昭和五年二月一日印刷
昭和五年二月七日發行



上製 新井石禪全集第一卷

著作權者 祥雲晩成

編纂者 山田靈林

發行者 飯野政晴
東京府北豊島郡中新井一九三四番地

印刷者 加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二四番地

印刷所 加藤文明社印刷所

發行所 東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所內
新井石禪全集刊行會
電話芝(43)一四八六番
振替東京四五四三二番

(製本 山田製本所)

【ま】

【み】

【む】

【め】

【ひ】

【ふ】

【と】

【な】

【ち】

【つ】

【て】

【そ】

【た】

【く】

【け】

【こ】

【か】

【き】

【う】

【え】

【お】

新井石禪全集 禪學講話篇第一　索　引

【あ】

【い】

限の樂みを感受して居られた。

　承陽大師は坐禪を以て安樂の法門なりと仰せられた。禪定の上から安心の狀態を觀ると三級の過程がある。初めは守靜の狀態、卽ち心意の妄動を止息して煩惱苦痛を解脫するのである。二には不動の狀態、前の守靜的安心術が慣熟すれば、遂には、如何なる時、如何なる處に處しても心意が動着せぬやうになる。『坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』といふのがそれである。更に一歩を進めて安樂といふ狀態に至りなば、無限絕大の樂みを得て縱橫自在に活動を起し『行亦禪坐亦禪、語默動靜體安然』といふ境界に達する。是れが慮ふこと無く憂ふること無き王三昧に安住したのであります。

　要するに、佛教は何れより入るも大安心を獲得するに依りて、始て宗教的生活に達するのである。處世的安心も遂に一致して行くものです。信仰も禪定も亦自づから融合すべきものです。

ば、遂には『心の欲する所に從つて矩を踰へず』といふ聖域にも達することが出來るものです。故に、六祖大師は『外、一切善惡の境界に於て心念起らざるを名けて坐と爲す、內、自性を見て動ぜざるを名けて禪と爲す』と仰せられた。心念起らずとか動ぜずとかいふは、枯木の樣になることではない。世に在りながら泥中の蓮華の如く清淨にして少しも汚れざるの謂である。精神修養の第一義は全くこゝに在るのです。

人には天性として惜い欲い、憎い愛いといふ情がある。此の情は心の源より涌き出る泉であるから、之を止めることは出來ぬ。欲いと思ふ心より五欲の巷に狂ひ出すから惡いが、是を善導すれば、此の欲念こそ求道利生の力である。華嚴經には『善法欲』と稱し、此の欲を斷ずるは魔事なりと說かれてある。又、憎いといふ心より怨恨憎嫉の病を生ずるが、此の情を善用すれば、斷德となり勇氣となつて現はれる。『なんのその岩をも透す桑の弓』と大高源吾が詠じたのも、勇氣の發露である。愛いといふ心から、道德も慈善も現はれる。唯だ之を惡用するから愛着となり執念となりて心の中正を失ふのであります。同一の水でも、牛が飲めば乳となり蛇が飲めば毒となる。

眞如實相の妙理に順應して善良なる美德を發揚するのが眞の解脫である。又、之を無我ともいふのである。無我現前の時、此の身は直ちに佛身となり、此の心は其の儘佛心となる。身心既に佛となりぬれば、此の世界も其の儘の淨土となる。治生產業も盡く佛事となり、算盤の上からも鋤鍬の先からも智慧德相が顯現する。世に是れ程の樂みと喜びとがありませうか。顏回は、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在りて無

坐一時の佛』と言はれたのである。凡そ吾々御互は其の本性に於て佛心を具有して居るが、唯だ妄想執着の爲めに昧まされて居るのである。妄念を靜止し去れば、本心の光輝は自づと發揮されて、任運に大信心も生ずるものです。尋常に能く此の禪定を薰修すれば、精神は堅固に落着て、一切の境に於て妄動することの無いやうになる。

普勸坐禪儀には『身心自然に脫落して本來の面目現前す』と仰せられた。脫落といふは解脫の意です。凡夫は兎角に身と心との爲めに役せられて居る。眼に使はれ、耳に使はれ、口に使はれ、常に感情や欲念に使はれて、空く一生を過すのみならず、徒らに名利の奴隷となつて、自己本來の面目を了せず、冥きより冥きに入る者が多い。古人も『大丈夫、天に先つて心の祖と爲れ』とか『心の師となりて心を師とせざれ』とかいうて置かれたが、若し心を調へて自由に其の妄動を停止することが出來る樣になれば、自心が自心を使ふ樣になる。勝海舟翁が『自ら處すること超然、人に處すること靄然、事無ければ澄然、事有れば嶄然、得意には淡然、失意には泰然』といふを修養の標準として居られたといふが、是れ皆な心の使用法である。

泣くも笑ふも心からです。同じ花を見ても『世の中は三日見ぬまの櫻かな』などゝ詠じて、哀れを催ふすものもある。心の働きほど面白きものは無い。併し、之を放任して置く時は『使れなば惡き道にも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな』少しも油斷はできぬ。されど、其の心の妄動を制止して眞解脫の境に入れ

が、雨は風にもまれ、しぶきとなつて全身にふりかゝり、眠ることも叶はず、半夜に端坐して念佛を唱へて居られた。御弟子達は餘りの御いとしさに涙を流しける時、上人は『決して歎き恨むべからず、余は今晩こそ殊に有り難く感じ居るぞよ、彌陀兆劫の御辛勞、釋尊六年の御難行は、到底、言葉をもて述べ盡し難し、北國の濱邊に於て一夜なりとも軒場の石を枕にして雨風に打たるるによりて、一層、佛恩の忝けなさが感ぜられる、是れ亦此の家の主の賜なるぞかし』と仰せられた。主人は壁越に之を聞きて大に感じ、夜中に上人を迎へて今までの無禮を謝し、焚火をもて持遇しながら、法義を聽聞し、夫婦共々信心發得して上人の御弟子となつた。變れば變る人心、上人は此の時『柿崎にしぶ／＼宿をとりければ主人の心熟柿なりけり』と詠ぜられた。是れがしぶ／＼寺の舊蹟であります。大信心の聖者にはかういふ御話が澤山ある。吾々も亦是の如き信仰心を具ふれば、逆境をも順境に轉じ、苦みをも樂みとなし、永久無限の安心滿足を得ることが出來るのであります。

禪定觀法

更に禪定觀の上から申せば、禪定波羅蜜を修行する時は、第一に心意識の運轉を靜止して無我境に安住するものであるから、超然として分別妄想を解脫する。足を組み手を組み、脊梁骨を直立し、呼吸を調へ心氣を靜むる時は、何人でも自然に吾れ我を忘るゝ底の三昧力を現はすものです。古人は是を『一時の靜

ことも無理に抑へつけるのではなかく〲骨が折れて、尋常一様の意志力では容易に成功を見ることが出來ぬ。然るに、若し信仰心を養ひますれば、自づから心も廣く氣も和らぎ、物事に對して諦らめが好くなり、恰も石の如く凝り固まりし氷雪が春風に逢うて消融するが如く、いつとは無く我見を透脱するものであります。之れに觀念の力も伴うて來るに依て、その作用に依て逆境をも順境となし、禍も福となすに至るものです。人間は多くは感情の爲めに精神の苦痛を牽き起すものであるから、觀念の力が加はると些々たる事に動かされぬ樣になる。觀念とは諦らめです。

京都の或る公家が、正月元日に大福の茶禮を行ふに當り、近侍の者が誤て福茶の土瓶を毀したのを非常に氣にかけて居りし時、加茂幸長といへる歌人が之を恕むるに『元日にどんとびんとをうちわりて後に殘るは金のつるなり』と詠ぜしに、お公家は俄かに機嫌を直し、彼の近侍の者に一分のお金を賜はつた。近侍も大に喜び是れも幸長のお蔭ぢやからといふので、その半分、即ち二朱を頒けて幸長に贈つた。幸長も土瓶を毀して御祝儀を貰ふとは前代未聞なりとて『元日に餘儀ないことを賴まれて一首の歌が二朱となりけり』と詠んだとある。世間凡百の事、十に八九は觀念作用に依て煩悶を脱することが出來るものです。況て信仰力が増長すれば全く苦中に樂を占むることが出來る。

親鸞上人が北越に在りし時、柿崎の濱邊に於て日暮れ雨さへ降りしきりしかば、扇屋とか稱する家に就て一宿を乞はれたれど、其の家内が無信心で斷わられた。據なく軒場を借りて一夜を明さんとせられた

入れ置き、今に拜んだなら一同が手を拍いて笑つてやらうと相談した。彼女はそれとも知らず、何時もと同じく節穴に向て一心に拜みを上げた。女中連は一齊に手を拍て笑はふとせしに、此の瞬間に、不思議や、一道の光明が節穴より輝いた。女中達は之を見て大に驚き且つ感じ、一同が遂に大信心を發したと申すことです。此等の事は果して事實でありしや否やは知らざれども、信仰的力用として斯る事は有り得べきことと思はれる。よし斯る事は一種の設話に過ぎずとするも、此の全身心を投じて佛陀に歸依する時は、自づから、佛陀の精神と妙德とは知らず〳〵の間に此の身心に一大薫化を與ふるもので、是を感應の妙といふのである。

曹洞宗祖承陽大師は『厭ふことなく慕ふこと無き此の時始めて佛の心に入る、但し心をもて測ること勿れ言葉をもていふこと勿れ、唯だ我身をも心をも放ち忘れて佛の家に投げ入れて佛の方より行はれて、是れに從がひもてゆく時、力をもいれず心をも費さずして生死を離れ佛となる』と仰せられた。此の御文を仔細に翫味すれば、自力と他力とを超越したる神人合一、能所一如の妙契であります。故に人我の見は自づから解脫して無窮の安心と滿足とが得られます。

或人は吾人修養の經路を三段に分けて、我主義・無我主義・無我々主義というて居た。吾々は元來我見の強いものであるが、修養觀念の強固となるに從ひ、その我見を抑制して、人道、又は佛道に隨順するのが無我である。此の無我の結果、始めて合理的自我、卽ち無我の大我が實現するのである。我見を抑制する

る。一は根本を信ず、是れは眞理を確信するのであるから內觀に屬する。卽ち主觀的信仰である。他の三は佛法僧の三寶であるから、無論客觀的信仰である。

併し、信仰は是非共客觀的で無ければならぬ。卽ち自己の永久的に歸依渴仰すべき本尊樣を立てることである。然らざれば宗敎的信仰の威力が現はれぬ。客觀的に吾々が永久に依憑して其の御濟度を戴き其の御慈悲に預かる所の御本尊を定めて、之に歸依し奉れば、恰も赤子が母の暖かい懷に抱かれて安らかに夢を結ぶが如く、そこに非常なる大安心を獲得するのである。而して、吾々が生々世々を盡して歸依渴仰する御本尊の廣大なる御德は、吾々と雖も修養の力に依て、之を自分の身に實現し得べきことを觀じて、自己の本性を返照して自己の佛を顯得せんと努めるのが主觀的信仰の基であります。故に、此の二つの信仰は同時に養なひ得るもので、決して相反するものではありませぬ。

信仰の靈感

殊に佛には神變不可思議の大威德がある。是れは深く信じた人で無ければ其の功德を感ずることが出來ぬ。昔、鎌倉の或富豪の家に奉公せる一少女があつた。觀音樣の御守りを頸にかけて信仰して居たが、奉公の身にては粗末になり易きを憂ひ、主人の居間に通行する大椽の柱に節穴があるので、其の穴の中に收めて、通る度每に拜んで居つた。他の女中達は之を見て、面白半分に觀音樣を匿して、代りに鰯の頭を

し惡業は墮落を招く、故に、吾々の現在に於ける幸福は善業の結果であつて、苦惱に關する者は惡業の結果である。併し、善業も惡業も有漏業と申して、凡夫根性より出でたものであるから、本性觀の上からいへば皆な迷執の所爲と言はねばならぬ。如何となれば、佛と同體なる本性を昧まして居るからです。
是の如く吾々には煩惱と罪障との二種の缺點があるが、その根本は煩惱妄想であるから、此の妄想を打破せざれば、後から〳〵罪を造り業を重ねて、永久に佛德を莊嚴することは出來ませぬ。故に、佛教に於ては、先づ以て妄念を斷ずることを修養せしめて居る。その修養法には自づから二通りある。即ち信仰と禪定です。戒學も慧學も皆な大切なる修養法であるが、その土臺となるものは信仰と禪定です。此の二つの修養法は、能く煩惱妄想を遮斷するが故に之を『慮ふこと無く』といひ、能く永久的安心を獲得するが故に『憂ふること無く』と仰せられたのであります。
先づ信仰の方面を論ずれば、信仰とは此の全身心を最高圓滿なる佛陀の大慈悲體に歸依することである。信仰の對象は無限の慈悲と絕對の智慧とを有する大覺の妙體でなければならぬ。故に佛に歸依し奉るのは取りも直さず大智慧と大慈悲とに歸依し奉るのである。故に信仰の成立は感應道交で無ければならぬ。此方で感ずる心と佛より應ずる力と合致したのが道交です。入我々入です。眞言の語でいへば、吾人の信ずる功德力と佛の應ずる加持力とが合體して一大法界力となつたのが道交である。故に眞信仰の上には自力とか他力とかいふ區別はつけられぬ。尤も、起信論には信仰の標準を四通りに分けて示してあ

一は精神上の缺點、卽ち煩惱妄想です。『ともすれば浮き立ち易き世の人の心の塵をいかで拂はん』とは明治大帝の御歎きであらせられる。吾々は無始已來の業習で先天的に煩惱を有して居るから、貪慾・瞋恚・愚痴といへる三毒の妄念は、波の如くに立騷ぎ、爲めに煩惱の犬は追へども去らず菩提の鹿は招げども來り難いのである。是を以て惡き路には導かれずとも走り易く、善き道には努力せざれば進み難いのである。況や佛敎に依りますれば、人々盡く佛の智慧德相を具有して居りながら、薄地の凡夫となり下つて居るのは皆な妄想執着の所爲である。

此の外に業障といへる厄介物がある。卽ち前生幾萬劫といふ限りも知れぬ昔より造りぬる惡業が罪過となつて此の身に附き纏うて居るのである。此の事は發達せる現代の學術の力でも解らぬから、世間の學問の力では信じ難いであらうが、宗敎的信仰の門に入れば、自づから、吾々には無始以來積りに積りし罪過のあることが信ぜられる。因果業報の理は天地自然の法則であるから、吾々の身分や境遇も偶然に現はれたものではなく、自作自受と申して、皆な自分で作つた果報を自分で受けて居るのであります。遺傳とか境遇とかいふけれども、その遺傳も境遇も單に父母祖先の所爲とか社會の罪とかいうて、祖先や社會に責任を有たせる譯には行かぬ。さういふ遺傳を享くべく、さういふ境遇に觸れべき根本原因は皆な自分の方にあるのである。運命といふものは過去・現在・未來の三世に貫通せる因緣因果の狀態に名けたもので、此の宇宙間に別段に運命の製造者があるのでは無い。尤も、業には善業と惡業とがある。善業は向上を致

山崎闇齋は徳川時代の大儒であるが、曾て保科正之公の問に答へて『吾に三樂あり、天地の間生物何ぞ限らん、生れて人間となる、是れが一樂である。學問ある世に生れ書を讀み文を習ひ古の聖賢と臂を一堂に把る、是れ亦一樂である。幸に卑賤に生れ侯伯の家に生れざる、是れ樂みの最大なるものである、如何となれば今の御大名なる者多くは婦女子の手に養なはれ、錦綉を纏ひ美食を嗜み、曾て世の艱苦を知らず、是を以て智淺く學薄し、吾れ卑賤に生れたるを以て智を磨き徳を養なひ今に至つて休せず、何の樂みか之に如かん』と申された。吾々は斯る見地と信念とを以て人生を安排したいものであります。

又、人生に貪着せざる時は、如何なる變化に處するとも、泰然自若、毫も其の心を動亂せず、超然として物外の乾坤に逍遙することが出來る。厭はず欣はず、是れ即ち中庸觀である。斯くしてこそ、人生に處して能く困難に打勝ち、能く身心を磨勵し、人生を利導して、動中に靜を占め、苦中に樂を得、益々功德を積み善根を長じ、自ら安心することが出來るのであります。

永久的安心

次に『心に慮ふこと無く憂ふること無き』とあるのは、即ち信仰及び禪定の力用で、所謂眞諦門的安心である。慮ふこと無しとは無我の意で、憂ふること無しとは安心の意です。抑々吾々が永久的安心を得んと欲せば、先づ自己の弱點缺點を自覺せねばならぬ。吾々には二種の缺點がある。

されぱとて、刹那無常の世の中なれば何一つとして貪着すべき物ではない。惜むとも惜みはつべきに非ず、着すとも着しはつべきに非ず、若し惜み得べきものと思ひ着し得べきものと思はゞ、變化に逢ふ毎に非常に狼狽せねばならぬ。多くの人は、凡夫の常として、執着心に囚はれて居るが爲めに得失是非に使役せられ、全で聲や色の奴隷となつて空しく生涯を送るのみにあらず、其の間に限り無き煩悶を抱き種々の罪愆を招くのであります。故に『欣ふ心なく』即ち執着し愛着してはならぬとの御示しです。要するに、健全なる人生觀は厭ひ離れる心をも起さず、又、執着貪愛の念をも生せず、不離不卽で無ければならぬ。寳鏡三昧に『背觸倶に非なり大火聚の如し』とある。火といふものは暫時も離るゝことは出來ぬ、瞬間も之を離れなば生命を危くする。否な、生命を失却して了ふ。されぱとて、少しでも之に觸るれば火傷をする。人生も亦た是の如きものである。人生を棄つれば、枯木死灰となりはてゝ、人としての活動を失なひ、佛菩薩となるべき種子をも失なふ。又、人生に貪着すれば、人生の奴隷となつて、物に觸れては精神を束縛され事に逢ふ毎に狼狽を招き、終には罪惡を造るか、さもなくば、煩悶の坑に墮ちて法身の慧命を喪失するに至るものです。之に反して、人生を厭はず、能く人生を以て修養の資料とするならば、古人が『世路の風霜は吾人錬心の境なり、世情の冷煖は吾人忍性の地なり、世事の顚倒は吾人修行の資なり』というた樣に、順境に處すれば、依て以て濟世利民の行持を勵み、逆境に處しては益々其の心膽を錬り信念を磨き、而して、人生の向上を圖り、自己能率の增進に努むる樣になる。

くも、夕の風耳を拂ふ、縱ひ毛嬙西施、美妙の容顏を見るも、朝の露眼を遮ぎる、已に聲色の繫縛を離るれば自づから道心の理致に合はんか』と仰せられた。實に至れり盡せりと謂つべき御教訓です。此の世は身心も國土も盡く無常にして變遷窮り無きものである。故に此の無常を諦觀する時は、自然に吾我の心を離れ、名利に迷ふこと無く、而して、寸陰を惜みて道を求め行ひを勵み、その結果見る物にも聞く物にも迷はぬ樣になる。眞正にして健全なる無常觀には是の如き功德がある。

併し、一面から見れば、此の身は道の器で、眇たる滄海の一粟とも謂ふべき此の身なれども、志を立て道を行へば、此の身を以て德を修め道を顯はし、進んでは家をも齊へ國をも治め、佛にも神にもなることが出來る。又、此の世は假の浮世とは言ひながら此の世に於て立派に淨土をも建立し覺路をも莊嚴することが出來る。『假りの世を假りの世ぢやとて仇にすな假りの世ばかり己が世なれば』、此の世以外に別に自分の世といふものは無いのである。又、無常憑み難しとは言ひながら、無常なるが爲めに菩提心をも發し信仰心をも發するのである。兎に角、吾々は最も眞面目に人生を觀察し、最も眞面目に、此の人生に處して迷ひを重ね、苦痛に縛られ、罪惡を造りつゝある事實を觀察して、是れよりして大なる菩提心を發することが大切であります。憑み難き人生の狀態こそ却て吾々に道念を促して吳れるのです。徒らに此の人生を恐れ厭ふが如きは、全く火を恐れて水に沈むが如きものである。『四苦八苦の娑婆世界こそ吾々の善知識であるから『厭ふ心なく』濫りに人生を厭ひ嫌うて人生に遠ざからうと思ふなよとの御教訓です。

佛教に厭世的氣分の澤山あることは事實であつて、釋尊は御涅槃の折『世は皆な無常なり、遇ふ者は必ず離るゝことあり、憂惱を懷くこと莫れ、世相是の如し』と仰せられ、此の肉體を以て『此は是れ棄つべき罪惡の物なり、假に名けて身と爲す、老病生死の大海に沒在せり』云々とまで仰せられた。彼の蓮如上人の白骨の御文にも『されば朝には紅顏ありて夕には白骨となれる身なり、既に無常の風來りぬれば乃ち二つの眼忽ちにとぢ一つの息永く絶えぬれば、紅顏空く變じて桃李のよそほひを失ひぬるときは、六親眷屬あつまりて慨き悲めども更にその甲斐あるべからず』とある。かういふ御示しは佛にも祖師にも澤山にある。併し是を以て直ちに佛教は厭世教なりと斷定することは出來ぬ。厭世的教訓のあるのは、現在の缺點と弱點とを指摘して自分の位地を自覺せしめ、之と同時に現狀より脫出して理想境に向つて進展せしめんが爲めである。

無常觀の如きは佛教に於ける必須の觀念であるが、其の之を勸める所以は吾人の自覺と進修策勵の必要とに出でたものです。承陽大師は學道用心集に無常觀を以て菩提心なりと御教へ下されて『誠に夫れ無常を觀ずる時、吾我の心生ぜず、名利の念起らず、時光の太だ速かなることを恐怖す、所以に行道は頭燃を救ふ、身命の牢からざることを顧眄す、所以に精進は翹足に慣ふ、縱ひ緊那迦陵、讃歎の音聲を聞

せ金襴の袈裟、襟巻、帽子、拂子、數珠それから足袋、』大變な騷ぎ、とう〳〵夏の暑い最中に綿入の白無垢に冬帽を冠り、緋の衣に拂子といふ裝束で出懸けた。老雲水、之を見て驚いた。此の和尚は餘程變り者と見たるより、然らば無言の問答をしてやらんと、行きなり、右左の手で丸き形を作つた。すると、蒟蒻屋は目を白黒して、左右の手を廣げて大きく圓相を作つた。雲水は五本の指を出した。親爺は十本の指。雲水は改めて三本の指を出すと、親爺は目の下に手をさした。すると、雲水は狼狽して逃げ出し、村外れの茶屋へ往て『やれ〳〵、山寺の和尚と思うて馬鹿にしたが、恐ろしい和尚が居るわい』、茶店の亭主は『和尚さんは留守な筈だ』、『なんの留守なものか、緋の衣に冬の仕度であつた』、亭主が委く聞くと『實は無言の問答をした、初めに丸い形を作つて心は如何と問ふと、天地に充滿すと答へた、五戒を持つやと問へば、十戒を守るというた、更に三尊の彌陀はと聞きしに、目の下に在りと答へた、イヤハヤ驚いた和尚ぢや』というて返り去つた。亭主は變だと思ひ、寺に至りて聞くと、蒟蒻屋は腹を立てゝ『忌々しい、おれは暑いのを辛抱して頭の丁髷までも愿して出たが、彼れは行きなり、貴樣の蒟蒻は是れ位だらうと手眞似をした、馬鹿をいふなこんなに大きいと手を廣げて見せると、一箇五十文かといふから、百文だと告げた、すると、三十文にまけろといふから、赤んべーをやつたのさ』と言うたそうです。滑稽な話しであるが、人の觀察の不同なることは、丁度此の御話の樣なものです。

らなくも觀られるが有り難くも觀られる。そこで承陽大師は『萬づ』と仰せられた。此の人生觀を大別すれば悲觀と樂觀との二つとなる。即ち厭世主義と樂天主義とである。併し、人生なるものは複雜窮り無きものであるから實は何れとも斷定することは出來ぬ。悲觀するも、樂觀するも、其の人の立ち場に依て觀察の狀態が變るのである。

殊に人は思想力を有して居るから、同一の事實に對しても其の人次第で觀察點を異にして居る。同じ月を觀ても、『千山月色令二人醉一、半夜梅花入レ夢香』というて樂む人もあれば『なげけとて月やは物を思はするかこち顏なる我が涙かな』と吟じて悲む人もある。同じく花を見ても、夢中になつて浮れる者もあれば、『明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは』というて憂うる者もある。譬へば彼の蒟蒻屋問答のやうなものである。

山寺の和尙が暫しくの間留守となるので、小僧一人と門前の蒟蒻屋の親爺とを賴んで留守居をさせた。すると、或日の事、堂々たる雲水が鐵如意を携へて入り來り、小僧に向て、『予は當山の和尙に一問答致したく罷り越した、取り次ツ』と怒鳴つた。小僧ビツクリして飛で來て蒟蒻屋に告げた。『和尙は留守だというたか』、『あんまり驚て言はなんだ』、『困つたことだ、今更實は留守でなどというたら、問答が恐ろしくて留守を使つたやうに思はれて、此の寺の顏にかゝる、よし〳〵己れが出逢うて問答しやう』、『お前に出來るか』、『出來るとも門前の蒟蒻屋習はぬ問答をもするわ、併し、此の儘でも出られまい、さあ緋の衣を出

ふ心なく』といふのが處世的安心で、『心に慮ふこと無く憂ふること無し』といふのが超世間的安心である。換言すれば、前者は俗諦門の安心で後者は眞諦門の安心です。又、前者は人生觀で後者は信仰觀、又は禪定觀である。

孔夫子が『四十にして惑はず五十にして天命を知る』といふは、皆な解脱境であつて、『七十にて心の欲する所に從つて矩を踰へず』といふのが解脱の成果であります。吾々は人生の中に生れてその間に死す。生も死も、苦も樂も、迷も悟も、一として人生を基礎とせざるは無い。人生は全く自己です。人生を知らざれば自己を知ることが出來ぬ。故に人生に對して安心を得るのは自己を保任する所以である。

併し、人生の問題は眼耳鼻舌身意の六根が色聲香味觸法の六塵に交渉する範圍に於て認むべき問題であつて、六根と六塵とを打離れた絕對界には人生といふ名もつけられませぬ。此の絕對界は全然吾々と沒交渉であるかといふに、そこが佛敎の佛敎たる特色の存する所で、その絕對界に向て一道の靈光を放ち、そこに大なる眞の自己を顯現し、所謂不可得安心といふ大安心を決定するのが、信仰上の極則です。禪門に於ける悟道といふも、見性とか見佛とかいふのも、つまり此の問題に對する解決であります。故に、吾々は畢竟じて二種の安心を獲得せねばならぬ。

先づ最初の人生觀といふは如何といふに、そも人生なるものは非常に複雜してをつて、何が何やらサツパリ譯の解らぬ樣な感じもするものです。故に其の人に依りて悲しくも觀らるれば樂しくも觀られ、つま

艶物語の話や、さなくば嫉み合ひ罵しり合ひで、怪物屋敷の體であつた。時の奥方が比ひ稀れなる賢夫人で、此等のあゝ、ゝ、りさまを見聞きする毎に、我が徳の至らざる爲めならんと觀じ、默々として慚愧の色あり、室内に閉居りて謹愼して居られた。そして、女中達が善き話しでもして正しき事をする時は、奥方も機嫌能くして嬉しさうにして居られた。女中達は追々と奥方の御樣子に氣が付いて自然に相誡め、終には奥殿の紀律が非常に改良され、女中達の品性までも高潔になつたと申すことです。

釋尊の御在世に、十大弟子の中の說法に長じたる富樓那尊者が敎化未開の地に赴きて傳道せんとせし時、釋尊は『彼地は人氣荒くして度し難し、將に堪忍を守りて敎化に努むべし、若し謂はれ無く罵る人あらば何んとする』、尊者曰く『打たれざるを喜びます』釋尊更に、『打たれなばいかにする』、『殺されざるを喜びます』、『殺されなばいかにする』、『未來の因緣を喜びます』、釋尊は、此の時、始めて點頭いて御暇を賜うたといふことである。是等は何れも觀念の力であります。吾々も斯かる標準に基きて修養に怠りなくば、本性の慈悲は必ず公明正大に發動し禽獸草木に迄も恩徳を施すことであらうと思ふ。

安心の要術

承陽大師は『よろづを厭ふ心なく欣ふ心なく、心に慮ふこと無く憂ふること無き、是を佛と名く』と仰せられたが、是れ正しく安心の要術を示されたるものである。安心に二種あり、『よろづを厭ふ心なく、欣

巾を置き忘れた者を賞めたといふことです。

或人が、霜月十五日に子供の袴着の祝ひをしやうとせし時、門前に、破れ衣と破れ袈裟、外に腐つたやうな珠數一連を落していつた者があつたので、非常に機嫌を損ぜしときに、友人が來りて『けさひろうころも霜月十五日この子の年は數珠の數ほど』と詠じたれば、大さうに喜びて其の三品を記念として土藏に仕舞はれたといふことである。つまらぬ話のやうだが、人間は此のつまらぬことに喜怒苦樂の位地を變ずる場合が往々にある。是れまた一種の觀念法です。

蓮月尼が、山中で日が暮れたから或家に宿を求めたが、つれなくも斷わられた。據なくトボ〲と出懸けたが、心の中には『尼一人泊めて呉れても好ささうなものを心なき人かな』と思ひつゝ、頃も三月彌生時、とある櫻の花の下に腰を下して居りしに、やがて東の山の端を出でたる春月は霞を帶びて櫻の花の中に光りを放つた。此の朧月夜の櫻花、その景色の妙なること得も言はれず、蓮月はツク〲と之を眺め『扨も面白き浮世やな、今が今まで宿を借さゞりし人を恨み居りつるが、若し彼家に泊りなば、いかで此の夜櫻の風情に觸れべきや、宿かさぬ人こそ今宵の恩人とやいふべき』と、坐ろに感心しつゝ『宿かさぬ人のつらさをなさけにて朧月夜の花の下伏し』と詠じたと申すことです。

又、昔、出羽の佐竹侯の大奧は諸大名のそれに比して風紀正しく、奥女中の心懸けもめでたかりしといふ。始めは佐竹侯の大奧とても品性の餘り高からざる女中達の聚まりとて、朝から晩まで、人の品評や、

る。此等も堪忍修養上の好教訓です。

次に寛容の徳を養ふことが必要である。忍辱と寛容とは姉妹の如き關係を有して居るから何れも缺くべらざるものであります。淸濁併せ呑むの度量が無いと自ら煩悶を製造する様なものです。次に願力を發すべきである。卽ち、人間の價値は濟世利物にあることを心得て、生々世々を盡して普く他を利益せんとの大願を起すが宜い。楠公の七生報國も皆此の願力である。次に善を樂むことを慣はねばならぬ。昔、子罕は善を以て寶としたとある。善根功德は寶の中の寶です。金銀財產は物質上の寶、善根功德は精神上の寶、物質上の寶は盡くることあるも精神上の寶は滅すること無し。此の寶を蓄ふるは眞の富です。次に公平の德を養ふことが大切である。人は動もすれば一方に偏する僻があつてならぬものです。故に、常に偏黨の念を避けて、何事も公平ならんことを期せねばならぬ。若し公平を缺くことあらば、縱ひ他を愛すること深くとも一面には他の恨みを買ふ事となる。偏黨の愛は平和を破るの敵である事を忘れてはならぬ。

それより觀念の修養が最も必要です。堪忍も、寛容も、其の他の諸德も、多くは觀念に依て始て成立するものです。觀念とは『あきらめ』である。あきらめ方如何に依り、禍も福と變じ、苦みも樂みとなり、凶も吉に轉ずるものです。

或人が、正月元日に、床の間に雜巾のありしを見て非常に不快を感じて居りしに、友人が來りて之を慰め『雜巾をあて字でかけば藏と金あちらふく〳〵こちらふく〳〵』と詠じたので俄かに機嫌を直し、雜

の句である。又、同人は外ケ濱の飛雁を圖して『けふからは日本の雁よ樂に居よ』と賛してある。鬼貫やらの句に『行水のすて處なし蟲の聲』某の句に『拂ふなよ其の雪そへて柴買はん』、千代の句に『朝顔に釣瓶とられて貰ひ水』何れも、同情の禽獸草木に及べる眞情であつて、人間の趣味も、詩人の風趣も、畢竟、此の慈悲心の賜物です。

慈悲の修養

先帝の御製に『我が心至らぬ隈のなくもがなこのよを照す月の如くに』、『夏の夜のねざめ勝にぞ明しける世のため思ふこと多くして』、『てるにつけ曇るにつけて思ふかなわが民草の上はいかにと』等の御詠のあらせられしは實に絶大の御慈悲と拜し奉るのである。吾々とても、縦ひ力弱く勢微なりと雖も、能く本性の慈悲を養ひなば天地六合をも包容する程の功徳を成すものです。

之を養ふには先づ忍辱行が大事です。即ち堪忍の徳である。人世は意の如くならずと諦めなば必ずや忍の力を得るものです。古人の教訓に『人は此の世に客に來たと思へば世話も苦勞もなし、心に叶はぬ食に向ひても馳走とほめて食はねばならぬ、夏のあつきも客なれば嗜まねばならぬ、冬の寒さも同じ、御馳走の返禮には銘々家業を勵め、衣服は分に應じ禮に缺けざるやうにし、孫子兄弟猶ほもつて相客なれば挨拶よく暮し、あとに心を殘さずして暇申すまで—父母によばれてかりに客に來て心殘さず返るふるさと』とあ

天地の覆載、日月の照臨、雨露の潤澤、皆な廣大なる慈悲です。吾々は此の天地の慈悲に養はれて生命を持續して居るのです。慈悲は天性であるから如何なる人にも有して居る。惻隱の心は仁の端なりと孟子はいうたが、どんな邪曲な人にも慈悲はある。石川五右衛門でも、悴の五郎市に對しては菩薩の如き慈念が注がれて居る。吾々凡夫は唯だ我見や妄執の爲めに其の本性の美德を圓滿に發揮せられずに居るのである。若し我見や妄執を離るれば、天性の慈悲は、恰も天地日月の如く公明正大に現はれて來るものです。故に、慈悲の德が現はるれば、貪婪の心も、瞋恚の情も、愚痴の念も、我慢も、偏執も、自づから離れるものです。而して慈悲の發動する所、自づから仁となり、義となり、忠となり、信となり、こゝに人道が成立つのである。孟子は是を天爵というてある。即ち『天爵なる者あり、人爵なる者あり、仁義忠信善を樂みて倦まざる此れ天爵なり、公卿大夫此れ人爵なり、古の人は其の天爵を修めて而して人爵之に從ふ、今の人は其の天爵を修めて以て人爵を要め、既に人爵を得れば而も天爵を棄つ、則ち惑ひの甚しき者なり、終に亦亡びんのみ』というて居る。

既に慈悲心は天性なりとすれば、獨り人間許りで無く、動物にでも、草木にでも、器物にでも、平等に慈悲の作用が現はれて來ねばならぬ。故に眞實人間に親切な人ならば、其の親切は動物にも及び器械・草木にも及ぶものです。若し、人には親切だが鳥獸には不親切、鳥獸には親切だが草木には不實であるといふ人があらば、是れは慈悲心がまだ徹底して居らぬからです。『やれうつな蠅が手をする足をする』とは一茶

併し、誠の心ある者は自から神を信ずる心も深きものであるから、孔夫子の語は意足りて語足らざるの感がある。されど孔夫子は流石に大聖であるから、常に天地の大道と終始して居られた。孔夫子それ自身が神であつたのです。吾々も亦此の信念と修養とがあるならば、生死の交謝、順逆の變化に處して寂然不動の大安心を持續することが出來やうと思ふ。是を解脱の境界と稱して自覺の大本となるのであります。

佛性の慈悲心

次に覺他の基礎は慈悲心です。慈悲は本性に有する至情であります。吾々の至情には『ありがたい』と感ずるものと『かあいさう』と感ずるものとがある。『ありがたい』と感ずる處より上を敬ふ様になり、『かあいさう』と感ずる所より下を憐れむ様になる。梵網戒經には是を佛性の孝順心・慈悲心と仰せられた。けれども、廣き意味を以てすれば、慈悲心といふ中に孝順も仁義も皆な含蓄されて居るのである。慈とは與樂の義、悲とは拔苦の義、他に快樂を與ふるのは慈であるから、長上に對して丹誠を盡し以て其の心を樂しましむるも慈である。又、苦痛を拔濟するといふても自分より位地の低い者には限らぬ。父母の病苦を救ふのも、長者の憂愁を慰むるのも、矢張、悲といふことが出來る。凡そ中心に誠ありて物に對して親切なるが慈悲です。儒教に仁といひ基督教に愛といふも、畢竟、慈悲の德であります。但だ佛の御慈悲は儒教や基督教の說く所よりは一段と意味が高尚博大である。

處に在るぞと御諭し下されてある。

要するに、此の世の壽命既に盡きると雖も、不滅の大生命を確認し、その大生命の上に永遠の大願力を立て佛陀無限の慈光を拜し、生々世々に渉りて退轉なき大希望を立てて瞑目するこそ、生死即涅槃の大安心といふべきである。さすれば、人生に於ける順逆是非も、無限に活動する道途の中の一丘一壑であり盡未來際に進航すべき現象海中の一波一瀾です。

朝に道を聞いて夕べに死するも可なり、大道を以て生命とする時はその生命は時間・空間を超越したものである。既に人生變化の最大なる生死の二途に於て束縛を解脱する程の大安心があれば、其の中間に於ける順逆の境遇、得失の事項に於ても、自から束縛を脱し迷報を離れ、萬里一條鐵に大道を濶歩することが出來るものです。

孔夫子が病氣せし時、子路が心配して御祈禱をすることを御勸めした。孔夫子は『そのやうな事があるか』と問はれたので『爾を天地の神祇に禱るといふことがあります』と答へしに、孔夫子は『丘が禱ること久し』さういふ御祈禱ならば、予は平日に於て御祈禱を致さぬ日はないとの仰せであつた。神の心は天の心である。天の心は公明正大である。誠信眞實である。誠信の心能く天に通じ神に通ず、公明の心能く天に感じ神に感ず、孔夫子の意は『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らむ』の歌の如くであらうと思ふ。

併し、佛教の大安心は單に生死の相に貪着せざるのみならず、前途に一段の光明を認め、最も眞面目に永久的活動を期せねばならぬ。

小西來山が死に臨んで『來山は生れた咎で死ぬるなりそれで恨みもなにもかも無し』と詠じ、膝栗毛の作者一九が『世の中をどりやお暇の線香の煙りとゝもにはいさようなら』と詠ぜしが如きは、一分の解脱を得たやうなものゝ、決して宗教的安心とは申されぬ。古人が『行く先も〳〵また同じこといつそこゝらで土にならうか』と詠んだのも、餘りに人生を輕視した見方である。

それよりは、王陽明が死に臨んで門弟の問に答へ、『我が心公明正大復た何をか言はん』というて瞑目せしが如き、山岡鐵舟居士が最後まで大般若經を書寫し、彌よといふ時に至り、筆を擱きて圍繞せる人々を視て『みなさんおさらば』というて終焉せられたるが如きは、實に眞面目なる行持である。

法然上人の御臨終に御弟子達が、『傳敎大師や弘法大師は何れも壯大なる偉蹟を遺されたが御師には更に見るべき御遺蹟が無い、是れのみが遺憾であります』と申すを聞かれ、上人は『予が遺蹟は日本國中到る處に存して居る、南無阿彌陀佛と唱ふる處が予の遺蹟ぢや――戀しくば南無阿彌陀佛と唱ふべしわれも六字の中にこそあれ』と仰せられしといふ。なんと立派な御遺蹟ではありませんか。

況や釋尊の如きは、御涅槃に臨みて常住佛性の妙諦を說示せられ、佛戒を以て末代の師なるぞと仰せられ、展轉して之を行せば如來の法身常に在して而も滅せざるなりと宣ひ、常に靈鷲山及び餘の諸の住

ることが當面の急務である。是を解脱論といふ。此の解脱を得るには第一に生死の假相に執着せず、生死を觀ること開花落葉の如くなるべし。

尾州の豪潮律師は曾て借宅證文といふを書たことがある。それは『借宅證文の事、一、地水火風空の作り家一軒、右借用仕候處實證也、御入用の節は何時でも、差上可申候爲後日如件、さあ〳〵宿がへの御用心』とある。宿替に當つて狼狽する樣ではならぬ。此の用心があれば、何時、生死岸頭に立つとも泰然、悠然、更に頓着するところは無いはずである。併し生死の束縛を脱する人で無ければ是の如き綽々として餘裕ある態度は出來ぬ。

支那に於ける曹洞の高祖洞山大師は唐の懿宗の咸通十年三月に六十三歳で御圓寂せられたが、諄々の最後の說法をなし、其の儘息を引取られた。多くの道俗は今更の如く歎き悲み、慟哭の聲堂に溢れて熄まなんだ。すると、暫くして大師は息を吹回し、一同を眺めて『扨々汝等は何故にその樣に見苦しきことをなすぞ、是れ皆な愚痴の餘習であるから、今一度敎化する所あらん』とて、遂に死を延期し、一週間『愚痴齋』といふ齋會を設けて演法化導せられたとある。是れ皆な生死の實相に體達して生死の兩端に滯らぬ大安心の現れであります。

不動の安心

體論の目的です。尤も、此の大生命にも二通りある。

一は道德的生命、他は宗教的生命である。楠公は戰死せられたるも其の誠忠は永く國民の思想を鼓舞して居られる。乃木將軍は殉死せられたるも其の義烈は永く吾々を感奮興起して居られる。古今の哲人德者の行爲は永久に功績を遺し且つ感化を與へて居る。卽ち道德的生命となつて活動息むこと無しである。此の生命は誰でも疑ふ所は無い。

次の宗教的生命といふは、吾々の個性その物の不滅を認むることです。道德的生命の如きは其の人の功績に依て生ずる感化であるが、宗教的生命は其の人自身が永久不滅なのである。此の生命は宗教的信念のある人で無ければ認められぬ。我が皇室に於ける御信念の如きは自づから宗教的に生命の實在を御信じ遊ばされるものと思はれます。神祇を祭り祖先を祠ることの如き、全く神明及び神靈の實在を信ずる所より出でゝ居らせられるのである。御卽位の御勅語に『祖宗ノ神靈照鑒上ニ在リ』と宣ひしは正く此の崇高なる御信念の御告げであります。明治大帝の御製に『我が心及ばぬ國のはて迄も夜晝神は守りますらん』『目に見えぬ神の心にかやふこそ人の心のまことなりけり』等とあるは、不滅の神靈に對する御信念であらせられます。吾々御互とても、人々具足箇々圓成で、悉く不滅の大靈、常住佛性を有して居る。此の大靈佛性を認識して、こゝに宗教的大安心の基礎を置くものである。是れ卽ち本體論的生死觀です。

併し、前にも申せし如く吾々は常に生死の爲め憂愁に沈み苦痛を感じて居るに依て、此の束縛を解脫す

ことが胸に浮ばれたから、取敢ず答へて『そなたは死ぬと觀音樣の御淨土に往くのであるぞ』その御淨土は洵に結構な處であるから少しも心配せず安心して往生して吳れよ』と答へられた。令孃は『お父さんも矢張その御淨土へ御出になりますか』『あゝ己れも追付そこへ往くぞよ』、『それで安心致しました、未來は一蓮托生の樂みと聞けば、最早、遺憾はござりませぬ』と言ひつゝ、徐に菩薩の御名號を唱へつゝ、眠るが如くにお逝れになつたのである。此の時の伯は、心の底に宗教的信念が發動したかの如く、何とも言はれぬ感じを起されたと申すことであります。

要するに、人生は喜びに生れて悲みに死するのであつて、如何なる人も死の暗には迷はざるを得ないのである。是に於てか、釋尊は懇篤に生死の問題に就て御教導下されました。御一代の御説法も、要するに生死問題の解決であるといふことも出來る程です。

生死問題

生死問題解決の法門にも大乘・小乘等淺深の別はあるが、要を取て言へば、本體論と解脱論との二門が主たるものです。本體論とは生死の實相を證悟せしむる法門である。生といひ死といふは萬物變化の相にして、其の實體は不生不滅である。『雨霰雪や氷と隔つれど落つれば同じ谷川の水』假りに現はれたる相には變化ありと雖も、其の實性は本來不變不易である。此の實性を覺了して不滅の大生命を認得するのが本

もない筈である。けれども、凡夫が常に生死の爲めに縛られて、三界六道昇沈の相に苦んで居るのは何故ぞといふに、是れは宇宙その物より苦しめらるゝに非ずして、皆な各自が自ら造り出だせし業相であります。恰も水の四見の喩の如くです。同一の水なれども、人間こそ水と見るが、魚は之を宮殿と見、天人は之を瑠璃と見、餓鬼道の衆生は之を火と見る。是れ皆な其の物の果報に依て見る所を異にして居る。此の生死に對する觀念亦之と同じく、苦痛と觀るも愉快と觀るもその觀る人の業障と思想との致す所である。併し、直接、哀別離苦に遭遇する時は、如何なる人も憂愁に腸を斷つの思ひがあるものです。男爵九鬼隆一君は、今春令兄琢磨翁と令息一造君とに御別れになり、生來始ての悲痛を感じたと仰せになつて歎かれ、最と懇なる追善の佛事を營まれた。

有名なる陸奥宗光伯は、日清戰役後、馬關に於て講話談判の際、時の伯爵伊藤博文君の副使として御出張になり、條約訂結の頃、令孃危篤の報に接せられ、御歸京の後、令孃の枕邊に至りて病苦を慰められた。令孃は殆ど昏醉狀態に陷りしが、父君に一目逢ひたしとの希望ある爲め死に切れずに居つたのである。伯の顏を見るや其の喜び言はん方なく、良ありて涙を流し『お父さん、私は迚も助かることは出來ませぬ。死しての後は何處へ往くのでありませう』、伯も此の一問に逢うては茫然とし答ふる所を知らずされど、令孃最後の疑問、まさかに『そんな事は知らぬ』と言ひ放つに忍びず、殆ど當惑の折柄、不圖思ひ出したは伯の母上の事である。伯の母は觀音菩薩の篤信家で常に『觀音樣の御淨土に往く』と申された

解脱道を得んと欲せば、先づ須く生死の理を明らめて自由無礙の境に逍遥することが一大事です。承陽大師は『生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因緣なり』と仰せられた。生死といふは宇宙間に於ける大事實である。

天地萬物、何物か生死せざる。世界の生死、是を成住壞空の四劫といふ。世界の成立は成劫、存在の時代は住劫、破壞の時代は壞劫、空滅の時代は空劫、空じて復た成り、成つて又た空すること恰も花散り花開くが如く輪環して息むこと無し。萬物には生住異滅の四相あり、發生し存住し變化し滅却する。日月山川より一草一木に至るまで皆な此の四相を現ぜざるは無い。一年の中に四相を現ずるあり、一日の中に四相を現ずるあり、百千萬年の中に四相を現ずるあり、唯だ其の壽命に長短遲速の差があるのみである。吾人間や動物の上では、是れが生老病死の四相となつて現はれる。

何故に生死があるかといふに、是れは萬物變化の相であつて宇宙活動の現象である。宇宙の本體は絶對平等であるが、恰も大海水に波瀾あるが如く、絶對平等とは申しながら靈動體であるに依て、常恒不斷に活動を起して息まぬ。天行は健なり、自彊不息といふも全く活動の力用を言うたものです。日月の運行地球の廻轉、風雲の變化も、草木の榮枯も、盡く宇宙眞如の妙相です。東坡居士は此の理を大悟して、『溪聲便是廣長舌、山色豈非淸淨身、夜來八萬四千偈、他日如何擧似人』と吟じたのである。然れば、吾々の生も死も皆な靈作動用でありますから、生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ふべき

あります。次に『よろづを厭ふ心なく欣ふ心なく』とあるのが人生觀です。佛教の人生觀は取りも直さず人生に處する安心の法門である。『心に慮ふことなく憂ふること無き』といふは信仰觀で、所謂宗教的安心法である。故に、此の二段を併せて安心の要術を示されたるものと見るべきである。就中、今は自覺々他の基礎に就て其の大旨を演べて見やうと思ふ。

佛陀は此に覺者と譯す。自覺々他覺行圓滿の義なりとは誰しも知て居ることであるが、自覺は自分の覺悟、覺他は他を敎化して覺悟せしむることであるから、如何なる人でも分相應に自覺と覺他との覺行を備へざれば一人前の者とはなられぬ譯である。敎育家なれば、自己の天職を覺悟して敎育家たるの人格を作るのが自覺で、學校に臨んで親切に周到に授業を施して生徒を敎養するのが覺他です。學生の方からいへば、學校に於て、勵精、學問に從事して智德の向上を圖るのが自覺で、家庭に於ても、學友に對しても社會に對しても、學を修むる者として恥かしからぬ言行をなすのみならず。恭儉博愛、能く同情の美德を發揮するのは覺他です。況てや佛陀大聖を以て理想となし、益々其の理想に向て修養の功を積まんとする者は、一層高尙なる自覺と覺他とを具備せんことを期せねばならぬ。その自覺の基は解脫道を得ることで覺他の礎は慈悲心を發することである。

のなり』といふがある。此等の御文章を能く翫味して見たならば、眞俗圓融の法門が歴々と現はれて居ります。元來、信仰は精神向上の基である。一念成佛を期し一念佛心に歸命す、是れ既に三德の門に入るのである。さすれば其の信仰が全身に漲りて日常生活の上に偉大なる作用を發すべき筈のものであります。

自覺と覺他

承陽大師正法眼藏生死の卷の親訓に『佛と成るに最と易き道あり、諸々の惡を作らず、生死に着する心なく、一切衆生の爲めにあはれみ深くして、上を敬まひ下を憐れみ、よろづを厭ふ心なく欣ふ心なく、心に慮ふこと無く憂ふること無き、是を佛と名く、又外に尋ぬること勿れ』といふ御示しがある。簡單なる御詞ではあるが、この御詞の中に佛教の大綱を提げ信仰の目的を示し、且つ各宗派の教義・安心も幾ど包容し盡してある樣に思はれます。

『最と易き』といふは、易行門の意味とは違ふ。志だに堅固にして修養に努めなば、如何なる人にも必ず成佛が出來るぞといふ御旨意である。その修養の標準を五段に分ての御示しです『諸々の惡を作らず』とは道德である。『生死に着する心なし』といふは死生觀で、生死の假相に執着せず不生不滅の實相を覺了せよといふのであつて、是れが大解脱の源です。『一切衆生の爲めに憐れみ深く』といふは大慈悲です。大解脱は自覺の本で大慈悲は覺他の基であるから、此の二つを併せたのが、自覺々他の基礎と稱するので

るに非ざれば必ず幸福なりとは斷じ難し』と答へた。果せる哉、王は後に傲奢に耽りて民心を失ひ、遂に鄰國の侵す所となり、一敗地に塗れて捕はれの身となり、始めてソーロンの言ふ所の意味を悟つたと申すことです。富貴も觀來れば一時の夢、幻の世に空華の如き榮耀は永久的價値のあるものとは申されぬ。眞の價値は正しく智德・斷德・恩德の源泉たる大道、換言すれば、吾人の佛性に在るのであります。

四具足

阿含經には四具足といふことを示されてある。即ち四の物が具足すれば成佛の目的が達せらるゝといふ意味である。其の四つとは、一には信具足、即ち佛陀に歸依して成佛を以て永遠の目的とするので、是を眞諦門ともいふ。二には戒具足、修身の道です。三には施具足、慈善の德です。四には慧具足、知識の向上です。此の三法は俗諦門たる人道の本であるが、眞諦門の上にも離るべからざる要素である。眞諦と俗諦、解り易く申せば佛法と人道、又は信仰と道德、此の二つが圓融せねば決して活きた佛敎とは申されぬ。

淨土眞宗の如きは無戒の宗旨といふけれども、但だ戒行の名が無いといふまでゝ、自づと立派な戒德は奬勵されて居る。蓮如上人が道西房に與へられしといふ御文章の中に『先づ朝起は天道の冥加と存じ、親孝行は我身の福德、學問は五常の道案內、書物を讀むは心の洗濯、手習ひは目の療治、堪忍は生涯の守り本尊、短氣は我身の腹切り刀、御內佛に參るは旅立祝ひ、我身の懺悔は疊の上の御舊蹟參りと心得べきも

全く本末を顚倒したる邪見と言はねばならぬ。

昔、希臘の大政治家と稱せられしソーロンは雅典憲法を創制した程の人物であつた。ペルシヤ國王クレーザス、其の賢名を聞いて之を宮中に迎へた。當時のペルシヤは四鄰を征伏し國威隆々たるものであつた。國王は己れの威勢を示さんが爲めに、軍隊や、兵器や、其の他多くの寶藏等を殘らず案內せしめてソーロンに見せ、然る後に延見することとなつた。王は彼が定めて我が勢力の絕大なるに驚いたであらうと思ひ、ソーロンに對つて『凡そ此の世界に於て最第一の幸福者は何人であらう』と問うた。定めて『陛下であります』と答へるだらうといふ注文であつたと見える。すると、ソーロンは『希臘の片田舍に貧乏なる某と稱する農夫があつた、一生懸命に働いて幾十萬の財產を造り、子弟を敎養し家庭を整理し、晩年、身代を家督に讓りしが、猶ほ健康なるを以て社會公共の事に力を盡し、後に土耳古との戰に志願兵として出征し、壯者を凌ぐ武功を顯はし、終に某所に於て名譽の戰死を遂げた、是れ恐らくは世界第一の幸福者であらうと思ひます』と答へた。王はスツカリ當が外れた。『然らば其の次の幸福者は』と問うた。『されば、希臘の或る都府に十七歲計りの一少年あり、學を修め德を養ひて忠孝を勵み、土耳古との戰に志願兵として壯士を凌ぐ武勇を示し、絕大なる働きを爲して名譽の戰死を遂げた、是亦最大幸福者であらうと思ひます』、王は益々解らぬ。そこで『朕が如きは如何』と問うた。其の時、ソーロンは『君は只今の處御幸福の御身とも思はれるが、人間の價値は棺を蓋ふて定まるとやら、今後如何になるや、其の終りを見

そこで講師は『約束の聽講者は』、『二三十人連れて參りました』、『そんなら早く席に就かせるが宜い』、『承知しました』と言ひながら、双つの袂の中より丈三寸か四寸もある伏見人形を三四十取り出して机の上に並べた。講師は驚き且つ怒りて之を責しに、鳳潭は平然として、開講の折、席に出づる者幾百人、漸漸に減少して私一人となる、思ふに彼等は聽講の志堅固ならず求法の念薄弱なる者である。斯る者は縱ひ講席に列するとも眞に聞法する者に非ず、故に土人形と大差なき者と思はる。師にして只其の人數の多きを望まるゝならば、彼等を寄せ集むるも人形を並べ置くも其の効果には格別の差もあるまじ、人形ならば場所も取らず、又、今後缺席や退席の憂なければ、私は彼を取らずして此を取つたのである』と申した。此の奇答に感じて、講師は遂に鳳潭一人の爲めに講演を續けたと申すことです。尤も、此の御話は鳳潭ではなく黃檗鐵眼の弟子だといふ說もあるが、兎に角、吾々が道を求むるに當り、伏見人形的にならぬやうにせねばなりませぬ。

佛敎に於て佛界を說き淨土を說くは、皆な吾人に對して最高圓滿の理想境を示されたものである。理想は吾人向上の標的であつて、是れ無ければ吾人は何時迄も淺はかなる欲望の奴隷とならねばなりませぬ。殊に高遠なる理想は全く俗情を超越して居るものです。孔夫子も『朝に道を聞いて夕べに死するも可なり』と言はれ、『富と貴きとは是れ人の好む所、其の道を以てせざれば處らず』と言はれた。富貴や名利は道を行ひ德を樹て以て功績を奏する上に現はるゝ自然的報酬である。然るに、報酬の方を目的とするが如きは

前に述ぶるが如く、佛敎の目的は、要するに成佛といふに外ならぬ。成佛は決して此の世を離るゝことでもなければ死ぬことでもない。卽ち人格を大成して三大德を開發し、以て永遠の生命を獲得し無限の活動を起すのが佛樣です。此の大理想に向て絕對的信念を發するを發菩提心といふのである。此の發菩提心が無ければ吾人の精神力を十分に養ふことは出來ませぬ。『火の中をわけても道を聞くべきに雨風雪は物の數かは』、此の熱心が無ければむつかしい。

華嚴の鳳潭は、青年時代、京都に遊學し、比叡山に天台四敎儀の講座の開かるゝを聞き、聽講せんが爲め、毎日、京都より通學を始めた。なか〳〵容易なことではない。鳳潭は六角堂の方面に居たといふから往復六里餘の道である。然るに、講師は立派な學者であつたが、講義振りが衆人に適せなんだかして一日一日に聽講生が減つて、終ひには鳳潭一人になつた。講師も呆れ果て『今日だけは講義をするが明日よりは中止せん』といふを聞いて『是非繼續して講義を完結して戴きたい』、『でも御前一人では』、『一人で御淋しく思召さば明日より二三十人の聽講生を同道して參りませう』、『山內の僧ですら一人も出席せぬ樣になつたもの、遙かなる京都より通學する者は御前の外恐らくはあるまい』、『いや屹度同道して來ますからと』約して還り、翌日も亦一人で山へ上つた。講師が見臺に向つて見ると講座に居る者は鳳潭一人である。

佛の一門を修す、而して其の安心の徹底是の如きは頗る感ずべし』と仰せられたとある。是れぞ信仰力の偉大なる處です。學問なく才能なき者と雖も、一念の信仰能く精神をして不動の地に安住するを得ば、其の安心裏に自づから佛の三大德の一分の光明が輝くに依て觀佛三昧をも修德三昧をも慈悲三昧をも獲得するに至るものである。

今日では宗教と敎育との二つが相分れて各〻其の特色を發揮して居る樣なもの丶、其の根源を究むれば、何れも吾々の身心を開發するの法であるから、決して水と火との如く其の性質を峻別して見ることは出來ぬ。渾然たる人格を大成するには、兩者とも圓融して吾人の身心を長養せねばならぬものです。太陽には光りと熱との二つの作用がある。敎育を光りとすれば宗敎は熱である。之を引離しては太陽の大能力を現はすことは出來ぬ。

唯だ宗敎にも種々の敎派があつて、多くは後世の人々が敎祖の信條を根據として樣々に之を組織したものであるから、全然鵜呑みにする事の出來ぬものもあらう、されど。我が佛敎の如きは、我國に渡來してより、我が國體と我が神道とに順應して國家的に發達し、千有餘年以來我が國民精神の指導開發に任じて來たのであるから、何れの宗派よりするも何等牴觸する所は無いのであります。故に、諸君は心を安んじて、佛敎を奉ぜられて宜しからうと思ふ。唯だ佛敎的信仰の目的を誤らず、名實ともに完全なる信仰を標榜することが最も肝要であらうと思ふ。

無ればならぬものです。

　唯だ志だに堅固ならば必ず成佛は期せられるから、承陽大師は生死の卷に於て『佛と成るに最と易き道あり、諸の惡を造らず生死に着する心なく、一切衆生の爲めに憐れみ深くして上を敬ひ下をあはれみ、よろづを厭ふ心なく欣ふ心なくて、心に慮ふこと無く憂ふること無き、是を佛と名く又外に尋ぬること勿れ』と仰せられた。易き道というても、修行もせず工夫もせずに成佛が出來るといふのではない。如何なる者でも志ありて道に依て修すれば必ず成佛し得られるぞとの仰せである。併し、それには『諸の惡を造らず』以下の覺悟を以て修養の功を積まねばならぬぞとの御敎であります。禪より入るも念佛より入るも結局は此の身心に佛德を體現し、そこに大安心の基礎を定むるといふに歸着せねばならぬ。

　臨濟宗傑出の高僧として有名なる白隱禪師の時代に、三河の國に念佛翁と稱せらるゝ老翁があつて、念佛の一門に依りて安心を定得し、如何にも佛敎信者たる立派なる人格を備へて居つた。禪師行化の折、彼の老翁が拜謁致したので、禪師は老翁に一問を試みられた。『翁の信心は何を中心として居るぞ』、『西方の彌陀如來』、『その彌陀如來は現に在ますや』、『たしかに現在して居られます』、『卽今は何處に居らるゝぞ』、すると、翁は直下に進んで禪師の御手を取りて自分の胸を指し『それ此處に居られます』、其の態度といひ、容貌といひ、さも嬉し氣にさも沈着て、如何にも如來と同座して居るが如くに思はれた。禪師は之を感歎して『山僧、行脚幾十年、漸く此の事を體得し以て無窮の法樂を占む、此の翁智なく學なし唯だ念

りませんか。

信仰の威徳

以上の三大徳が相聚まつて金剛不壞の佛身を莊嚴したものであるとすれば、佛身は實に吾々人類の最高理想であります。斯くの如き境界は口言ふべくして、到底、現在に於て實現すべからざるものと片付てはならぬ。

現世成佛と未來成佛とは全で違つた教義の樣に思はれるが、其の實は同じ意味であります。御證の上に分證と滿證との二つがある。分證とは一分の證、滿證とは全分の證、全分の證は一分の證の積集し向上したものです。現世成佛というても、釋尊滅後、玆に三千年、未だ釋尊の如き御方は無いではないかといふ人がある。實に其の通りであるが、各宗の開祖、古今の名僧は各々佛陀一分の功德、否な、五六分七八分の德を備へて自利利他の偉績を擧げられてゐる。今日の吾々とても信仰修養怠らざるに於ては、各宗の開祖、古今の高僧方の一小部分の德なりとも必ず成得するに相違ない。又、成得する樣でなければ活きた佛教を現はすことは出來ぬ譯です。よしや愚夫愚婦たりと雖も、信仰の力、佛教的修養の德は必ず佛陀一分の功德を備へ、それに依て安心立命し、それに依て神聖なる道德的光明を放つものであります。故に現在を分證として滿證を來世に期するは、修養自然の順序であつて、原因結果の法則として、是非とも斯く

大慈悲に在るのであります。『今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり』とは實に廣大なる恩德ではありませんか。

明治大帝の御仁德の如きは大日本帝國のみならず、全世界をも包容して餘さゞる大慈悲であらせられた。一年、夏の半、非常な暑さで火雲天を焦すといへる有樣、奉仕の方々も玉體の御健康如何と案じ上げ、或日、御傍に伺候して御避暑を奏請せられた。すると、大帝は暫くは何等の御沙汰も賜らず、良あつて『あつしともいはれざりけり沸えかへる水田に立てる賤を思へば』といふ御製を賜はつた。即ち汝等は暑い〳〵といふけれども、此の暑き日に沸えかへる樣な水田に立て農事に煩ふ賤夫の事を思へば、暑いなどゝいふことを口に出しては言はれまいぞよとの御仰せであつたから、奉仕の人々も餘りの有り難さに淚を流して御前を退出したと申すことです。又、或冬の事、非常な寒さであつたので御避寒を奏請せられた。大帝は御笑ひながら御聞きであつたが『寒き時には國民は多く避寒に出づるや』との御沙汰であつた。『避寒する者は多くは中流以上の者、又は病人としてゞございます』、『中流以上の者は悉く避寒するや』、『却々もちまして避寒する者は聊かであります』大帝は更に『然らば避寒せぬ方が多數ぢやの』との御仰せ、『御意にございます』といふを聞いて、『朕は多數に隨ふぞ』との御沙汰であつたので、奉仕の人々も唯恐れ入つて、暑からざるに覺えず汗を絞つて御前を退つたと申すことです。國民を御惠み遊ばさるゝ御慈悲は御身の寒暑をも忘れさせたまふ。實に佛陀の權化、神明の御垂迹とも稱へ奉るべきものではあ

寒巖義尹禪師に就て得度せられし肥後の大智禪師は、南朝の功臣菊池武重の師と仰がれた高僧であるが、師僧寒巖禪師の處に修行の折、寒巖禪師の住地たる肥後の大慈寺は前に河川があつて商船が常に往來して居る。一日、寒巖禪師は帆船の風を帶びて走るのを指さし『汝這裡に在りて行舟を停め得るや』此處に坐つて居ながら彼の走る船が停められるかと一拶せられた。すると大智禪師は默つて前面の障子をピシヤリと鎖された。寒巖禪師は『尙ほ手脚を勞すること在り』手や脚を使うて停る樣では遲いぞとの再勘辨、大智禪師は瞑目せられて知らぬ顏、寒巖禪師は是より一層撫愛を加へられたとある。是れ六根門を閑却せば盡天地我を誘惑する物なき底の意を表せられたものです。今日の吾々も、別段、耳を掩ふにも目を塞ぐにも及ばぬ『坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』見る儘、聞く儘が大解脫地に安住せば、世界に處すること猶ほ虛空の如く、又、蓮華の水に着せざるが如くになるものであります。

されば、解脫というても人生生活と分離したものと思うてはならぬ。人生を解脫するのは人生に於て大自在を得ることである。眞の自由は眞の解脫より產み出さるゝものである。眞の自由は公明正大でなければならぬ。王陽明は死に臨んで、門弟子が『先生何か仰せらるゝことはあらずや』と申せし時、王陽明は『我が心公明正大復た何をか言はん』と答へて瞑目せられたとある。生死岸頭に立ても堂々として公明正大の天地に逍遙する、是れが眞の大解脫であります。

第三に大慈悲は、觀經にも『佛心とは大慈悲是れなり』とあるが如く、佛の佛たる所以は正しく此の

ざる手段である。波羅門教派の一類の如く、全然、人生を放棄したり、肉體を苦しめたり精神の活動を息滅したりするは是れ亦一種の死刑である。人生は修養の道場で身心は智德の淵源であるから、之を絶滅してはならぬ。そこで此の身此の儘その束縛を解くのである。

坐禪も念佛も皆な一面には解脫の法門となるのであります。內、六根を制御して心を不動の地に置き、外、六境を防禦して誘惑に遠かる、是れ卽ち解脫である。人は名利の爲めに束縛せられて種々の罪惡をも造る。されど名利そのものが惡い譯では無い。唯だ其の實を求めずして妄りに名を貪り、其の義を守らずして徒らに利を求むるに依りて、名利の奴隷となつて、却て天理人道を忘却するに至るから惡いのである。故に、人は名利以外に超然として自ら守る所の道が無ければならぬ。

乃木將軍は修養の龜鑑を萬世に示されたる御方であるが、日常質素を守り、時々那須野原に產せる稗を用ゐて御飯に焚かれた。臨時の客でもあると、中食の用意の間に合はぬ場合は、例の稗飯を出來合ひというて出されることもあつた。大概な客は食べ惡いので漸く一膳位を戴き『珍らしき御飯を頂戴しました、閣下は稗の御飯を御好みでありますか』と御尋ねすると、大將は『イヤ嘸ぞ召上り惡くかつたであらう、拙者も餘り好きではござらぬ、併し人間は時々嫌いな物を食べて置く習慣を付けることが必要である』と仰せられたそうです。嫌いな物を食べる習慣、こゝに非常なる勇氣、卽ち斷德がある。萬事萬端の上に此の覺悟があれば自然に衣食住所に縛られる氣支は無いのです。

を具有して缺くる所が無い。然るに自ら罪惡を造り自ら生死の苦患に惱み、枉げて迷妄の窩中にて顚倒して居るのは、つまり或物に縛られてをるからである。然らば、自己を束縛する物は何かといふに、矢つ張り自己である。自己が自己を束縛して居る。自繩自縛である。『盜人を捕へて見れば我が子なり』決して外に惡魔がある譯では無い。此の惡戯者は煩惱とも妄想とも名づくるのであります。故に釋尊は成道の最初に於て『一切衆生皆な如來の智慧德相を具す。但妄想執着に由りて而も證得せず』といはれたは是である。

解脱と慈悲

もう一つ喩て見れば、針と糸とを以て縫物をする如くである。針は短かく糸は長い。されど糸は必ず針に隨つて少しも違背せぬ。右にせよ、左にせよ、針の行く所糸必ず之に隨ふ。針とは道である。君に對し、父母に對し、社會に對する、皆夫々の道がある。その道を守つて背かざる、是れ人の人たる所以です。けれども、彼の溫柔なる糸に一ヶ處でも結ぼれが出來るとき、もう針の言ふ事を聞かぬ。いくら引張つても動かぬ。切れても動かぬ。卽ち君に對しても忠を盡す心なく、父母に對しても孝を行ふ心なく、社會に對しても德義を守る心が無くなる。其の時は仕方が無いから、其の糸を切つて了うか解くかせねばならぬ。普通の糸ならば切つても繼ぎ直すことが出來るが、心の糸の結ぼれは切り棄てる譯には行かぬ。重罪人を刑法に於て死刑に處するが如きは全く切り棄てるのであるが、是れは非常な場合に處する止むを得

る。宇宙の本源、生死の原理、自己の本性、大道の根源等を徹見するのは根本智で、現象世界の法相、生死變化の因緣、善惡迷悟の由來より衆生根性の差別、隨機説法の方便等に通曉無礙なるは差別智である。佛は此の根本智に依りて自覺せられ、此の差別智に依りて覺他の妙用を發したまうたのである。

教育の方面から申して見れば、修身道德に對する知識の備はるのが根本智で、應用の學を究むるのが差別智である。昔の教育は根本智に重きを置て差別智を閑却した傾きがある。『學問の要は放心を收むるに在り』といふ主義がそれです。精神を正しくし品行を愼み、忠孝の二道を修むるのが根本智を開くの目的であつた。今日の教育は差別智に重きを置て根本智を閑却する傾きがある。運用の智、藝術の才は益々發達するが、動もすれば自分の人格を作ることを忘れたがる。即ち仕事をさせると立派な者だが、品性や操行が一向ありがたく無いといふ姿である。要するに、物質的文明の要素は差別智で、精神的文明の資源は根本智である。此の兩智の完全なる發達を期するのが教育の目的であらうと思ふ。此の兩智の最高至上域に達せられたのが佛の大知見であります。

次には大解脱、即ち斷德、是れは佛の意志力である。佛の大勇氣である。元來『ホトケ』といへる名詞には色々の解釋があるが、國語學上の解釋は別として、天桂禪師が『佛とは誰が結びけん白糸の賤が小田卷くりかへし見よ』と詠じて『ホトケ』とは結ぼれの解けたる意味であると見られたは所謂大解脱の意味で甚だ面白い。どんな強力な人でも手足を縛られて居ては何等の働きも出來ぬ。吾々凡夫は、本來、佛性

然らば、佛敎各宗派に共通する佛敎の大目的は那邊に在るかといふに、一言以て之を蔽へば『成佛』の二字に歸するであらうと思ふ。大乘・小乘、頓敎・漸敎何れより見るも、『佛に成る』此の外に佛敎の根本目的は無い筈です。而して、佛敎信仰の功果は如何といふに、是れ亦、一言以て之を蔽へば、法華經に所謂『現世安穩後生善處』といふに歸するであらうと思ひます。現世安穩といふは、現在の此の世に於て最高圓滿なる幸福を得ることです。身を修め家を齊へ、國を治め天下を平らかにすることは言ふに及ばず、進みて最高の理想的身心、國土を目前に實現するのが眞の安穩快樂であります。又、後生善處とは、後生は未來です、善處は安穩快樂の境です、卽ち永久的安穩を獲得するのが後生善處であります。表面に後生善處を開示して自ら現世安穩の利益を得せしむるのが淨土門の敎である。又、現世安穩を標榜して自づと後生善處の樂因をも成就せしむるのが聖道門と稱する方の敎である。表裏兩面を通じて深く觀察すれば佛敎の目的も功果も終に歸一すべきものであります。

然らば、其の根本目的たる佛とは何ぞやといふに、佛とは梵語に佛陀、譯して覺者又は智者といふ。迷の夢より覺めたる人、正智圓滿の人といふ意味である。併し、是れだけでは其の意義が十分で無いから、古來より佛とは三德圓滿の德號と稱して居る。三德とは智德・斷德・恩德である。換言すれば、大知見と大解脱と大慈悲とであります。佛の智慧は廣大であるから三智・五智等の名を以て其の內容を說明して居るが、大別すれば根本智と差別智とに歸する。本體を究むるのが根本智で作用を覺知するのが差別智であ

自覺覺他覺行圓滿

佛教の目的

佛教は八萬四千の法門とも稱して其の說く所普く萬機を攝して漏らす事なし。我國は大乘有緣の地であつて、佛教の中獨り大乘教のみ最も隆盛を極めて居るが、その大乘教にも亦無量の法門あるが爲めに、顯教・密教、聖道・淨土、各々其の趣を異にし、今や十三宗五十七派の宗派を見るに至つたのである。尤も、宗派の中には教理解釋の相違、信條の異同に依つて分岐したもの計りでは無く、開創の由緒や傳法の系統などの關係より宗派を異にして居るのもあるが、兎に角、佛教の教義法門は殆ど大海の如く其の涯際を測ることが出來ぬ。そこで、始めて佛教を研究せんと志す人は多く入門の正路を見出すに苦しむといふ狀態であります。併し、我が曹洞宗祖承陽大師は『如來の在世には全く二教なく全く二師なし』と仰せられて、衆生の側から見ればこそ法門萬差なりと雖も、釋尊の御本懷より御覽になれば唯有一乘法無二亦無三で無ければならぬ。

べし冬亦惡からず』といふうたは全く道人の志です。安東省菴は『求め無き是れ至寶、足ることを知るは是れ至富、安心は是れ至樂』といふたが、これだけではまだ達人とは言はれぬ。道を求めて倦まず是れ至寶、業を勵んで足ることを知る是れ至富、順逆の境に在りて己れの身心を鍛錬す是れ至樂といふのでなければならぬ。此の意氣と覺悟とがあらば、平生底の行持が盡く安心の源泉となつて、自然に彼の勝海舟翁が座右の箴とせられしといふ『自ら處すること超然、人に處すること靄然、事なければ澄然、事あれば嶄然、得意には澄然、失意には泰然』といふ風になるであらう。

併し、此の地に達するには自己の精神を健全にして常に煩惱妄念の塵を拂ひ、罪障の借金を取片付けて、俯仰天地に耻ぢざる者とならねばならぬ。見識や理窟ばかりでは大晦日の關所は通られぬ。況や人生の大晦日に處しては大抵の者は狼狽するものです。明治天皇は吾々を御誡め下されて『時はかる器は前にありながらたゆみがちなり人の心は』、『思ふこと思ふがまゝになりぬとも身を愼まむことな忘れそ』との御製がある。歳晩は既往の成蹟を見るべき統計表である。此の時期に於て吾々は能々己れを知り己れを考へ、以て正當恁麼時の大安心を決定し、人々の脚跟下に於て能く歳晩の活佛法を現成せしむる樣に致したいものである。

趙州は富士の絶頂に居ながら箱根山の話を以て投子に當られた。流石に投子である。直ちに『夜行を許さず明に投じて須らく到るべし』と答へられた。夜路は兎角に危險ぢやわい、盲人の垣窺きの樣で一向譯が解らぬ、寧そ夜が明けてからお出でなされよ、活眼を開いて法界を見渡せばソックリ其の儘の妙法である。一微塵の中にも諸佛の慈悲光明を放ち、一滴水の上にも般若の大智慧を現はして居る。迷ふが故に三界成、悟るが故に十方空、『此の經のこゝろを得れば世の中の賣り買ふ聲も法を説くかな』、『法の華やまきばかりに限らめや松竹櫻當意卽妙』である。溪聲山色も實相であるが運水搬柴も妙法である。何處に死だの活だの解脫だの利生だのといふ閑名目があらうぞ、といふ挨拶です。趙州は元來夜行の人では無い。是に於てか兩禪師の間は肝膽相照すともいふべきものであらう。

吾々も亦眞に能く身心を訓練して圓熟の境に達すれば達磨の所謂不識の境界にして、最早、靜的だの動的だのといふ區別も名相も不要である。況してや大晦日だから寂寥いの、正月だから面白いの、逆境を厭うたり順境を貪つたり、秋色を見て憂ひたり春風に觸れて樂んだりする妄想のある中は駄目だ。故に承陽大師は『春風に引かれて春澤に遊ばず、秋色を見ると雖も更に秋心なし』と仰せられた。併し、前にも申した枯木寒巖では無く。其の間に一段の風流あり、向上の法樂あり、無我の大慈悲あり、無漏の大菩提があるのである。

佐藤一齋も『順境は春の如く出遊して花を觀る、逆境は冬の如く堅臥して雪を觀る。春固より樂む

夜行を許さず明に投じて須らく到るべし

支那禪門の巨匠趙州禪師が、或時、投子禪師に向つて、『大死底の人還つて活する時如何』と問はれた。大死底の人とは天地法界をも空じ來つて寂滅無我になり去つた人です。即ち生死を解脱し、名利を超越し、修養上大晦日のドン尻にまで進んだ境界である。併し、一年の月日が全く究め盡して一日も一時も一分時も無くなつて了つた時は總てが空滅に歸するであらうか、否、さうでは無い。大晦日の最後と同時に新しき正月元日の幕が開ける。絶對無我になり切つて了へばそこに大活せる新生命が現はれる。是れぞ木人方に歌ひ石女立て舞ふ底の消息である。趙州は此の消息を以て一問を試みられた。

併し、今日は大晦日ぢや、明日は元日ぢやといふ議論をして居る中はまだ大安心を決定したものとは許されぬ。大眞理の上には眞空も妙有も無い筈だ。大道の上には向去とか却來とかいふ名相も付せられぬ。世の中を解脱したとか、解脱地より世の中に下るとかいふ順序を論じて居る間はまだお悟りの普請中で、落成式までには餘程距離がありさうである。『山々の高根〳〵を傳ひ來て富士の裾野にかゝる白雲』で、箱根山や足柄山では一番高い處に居る雲でも富士の處に來ると漸く裾野にマゴツイて居るのである。大死一番して大活現成し、大解脱の中より大慈悲を運び出すといふは實に氣高い境界の樣であるが、眞に能く大道と一體不二になつた人から見れば、まだ〳〵舌頭上の議論である。

我が禪門ではそれ位の處には止まらぬ。進んで自己の一心能く萬象を收め宇宙の大靈と無二無別なることを了知し、脱然として生死の兩頭を截斷し、超然として差別の妄念を脱落し、大無我大解脱底の人となり去るのである。此の境界は信念と禪定力とに依りて成得するのである。併し、單に自己の解脱のみにては、未だ以て本分を盡せし者とは稱せられぬ。即ち更に一歩を進めて身を五欲六塵の巷に投じ、縁に應じて正法を弘通し機に隨て迷執を拔濟し、終日、無我にして能く大我の靈機を發轉し、寂滅道場に安住しながら縱横無礙の妙用を現出し、孝順となり、慈悲となり、眞諦に入り、俗諦に出で、或時は降魔の劍を揮ひ、或時は顯正の幢を立て、柔かなること楊柳の如く、剛きこと古松の如く、山の如くにしては風に動かされず、海の如くにしては宏く百川を容る、是の如くの活機輪が無ければ禪門の大活動とは謂はれませぬ。是れ則ち動的訓練で、百尺竿頭に一歩を進むる底の手脚といふのである。

昔、或る禪師が『坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人を深山木に見て』と詠ぜられた。即ち心地不動なる時は花の街、柳の巷に在りとも深山幽谷に在るが如しといふ意味である。吾々はかういふ境界にならねばならぬ。されど唯だ深山孤絶の生涯のみでは、所謂枯木寒巖の風景と一般で、慈悲爲人の機用は起らぬ。即ち温き血と熱き涙とが乾燥して百尺竿頭に高く止まるに過ぎぬ。そこで天桂禪師は『深山木』を『そのまゝ』と訂正して進一歩の消息を示されたといふことである。

彼の二宮尊徳翁の如き初より名利に打克つた人である。翁の高潔なる志操は少年時代から養はれたのです。少壯の頃、其の鄕里なる相州柏山村の某家に淨瑠璃の會があつた。出物は太閤記十段目で、光秀の母の皐月が、久吉と間違られて、光秀の竹槍にかけられた愁歎場になり『歎くまい〳〵内大臣春長といふ主君を害せし武智が一類、かく成り果るは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の名に穢す、不孝者とも惡人とも、たとへがたなき人非人、不義の富貴は浮べる雲』といふ所に語り至ると、聽衆の中より大音聲に『そこだ』といふ者があつた。餘りの大聲に太夫は腰を拔して語り續くることが出來ぬ爲め遂に中止になつた。集つた村人も太夫も不平だら〳〵にて散會したが、翌日、太夫が或人に向つて、昨夜、私の淨瑠璃に横槍を入れしは誰れであつたかと問ひたるに、あれは金次郎といふ變り者であると答へた處、彼は何か感ずる所ありしと見えて、人に賴みて翁に面會して、『昨夜は何故にあの樣な大聲を出だせしか』と尋ねたるに、翁は『あの淨瑠璃は母の光秀に對する諫言が最も肝心な處で、十段目の生命は『不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて功名顏、たとへ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか、主に背かず親に仕へ仁義忠孝の道さへ立てば、モツソウ飯の切米も、百萬石に優るぞや』といふ處にある。あそこを甘く語る太夫ならば其の目的は達したものであらう、だから己が掛聲をして力を入れてやつたのに、お前が腰を拔かしたからいけぬ』というて破顏一笑したと云ふことである。翁は實に此の精神を以て全生涯を一貫せられたのです。是れ則ち向去の消息の一部とも見られる。

ることである。是の如くすれば始終生氣に充されて、日々夜々に活動を怠らぬから、何時、年窮歳盡が到來してもビクともするものではありませぬ。

百尺竿頭一歩を進めよ

抑も前に申した通り、吾人の修養には必ず二重の訓練方法のあるのを、禪門では之を向去却來というて居る。向去とは俗界を解脱して大道に逍遙することです。却來とは解脱の悟境より本の俗界に立戻りて大道を運用することです。而して、吾々は是非共第一着に向去門に進まねば眞の安心は得られませぬ。

兎角、人間といふものは名利の爲めに束縛せられ易いものである。名利必ずしも惡しゝとはいふべからず、正義の利福は國家富强の基で、眞正の名譽は國光宣揚の源となる。併し、名譽と利益とは人間が、徳を修め恩を布き、國に盡し世の爲めにする成蹟によつて得る所の報酬たることを忘れてはならぬ。その報酬たる名利を目的として行く時は、正しく主客を顚倒する譯であるから、その顚倒の割目から様々なる惡徳を産み出す様なことになるものです。獨り佛教計りで無く、古今の聖賢が名利を卑しめたのは全く此の惡徳を恐れたからです。是の如き卑き名利の心は、畢竟、利己的妄想より發するのであるに依て、之を放任して制することが無いと、彼の梁惠王が利を愛せしが如く、又、現代に輕薄なる才子が名を貪るが如くになつて、肝心なる道念も志操も皆な消耗して了ふ。

を策勵する時、警策を以て聖僧前に立ち『暫時不レ在如二同死人一』と言はれるのが常であつた。和尚は聲の大きな方であつたそうだが、此の一語は滿堂に響き渡りて大衆の心肝に徹し、爲めに疲れし者は疲れを忘れ、倦める者は倦むを忘れ、病める者は病を忘れ、眠れる者は眠氣を忘れたと申すことである。實に暫時も心頭がウカ〳〵と餘所道に飛び廻りて御留主であつたなら、坐禪をして居ても、讀經をして居ても、何の役にも立たぬ。全く死人も同然である。故に孟子は『學問の要は放心を收むるに在り』といひ程明道も『聖賢の千言萬語只だ是れ人の已に放てるの心を持て、之を約めて反覆し、身に入り來らしめんと欲す』といひ、又『心は腔子裏に在るを要す』といはれた。『引かれなば惡しき道にも入りぬべし、心の駒に手綱ゆるすな』、『人心惡しき道には入り易し朱に交れば赤耻をかく』故に明治天皇も『世の中の人におくれを取りぬべし進まん時に進まざりせば』と御訓誡あらせられた。

我が佛教にては四如意足といふを說かれた。卽ち眞の滿足を得るには四つの心得が必要である。一には欲、是れは確實なる目的を立てゝ、その目的に向つて一心を傾注することです。之れを以て見ても佛教は活動に背いた單なる無欲主義では無い。邪欲妄欲は嚴に之を制するも、之と同時に正義公道に順ずる希望は極端に奬勵せられて居る。二には念、卽ちその目的を常恒に憶念して暫時も放過せざること。三には精進、その目的を達する爲めに奮勵努力すること。四には思惟、論語にも『學んで而して思はざれば罔し』とあるが如く、尋常に實際的研究に努めて自ら邪道に陷ることを警しめ、且つ應用を誤らぬ樣に用心す

發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、我が生涯云ひ捨てし句は一句として辭世ならぬはなし、若し我が辭世いかにと問ふ人あらば、此の年頃云ひ捨て置きし句いづれなりとも辭世なりと申し給はれかし、說法從來常示寂滅相、是は釋尊の辭世にして『一代の佛敎此の一語より外はなし』といはれた。翌九日、丈草・去來等を床近く招きて、『昨夜は眠られざりしまゝ不圖一句を案じたり』とて呑舟に筆とらせて『旅にやみて夢は枯野をかけ廻る』と吟じ了りて、更に『是は辭世にもあらず、辭世に非ざるにもあらず、病中の吟なり、併あれど、生死の大事を前に置きながら如何に生涯好みし風流とはいひ是れも妄執の一つともいふべけれ』と申された。かくて十二日には強て沐浴を命じて身を淨め、次郎兵衛に抱へられて正坐し、其角・去來・丈草を正面に、其の他の門人を左右に置き、惟然・支考をして遺言を筆記せしめ、伊賀への書狀は自ら認め、江戸・美濃・尾張等の諸門人に傳言を托し、之より先き路通が不興を蒙りて乖離したるを我が歿後必ず棄つる勿れと去來に賴み、殘る方なく言ひ終りて合掌し、靜かに觀音經を念じて眠るが如く長逝せられたとある。翁の平生の句を以て辭世なりといはれた言葉の中には最も深き敎訓が含まれて居る樣に思はれる。平生に於て臨終の覺悟を存すれば臨終も尙ほ平生の如くならん。平日に於て大晦日の用意を存しなば大晦日も亦平日の如くであらう。然れば吾人の最も大事とする所は平日の行持である。

奕堂禪師等の多年參得せられし美濃の國關の龍泰寺の來應和尙は當代の巨匠であつた。坐堂に於て大衆

ゆる變事に處しても自づから泰然として動着せず、嶄然として奮ひ進み、超然として獨り樂しむ底の安心がありたいものです。大晦日になつたとてマゴ〳〵したり、正月になつたとて有頂天になる樣なことでは、決して人生の荒波を安々と渡ることは覺束ない。況して生死岸頭に於てをやである。

暫時も在らざれば死人に如同す

元來、年窮歲盡の時に於ける苦樂喜憂は平日の心懸と行持の如何に依るものである。斷末魔の時に於ける安心と苦悶とも亦平素の覺悟如何に依りて分るゝものである。時計のカチ〳〵と響く音に變りはないが、平生の始末の惡い者は大晦日になると、その時計のカチ〳〵がシヤツキン〳〵と鳴る樣に聞え、用心が宜くて貯蓄でも出來て居る者にはチヨキン〳〵と響く樣に感ぜらるゝと申すことである。されば南泉禪師は『平常心是れ道』といひ、孔子は『道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず』といひ、慧信僧都は『道といふ言葉に迷ふことなかれ、朝夕己がなし業と知れ』と詠ぜられた。平生の覺悟が善ければ大晦日が來ても更に苦慮する所は無い。平日の信念が堅固ならば何時無常の嵐が吹き來るとも少しも動着はせぬものです。

芭蕉翁が元祿七年九月の末に病に罹り、次第に重態に陷りたれば十月八日、支考・乙州・去來等が相議して、古より名ある宗匠には必ず辭世があるから、翁にも一句賜はりたしと申しける時、翁は『昨日の

ること山の如くであつた。

又、彼の鎌倉圓覺寺開山祖元禪師が、故郷支那に在りし時、南宋の德祐元年、元兵大擧入寇して、中國を攻擊した。師は難を溫州の能仁寺に避けしに、明年、元の兵は遂に溫州をも侵したのである。大衆は皆な驚いて逃走したが師は獨り堂裏に踞坐して居られた。元將刃を揮つて既に師の頭に擬したれども、神色自若として更に動着せず、便ち『乾坤無レ地三卓二孤筇一、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬二春風一』の一偈を擧唱せられた。元兵之に感じて懺謝して去つたとある。

又、武田信玄公の歸依僧たりし甲州慧林寺の快川禪師が武田家の亡びし時、織田信長の召に應ぜざりし爲め、信長は怒りて、天正十年四月三日、武夫數百人を遣はし一山の大衆を驅りて山門に趁ひ上げ、門の下に薪を積みて四方より火を放ち、士卒戟を持し露刄にて四方を圍む。衆僧一百餘人皆威儀を整へて烟焰の中に在て位に依て坐す。師は座に據りて『諸人者即今火焰裏に向つて如何が大法輪を轉じ去らん、須らく一轉語を著て末後の句と爲すべし』といはれた。衆各々一語を下す。師、最後に高聲に擧して曰く『安禪不三必須二山水一、滅却二心頭一火自涼』と、火焰衣に着くも恬然として動かず、忽ちにして猛火紅舌を吐いて大衆を呑却す。師、莞爾として火中に殁せられたといふ。

是の如きは年窮歳盡に處する活機輪とも見るが宜しい。若し此の機輪ありせば年々歳々に遭遇する歲晚の期に至りても毫末も狼狽ることは無い筈である。又、人生に於ける有らゆる艱難有らゆる逆境、有ら

を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因緣なり』と仰せられた。

流石に楠公は此の問題を閑却せられず、湊川戰死の前日、明極禪師の禪室に參じて、『生死交謝の時如何』生と死との變り目に處する安心如何と進問せられた。時に禪師は『兩頭俱に截斷して一劍天に倚りて寒し』と答へられた。是れ實に年窮歲盡の一著である。生と死との兩頭を認めて彼を厭ひ此を欣ぶといふ樣なことではならぬ。肉體には生死の假相ありとも心性には生死などいふものは無い。波瀾には出沒ありとも海水に變動は無い。故に禪氣を振ひ起して生死の兩頭を截斷つて了ひさへすれば、その禪氣なるものが天地に充盈し、大千沙界一蒲團の境界を自得することであらう。此の時、楠公は『畢竟如何』と問はれた。生死を超越し去りなば、安心如何に得られませうぞ。禪師威を震つて一聲『喝ッ』と叱り飛ばされた。既に生死を驀過し去らば、其處が直ちに不生不滅の佛性海に悠々自適すべき大安心の場處である、その外に別に安心の地を求めんと欲せば早く是れ妄想窟中に墮落したものであるぞ、と直示されて楠公は言下に大悟徹底せられたとある。人間一生の大晦日に至つた場合、此の楠公の樣な大安心が無ければ、眞の佛者とは申されまい。

森田悟由禪師は、大正四年二月四日の夜、重患に罹られ、其の翌朝、二三の醫士が御手當を致せし折、靜かに御目を開かれて『古家の造作役には立つまい、壽命があらば百までも生きて居るが見込が無くばその小刀細工は止してくれよ』といはれて微笑を浮べられた。その時の御態度は優悠逼らず、實に泰然た

『世に恐るべきは恐れざるの人なり』、『悔悟の涙は能く罪の汚れを洗ふ』というて居る。故に吾人は歳晩の時に際し、縦ひ不如意の事ありとも、天を怨みず、人を尤めずして、宜しく既往を回顧し自己に返照して、先づ以て精神上の汚れを洗濯するの心懸こそ急務である。

年窮歳盡の一著

『年窮歳盡の時如何』といふは好箇の問題である。十二月は月の終り、大晦日は日の終り、死期は人生の終りなり。此の時に於ける吾人の覺悟果して如何、彼の大我夢庵の樣に『貰ふことといやでござると言ひながらとらねばならぬ暮れて行く年』など〻愚痴をならべても役に立たぬ。『かけとりの來んと知りなば門さして留守と答へて逢はざらましを』も餘りの不覺悟、『年の暮たへてかけとりなかりせばかりの世の中すみよからまし』も無益の繰り言である。況や生死岸頭に立ちて、人生の年窮歳盡に處するには、そんな呑氣なことを言うて居る場合で無い。

光陰矢の如しとは言ひながら十二月三十一日は定まりし日數を經盡さねば到來せぬが、人間一代の大晦日は明日をも待たで今にも目の前に到來するやら知れぬ。然るに吾々も其の多くは一向に之に對する覺悟が無い樣である。我は果して何れより生れ來りしかを知らざるを以て、死して何れの處に去るかといふことも知らぬ、既に始めに昧く又終りに昧し、之を迷ひといはずして將た何とか言はん。故に承陽大師は『生

吾々は明治天皇の御製に『我れとわが心折々顧みよ知らず〳〵も迷ふことあり』と仰せられた通り、知らず〳〵法に背き情に悖り信を失なひ非を飾る様なことが多いものです。よしや格別の大過なしとするも、佛様や神様の眼から御覧になつたならば、如何であらう、吾々の心も身も、恐くは煩惱の塵に埋まり、罪惡の泥に塗れて居りはせんであらうか、若し嚴格なる佛祖の訓誡や聖賢の敎範に引較べて見たならば、吾人の既往は實に恥かしきことと恐るべきことに充されて居ることをツク〴〵感ぜられます。彼の蘧伯玉は『我れ五十にして四十九年の非を知る』といはれた。蘧伯玉は孔夫子も御褒めになつたほどの賢者であるけれども五十歳の春を迎へて、過去四十九年の言行を回顧すれば、甚だお愧かしい事であつたといふ悔悟の情を述べられたのです。

我が國では淳和天皇の天長七年十二月頃より宮中に於て、三千佛名會といふ御行事があつた。是れは曹洞宗の授戒會で禮佛を行ふ如く、過去の千佛、現在の千佛、未來の千佛、此の三千佛名の御名號を唱へて禮拜を行ふので、要は一年中に造つた凡ての罪障を佛前に懺悔して、三業の塵垢を洗滌するといふ御旨意である。此の御行事は五六百年間も、上、朝廷より、下、民間にまで齊しく行はれたものである。故に太政大臣藤原良經公の歌にも『一年のはかなき夢やさめぬらむ三世の佛の鐘の響に』とあり、紀貫之の歌にも、『年の中に積みたる罪はかきくらし降る白雪と共に消えなん』とあります。

人誰か過なからん、過つては之を愧ぢ且つ之を改む、是れ卽ち善に遷り德に進むの基である。西哲も

に影を西の海に沈めんとする時、終りに元の東の山の端を照すが如きをいふ。吾々も眼には色を縁じ、耳には聲を縁じ、此の意識が始終外界に向つて萬境を縁じて居るが、その外に向つて走る心意を引き回らして、却つて自己を返照するのが回光返照です。即ち自ら己れを顧み觀ずることです。震旦の二祖慧可大師が達磨大師に參ぜられた時、『我が心未だ安んずる能はず、和尚願くば我が爲めに安心の法門を與へよ』と願はれた。すると達磨大師は『心を持ち來れ汝が爲めに安心せしめん』といはれた、二祖は是れより自己を返照して御修行をなされ、遂に大事を悟了し、『心を覓むるに竟に不可得』というて達磨の印可を稟けられた。

吾々が歳晩に於ける修養にも、先づ以て退て自己を返照して見るが宜い。即ち臘月に至るに及び既往十一ケ月間の言動は果して是とせんや非とせんや、臘月三十一日に至るに及び過去三百六十五日間の行持は果して善とやせん惡とやせん、自己の本分に照して恥づる所なきや否や、佛祖の御照覽に對して畏るゝ所なきや否や、能く〱點檢したならば、吾々の行動には、隨分恥かしと思はるゝこと、畏ろしと感ぜらることが多いであらうと惟ふのである。曾子は大賢であるが、猶ほ『吾れ日に吾身を三省す、人の爲めに謀つて忠ならざるか、朋友と交りて信ならざるか、傳へて習はざるか』といはれた。即ち他人の爲めに事を謀て不親切なことは無つたらうか、友達に交りて言と行と違つたことは無つたらうか、道を傳へて習はずにすましたことは無つたらうかと、日々夜々に反省せられたのである。

歳晩の教訓

回光返照せよ

歳の晩には歳晩の教訓が無ければならぬ。されど迂衲の如きは他を教訓するの力は無く、却て他より教訓を受けねばならぬ身である。依て此の歳晩訓の如きは、先達の士の教訓を土臺として同志の人々と共に互に相誡めて、歳晩に於ける一大修養を致したいと思ふが爲めであります。

抑も吾々が人の人たる道を全うせんとするには、必ず二樣の方面から精神を訓練せねばならぬ。即ち內に省みて精神を廓清すると、外に向つて精力を進展するとの二つである。一は靜的で他は動的である。又、一は保守的で他は進取的である。此の二つは恰も前後の歩の如く偏廢すべからざるものであります。中に就て、先づ始めに靜的修養に依りて、自己の立脚地を確立することが必要です。我が禪門では是を『回光返照の退歩』と稱します。

回光返照とは光りを回らして返り照すといふので、譬へば太陽が東の山の端を昇つて光りを放ち、夕べ

なり」と仰せられたが、吾々も亦釋尊降魔成道の遺風に倣ひ、二祖斷臂の勝躅に鑑み、益々求道の志念を鼓舞して佛光明を現實に發揚せんことに精進せねばならぬ。」

道に入るべし』との教訓を受けて専一に辨道せられた。是れが二祖の降魔行である。併し、一般の人々に對して、釋尊の如き二祖の如き難行苦修を勸むることは不可能であるが、堅實なる理想と眞純なる信念とだにあらば、行住坐臥の中にも内外の魔障を降伏することが出來るものである。

眠らぬ人の前には夢は無い。妄念妄想を解脱した人の前には苦惱も逼迫も無い。縱ひ苦惱ありとも其の苦惱が修養の資料となり、其の逼迫も成道の奬勵となる。古人は『聖人は心を治めて境を治めず小人は境を治めて心を治めず』というて居る。聖人は自己を訓練するに依つて順境に在りては益々精進し逆境に處しては益々奮鬪す。故に如何なる境遇も皆な理想を實現し信念を培養するの因緣となる。

然るに、小人は之に反して境遇に支配せられ惱殺せられて頻りに苦痛煩悶を感じ、其の結果境遇を改造せんとのみ努め、毫も自己精神の訓錬に注意を拂はぬから、もがけばもがくほどあせればあせるほど境遇の壓迫が深刻になりて、遂に五尺の身體の置き處にも差支を來し『世の中は四尺五寸となりにけり五尺のからだ置き處なし』といふに至る。是れ則ち悪魔に征伏せられたのである。されば古人は『心を治むるの法は須く至靜を至動の中に認得すべし』というた。至動とは日常の生活々動である。此の活動の中に於て降魔的三昧に安住するのが至靜である。

吾々が成道如來を禮讃せんには、己れ亦宜しく成道の過程に一歩を進むべきである。『佛とはたが結びけん白糸の賤が小田卷くりかへし見よ』高祖大師は『所謂諸佛とは釋迦牟尼佛なり釋迦牟尼佛是れ即心是佛

た日であるから、成道會に引續き斷臂紀念の坐禪を行ふことが禪門の例となつて居る。

二祖慧可大師は聰明の資を以て求道の志深く、嘗て世典を學び佛敎を究むるも猶ほ未だ安心の地に至らず、遂に嵩山に上りて達磨大師の室を扣いたが大師は入室を許されぬ。寒夜降雪の中に立て大師の聽許を待て居られた。其の胸中の苦悶は如何計りにてありしならん。積雪腰を埋め、落つる涙は滴々に凍る。されど二祖は毫も屈せず、自ら『古人道を求むるに、骨を敲き髓を取り血を刺して飢を濟ふ、髮を布きて泥を掩ひ崖に投じて虎を飼ふ、古へ倘ほ此の如し我れ又何人ぞ』と思惟し、死を決して立つて居られた。良ありて、大師は初めて口を開き『汝は久しく雪中に立つ、何事をか求めんとする』二祖曰く『惟願くば和尙慈悲甘露門を開いて廣く群品を度したまへ』時に大師は『諸佛無上の妙道は曠劫に精勤し行ひ難きを能く行ひ忍ぶべからざるを能く忍びて以て成道の成果を擧げたるものぞ、豈に小德小智輕心慢心を以て眞乘を冀ふべけんや』と怒鳴りつけられた。黃檗の三十棒にも勝る一大鐵槌であつた。だが、大師の此の激勵の語は慈悲の涙の結晶である。殺活自在の全機現である。二祖は深く求道の志念が緊張して、遂に利刀を以て左の臂を斷ちて大師の面前に突出された。是に於て大師は入室を許して親く接得せられた。二祖は大師に參侍すること八年の後、大師の正法眼藏を面授せられたのである。

二祖が臂を斷ずる時、所謂身心を佛法に投じたので、全く自我を沒却し盡して居るから如何なる惡魔も近づくことは出來ぬ。更に大師より『外、諸緣を息め、內、心喘ぐことなく、心牆壁の如くにして以て

えず手が顫ひて聊か酒を流されて『和尚何事ぢや』といはれると、禪師は亦もや笑を含んで『棒喝は禪門の習ひ、御斟酌は仕りませぬ』と申し上げた。公は是より一段の歸依を加へ遂に祇園寺を水戸に創立して禪師を開山に請じ、自ら弟子の禮を執て參禪せられた。

吾々も亦常に降魔の威力を發揮すれば逆境にも縛られず順境にも囚はれず、變轉窮りなき人生に處して其の動かざること山の如くなることを得ば、五蘊魔にも煩惱魔にもおかされず、能く天命を明らめ因緣の理を信ずるが故に天魔にも支配せられず、能く生死の原理を究め永遠の生命を把捉するを以て死魔の爲めにも苦しめられぬ樣になるものである。

彼の孟子が『天下の廣居に居り、天下の正位に立ち天下の大道を行ひ、富貴も淫すること能はず貧賤も移すこと能はず威武も屈すること能はず、此れ之を大丈夫と謂ふ』と言ひし如く、眞箇大丈夫の鐵漢となることが出來る。此の境致に達するには、必ずや堅實なる理想と眞純なる信念との上に立脚せねばならぬ。理想なき者の生活は海圖を有せずして船を大洋に浮べる樣なもの、信念なき者の生涯は萍の波の間に〳〵漂ふが如きもので、到底、降魔の威力も成道の光明も實現することは不可能である。

至靜を至動の中に認得せよ

釋尊成道の翌日即ち十二月九日を斷臂會と稱し、支那禪門の第二祖が達磨大師に參じて深夜臂を斷つ

る場合は、知らず〳〵之に耽溺して其の志操も意氣も蕩盡し易いものであるから、廬山の慧遠法師も『逆境は打し易く順境は打し難し』といひ、王陽明も『山中の賊を破ることは易く心中の賊を破ることは難し』というて居る。此の惡魔に打克つのが降魔の威力である。

水戸黄門光圀公は徳川時代に於ける第一流の賢人であるが、公が師として崇拜した人の中に東皐心越禪師がある。禪師は曹洞宗派に屬する支那僧にして我が國に歸化した人であるが、公は江戸小石川邸に禪師を招きし時、其の人物を試驗するに色々の方法を以てせられた。先づ第一に軟魔を以て其の志操を試みた。その方法として、邸内第一の美人を常侍せしめて其の態度を觀察した。禪師は更に喜びもせず厭ひもせず、從て愛念も無く憎惡の色も無く、つまり書生を使うて居ると少しも變らなんだ。そこで、公は或日の事、離れの小亭に禪師を招き、今日は盃を傾けて閑談を試みんとて、酒盃を與へ小姓をしてなみなみと酒を注がしめた。禪師が其の盃を手元に引かうとした途端、間近い軒下で大砲を打放した。所謂剛魔的試驗であるから思ひ切て恐ろしい大音響を發し、天地も崩れるかと思ふ程で、給仕人の小姓さへ驚愕の餘り卒倒した。然るに禪師は泰然自若、殆ど知らざるもの丶如く、靜かに盃を擧げて飲み始めた。公は呆れながらも『折角の閑談中に騷々敷ことぞ』といはれしに、禪師はニツコリして『鐵砲は武門の習ひ御斟酌には及び申さぬ』と申した。斯くて盃を乾して、謹で公に返杯せられたので、公も小姓をして酒を注がしめ、今や御手元に盃を引かんとする刹那、禪師は威を震つて大喝を下した。流石の公も覺

ある。或は飲食物の要求、或は生殖本能の要求、或は睡眠を貪り遊樂を求め、その要求を充す能はざるに於て種々の苦悶憂愁を感ず、是れ卽ち五蘊魔の致す所である。煩惱魔とは所謂內魔で、心の內より發生する種々の妄想邪慾である。死魔とは吾人生命の斷絶で最も慘酷なる惡魔である。所有希望も、事業も、財產も、快樂も、此の惡魔の爲めには悉く抹殺される。『妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者』である。如何なる人でも此の四大惡魔の襲擊を免るゝことは出來ぬ。人間の一生は此の惡魔に對する闘爭史である。

此の惡魔を征服して無礙解脫の神境に住するのが人生の勝利者であつて、此の惡魔に飜弄せられ、常に煩悶苦惱の中に在て惡魔の奴隸となつて居る者は人生の劣敗者である。故に、釋尊は第一に降魔の威力を發揮せられて解脫の境に進み、而して後に無上道の覺位を成ぜられた。

惡魔の種類も細かに數へ來れば無數無量であらう。吾々の生活を妨ぐる者あり、進步を妨ぐる者あり、事務を妨ぐる者あり、修養を妨ぐる者あり、其の人と其の境遇と其の時代とに依りて魔障の狀態も多種多樣であらうが、大別すれば剛魔と軟魔との二つに分けて見ることが出來る。

剛魔といふは、恐ろしき天變地災を被むるとか、強力なる脅威を感ずるとか、境遇上の壓迫を受くるとか、病苦や貧苦に襲はるゝとかいふの類である。軟魔といふは榮譽に誘はれるとか、金衣玉食にさそはれるとか、金銀財寶を手にするとか、情慾の對境を得るとかいふの類である。

剛魔に襲はれたる場合は、苦痛を感ずることが強いから之に對抗する意力も增進するが、軟魔に誘はれ

道ではない、一切衆生と同時の成道なるぞ、我れ一人が佛となりしには非ず、法界の群生も皆な佛なるぞ、といふ御說法である。佛敎の根本義は此の御一言に盡されて居る『一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛』も『一切衆生悉有佛性』も『始て知る衆生本來成佛』も皆な此の語の餘韻である、我が宗に謂ゆる『卽心是佛』も亦此の一語より出生し來つたものである。奕堂禪師が寒中の水坐も此の公案を體驗せんが爲めであつた。苟も佛敎を信じ佛敎に依て眞箇の禪生活に入らんと欲せば、どこ迄も同時成道の理想を實現することを期せねばならぬ。是れが眞の法供養である。

理想と信念

降魔と成道とは八相作佛の中の一大儀表である。降魔の威力なき者は成道の德を彰はすことは出來ぬ。魔とは梵語にて害の義となる。卽ち我が志を妨げ、我が幸福を奪ひ、我が向上の進路を阻害するものである。此の惡魔の住處を大別すれば、外魔と內魔との二通りある。外魔は外界より來り襲うて我を苦しむるもの、內魔は心內より發生して我れを惱ますもの、佛敎では普通四魔と稱して天魔・五蘊魔・煩惱魔・死魔を擧げて居る。

天魔とは第六天に在りと稱する惡魔の所爲といふのであるが、是を自然界若くは環境より受くる故障とも見ることが出來る。五蘊魔とは、五蘊は此の身であるから、色心和合の身分より生ずる種々の苦惱で

明治年間に於ける曹洞宗の巨匠として有名なりし奕堂禪師は、總持寺獨住第一世で、瀧谷琢宗・森田悟由・福山默童・星見天海・日置默仙等の高僧は皆其の門下である。奕堂禪師は壯年の頃、信州松本市、全久院洞門和尚の會下に在りし時、恰も成道攝心會に遭遇した。精力絶倫の同禪師は佛祖に對して『我れ此の攝心會中斷じて打睡せまじと』誓はれた、五晝夜程は睡魔を拂つて兀坐せられたが、身體が極度に疲勞し、骨髓までも睡魔が喰ひ入りし如くに感ぜられ、立つて居ても、經行して居ても、何時の間にやら睡氣を催うして殆ど不可抗の狀態となつた。禪師は大に慚ぢ且つ悲しみ、『我れ一身を放捨して大道を參究するに、一七日間の不睡三昧すら猶之を能せずんば、佛祖に對して慚謝の言葉なし、寧ろ死すとも此の誓を破るまじ』とて、遂て極寒を犯して寺邊を流るゝ大河に投じ、水中に坐禪し、とう〳〵八日の曉まで一睡もせられなんだ。此の事は、當時同參たりし予の本師如禪老漢より親しく聞きしことでもあり、又、奕堂禪師は森田悟由禪師に『衲は晩年に至りてから手足の指が冷て暖まらぬ、時としては痛みをも感ずる、是れは壯年の頃、寒中信州松本の如き嚴寒の地に於て水中に坐禪して凍傷を起した結果だ、修行は大切であるが、肉體を有して居る以上、餘りに無理な事をするのも宜しからぬぞ』と言はれたことがある。兎に角、是の如き熱心を以て成道如來を迎へたのである。

　成道如來に對する眞の法供養は、釋尊の御心を體得し釋尊の悟りたまへる大道を究むるのが報恩の第一義である。釋尊は成道の最初に『我れと大地の有情と同時に成道す』と獅子吼せられた。卽ち我れ一人の成

佛成道會禪話

降魔と成道

釋尊は十二月八日の曉天、明星出現の時に於て成道したまうた。是を見明星悟道と稱す。釋尊は山中に苦行したまふこと六年、其の間、只管に打坐して殆ど斷食同樣であつた。後に大に感じたまふ所あつて、尼連禪河に於て御身を淨め、牧牛女難陀の供養を受けて體力を養ひ、直ちに菩提樹下なる金剛座上に坐し、四襲せる無數の惡魔を降伏し了りて玆に無上正覺を證せられたのである。

故に、四月八日は迦毘羅衞國王子としての釋尊が降誕せられ、十二月八日は佛教教祖としての釋尊が出現せられたのであるから、二月十五日の御涅槃と與に三大聖日として、古來より種々の會式が行はれて居る。中にも我が禪門に於ては、佛心に證契するを參禪の眼目として居る所より、此の成道如來を特に瞻仰し、釋尊の遺風に倣ひ奉りて、十二月一日より八日の曉まで特別に嚴肅を極めたる攝心會が行はれ、殆ど決死の覺悟を以て、一七日間、常坐不臥に參禪の工夫に精進するを例として居る。

起居動靜が盡く法に隨ひ法に打任せて益々其の道を明らかにするの行である。

此の四種の行は全く我等が修養の好模範を示されたるもので、即ち眞實發菩提心の大行である。併し此の四行は、つまり一行を四通りに說き示されたものと見るが宜い。なぜなれば我等御互が眞實道を行はんと欲せば、先づ人生の狀態を覺悟して境遇や苦痛の爲めに束縛せられぬ樣にし、更に因緣の理を明らめて有謂妄想執着を離るゝことが肝要である。それから浮雲の如き果敢ない望みに迷はされず、常に佛の正法に稱ひ天地の大道を實踐せんことを期する時は、大師の四大行は自づと此の中に具はります。かくしてこそ始めて娑婆世界に生れたる甲斐もあり、佛法を信ずる功德をも空うせざるものといふことが出來ます。

眞實道に入りて、佛の御心を以て我が心となし、衆生利益の大誓願を發し、佛の行を以て我が行となし、四恩報謝の行持を營み、手の舞ひ足の踏む所、茶を喫み飯を喫する所、此の身此の儘佛地の功德を成就し、達磨大師の孝子順孫となることが肝要であります。

達磨大師の御一生は大體を御話しすれば、前に述べたる如くにして、其の宗旨の高尚なることは云ふ迄もない。我等衆生をして等しく佛道に入らしめんが爲めの御艱難御苦勞であります。

大師が修行の標準として、兒孫にお示し下されたものに大乘入道の四行といふものがあります。四行とは四種の行相で、

其の第一を報寃行と云ひます。寃とはアクタと訓じて、こゝでは過去の業因に報いたる人生の苦痛を指したものである。無常轉變の世に生れ幾許の苦惱を受けつゝあるは人間の常であるが、深く自ら業報の理を明らめて苦惱の中に在りながらも、天をも恨みず人をも憾みず、泰然として心を安んじ、益々道に進むの行である。

第二には隨緣行である三界六道は皆な因緣の生ずる所我々の身とても因緣和合の假の相なりと觀じて、一切の執着を離れ驀直に道を進むの行である。

第三は無所求行、是は一切所得の念を離れ、毫も貪愛の心を起さず、常に天眞の法を樂んで、道に進むの行である。凡夫は兎角報酬を貪るの心が先に立ちて、道を行うに眞實心が薄いものである。顏回の如きは道を陋巷に樂しんで、毫も身外に求むる所がなかつた。況や佛樣や祖師方の行持は盡く無爲無作の功德莊嚴である。

第四は稱法行である。法とは佛の正法、天地の妙道である。我等は微塵計りも我見や私情を立せず、

茫然自失することを免れぬ。和尚は一生懸命に參禪して遂に心を明らめられたが、其の報告は『心を覓むるに竟に不可得心は有無の兩端に非ず全く說明の限りでないと云ふのであつた。其の時大師は『汝が爲めに安心せしめ了れり』と云うて證明せられました。こゝが最も肝要なる禪門の第一義である。不可得と云ふは、不識と云うたのと異曲同調です。夢窓國師が『我といふ我を知らざる我なれば我を我とも思はぬは我れ』、『さかぬ花いでぬ月ぞと見る時は心にかゝる春秋もなし』と詠ぜられたは、矢張、此の不可得の說明である。

大師には多くの御弟子もあつたらうが、其の高弟は慧可と道育と尼總持と道副との四人である。中にも慧可禪師は大師の髓を傳へて支那禪門の二祖とならせらる。是を太祖慧可大師と稱し奉るのであります。

かくて大師は支那に在ること九年にして、前にも申せし通り大通二年十月五日に御入滅遊ばされ、十二月二十八日熊耳峰といふに葬り奉り有名なる定林寺に塔を建たとある、後三年を經て魏の國より印度に赴きたる勅使宋雲と云ふが、歸途葱嶺に於て大師に逢うた。其の時大師は隻履と云うて片方の履を携へて居られ、是より西天竺へ歸るのだと仰せられた。宋雲歸國して見れば大師は三年前に御示寂とのこと、餘りの不思議さに棺を開いて見たるに、中は空壺にして唯片方の履のみあつたと申し傳へてあります。

四百餘州に弘まつて居る處から、大師は唯だ佛教を統一したる佛の大精神を傳へんが爲めの手段に出でられたのであります。

其の頃武牢の人で神光と云へる高僧があつた。諸史百家の學に通ぜしも、未だ滿足すること能はざる爲め、洛陽の龍門に投じて出家し、專ら佛教を研究して、殆ど其の堂奥を極められたが、未だ眞の安心を得ることが出來ぬ處から、遂に達磨大師を少林寺に訪はれた。大師は更に教を施して吳れぬ。そこで和尚は十二月九日の夜、大雪の中に立ち死を決して教を乞はれた。大師は依然として顧みぬ。雪は益々積りて膝を過ぐるに至り、寒氣凜烈骨も亦た凍らんとす。大師は漸くにして『汝雪中に立て何事をか求むるや』と尋ねられた、和尚淚を流して、『弟子不敏にして未だ安心を得ず、願くは大慈大悲甘露の法門を開いて群品を濟度したまへ』と御願ひ申された。すると大師は『佛法は深大なり、古の佛祖は行じ難きに行じ、忍び難きを忍び、無限に精進して之を成ぜられた、然るに汝は聊かの學文と知能を恃んで佛法を悟らんと思ふは何事ぞや』と云うて受けつけられぬ。元より神光は命を投げ出して居られるのであるから、何かは暫しも躊躇ふべき、忽ち利刀を取出し、左の臂を截切りて大師の前に突出された。大師は其の志を嘉みして慧可と云へる名を與へられ、且つ『汝は未だ安心を得ぬ、心が安んぜぬと云ふが、其の心を將ち來れ汝が爲めに安心せしめん』と云はれた。サア其の心が容易に明らめられぬ。明治の今日に至つても心の本體妙用は依然として千古の大疑問である。心理學者でも哲學者でも心の本體は果して如何んと詰問すれば、盡く

不識の眞意義

抑も佛法極意の御悟りは思量分別というて、惜い欲い、憎い愛いといふ様な妄想を以ては解らぬ。凡夫根性で天地の大道を尋ね廻はつたからとて知れるものではない。天は無心なれども、日は朝々東より出で、月は夜々西に沈む。地は無心なれども、春來れば百花笑を帶び、秋到れば千林錦を染む。天地無窮の作用は皆な是れ不識の大道ではありませんか。されば上杉謙信公は此の不識の二字に參じて大悟徹底せられ、自ら不識庵主と稱せられたとある。

然るに梁の武帝は大師の佛法を聞く丈の耳は持ちなされなんだ。そこで大師は斷然金陵の都を辭して小舟に乘りて楊子江を渡り、魏の國なる嵩山の中の小室峰の少林寺に至りて錫を駐め、九年の間面壁と云うて壁に面つて坐禪せられました。さればとて坐つてのみ居られたのではない。經行もせられ、說法もせられたが、大師の金看板は正しく坐禪三昧であつたのである。此の事蹟を見ても大師の本懷の存する所を翫味して貰ひたいのです。

天竺に在りては席暖かなるに遑なき程、錫を四方に飛して橫說竪說せられたる大傳道家大演說家でありながら、支那に來つてからは丸で別人の如く默々として少林に冷坐し、偶ま人を接するにも『廓然無聖』『不識』と云ふ様に取つても付けぬほど、高尚なる法門を示されたのである。是は全く隨機方便の敎は既に

遊んで暮したいから孝行を勵むとか云ふ中は、決して本當の忠孝ではない。佐藤一齋翁が『眞忠は忠を忘る、念々是れ忠、眞孝は孝を忘る、念々是れ孝』と云うた如く、結果の如何に拘はらず報酬の有無に關せず、忠孝其の物を重んじ仁義其の物を尊び、己れを空しうして道に從がひ我を忘れて道を守るこそ、眞の君子である、眞實菩提心を發したる大修行者である。

梁の武帝は大師の此の御答がお分りにならぬ。そこで更に語を改めて『如何なるか是れ聖諦第一義』と問はれた。聖諦とは佛聖人の悟りたまへる眞理のことであるから、眞理中の眞理といふことです。すると大師は『廓然無聖』と答へられた。眞理の中の眞理は廓然として大虚空の片雲なきが如く、迷も無く悟も無く、我も無く人も無く、平等にして絶對である。されば眞理の中の眞理よりみる時には佛聖人と云ふものも無い。唯だ因縁和合の作用に依て種々差別の相が現はれてはゐるけれども、其の本體を究むれば『本來無一物何の處にか塵埃を惹かん』で、一物として擧げていふべきものがない。古歌に『ひきよせて結べば柴の庵なり解くれば本の野原なりけり』といひ、又『善惡のたゝぬ處を極むれば地獄淨土といふきはもなし』といふ如くである。處が梁の武帝は一向にこの道理が解らなかつたらしい。こそで『朕に對する者は誰ぞ』貴僧は佛も無いと云はるれど現在貴僧は佛の弟子では無いかと云うて突込んで問はれた。これでは提撕の上手な達磨大師も手がつかぬが、然し大師は更に向上より『不識』と答へられた。此の不識の二字が佛法中の佛法を說き示されたので、之を無愛想の捨臺詞だなどと思うてはなりませぬ。

梁の武帝は有名なる佛敎信者で、殊に教理に精通し自ら袈裟を搭けて殿中に法を說き、世に是を佛心天子と稱した程の御方であるから、非常に御歡迎あらせられ、特々勅使を派して、金陵の都に請ぜられ、殿中に迎へて親しく御對面遊ばされた。其の時の會話が實に千古の大公案であつたのです。先づ武帝は大師に對つて『朕は卽位してより寺を建て經を寫し僧侶を得度すること無數である、此の功德如何』と問はれました。すると大師は『功德なし』と答へられた。武帝愕然として怪み『何故に功德なきや』と問はれければ、大師は『此は但だ人天の小果有漏の因』と答へられた。

有漏とは煩惱の異名も同然である。寺を建て佛果の樂しみを得やう、經を寫して永く淨土に遊ばんとの希望は、極めて淺果敢なる凡夫根性である。凡夫根性を以て佛法を行ふ時は、少かに人間とか天上とか云ふ世間的の因緣を結ぶに過ぎぬ。眞實の佛法は決して其の樣なものでは無い。眞實の信仰は、名聞とか利益とか、快樂とか福慶とか云ふ世間的欲望を飛び超た處まで進まねばならぬものである。念佛を唱へて極樂に赴き樂をして遊ばうなどといふ樣な功德を貪る量見では、眞の信仰は獲られませぬ。時宗の開祖一遍上人が禪に參じて念佛の奧義を悟られ、『唱ふれば佛も我もなかりけり南無阿彌陀佛の聲ばかりして』と詠まれたとやら申すことである。佛も我も無かりけりとは無我無心の狀態を云はれたので、無我無心と申しても枯木や死人の如くなれと云ふのではない。煩惱欲念を離れて自己の本心の現はれたことです。人間の道たる忠孝仁義の德を行ふことも、矢張、無我無心の處まで進まねばならぬ。樂を得たいから忠義を盡すとか、

するに至りましたのを、大師は深く傷んで彼等の執見を排除し、唯有一乘法なる佛教の妙義を示し、五天竺の衆生を化導したまふこと六十七年の間であつたと申します。其の後彌々正傳の佛法を支那に流傳すべき時節の到來せることを觀察し、舟を南洋に泛べて印度の山河に御別れなされました。大師の俗弟子たる異見王といへる國王の如きは、大師の去りたまふを惜みて『此の國何の罪かある彼國何の祥ぞや、因緣既に定まれば止め參らせんにも力及ばず、唯願くは父母の國を忘れず、事畢らば早く廻りたまへ』というて悲まれたとある。此の時、年齡は少なくとも百二三十歳であつたらうと思ひます。大丈夫の志氣は又格別なものではありませんか。我々御互も何卒して斯る氣象を具へたいものであります。六十、七十になると早や隱居の仕度遊んで暮す考を起す樣では役に立たぬ。人生無常、朝にして夕を保ち難しとは申しながら、死ぬまでは生きて居るに相違ないから、息のあらん限り手足の動く限りは、道の爲めに働きたいものです。

支那禪門の第一祖

扨て大師が印度を出て支那に來らるゝには其の途中處々に寄航せられたものと見え、航海三年を經て漸く南海卽ち今の廣州灣に着せられた。其の頃の支那は南北朝時代で、南は梁の國、北は魏の國、大師の御到着は梁の武帝普通元年九月廿一日で、魏の明帝正光元年に當ります。是にも色々の說があれど今は多く行はれて居る說に依て置きます。

歷が筆舌にも及ばざる程の大教訓を吾人に御與へ下されてある。大師も亦た是の如く其の出處進退の一一が最尊無比の活佛法と爲りて、千載の下我等を敎化すること幾許なるやを知らぬ程であります。

抑も達磨大師は南印度香至國王の第三子にて始は菩提多羅と仰せられた。或時父君なる國王が、當時の高僧たる釋尊二十七世の祖師般若多羅尊者を宮中に請して法要を聞かせられ、其の施物として一顆の明玉を賜はれました。尊者は恭しく彼の明玉を拜受して之を三人の王子に示されました時、三人の王子の中のお二人は一齊に、是は尊者の道德世に優れたまひし爲め、斯る明玉を受けられたのである。其の名譽は永く萬世に輝きて朽つること無し、されば傳道上の最好紀念として之を後世に傳ふるこそ宜しからんとの御挨拶でありました。時に菩提多羅王子のみはその言を肯はず、此の玉明かなりと雖も智慧の寶には及ぶべからず、又此の玉光りありと雖も心の光りに比ぶれば未だ以て貴とするに足らず、世間・出世間を通じて心の玉こそ貴とけれ智慧の寶こそ好ましけれと申されました。般若多羅尊者は深く其の聰明を喜び國王に願うて遂に御弟子になされました。實に栴檀は二葉より馨ばしとやら、幼年の頃より斯る大思想を有して居られた者と見える。山上憶良が『白銀も黄金も玉も何せむに勝れる寶子にしかめやも』と詠みし如く菩提多羅こそ玉にも勝る天賦の至聖であつたらうと思ふのです。

大師は是より尊者に隨侍して霜辛雪苦の行を積むこと四十年、遂に佛祖正傳の大法を相傳して釋尊二十八代の祖位に列せられました。尊者御入滅の後お弟子達が互に自說を主張して相下らず、遂に六宗を分派

二十八代の祖師

今日（十月五日）は釋尊二十八代の祖師、支那禪宗の御開山たる達磨大師御示寂の御正當でありますから、聊か大師の御偉德と、大師唱道の佛法とを述べて、報恩謝德の志を勵ましたいと思ひます。

達磨大師御入滅の年曆に就ては種々の異說がありまするが、傳法正宗記等に依れば、梁の武帝大通二年十月五日とある。卽ち我國人皇二十六代繼體天皇の二十二年に當り、西曆にては紀元五百二十八年で、今を距ること一千三百八十六年以前であります。大師の肉體は斯く遠い昔に此の世を去られたのであるが其の御法身は元より生滅の外に在りて、常在少室峰です。故に今日大師の御入滅の日に逢ひ奉りて其の御法身を供養し奉るに就ては、大師西來の大精神を發揮して大師の佛法を擧揚するのが最第一の報恩であらうと思ひます。

古來大聖人と稱すべき方々の御洪德は舌頭より漏れ出でたる御敎訓は申す迄も無いが、其の生涯の御經

五升づゝを差出たきに付き御聞濟みを願ひたしと申し出でた。氏は涙を流して之を謝せられたさうである。それより小作人の氣風が頓に革まり、米質も非常に佳良になりて、今日では他村の米よりも一石に付き五十錢高になつたと申すことであります。氏の如きは實に賞讃すべき人物と申すべきである。

氏が一旦は病魔の爲めに、身を捨て樣と思ひ詰むる程の煩悶に陥ゐたのは、全く此の世からなる地獄の苦しみであつた。けれども、一朝、一粒の米に感じて煩悶轉じて愉快となり、更に元氣を恢復して利他的大活動を試みたのは、全く此の世ながらの彼岸を現出したのである。同一の身を以て同一の世に處し、昨は人生を悲觀し、今は人生に趣味を感ず、心念の妙用實に奇といふべきであります。

吾々も亦是の如く菩薩の六波羅蜜と申しても決して困難なるものではない。信念堅固なれば日用光中、喫茶喫飯の上にも之を實行することが出來る。一日之を行へば一日の彼岸を現じ、一年之を行へば一年の彼岸を現ず、彼岸は邇きに在り、吾人の脚跟下直に是れ諸佛の聖地である。溪聲便ち是れ長廣舌、山色豈に清淨身に非ざらんや、治生産業も皆な實相に歸し、運水搬柴も皆な法輪を轉ず。されば六波羅蜜は畢竟、吾人の身心である手脚である。是を修證義には日々の行持とも即心是佛とも御示し下されたのである。」

る者は縱ひ盲目とならうとも、若し國家の爲め社會の爲め獻身的に盡したならば、必ずや大なる價値を有するに相違ない。人にして豈に一粒米にだも如かさるべけんや、

といふ感じを起されたのである。それからといふものは今迄の煩悶は一時に消滅して、前途に赫々たる光明を認むるやうになつた。是に於て或は江州の比叡山に上りて佛教を聞き、或は京都の南禪寺に參じて禪を味はひ、益々修養に努められた。村長になつてからは一層立派な仕事を致さうとの志を發したとある。

餘土村は松山を距ること一里許り四百餘戸を有する村であるが、從前、小作人が耕作に忠實ならざる爲め、何時も隣村よりも米質が惡い。從つて村は年一年疲弊を來す樣な始末である。そこで氏は第一小作人の心からして矯正せんと欲し、自分は暑中と雖も笠を被らず、村內を往來するには草履のみを用ひて下駄を穿かず、且つ小作人保護の資金を作らん爲め土地所有者より一段歩には米五升宛を出して貰ふこととした。處が中には容易に出して呉れぬ人もあるので、氏は首に袋を掛け地主の家へ廻り『どうぞ願ひます賴みます』というて三拜九拜して米を出して貰ふことも數々ある。村の內には氏の事を盲乞食というて惡口をいふ者もあつたが、氏は少しも意に介せず、遂に三千圓の資金を作り上げた。それを村役場で保管して利息を貯へ、小作人が不時の困難を救ふの資金となした。

或時、小作人百八十餘人の總代が三四名で氏の處に來り、村長樣の御蔭にて吾々も永久に安心が出來ることになりました。此の御恩に報いる爲め向後は農作に勉強すべきは勿論、小作人一同、一段歩に付き麥

盲目の身を以て一村の長となり、村内の悪習を一掃して模範村を作り上げたといふので名を全國に揚げたる愛媛縣溫泉郡餘土村の森恒太郎氏は、曾て縣會議員をも勤めた人であるが、明治二十八年、三十四五歳の時不幸にして盲目の人となつた。東京にも上りて種々治療に力を盡したが如何しても治らぬ。氏は泣く／＼家に歸つたが親の顏も見られず、郷土の山川草木一として見ること能はず、渺たる一身は此の世からなる暗黑地獄の人となつて了うたのである。悲しさの餘り、幾度か死を決したこともあるが、慈愛深き母親や恩愛の切なる妻子の事を思へば死ぬにも死なれず、明けても暮れても泣て許り居られたが、或日、食事の際、御飯一粒を取落した。手で以て撫で廻はして漸く之を拾ひ上げ、指の先にて其の米粒を捻り居たる一刹那、忽然として一種の大覺省を得たのである。

嗚呼此の一粒米は人間の指の先に飜弄せらるゝ程の微少なるものである。此の微物を古人は『一粒米の重きこと須彌山の如し』というて、嚴格なる家庭では、一粒たりとも疎末にすることを許さぬ。若しそこらに落ちて居れば必ず之を戴いて拾はせる。なぜ此の一小物が古今の人に尊重せらるゝのであらう。此の物小なりと雖も六月の炎天に照付られつゝ生長し、生熟の後は鎌に刈られ臼に搗かれ、水にて洗はれ釜にて煮られ、漸くにして食膳に上ることを得たのである。併し、此れのみにては未だ其の價値を現はすことは出來ぬ。其の價値ある所以のものは、此の物が他の食用となりて體内に入り、人體の血肉となりて萬物の靈長たる人間を營養する、そこに此の物の價値が現はるゝのである。然れば、吾々人間た

彼岸遠きに在り

信心清淨にして能く六波羅蜜を實行する時は、手の舞ひ足の踏む所も盡く彼岸の佛地ならざるはない。元來、彼岸を遠き處と見るも邇き處とするも一心の作用如何にあるのであります。迷ふ時は十萬億の國土を隔て、悟る時は卽心卽佛である。一日を千秋と思ふも六十小劫を食頃の如く思ふも皆な心念の作用である。『傀儡師胸に掛けたる人形箱佛出さうと鬼を出さうと』心の儘である。

江島其磧の諺草には『一升樽と百の錢に手を付くると其の儘みなになる事はやし、あてがひ世帯の米薪と風吹に蠟燭たてると、春日にあふ軒の雪と、元日から十五日までの日は早く立ちて遊ぶ日のみになる事、毎年我人あそびたらず、光陰にちがひはなけれど我が心に好まぬ事する時は同じ日を長く覺え、心にすきぬる遊びにはもう入相の鐘がなるかと惜しみぬ』とある。

僧美寛は山に住むこと六十餘年數ふる程しか門外に出たことがない。或る僧が『老師、坊に在て何事をして間を消せらるゝや』と問ひしに、『蝸牛の角の上石火の光りの中、唯だ迅速に過るを覺ゆ、未だ閒あるを知らず』と答へたとある。光陰は同一なるも其の人に依りて長短の感を異にするのである。凡夫と佛、此岸と彼岸との關係も亦是の如く、遠近は人に在りて境に在るに非ず、現前と不現前とは皆な自ら招く所のものである。

彼の伊能忠敬は、老年、幕府の命を奉じ天下を周遊して地理を測量した人である。將に出立せんとして餞別の宴を開きし時、偶ま梁の上の乳燕が席上に墜て死んだ。なにやら緣起が惡いといふので來會者は私かに此の行を危ぶんだ。すると、忠敬は衆に向て『乳燕の死するは我が出立とは何等の關係もなし、諸君決して意に介したまふなよ』といひ、起て草鞋を穿んとせしに、草鞋の紐がプツリと截れた、一同は益々不安の思ひをなしたが、忠敬は一向平氣で『草鞋の紐とて別段鐵や金で製したものではない、時として截ることのあるのは當然である』というて出立した。まだ門の外に出たか出ないかに、家で釀造した酒桶が破裂して酒がドッと流れ出した。重ね〴〵の事で一同顏の色を失なひ、飛で往て出立を留めましたが、忠敬はビクともせず『酒桶ぢやもの破るゝこともあるべし、何ぞ怪むに足らんや』とて、斷然出掛けて遂に偉大なる任務を立派に果されたとある。

又、德川家康公が關ヶ原へ出陣の時、陰陽師等が、本年は西の方が塞がつて、甚だ不祥であるから御出陣見合せられ然るべし』と申し上げしに、公は笑て『西の方塞がり居らば吾れ往て之を開かん』というて出陣を遂行せられました。是れ等も皆な信念より發したる大勇氣であるから、惡魔も之を侵すことが出來なんだのである。故に華嚴經には『信は境界に於て所着なし諸難を遠離して無難を得せしむ、信は能く衆魔の道を超出して無上解脫の道を示現せしむ』云々と御示し下されてあるのである。

れば、佛樣に對して有り難くて耐らぬといふ程の深き厚き歸依の念を發するのであります。青年時代などは容易に此の『有り難い』といふ念が起りかねる。物質以外に一の崇高にして偉大なる御本尊を立て、常に有り難いといふ觀念を抱いて居ることは最も大切なことである。黄金を尊び名譽を重んじ、且つ其の娛樂をば物質の上にのみ求めんと欲する時は、常に萬境の爲めに心志を攪亂せられて、容易に安心を得ることは出來ぬ。歡樂極つて哀情多し、樂は却て苦の種となる場合が澤山ある。

人や物質の上に憑つて行く者は、必ず不平不滿の念が絶えぬものです。善行を修めても、之を認めて呉れる人がないと厭になつて來る。邪念を發しても之を監視する者がないと益々增長する。一たび不遇の身となり若くは逆境の襲ふ所とならうものならそれこそ大變、忽ちにして煩悶病に取り付かれる。

然るに、若し信念がありますれば、朝でも晩でも佛樣と同道同行であるから、有り難いといふ念が去らぬ。佛樣の大智慧は常に吾々の行爲を審判し監督して下さる。佛樣の大慈悲は何時でも吾々の身心を救濟し攝取して下さる。佛樣の光明は暗室の隅々までも照して居られる。佛樣の神通は水火の中にまで靈動して居られる。斯く觀じ來れば佛樣は吾々の保護者であらせられ、吾々の指導者であらせらるゝ。人存ぜずと雖も佛樣の存するあり、人知らずと雖も佛樣は照覽してござる。此の信念あれば心の中常に力強くして獨りで居ても決して寂しさを感ぜぬ。從つて何時も喜びの情に充たされて居るものである。且つ信念ある時は自然に大勇氣を發して決斷に富み實行に迷ふことがないものである。

忍辱と精進とは自利々他の行持を實現すべき原動力です。如何に布施を行ひ戒法を持たんと欲するも、忍耐力に乏しく勉強力に薄き時は決して之を實行することは出來ぬ。而して、忍耐と勉強との土臺となるものは禪定で、又、之れが指導者となるのは智慧である。禪定が無くして心がフラ〳〵して居ては何事をも貫徹することが出來ぬ。縱ひ忍耐勉強の勇氣があつても、若し智慧が無ければ唯だ無茶苦茶に盲動することゝなる譯です。故に此の六波羅蜜は互に相扶け相待て行かねばならぬ。つまり六本の柱に依りて自利々他圓滿の宮殿が建築されるのであります。

此の六波羅蜜こそ凡夫迷妄の此の岸より佛界安樂の彼岸に到達すべき唯一の船筏であるが、此の船筏を進むるには極完全なる船長と適當なる梶取とがなければならぬ。船長が無ければ航海の方向が分らず、梶取がないと船を程好く操ることが出來ぬ。方向が解らねば目的を誤つたり暗礁に乘り上る樣な恐れがあり、船を操る者が居らぬと逆卷く波浪に妨げられて後戻りをする樣なことにもなるものである。然らば完全なる船長となりて確實なる方向を示して下さる御方はといへば佛樣である。又、梶取となりて適當に船を操て呉れる者は誰れかといふと健全なる信仰である。佛樣は三界の大導師、一切衆生の慈父であらせらるゝことは、苟も佛教に志す者の等く承認する所である。唯だ信仰、即ち信念の梶取がまだ訓錬が不充分の樣に思はるゝ、之を訓錬するのが所謂信念の涵養である。

信念といふは佛樣に向つて絕對的に歸依し奉りて御慈光に觸れ其の愛護を喜び願ふ心である。要言す

發するでなければならぬ。

信念の涵養

以上の六波羅蜜は決して個々別々に獨立することは出來ぬものです。先づ布施は利他の代表的行持で、持戒は自利の根本的修養であるが、此の二は互に相待て其の功を奏するものであります。何故ならば、眞實、布施を行はんとするには必ず己れの身を修め己れの行動を淨らかにせねばならぬ。自分の身が修まらんで他人を救ひ助くることは出來るものではない。自分が一文なしで人に財を施すことはならぬ。自分が何にも知らんで人を敎ふることはならぬ譯のものである。

彼の儒教に於ける大學は治國平天下の道であるが、『天下を平らかにせんと欲せば先づ其の國を治めよ、其の國を治めんと欲せば先づ其の家を齊のへよ、其の家を齊へんと欲せば先づ其の身を修めよ、其の身を修めんと欲せば先づ其の意を誠にせよ、其の意を誠にせんと欲せば先づ其の心を正うせよ』と說てある。されば治國平天下の本は修身齊家に在ることは古今不變の格則である。

又、利他の目的を以てせざれば完全なる修身齊家の實を擧ぐることも亦不可能である。何故なれば布施の中心は忠孝である。國家に對するの忠誠、父母祖先に對するの孝道、これが布施の最も大なるものであるから、布施の志なき者は修身齊家の基礎が成り立たぬ譯であります。

道の功徳を實現すること能はず。

常濟大師は徹通禪師が『平常心是れ道』の古則を擧せらるゝを聞て忽然として省悟せられたが、更に之を工夫したまふこと數年、後、始て平常心是れ道の境界に達せられた。平常心とは平生の心である。茶に逢うては茶を喫し飯に逢うては飯を喫し、水を呑んで冷煖自知する底をいふ。その冷煖自知がその儘佛祖の大道ぢやといふのである。道理としては誰にでも解ることとならんが、さて彌々平生底の心念が一々佛祖の大道と一致して、心の欲する所に從つて矩を踰えずといふに至ることは却々容易でない。知つた許り思うた許りでは決して佛法とはいはれませぬ。

或人が極樂世界に至りて處々を見物せしに、大きな藏が二戸前あるのを見た。中を窺いて見ると一つの藏には數の子が山の樣に積んであり、他の一つの藏には木茸が一杯詰つてあるから、不思議に思うて、『なぜこんな物が御淨土にあるのであるか』と聞きますと、案內せし者の答へに、『これは其の樣な物ではない、木茸の樣に見えるのは人間の耳の乾したので、數の子の樣なのは人間の舌の乾物ぢや』というた。益々不思議に思うて『なぜこんな物を貯へて置かるゝか』と尋ねると、『是れは人間といふ者が、何時も耳に善い事を聞いて、舌の先でばかり善い樣な事のみを說くに依て、身體は三惡道に墮落したが、耳と舌ばかりは御淨土參りをしたのである』と申したといふ御話しがあります。耳と舌だけが御淨土參りをして、身體は永く三惡道の苦しみを受けるといふは決して眞實の智慧ではない。眞實の智慧は聞思修の三慧より

達したものであるから、六波羅蜜の一部の行に非ずして、其の全部を總合して自己本來の佛性を現成せしむる法門でありますが、今は專ら煩惱を坐斷し妄想を打靜めて一心を不動の地に安住せしむるの行である。
坐禪の仕方等は此處で委しく御話しをする餘地もないが、要するに、足を組み手を組んで心を氣海丹田に收め、呼吸を調へて物我一體の境界となるのである。『坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』とあるが如く、如何に順逆の二境に觸るゝとも、心大山の如くにして更に動ずることのないのが三昧の定力です。兎角に凡夫の心は散亂盲動して種々の煩惱を惹起してならぬものである。夫故、多くは一生を外界の爲めに使役せられて、朝から晩まで、惜い欲い、憎い愛いの間に展轉反側して居る。而して、確乎たる落着がないから見る物聞く物の爲めに飜弄せられて、常に精神を勞して更に安心の分がない。若し能く禪定を修すれば、自づと精神を鍊磨して堅固不動の地に安住することが出來るものです。
第六の智慧行は梵語の般若波羅蜜である。般若は此に智慧と譯す。智慧というても學問才能のことではない。學問も智慧の中の樣なものなれど、少かに智慧の端緒である。眞實の智慧は明らかに天地の實相を究め盡未來際の大方針を確立して、是を身口意三業の上に實踐し應用するをいふのである。禪門に於ける見性悟道も正智慧のことであります。遺教經には『聞思修の慧を以て而も自ら增益すべし』と仰せられてある。聞とは正法を聞くこと、思とは聞きたる正法を思惟研究すること、修とは其の正法を實行することと、是を三慧といふ。聞かされば道を知ること能はず、思はざれば道を信じ守ること能はず、修せざれば

て之を實行するに非ざれば、依然として鸚鵡の學である。
承陽大師の御歌に『頂きに鵲の巣やすくうらん眉にかゝれる蜘蛛の絲』といふがある。是れは釋尊が因地の御修行の折、頭の頂に鵲が巣をかけたのを知らずに坐禪して居られたことがある。又、雪山に御難行の節は、眉の處に蜘蛛の巣を張つたこともある。それを歌に詠まれたのである。此の如き勉強力があればこそ萬德圓滿なる佛陀の境界ともならせられたのであります。世の中に投機心のある者や徒らに僥倖を貪ぼる者は、此の精進力に乏しいのであるから、確實なる成功は得られませぬ。
董仲舒は『事は勉強に在るのみ、學問を勉強すれば見聞博うして、智益々明かなり、勉強して道を行へば則ち德日々に起つて大に功あり』というてある。故に佛遺教經には『若し勤めて精進すれば事として難きは無し』と仰せられ、佛弟子薄倶羅は『我れ出家してより以來八十年の中、未だ曾て偃臥し脇を牀に着けて背を倚せしことあらず』といはれてある。承陽大師も天童山に在せし時、三年の久しき、專一に坐禪して一度も横になつて休まれなんだ。常濟大師は『唯諸人の精進不精進によりて諸佛頭出頭沒す』と仰せられて、精進すれば諸佛現はれ、精進せざれば諸佛永く隱れて現はれたまふことなしと示された。
第五に禪定行は梵語の禪那波羅蜜である。禪那は靜慮とも定とも譯してある。思慮想念を靜めて散亂せざるを靜慮といふ。或は靜かに慮かりて其の心の散亂を定止するが故に定ともいふ。今は梵語の禪と譯語の定とを兼擧げて禪定ともいうたものである。即ち坐禪のことです。尤も、禪門の坐禪は禪の最も發

道德の進歩も望まれるものではない。此の心を心のまゝに放任して置く時は、五欲の境を追ひ六塵の衢に奔り、爲めに人道の立脚地をも失却し、一切の罪惡皆な是より出づる樣になるものである。故に吾々は造次顚沛の間も油斷なく之に制裁を加へねばならぬ。

さればとて禁欲主義とか消極的道德とか思うてはならぬ。大に忍ぶのは取も直さず大に進む所以である。此の制裁力に依て始て淨き正しき進歩的行動が現はれて來るのである。若し忍力が無かつたならば、少しの事にも腹を立て些々たる事情にも束縛されるに依て、決して何事も成功するものではありませぬ。

六波羅蜜の意義　その二

第四には、精進行は梵語の毘梨耶波羅蜜である。精とはクワシと訓じ、純一にして雜り氣の無いこと、進はスゝムで、進趣向上して息まざるの義である。卽ち善法に向て專心一意に勉强することである。忍辱を消極的勇氣とすれば精進は積極的勇氣である。忍辱力に依て己れを制し欲を愼しみ、精進力に依て智を研き德を錬り業を勵み職を盡すは卽ち合理的意志の大活動である。世に天然の釋迦なく自然の彌勒なし、精進勇猛の力なき時は、生知安行の人と雖も其の志を達することは出來ぬ。

支那杭州大慈山寰中禪師は『一丈を說得せんよりは一尺を行取せんには如かず、一尺を說得せんよりは一寸を行取せんには如かず』と仰せられてあつて、何如ほど學問辯才に長ずるとも、精進勉强の力を以

否な生々世々の大修行である。一日戒を持てば一日の道を得、一年惡に遠ざかれば一年の德を成す。是れ實に菩薩の心行であります。

第三に忍辱行とは、梵語では羼提波羅蜜といふ。羼提を譯して忍辱と云ふ。忍辱は辱めを忍んで、他より耻辱を與へられた場合にもヂット忍んで忿怒を發せざるをいふ。是の如きは忍耐力の最も大なるものであるから忍辱というたので、つまり忍耐の意味である。此の忍耐力は種々の方面に於て發せられねばならぬ。己れの情欲や妄念を制するのも忍耐なれば、艱難辛苦を辛棒するのも忍耐である。腹を立てぬのも忍耐なれば儉約を守るのも、忍耐である。忍耐は消極的なる人間の大勇氣であります。

東坡居士が『分に安んじて以て福を養なひ、意を寬くして以て氣を養なひ、費を省いて以て財を養なふ』といふ三養を說いたのも、矢張、忍耐の効果である。鈴木正三老人が『佛法修行は不淨穢惡の心を去り淸淨無礙の心と成て苦を樂とし惡を善となす、此の心卽ち萬事に使ふ寶なり』といはれたが、此の不淨穢惡の心を去るのが正しく忍耐の力である。坐禪の場合でも、精神をドッシリと安住て諸〻の散亂妄念を排除するのは、矢張、忍力の致す所であります。

吾々の心といふものは兎角に見聞の爲めに昧まされ易いものです。明治天皇の御製に『ともすれば浮き立ち易き世の人の心の塵をいかで拂はん』といふ最も貴とき御歌のあることを承はつて居りますが、實に浮き立ち易き人心は暫くも油斷は出來ぬ。此の心を十分に自ら監督し誘引して行かねば、人智の發達も

た手段の如きは、法施中の大法施です。承陽大師は『我れ箇裏に在て十萬億佛を供養す』とも仰せられ、大般若理趣分には『無上正等覺心を發すれば諸の如來に於て廣く供養を設く』とありますれば、一錢一草を有せず一指一足を動ぜずして、十方の諸佛を供養し一切の衆生に布施するの道理あることを知らねばなりませぬ。

第二に持戒行は、梵語の尸羅波羅蜜です。尸羅は戒と譯す。戒とは防非止惡というて身口意三業の非を防ぎ惡を止むる佛の御掟のことである。併し、必ずしも佛弟子のみの守るべき掟といふではない。阿含經に七佛通戒の偈といふがあるが、此の偈が正しく戒法の綱領を示したものである。卽ち『諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教』といふのである。點付に讀めば、『諸の惡は作すこと莫れ、衆の善は奉行せよ、自ら其の意を淨らかにす、是れ諸佛の教なり』となる。誠に明白なる御示しです。惡い事をする な善い事をせよ、其の意を淨めよ、此の簡易なる語が一切道德の基礎であつて、而も德教の歸趣である。

唐の白居易（字は樂天）は香山居士と稱して有名なる詩人で且つ非凡なる佛教信者である。元和十五年、杭州に牧たりし時、一日山に入て鳥窠道林禪師の玄關を敲き『如何なるか是れ佛法の大意』と問うた。すると禪師は『諸惡莫作、衆善奉行』と答へた。樂天、大に笑て『三歲の孩兒も亦恁麼に道ふことを解す』といふと、禪師も亦た笑て『三歲の孩兒も能く言ふと雖も八十の老翁も行ふことを得ず』と言はれた。樂天は此の一言で心服したとある。故に、戒を持つて惡に遠かり善に進むは吾人生涯の修行である。

衆生を永久に濟度せんとの大行を經營する人に名けたものです。

六波羅蜜の意義　その一

先づ一通り六波羅蜜の名義を述べますれば、第一の布施は、梵語には檀那といふ。己れの力を頒ちて他に施すの行である。修證義には『布施といふは貪らざるなり』とありて、慳貪の念を離れて慈悲博愛の情を發するが布施の源泉である。これに財施と法施との二つがある。物質上の施しが財施で、精神を益すべき善法を施すのが法施です。要するに一切衆生を愛護して、利益を與へ幸福を進めしむるの目的を以て、他の爲めにする事は總て布施行と言はれる道理がある。故に、時として奪ふのが却て施しとなる場合もある。子供が危險ない物を翫んで居たならば之を奪ふのが慈悲である。即ち子供に安全を與ふる譯になる。胃病患者が酒德利を持て居たならば、寧ろ之を取上るのが布施である。即ち彼に健康を與ふる譯になる。

臨濟禪師が黃檗禪師に『如何なるか是佛法的々の大意』と問ふた時、黃檗は一言の答へも無く眞向から三十棒を與へた。三度問ひしに三度とも打たれた。臨濟は更に黃檗の眞意が解らぬ。そこで大愚和尚の處に至りて此の意を質した。其の時、和尚は『あゝ流石に黃檗は親切なものぢや、汝の爲にすること至れり盡せりといふべきぢや』といはれたのを聞て、忽然として大悟せられたとある。黃檗の臨濟を接せられ

る。流石に面白くも亦感ずべきことと思ふ。氏は常に『富貴榮達と仁義道德とは兩立すべからざるものと思ふのは幕府時代の舊思想である。今や世界的に發達したる我國に於ては、上下心を一にして一家の富を作り、一國の富を殖すことは我國民の急務である。淸貧自ら安んずといふ樣な時節ではない。併し、誤れる方法や手段を以て富を作るのは、その國家の大害たることは言ふ迄も無く、一身の幸福をも決して得られるものでは無い。「不義にして富み且つ貴きは吾れに於て浮雲の如し」と孔子の言はれたのは此處である。故に仁義道德を堅く守り、正義公道に依りて富を作り、且つ富を使ふの方法を誤らぬ樣にせねばならぬ。是れ論語と算盤とを一致せしむる必要ある所以である』と言うて居らるゝそうです。

氏の總裁に係る東京養育院には、目下、一千七八百人も收容されて居るが、此等の者の共通性ともいふべきものは全く利己一點張であると申すことです。其の中でも不良少年者の如きは最も甚しく、彼等の飮食起臥の日常行爲の上には、其の利己的なる根性が殊に露骨に現はれて居るさうであります。此等の事實に徵するも、人間の確實なる幸福は利他的精神から現はれた勤勉努力の產物であることが解る。故に、現代に於ける文明國民の行動は、總て道德的・利他的でなければなりませぬ。即ち菩薩行でなければなりませぬ。其の菩薩行の標準として御示し下されたのが六波羅蜜であります。

序でながら、菩薩とは大士とも覺有情とも譯してあるが、通俗的にいへば大心の士、即ち心の廣き人といふことです。心の廣き人といふは、自分と他人との隔て無く、怨親平等に慈悲同情の念を起し、一切の

る。然るに、途中の大河に礙へられて、容易に向ふの岸に往くことが出來ぬ。幸に堅牢なる船があつて、吾々を導いて大河の險浪を乘切て彼の岸に到らしめて吳れたのが彼岸到です。此方の岸とは、迷ひ深く罪障重き凡夫の位地に喩へ、途中の大河とは、三界生死の苦しみを指し、彼の岸とは、悟りの月明らかに菩提の花麗はしき佛の境界に比したものです。迷を轉じて悟りを開き、苦しみを離れて樂しみを得、凡夫地を解脫して佛境界に達するのは正しく佛敎の大目的であるが、さて其の大目的を達すべき船となり筏となるものは六種の菩薩行であるから、六波羅蜜と名けたのであります。此の六種の行に依て彼岸に渡り着くといふ所から是を六度ともいひます。

その六種の行とは布施と持戒と忍辱と精進と禪定と智慧との六大行であります。此の六大行を一切衆生の爲めに實行するのが眞の菩薩であります。若し自己本位で單に自己の名聲利欲の爲めに行ふのでは、縱ひ萬兩の黃金を施し幾回の忍耐を守るとも、未だ以て菩薩の行願とは申されませぬ。換言すれば、國家の爲め、父母祖先の爲め、妻子兄弟の爲め、社會公衆の爲めといふ觀念に住して、此の六大行を修むるのが、眞の佛子としての行持、卽ち菩薩の大行となるのであります。

實業界の泰斗ともいはれて居る子爵澁澤榮一氏は、自ら『己れは守錢奴以上に金を欲しがる』というて居るそうであるが、併し、氏は極めて利己的思想の陋劣なることを說き、專ら仁義道德の尊重すべきことを勸めて、曾て畫工をして算盤と論語とを描かしめ、これを幅物として床に掛けて居らるゝといふことであ

彼岸の淨行

佛教の目的

本日は彼岸會に因み六波羅蜜の御話しを致さうと思ふ。我國では春の三月、秋の九月、春秋二季の皇靈祭を中心として前後七日間を『ひがん』と申します。『ひがん』は彼岸、卽ち『彼の岸』と書き、無論、佛教より出でたる名稱である。而して、彼岸會の由來は、我日本に始まつたものでありますが、其の歷史に關する事は每度御話しの出ることとであるから、今日は彼岸の名稱に就て禪的に六波羅蜜行の事を述べて見やうと思ひます。

六波羅蜜とは、波羅蜜の行ひが六通りあるから是を六波羅蜜といふのであるが、波羅蜜は具さには波羅蜜多というて梵語であります。是を飜譯すると彼岸到となる。彼岸到は彼の岸に到るといふことです。これは譬喩に依て出來た名である。譬へば此に恐ろしい大河がある。河の向ふの岸に極めて結構なる土地がある。然るに吾々の現在は此方の岸に居るのであるが、此方の岸は極めて危險なる穢れ多き場所であ

統記には張杭學士が臨終の時家人に向て、『西方淨土は只だ堂屋の上にあり』というたとある。

されば無量壽經には『佛、威神力を以て阿難及び一會の大衆をして座を起たずして、西方極樂を觀見せしむ、彼此互に相見ること掌中を見るが如し』とある。佛眼を以て見れば法界皆な佛、迷想を以て對すれば萬象皆迷なり。兩祖大師の菩薩を感得したまへることは、少しも不思議では無い。世の唯物論者や狹量なる科學的眼孔の人などでは、恐くは是の如き感應道交の妙理を解し得られぬことであらう。誠に氣の毒千萬なことであります。吾々は誓つて、佛菩薩の身心を學得し、感應道交の妙理を體解いたさなければ、佛祖の兒孫とは申されないのであります。早く大修行をなして兒孫たるの名に背かぬ樣になる工夫が肝要です。兩祖大師への御恩報謝の道もこの外にはないのであります。

未だ請せざるに端嚴微妙の形を現じ、羅漢尊者の木像畫像が盡く生命ある活羅漢となりたまうたのであります。高祖大師夫れ自身が觀音菩薩の御慈悲、羅漢尊者の御威德に一如せられたから、菩薩の妙相は忽然として目前に現はれ、尊者の光明は忽然として輝を發せられたのであります。

太祖大師が酒井の永光寺を御建立の時、十六羅漢の中の第八に當らせらるゝ伐闍羅弗多羅尊者が姿を現はしたまひ、又、定賢律師が今の大本山總持寺を太祖に御獻上の時、太祖は定中に於て、觀世音菩薩が蕾の蓮華を持ちて姿を現はし、我れ禪師が爲めに道場の地を與へんと仰せられたとある。全く大師の身心が羅漢尊者や觀音菩薩と一致したまうてゐるが故に、感應道交して斯樣なことが現成したので、決して不思議の事では無いのであります。吾々とても眞實佛祖の行持に一如することを得ば此の身が其の儘佛の身となるのです。吾々の行持が其の儘三世の諸佛の有したまふ大功德の種子です。

世間の事でも矢張同樣で、楠正成公の銅像を見たり、其の傳記を御話しするのみでは、生命ある正成公を見る事は出來ぬが、眞實、七生報國の大義を抱いて、二心なく君國の爲めに忠節を盡す者には、そこに正成公の眞生命は堂々として現はれます。聖賢の道も亦た是の如くで、論語を讀むこと千萬遍するとも、孔子樣は見られぬが、事に臨んで能く忠恕の道を行ふことを得ば、そこに孔子聖人の眞面目は活躍するのです。極樂世界は西方十萬億土を隔つといふけれども、淨土論には僧衍法師が臨終の時に、阿彌陀如來も二十五菩薩も、虛空に充滿してござる。此處より西は純ら是れ淨土ぞと告げられた事が記してある。佛祖

以上の三心が具足すれば、自づと佛法の行持が其の身に備つて來るに違ひ無い。此の身に佛法の行持が現はれますれば、諸佛行持の大功德が忽然として目前に輝きを發し、自身をも照し他人をも照すのである華嚴經にも『衆生法器に非ざれば諸佛を見ること能はず、若し心樂の者あれば一切處に皆な見る』とあるが如く、諸佛の大道は十方法界に圓通すと雖も、若し吾々の身心に行持の力なきときは、佛道の利益も現はれませぬ。一日行持あれば一日だけ諸佛の大道が通達する、一時間佛法を實行すれば一時間だけ諸佛の光明が發揮されるものです。行持なきものは釋尊の御在世に生れたからとても、佛教の功德に浴する事は出來ぬ。苟も行持ある者ならば、縱ひ末世末代に生るゝとも、常に諸佛の御濟度に預かつて居るのであります。

感應道交

兩祖の御傳記に就て見るに、高祖大師御歸朝の時、海上風雨の難に遇ひたまひ、船將に覆へらんとするに當り、大師は默然として端坐したまひければ、不思議や觀世音菩薩が一葉の蓮葩に駕し、忽然として舟の頭に出現したまひしに、さしもの風雨も瞬く暇に靜まりしとあります。又、寶治三年正月元日、永平寺に於て羅漢尊者の供養を御營み遊ばされし時、木像及び畫像の十六羅漢が悉く皆な大光明を放たれたとあります。是は決して不思議でない。高祖の身心が諸佛の行持と一致したまふが故に、觀世音菩薩は

物の靈長として無限に發達すべき智性と德性とを備へ、其の本體に於ては神佛と寸分の相違は無い。然るに唯だ煩惱妄念の爲めに種々の惡業を作り、我と我手で三界六道の苦惱を招き寄せて居るのである。幸に佛樣や兩祖大師等の御化導を被むることを得たるは、實に是れ生死の中の善生最勝の生と申すべきである。故に何處迄も此の一生に於て三界生死の苦患を脫し、成佛得脫の勝緣を決定する樣に、信心修證を勵まねばなりませぬ。太祖大師は『身心徒に放捨すること勿れ、人々悉く道器なり、日々是れ好日なり、只子細に參と不參とに依りて徹人未徹人あり、必ずしも人を擇ぶに非ず、時を擇ぶに非ず』と御示し下されてある。如何なる人でも如何なる時でも處でも、一念の深心さへあれば、必ず佛道を成じ、功德を全うすることが出來るのであります。

次に大悲心とは一切衆生を利益せんとの大願を發する事です。即ち、上、國家に奉じ、下、民人を愍れみ、他の苦痛を濟ひ他をして安樂ならしめんとの行願であります。高祖大師は『凡そ菩提心は、いかゞして一切衆生をして菩提心を發さしめ、佛道に引導せましと、ひまなく三業を營むなり』と仰せられた。一切衆生をして眞正なる信念と道心とを發さしめて佛果菩提の正道に引き入るゝ事を目的として、身口意三業の上に無間斷に之を勸め勵むのが、眞の菩提心である。太祖大師は坐禪の用心を示したまふ中にも『常に大慈大悲に住して坐禪無量の功德を一切の衆生に回向せよ、憍慢・我慢・法慢を生ずる事勿れ』と仰せられた。禪門に於ける總ての修行も、つまりは衆生利益といふ大目的に歸するのであります。

く眞實至誠の大徳大用です。兩祖の恩徳を報ぜん者は、先づ以つて眞實至誠の徳を修めてかゝらねばなりませぬ。

眞正の行持

次に深心とは、起信論には『樂うて一切の諸の善行を集むる故に』とあつて、諸惡莫作、衆善奉行の願心です。兎角、凡夫の心は淺はかであつて、中心より惡を厭ひ善を樂うこと少く、多くは自己一身の利害得失を標準とするの傾向がある。此等は深心では無くて淺心である。深心とは深遠なる志ありて天地の公道に則り、永世の勝果を期するの心をいふ。高祖大師は慈訓を垂れて『劫々多生の間、幾度か徒らに生じ徒らに死せしに、まれに人身を受けて偶ま佛法に遭ふ時、此の身を度せずんば何れの生にか此の身を度せん、縱ひ身を惜み保ちたりとも叶ふべからず。遂に捨てゝ行く命を一日片時なりとも佛法の爲めに捨てたらんは、永劫の樂因なるべし、(乃至)只思ひきりて明日の活計なくば、飢へ死にもせよ寒へ死にもせよ、今日一日道を聞きて、佛意に隨つて死せんと思ふ心を先づ發すべきなり』云々と仰せられてある。實にや人間一期の壽命は朝日待つ間の露よりも脆し、徒らに利名の巷に奔走して空しく生涯を送らんことは、返す返すも口惜しきことではありませんか。

我等は等しく無窮の生命を有て居るのである。生といひ死といふも、一時の變化たるに過ぎぬ。然も萬

今日の世の中は學問といひ技術といひ規律といひ裝飾といひ、何もかも日進月步の狀態でありながら、到る處に道德の頽廢、信念の缺乏といふ樣な聲を聞くのは、唯だ一つ眞の道が缺けて居るからです。眞の道を現はさんには、神明佛陀の照鑑を畏るゝ樣にならねばならぬ。孔子樣は『君子に三畏あり』即ち畏れ憚るものが三つある、一には天命、即ち天地の公道を畏れ、二には大人、即ち聖者を畏れ、三には聖人の言を畏ると申されました。吾々とても何よりも神佛の照鑑を畏るゝが宜い。日月天に懸て萬物を照したまふが如く、神佛世にありて人心の奧底をも照したまふらんと露疑ふべからず。人を欺く事が出來ても己れを欺く事は出來ぬ。欺く可らざらんものを欺かんとして、枉げて虛假不實の科に投ず、是れ即ち六道輪廻生死流轉の本である。

太祖大師は適切に『明かに實道に參ぜんと思はゞ己見・舊情・憍慢・我慢を捨て初心を廻し佛智を會すべし』と御示し下されてあるが、此の己見・舊情といふのは從前己れを味まし、神佛の眼を味ました裏表ある僞り心のことである。大方等大集經に釋尊は寶女といへる童女に對して、三種の實といふことを御示しになつて居る。其の第一は諸佛を誑かさず、即ち佛の御照鑑を昧まさぬこと。第二は己身を誑かさず、即ち自分が自分を誑さぬこと、自分が自分を誑すと云ふは、己れの志に背いたり、己れの良心を枉げたりすることです。第三は衆生を誑さず、即ち他人を欺かぬこと。此の三種の實があつてこそ始めて實道に參ぜらるゝ。己れ未だ眞實ならずして、如何ぞ眞實の道を得べけんや。兩祖大師の發心修行は盡く

燈を備へ、經を讀み拜を設くる事のみではない、修證義にも『唯當に日々の行持其の報謝の正道なるべし』と御示し下された如く、日々の行持こそ眞の報恩です。

然らば如何樣に日々の行持を勤むべきぞといふに、兩祖大師は我等が爲めに手に取る如く御深切に行持の心得を御指南下されてあります。起信論には三心といふ事が說いてある。卽ち一に直心、二に深心、三に大悲心です。此の三心は行持の大精神であります。今此の三心を標準として、兩祖の御親訓の一二を御紹介すれば、

先づ第一には直心、卽ち正直の心が大切である。起信論には『正しく眞如の法を念ずるが故に』とあるが、つまり眞實の道に契うた心のことです。この心を持つには吾々の心を正直にして諸〻の虛僞を離ることが肝腎です。故に高祖大師の御敎訓には『今ま世出世間の人、多分は善事をなしては、かまへて人に知られんと思ひ、惡事を作しては人に知られじと思ふ、是に依つて內外不相應のこと出來たる、あいかまへて內外相應し、錯を悔い實德をかくして外相をかざらず。好事をば他人に讓り、惡事をば己れに向ふる志氣あるべきなり』と御示し下されてあります。此の御示しに從うて從前の錯まりを悔い外相を飾る事なく、又、善事に誇り惡事を覆ふといふ樣な我儘勝手なる了見をば打捨てゝ、裏表なく道を求め道を行ふの志氣を存ずるのが眞の人である。『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん』裏表なき眞誠の心が宗教的信念の基礎です。

寶を敬重し、佛制に違はず、參禪學道すべし』と仰せられてある。而して國家を鎭護し、黎民を慈愍したまふの深きは、各種の御教訓を拜しても最と明らかにして『汝諸人悉皆な國土にはらまる、一天下國土上悉く是れ國王の水土に非ずといふことなし。然るに家にあれば親につかへ、國に侍べれば君に事ふまつる。如是なる時天地加護ありて、自ら陰陽の惠みを受く』といへる御示しの如きは、實に無限の玄旨が含まれて居るではありませんか。

抑も高祖大師は空前絕後の大聖人に渡らせられ、佛祖嫡傳の佛法を相續して、始めて純粹の禪風を我國に弘通せられた。太祖大師は高祖第四世の法孫として道德八紘を蓋ひ、其の門下よりは無數の高僧碩德を出し、天下到處欝然として宗門の繁興を來たされたのである。今日の曹洞宗は一萬四千餘ケ寺の末派と、幾百萬の信徒とを有し、佛敎中の大宗門として化を四方に垂るゝのみならず、其の敎義は佛敎の堂奧に徹し、道德の幽微を穿ち、時として可ならざるは無く、處として適せざるはないのでありますが、これは悉く兩祖大師の大慈悲大恩德の賜と申さねばなりませぬ。

報謝の正道

心地觀經にも『恩を知り德に報ゆるは是れ聖道』とある通り、兩祖の御恩の廣大なることが解つたならば、飽迄も其の恩德に報ゆるのが、人道の本義、佛法の大事であります。然し報恩と申せばとて香を燒き

一如の御宗風にして、唯だ日々の行事を以て諸佛の種子と仰せられ、妄りに知見に誇り、空論に奔ることを極力御誡め遊されてあります。宇治の興聖寺に在す時などは、權門高貴の大師に歸依し奉ること、水の低きに就くが如くなるにも拘らず、名聞利養を惡みたまふこと蛇蝎の如く、遂に化を越前に移して道を深山幽谷の間に行ひ、眞實の佛法を傳授して實地の僧寶を養成し、後嵯峨上皇より賜はりし紫衣すらも再度迄も之を辭退せられ、北條時賴の寄附物件は一切之を斥けられた。而して國家を輔け民人を度するの御精神に至つては、徹頭徹尾之が實行に心力を注ぎたまひ、御垂示の中にすら『國家に眞實の佛法弘通すれば、諸佛諸天ひまなく衞護するが故に、王化太平なり、聖化太平なれば、佛法其の力を得るものなり』とも仰せられてあります。

又、太祖大師は徹通禪師に就て御修行の時の如き、一心に工夫を凝して夜も寢ねたまはず、暫時も御油斷あらせられざる事、恰も仇敵と室を同して處るが如くであつたと申します。殊に御修行の目的は父母所生眼悉見三千界の經文に基き、此の身心に於て佛の境界を得んとの大願を發したまひ、遂に『平常心是道』平常の心がそつくり佛の大道だといふ公案に就て大悟徹底遊ばされた。且つ其の御行蹟に至りては名利の巷に遠かり、京洛の塵を避け、加州より能州に入り、洞谷より諸嶽に遷りたまひ、後醍醐天皇より紫衣を賜はり、且つ日本曹洞の本山たるべき綸旨を賜はりたるにも拘はらず、綠水青山を經行の處とし、谿邊樹下を澄心の處とし、十條龜鑑の第五條には『予の門弟子は名利を離れ、頭陀を行じ、專ら戒律を持して、三

を集めて懇ろに遺訓を垂れ、筆を取り偈を書し、宴然として坐化遊ばされました。
滅後三十年を經た正平九年に後村上天皇より、佛慈禪師の尊號を賜はり、更に四百有八年を過ぎて安永元年十一月に、後桃園天皇は親く宸翰を下して、弘德圓明國師の徽號を賜ひ、それより百三十八年を經て、明治四十二年九月に至り、明治天皇より常濟大師の諡號を賜はりました。

兩祖の慈恩

右述べました通り、高祖大師は八月二十八日に御入滅になり、太祖大師は八月十五日に御示寂になつてゐますが、不思議にも是を太陽曆に換算して見ると、御二方とも九月廿九日となります。つまり同月同日同刻の御涅槃です。實に不思議の因緣ではありませんか。依て今日では宗內一般に九月廿九日を以て兩祖忌を勤修する事になつて居ります。

それのみならず、兩祖大師御行狀を拜し奉りまするに、御修行力の拔群なる事、實踐躬行を主眼としたまへる事、名利の外に超然として化杖を北陸の山中に卓したまひたる事、皇室を擁護し國家を扶翼するを以て化導の標榜と爲したまひたる事、等に於て、兩大師とも殆ど割符を合せたらんが如くにして、寸分の差もあらせられぬ樣に思はれます。

高祖大師が天童山に在せし時の如き、晝夜眠らずして坐禪せられたとある。御歸朝以後の御唱道は修證

四日、傳法相續の事畢りて、釋尊より五十四代、高祖より四代の祖位を御繼紹遊ばされました。

翌年は阿波國海部の郡司の特請に應じて同國に赴き城滿寺を開創せられ、化を西海に開く事四年、正安元年本師の囑に依り、加州大乘寺に歸錫せられて、前後四年の間、其の接化を翼け、乾元元年三十五歳にして大乘寺の師席を繼ぎ、丕に宗風を宣揚したまうた。應長元年御年四十四歳、淨住寺の請を受け開山第一世となりたまひ、翌年能州滋野信直夫妻の請に赴き、草庵を酒井保の地に結びたまひしが、富樫家尙父子の特志を以て、其の地に伽藍を造立されました。これが今の洞谷山永光寺です。また正和三年には能登羽喰の郡司が新たに光孝寺を建て、太祖を請じて開山と爲し奉つたとあります。

元亨元年御年五十四歳の四月、能州鳳至郡櫛比莊の諸嶽寺と稱する律院の院主定賢律師が觀音薩埵の靈夢を感じて懇ろに太祖を拜請せられ、太祖も亦た同じく薩埵の靈告を感ぜられたので、快く其の請を容れらるることゝなり、六月八日を以て開堂說法の盛儀を擧げさせられ、諸嶽山總持寺と改稱遊ばされました。是が今の大本山總持寺であります。其の年の秋八月、後醍醐天皇より佛法肝心の要義十ヶ條の疑問を擧げ、勅使を遣はして太祖の答話を徵されたるに、太祖は速かに御奏對あらせられて、天皇御叡感斜ならず、勅して紫衣を賜はり、且つ總持寺を擧げて官寺となし、翌年八月二十八日には特に綸旨を下して『日本曹洞の本山、賜紫出世の道場』と御定め下されました。正中元年の八月に峨山紹碩禪師を擧げて、總持寺の主席を繼がしめ、自ら永光寺に赴きたまひ、翌正中二年御年五十八歳の八月十五日夜半に衆

て御上洛、錫を高辻西洞院なる俗弟子覺念の宅に駐め、其の月の夜半に至り、自ら遺偈を書して端坐のまま、泊然として涅槃の雲に藏れさせたまうたのであります。後嵯峨上皇は深く高祖の偉徳を敬慕せられ、御在世中に佛法禪師の尊號を賜はりました。高祖滅後六百二年を經た嘉永七年には、孝明天皇、特に勅書を下して、佛性傳東國師の徽號を賜ひ、それより二十五年を過ぎた明治十二年十一月廿二日には、明治天皇より更に承陽大師の諡號を賜はつたのであります。

太祖の御略歷

又、太祖常濟大師は、高祖滅後十六年を經たる文永五年十月八日、是を太陽暦に直せば十一月二十一日といふに、越前國の多禰に降誕あらせられた。母上は世に比ひなき篤信者にて、常に觀音菩薩に祈誓せられて居りました。大師は御幼少の頃より、穎敏衆に超え、六歳の御時、觀音の尊像を拜して菩提心を發したまひ、八歳の四月八日、永平寺に登りて沙彌となり、十三歳の春、孤雲懷弉禪師に就て受戒得度し、茲に正しく僧寶に列せられたのであります。

其の年に孤雲禪師は御入滅なされ、高祖三世の祖、徹通義价禪師に就て晝夜學道に精進あらせられました。十六歳の春、遊方行脚の途に上り、道を禪門の俊傑に尋ね、學を叡山の講堂に修め、御年二十一歳にして師の許に歸省せられ、辨道工夫七年にして一大事を徹證したまひ、永仁三年御年二十八歳の正月十

て、生死無常の理を觀じたまひ、十三歳の春の夜に潜に生家を遁れ出で、比叡の麓なる良觀法眼の禪室を訪うて出家の志を告げ、尋で横川の千光房に留學し、十四歳の四月九日、天台座主公圓僧正に就て得度せられました。

それより叡山にありて大小顯密の敎義を研鑽せらるゝ中、端なくも大疑團を發したまひけるが、之れが解決を與ふる人のあらざりしを以て、遂に京都に下り建仁寺の榮西禪師に參ぜられることゝなりました。是れ御年十五歳の時であります。翌年不幸にして榮西禪師は遷化せられければ、其の嗣明全和尙に隨侍せられ、御年二十四の春、斷然志を決して宋國に渡り、參禪學道に五歳の星霜を閱し、遂に天童如淨禪師の衣鉢を相續して釋尊五十一代の祖位に列せられたのであります。

二十八歳の秋御歸朝の上、暫くは錫を建仁寺に駐められ、尋で深草の里に閑居したまひ、天福元年御年三十四歳の春、興聖寺を宇治に開創して專ら曹洞の宗風を鼓揚せられ、廣く化門を張りたまふこと十有一年、寛元元年、御年四十四歳の秋、越前の領主波多野義重の請に應じ、錫を同國志比の莊に移し、翌年に到りて一大殿堂を建立したまうた。是ぞ今の大本山たる吉祥山永平寺であります

寶治元年の秋、時の執權北條時賴の特請を容れて、鎌倉に下向し、半歳の御化導ありし外は、前後十ケ年の間、殆ど山門を下りたまはず、專ら正傳の佛法を山上に於て開示せられました。

建長五年御年五十四歳の七月に永平寺の法席を上足、孤雲懷奘禪師に讓りたまひ、八月五日に山を下り

兩祖報恩會禪話

高祖の御略歴

本日は我曹洞宗の兩祖大師の御慈訓に就て、聊か御話を致して、相共に兩祖鴻恩の萬一を報謝し奉りたいと思ひます。兩祖と申し上げるは御承知の通り、曹洞宗兩大本山の御開山であります。曹洞宗は他宗とは趣きを異にして兩箇の大本山があるけれ共、其の兩大本山が一體になつて一萬四千餘箇寺の末派寺院を統轄して居らるゝのであります。其の一つは永平寺にして、御開山は我國に始めて曹洞宗を傳へられたる釋尊五十一代の祖師たる道元禪師で、是を高祖承陽大師と申し上げる。他の一は總持寺にして其の御開山は高祖承陽大師の四世の法孫に當らせらる瑩山禪師で、是を太祖常濟大師と申し上げます。

高祖大師は人皇八十三代土御門天皇の御宇、正治二年正月二日、太陽暦に改むれば正月廿六日に京都に降誕あらせられ、御父君は久我内大臣源通親公、御母君は攝政太政大臣藤原基房公の御女である。三歳にして父君に別れ八歳の御時母君に別れたまうた。其の時龕前に跪きながら香烟の消行く有樣を見

然として煩暑の苦みを忘るゝ樣でなければならぬ。故に古人は『靜中の靜は眞の靜に非ず、動處に靜を得來つて纔に天性の眞境を得、樂處の樂は眞の樂に非ず、苦中に樂を得來て纔かに心體の眞機を見る』というてある。して見れば吾々は大暑の時に於ても、勇を鼓して自己の天職を盡し、愉快に滿足に之を勤め勵み頭々上物々上に、精神を鍊磨し信念を長養し去る樣にすれば、野鶴閑雲の妙趣は自づから此の中に現はれ光風霽月の風流も亦自づから此の中に生じ、胸中一塵の累ひ無く、脚下一毫の障も無く、無限の凉味、物外の爽氣は、全身に漲り渾心に溢れ、愉々快々、實に大安心の地に達することが出來やうと思ふのであります。

ながら暑さを忘るゝ。人生の眞只中に在りて活動をして居りながら、藐然として雲外の樂みを占取するのである。木人方に歌ひ石女立て舞ふといふも、此の當體を詠じたものである。

一休禪師が曾て住吉明神に詣して鳥居前に來ると、葬送の行列に出逢はれた。禪師は『嗚呼住吉とは稱して居るものゝ此處でも矢張浮世の苦惱は免がれぬ、釋尊は「三界不安猶如火宅」と仰せられたが、無常の火勢は住吉の地にも及べり、さすれば餘り住吉とも思はれぬ』と感ぜられつゝ、『來て見ればこゝも火宅の宿なるを、なに住吉と人のいふらん』と詠ぜられた。すると一老翁が出で來りて禪師に向ひ『よしあしと思ふ心をふりすてゝ、たゞなにとなく住めば住吉』といふ返歌をしたといふ物語りがあります。たゞなにとなくといふは逍遙として性に任する底の消息である。併し之を誤解すると竹林の七賢人の様なものと思ふ様になるが、佛の道は上求菩提、下化衆生にあるものであるから決して消極的解脱に安んずるものでは無い。

正岡子規は病牀六尺の中に『余は今まで禪宗の悟といふことを誤解して居た。悟りといふことは如何なる場合にも平氣で死ぬことゝ思うて居たのは間違ひで、悟りといふことは如何なる場合にも平氣で生きて居ることである』というて居るが、是れは頗る禪味を解した語である。平氣で生きるといふは一切の境界に束縛せられずして大道に隨順する活動を爲すことである。是れが禪の妙趣である。

されば吾々は必ずしも暑を恐れず暑を避けず、暑中に在りて能く其の道を盡し其の業を勵み、而して脫

執着を離るゝといふは無我になることである。無我といふは無感覺になることでは無い。人生に處して人生の汚れを解脱する底の境界を自得するをいふのである。人生を解脱するといふは人生の眞意義を體得して、大安心を得ることをいふのである。

支那禪門の高僧洞山悟本大師に僧あり問て曰く『寒暑到來如何か廻避せん』いかにせば寒暑の苦痛を解脱することが出來やうぞとの進問である。大師曰く『何ぞ無寒暑の處に向て廻避せざる』即ち寒くも暑くも無い處に身を安んぜよ。無寒暑の地といへば夏にも冬にも適當なる御淨土である。すると彼の僧は『如何なるか是れ無寒暑の處』、その樣な安樂の御淨土はどこにありますか。大師は直ちに『寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す』と答へられた。寒暑不到の安樂地とて別に求むることを休めよ、寒い時は寒い、熱い時は熱い（闍梨とは梵語、軌範師と譯す。出家の修行稍や成熟して後進の軌範となるべき者をいふ。今は問話の僧に對する敬稱である）殺は徹底といふ程の意味である、即ち寒い時は徹底寒い、そこに大安心の地があるぞ、熱い時は徹底熱い、そこに大安樂の境があるぞ、人生に處して眞面目に人生の眞意義を發揮せよ、そこに佛界が現成するぞ『寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心なければ苦みもなし』とは利休の歌といふのであるが、心なければと申しても茶柄杓の樣になつて仕舞うてはならぬ。暑い時は汗を絞り

したがつてならぬ。さればとて人生を嫌ひ厭ふ時は消極的解脱の窩中に投じて、菩薩の大行を營むことが出來ぬ。そこで吾々は是非とも適當の訓錬を積まねばならぬ。其の訓錬の第一歩は己見己我に對する執着を拂ふことが必要である。人の精神をコ、ロといふ、コ、ロとはコロ〳〵の義である。コロとは凝り固まることとです。人心は一方に偏し易く一隅に固まり易い性質を有て居る。出世間に偏すれば世間を輕視し、世間に偏すれば名利に使役せらる。釋尊が最初に聲聞・縁覺の法門を說き、後に至りて却て之を彈呵せられたのは、決して法門の罪では無く、之に偏執する人に罪があるからである。

昔、栂尾の明慧上人は卓越せる高僧であつた。上人は松茸がお好きでありしかば、一人の信者ありて特に上人を請じて松茸の馳走をした。上人は大に喜んで十分に飽喫せられた。寺に歸られてから、弟子達が上人に向て『今日は施主家が上人にお嗜な物を差上げたいとて松茸を供養せしに、上人が喜んで召上がつたので非常に滿足して居りました。今日の御供養に就ての施主家の心盡しは一通りでは無かつたのです』と申上ると、上人は物をも言はず、袈裟をかけて佛前に懺謝せられ、而して後弟子達に對して『予が松茸を好むといふ處より、施主家に非常なる勞力と物入りとをさせたは、誠に佛弟子として愧づべきことぢや、是れ畢竟予が松茸に對する執着があつたからであらう。抑も佛法は執着を離るゝを以て第一とす。縱ひ佛法その物と雖も、執着する時は一種の病となる』と說き示されたとある。

に於て大火焔裏に之を高唱して、壯烈なる最後を遂げられたといふので名高い句である。悟空上人の活計は三伏の日光が隈まく差込むといふ大焦熱裏に端坐して、而して能く忘暑三昧に入られたのである。そこで杜荀鶴は感歎し、生死岸頭に立て寂光淨土の樂みを得、六道四生の巷に居して涅槃寶臺の安心を得ることは、必ずしも青山綠水の間に逃れ、閑雲野鶴の群に伍するには及ばぬ。但だ心頭を滅却する時は火中に在るも猶ほ淸凉の地に在るが如し。是れ人生に處するも人生の束縛を受けず、其の間寧ろ無限の快樂を感ずると謂うたものである。

夏時の炎熱は動もすれば身心を疲らし、且つ惰氣に陷らしめ、四肢五體ともに倦怠を覺ゆるを以て、古人は熱氣を煩惱に喩へて、煩惱の熱慢などゝいうて居る。又、人生は頗る五月蠅きものだ。種々の境遇や事情が常に吾人の身邊を圍繞して、不安ならしむるを以て、人生をも熱境に喩へてある。故に『心頭を滅却すれば火も亦涼し』といふは、獨り銷暑の活計を述べた計りで無く、全く人生解脫の妙味を示されたものである。消極的解脫を習得する者は、全然人生と絕緣するを以て、安心を得られると考へて居るのが多い。解脫上人や西行法師や苅萱道心の如きはそれである。解脫上人等の如き生涯は、其の時代が斯る行動を餘儀なくせしめた趣がある。今日は獨り自ら潔くして居る時代では無い。百尺竿頭進一步して護國利生に努力せねばならぬ。

併し、こゝが六かしい處で、人生の眞只中に在る時は、動もすれば人生の穢れを受けて、知らず〱俗化

風通りも宜い方ではなし、室も餘り廣いといふでは無し、中々堪へられぬ程の暑さである。然るに禪師の態度洒々落々たること是の如し。是に於て白樂天は禪師の暑さを感ぜざるは精神の落着に依るものであるといふことが分つた。そこで筆を取りて、

人人避暑走如狂。獨有禪師不出房。
是可禪房無熱到。但能心靜便身涼。

の一詩を賦して丈室の壁に題したとある。洵に面白き詩である。世間の人々は暑さを避んとて東奔西走氣も狂はん計りの有樣である。獨り恒寂禪師は悠然として方丈裡に端坐し、終日戸を出でらるゝことが無い。是れは要するに心が靜かなる爲めに身も清涼であるのである。是れらは禪門に於ける忘暑三昧とでも言ふのであらう。白樂天も此の忘暑禪を學んだものと見え、後に至りて消暑の詩を賦して『何以消煩暑。端居一院中。眼前無長物。窓下有清風。熱散由心靜。涼生爲室空。此時身自得。難更與人同』というた。

杜荀鶴が悟空上人を詠じた詩にも、之れと同轍なのがある。即ち

三伏閉門披一衲。兼無松竹蔭房廊。
安禪不必須山水。滅却心頭火自涼。

といふのである。轉結の二句は甲州慧林寺の快川禪師が織田信長公の爲めに燒打せられし時、山門の樓上

因縁外道と稱して呵責せられた。

して見れば先世房よりは『況しての翁』の方が一段進んで居る樣に思はれる。此の『況して』の行を善用する時は、觀念の力が強く發揮するであらう。例せば暑中の熱き日には、溫帶國たる我が國ですら猶ほ暑きこと是の如し、況して熱帶地の如きは如何であらう。釋尊の如きは一化五十年、熱帶地に遊行ましませども暑さを訴へ給ふことなどは、經典の中殆ど一箇所も無い。然るに無智短才なる吾々が如何に暑ければとて暑いなどといふことを口に出して濟まうか、況して明治天皇の如きは前述の如き御製すらあるのみならず、猶ほ『政りごと出でゝ聞くまはかくばかり暑き日としも思はざりしを』といふ御製もあると思ひ廻せば、どうしても暑さに負けては居られぬ樣になる。暑さに負けざる者は暑さを恐れぬ。暑さを恐れぬから暑中に於ても依然として活動する。此の活動の處に清涼の味が現はれて來る。

忘暑三昧

併し、觀念の力を假りて暑さに打克つといふのは未だ以て徹底的の妙域に達したものとは言はれぬ。唐の白樂天は大暑の砌り恒寂禪師の處を訪問された。相見清話を試みるに、禪師は快然として商量を打し、渾身清涼の氣に充され、殆ど夏を知らざるものゝ如くである。從つて暑いとか辛いとかいふ語は全く聞くことが出來ぬ。白樂天は奇異の感を抱き、此の禪房は暑さを感ぜぬのか知らんと思ひしも、然うでない。

人稱して『況しての翁』と申した。大和國の或僧が此の翁の信仰安心の勝れたるを聞き、特に尋ね來りて結緣を求め、且つ其の平素の覺悟を問ひけるに、翁の答ふる樣は、私は『況して』といふ一行を守りて信仰して居ります。飢えたる時は、暫時の飢渴すら猶ほ堪へ難く覺ゆ、況て餓鬼道の苦はいかゞあるべきと思うて之を忍び、寒暑に遇うては八寒八熱等の地獄に思ひ比べては之を忍び、益々其の身の果報を喜びて佛道を欣求して居ります』というた。是れは長明の發心集に出て居る御話しである。

又、砂石集には、下總國の『先世房』の事が出て居つた。先世房は貧賤孤獨の身であつたが、萬事萬端の上に就て先世の事と觀念て、憂喜の境に於て未だ甞て心を動かさず、尋常に正直を守り聊かにても諂ふ心が無かつた。或時其の家が火災に罹つたが、矢張先世よりの定まり事ぞというて少しも騷がなんだ。鄰人が來りて手を取つて火中より救ひ出せしに、是れも亦先世の約束ぞと申して引かるゝまゝに逃れ出でた。先世房と申す名は斯うしたことからつけられたのだといふ。斯る單純なる觀念ですらも矢張一分の安心が得られる。尤も、先世房の如きは決して健全なる觀念法とは許されぬ。何事も皆な前世の因緣だと諦らめて心念を動せぬといふ處には、相當の價値はあるけれども、さういふ觀念のみでは永遠の理想もなく、進取の氣力も無いことゝなる。何もかも皆な因緣に打任せて、保守一偏に墮しては、是れ亦一種の病である。佛在世にもさういふ種類の者があつた。貧乏するのも定まる因緣、死ぬるのも定まる因緣、死生命あり富貴天に在り、何事も因緣の定まる所と諦めて、それに滿足して、以て自ら劃るのである。故に釋尊は是を

とは、禪門の生活に於ては殆んど用不着である。然らば、如何にして、克暑・忘暑の境に安住することを得べきや。

克暑の人

暑に克つの法というて別には無い。第一に暑さを恐れぬことが肝要です。人間の身體といふものは却々強いもので、病人とか老衰者とかならばいざ知らず、普通の人ならば適當の用意さへして居れば、大概の暑さには負けぬものです。如何に暑き日なりとも、何んの是れしきのことと思うて勇氣を鼓する時は、無暗に暑さに苦しめられる樣なことは無い。乃木將軍は學習院生徒に敎へて『暑い時は寒いと思ひ寒い時は暑いと思へ』と言はれた。吾々御互は常に是れ程の勇氣が欲いものである。勇氣ある者は艱難をも艱難とせず、故に艱難の中に在りて獨り能く樂むものである。天福は常に斯る人にのみ來り臻るものです。勞働に從事して居る者で、如何程暑い日でも平氣で愉快氣に働いて居る樣なれば、好運は自づから開かれる。然るに暑さに惱みて、どうも〳〵やり切れませぬとか、身體がうだる樣ですとか、左も苦しそうな顏をして、愚痴や不平を覆す者は、結局貧乏神にとりつかれて、開運の進路が杜絕する樣である。故に人は總てに於て、觀念が大切である。

昔、近江國に乞食の老人があつた。此の乞食老人は何事につけても『況して』といふ口癖があつたので

當りても、妄りに苦悶の情を發せず、寧ろ此の時を利用して或は業務に勉勵し、或は身心を訓練し、或は知識を錬磨することを心懸けたきものと思ふ。

明治天皇御在位の折、一年例年に增して暑さ烈しかりける折、奉仕の方々は御玉體に御恙あらせたまふこともやと案じ奉りて、御避暑を御勸め申上られた時に、陛下に於せられては暫しは何等の御沙汰をも賜はらなんだが、良あつて『あつしともいはれざりけり沸えかへる水田に立てる賤を思へば』といふ一首の御製を御吟じ遊ばされた。此の御製の意は、汝等は頻りに暑い〳〵というて騷ぎ居るが、此の暑い最中に煮え立つ計りなる泥田の中で、日光を浴び膏汗を絞つて働いて居る者共の事を思ひ遣りなば、暑いなどといふ事は一口も言はれぬでは無いかといふ最も尊き御仰せである。此の御製を拜したる奉仕の方々は、一言も申上ぐべき語を知らず、唯々優れさせ給ふ御勇氣と農民を思召し給ふ御仁德とに感泣して、御前を引下つたと申すことでありす。

吾々は暑氣蒸すが如き日に外出して汽車にでも乘りし場合、一方には立派なる姿を爲して團扇を使ひ氷水を喫しつゝ避暑地に赴く人と、一方には笠を被り金剛杖を持ち、白衣を着け鉢卷を爲し、破草鞋をつけて三等汽車に駈け込む人とを對照して見て、言ふべからざる興味を感ずる。況や汽車の窓より田園の中に在りて、泥塗れになりて田の草を取り居る男女の樣などを見ては、恰も一種の謎にでも逢ひたらんが如き感じが致します。我が禪門に於ては古來より克暑の修養と忘暑三昧を敎へられてである。故に遁暑と患暑

で苦悶して居る連中である。『言ふまいと思へど今日の暑さかな』人に向へば先づ第一に暑い〳〵の挨拶を交換すること幾數回、中には『あつ〳〵』などと丸で燒傷でもしたかと思はるゝ程の騷ぎをして居る樣なのもある。

三は此の暑さに乘じ、高山險嶽などを跋渉する人である。

四は其の身分又は職業に於て避暑等を爲すを許さず、汗を絞りながら熱心に働いて居る人である。農民にせよ、勞働者にせよ、敎育家にせよ、商業家にせよ、此の種に屬する人が國民の大多數を占めて居ります。

此の四種の中、初めの人は暑を厭うて遁がるゝので是を『遁暑の人』といふ。次は暑に惱まされて暑氣病に罹かつて居るので、是を『患暑の人』といふ。次は暑を恐れず、却て之に打克つ底の人で是を『克暑の人』といふ。後のは暑さに對する覺悟の力に依りて、格別之を苦みともせず、業務の爲めに心を奪はれて居るので、是を『忘暑の人』といふべきである。最も中には據なく泣き〳〵働いて居る者もあらうが彼の農家の如きは、暫時も油斷すべからざる家業の爲めに、暑を避けんとする考も無ければ、暑ければとて、別段甚き苦悶をも起しては居らぬ者が多い。此等四種の中にて吾々の則るべきものは、第三と第四即ち克暑と忘暑とである。遁暑の人の中には特別に學問や硏究の爲めにする人もあらうに依つて、敢て必ずしも彼を捨て此れを取りて、其の是非を判定する譯には行かぬが、何れにしても、吾々は大暑の時に

心靜かなれば便ち身涼し

大暑に處する四類の人

夏は暑いものにきまつてゐる。若し、夏にして冷かであるならば、それこそ氣候の變調で、大騷ぎである。故に吾々は夏の暑さに對しては、衷心感謝すべき道理がある。併し極寒と極暑とは兎に角極端なる氣候であるから、如何なる人も多少の苦痛を感ずるは常然であるが、さし當り極暑の時の如きは如何にせば愉快なる日送りが出來るであらう。大暑に處する人々の生活振りを察するに、大體、四通りに分けて見られる。

一は避暑生活である。寒暖計が八十度以上にでも騰ると、最早暑さに堪え難く、或は涼を山間に搜り、或は熱を海邊に避け、暫時も暑熱といふ敵に對抗するの勇氣なく、一夏九十日殆ど豫定の退却にのみ汲々たる人々である。

二は暑を避くるの資力を有せず。或は資力あるも其の暇を得ること能はずして、朝から晩まで暑い〱

昭憲皇太后は明治大帝御崩御の後、沼津の御用邸に在て、親しく觀音普門品を書寫せらせたまひて明治大帝の御冥福を祈らせられたと漏れ承つて居ります。或夜の如きは午後十二時頃になりても猶ほ御机に向はせられて御筆を御執り遊ばさるゝので、奉仕の面々は恭しく『陛下には何を御寫し遊ばさるゝや』と御伺ひ申上げしに、『予は觀音經を寫して居るぞ』と御意あらせられたと申すことである。其の御書寫の普門品一卷は後に村雲尼公に御下賜あらせたまひしやに承つて居ります。洵に畏くもまた有り難き御事ではありませんか。

併し此の目的を達するには吾々の至誠の力と佛法の力とが合體せねばなりませぬ。至誠の力は能く鬼神をも感ぜしめ天地をも動すの靈機がある。明治大帝は『鬼神も泣かするものは世の中の人の心の誠なりけり』と御製あらせたまうた。此の誠の力の佛に對して現れたのが信仰です。一切の妄想邪念、懷疑僻見を脫出して三寶の歸依する時、必ず偉大なる至誠の力が現れます。之に佛力・法力が感應して甚妙不可思議の佛化に預るのであります。是即ち孝德の最大最勝なるものであるから至道の法とも仰せられたのである。

凡て佛敎の行事は圓通無碍の法と申して、一佛事、一法要の上にも眞諦・俗諦の二門を備へ、事相と理趣との二方面を有して居るに依て、此の盆會の一事の上にも、佛敎の全體を說明する程の意義があるのでありますから、國民的年中行事たる盆會の如きは、能く其の意義を理解し、法の如くに之を行なひなば、之れが子弟に對する好敎訓ともなり、各自の修養上非常に力ある行持ともなるものであります。

のである。

總じて佛敎に於ける追祀の意旨は自づから二通りある。一は報恩の供養で所謂神を祭ること其の在すが如く、父母祖先等は目前に實在せらるゝものであるといふ觀念を以て、眞情を盡して供物を備へ以て報恩の誠を致すのであります。吾々が朝夕神佛を拜し、又は祖先の靈前に敬禮するにも亦此の觀念が無ければなりませぬ。世間一般に勤むる追悼とか供饌式とか稱する儀禮は皆此の觀念に於てするのである。

今一つは父母祖先等の冥福を資くることで、是れは佛敎特有の行事です。即ち父母祖先等は今後益々其の幸福を進め智德を圓滿せらるゝ樣にと回向するのである。此の事は到底凡夫の能する所ではないから、佛陀の慈光を仰ぎ三寶の功德に憑りて其の目的を達せんと期するのである。佛菩薩の前に於てするは其の加被力を懇請するので、經を讀み咒を誦し若しくは之を講讃するのは、亡靈をして見佛聞法の勝緣を結ばしむるのであります。

梵網戒經には『若し父母兄弟死亡の日は應に法師を請じて菩薩戒經律を講じ、福をもて亡者を資け諸佛に見え人天の上に生ずることを得せしむべし』と仰せられてある。未來の果報は現在の業力に依て定まるのであるから、御歿れなされし父母や祖先は如何なる果報を受けたまひしやは知らされど、凡夫の習ひとして容易に三界六道の業果を解脫することは出來ぬ。故に孝子順孫たる者は、父母祖先に代つて或は三寶を供養し、或は布施行を修し、或は聖敎を讀誦し、是を以て其の菩提を弔ふのであります。

には父母祖先に追孝の誠を盡し、間接には廣く三界の萬靈に法味を施與するのである。

感應の妙理

凡そ物には本末あり事には終始あるを以て、能々先後する所を知らねばならぬ。盆會は大なる孝道より出るとせば、吾々は平日に於て其の父母に對するに孝順の道を以てし、兄弟・夫婦・朋友等に對するに慈悲の徳を以てせねばなりませぬ。盂蘭盆會は盛大に勤めるが、平素の孝養は一向顧みぬといふ様では、全く其の本末を誤つたこととなる。世には猫は可愛がるが母親をば粗略にするといふ様な人もあるそうです。是れは全く輕重を誤つた行爲であります。佛教に於ては盆會すら猶ほ且つ是の如く御勸めになつて居る程であるから、平日の孝養は更に一層の努力を以て遺憾なきを期せねばなりませぬ。

人に孝心の誠があれば其の誠の力は必ずや冥界にも達すべきは佛教徒の齊く信ずる所である。支那の廣寒は至孝の人であつた。其の母常に梅花を愛することが深く、六月朔日といへば梅花の季節ではないが、廣寒は是非とも梅花を母に見せたいと思ひ、一心に天に祈りしに、不思議にも庭前の梅に花が咲いたので人是を孝感梅と稱したとある。我が國の養老の瀧の故事も亦此の例であります。是れ則ち感應の妙理であつて管見者流の窺ひ知る所ではありませぬ。釋尊の如きは御父淨飯王の御薨去の砌りは、親く其の棺を擔はれたとある。目連尊者の如きは母親の爲めに大供養會を設け遂に餓鬼道の苦みをも御救ひ申上げられた

實は不滅なのであると信ずる。生死は猶ほ晝夜の如きものであつて、其の相異なりと雖も其の實は異なつては居らぬ。故に父母祖先等に對しても全く實在者として供養もし回向もするのである。此の信念が無ければ御靈供も讀經も無意味になつて了ふ。猶ほ佛教にては孝行の對象を現在の父母や祖先なりとせず、過去世に於ける父母にも及ぼすから其の範圍は非常に廣くなる。承陽大師は『六の道遠近迷ふ輩は我が父ぞかし我が母ぞかし』と詠ぜられた。

梵網經の四十八輕戒の第二十は不救存亡戒といふのである。是れは此の世に生存して居る衆生と故人となりし人とを、倶に救ふといふ戒法です。その戒の本文に『若佛子慈心を以ての故に放生の業を行ずべし、一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母、我れ生生に之に從がひ生を受けずといふこと無し、故に六道の衆生は皆な是れ我が父母なり』云々とある。此等は因緣觀より生ずる自然の歸結でありま す、佛教に於ては此の意味に於て、宇宙間一切の生物を利益して幽明併せ救ふのが盡く孝道の行持としてある。

明教大師は孝論に於て『夫れ佛の道たる、人の親を視ること猶ほ己れが親の如く物の生を衛ること猶ほ己れが生のごとし、故に其の善を爲すときは昆虫悉く懷く、孝を爲すときは鬼神皆な勸む、其の孝に資て世に處するときは世と與に和平にして忿爭なし、其の善に資て世を出づるときは世と與に大慈にして其の世を勸む』と說て置かれたのである。盂會の如きは此の深遠なる因緣觀が根底を爲して居るから、直接

されば眞に能く孝道を盡さんと思はゞ、子ある者は完全に其の子を教育せねばならぬ。妻ある者は親切に其の妻を愛護せねばならぬ。奴婢を有する者は使ふに道を以てし、親戚ある者は交はるに道を以てし、職業ある者は務むるに道を以てし、其の他、社會に對し國家に對し完全に其の本分を盡すに非ざれば孝の全きものとは申されぬ。父母としての慈愛、夫婦としての和順、兄弟としての友誼、朋友としての信義、一として孝行の道ならざるは無い。

然るに此の本務を等閑にして、子たる者が父母に對して漫りに慈愛を要求し、父母たる者が其の子に對して無暗に孝養を強要し、而して自己の盡すべき所以の道を盡さなんだならば、決して家庭の和樂を見ることは出來ませぬ。彼の不良少年などは多くは家庭の缺陥より産出せらるゝといふことです。父母の放蕩とか繼父母の虐待とかいふことが、不良少年を造り出す樣になる。之に反して餘りに可愛がり過ぎて子弟を不良に陷れたるものもあると申すことです。故に家族相互の間でも十分に道德的知識を啓發するの必要があります。

一旦父母なり子弟なりが此の世を去りたらん曉は、最早、之に對する義務は不要になつたものと見るべきであらうか、否な、決してそうではありません。佛教の敎ふる所に依れば吾人の生命は永久に不滅である。生といひ死といふは因縁に於て現はるゝ一時の假相です。假の相は時々刻々に變化して止まざれど其の實相は不生不滅であります。そこで佛教に於ては、其の人死するも唯だ死の影を現はすのみにて其の

所有生物を對機として、其の福樂を增進せしめんとして回向するのである。獨り盆會ばかりではなく、總ての祭祀及法事は何れも過去せられた方々の心靈に觸れるのが根本義であるにも拘はらず、現代の人の行ふ所は多く此の根本義を閑却して居る樣に思はれて甚だ遺憾である。

都人士の間には父母の法事を行ふに當りても、前にも述べた通り、唯だ一種の社交的饗應なるに過ぎぬ樣な風がある。その佛事に列なる人も多くは宴會同樣の考を持て居りはせぬかと思はれる。佛式の法事にも精進料理は感心せぬなどというて、鮮肉を盤上に駢べたり、又は讀經後、料理店などに案內されて酒食を飽喫し、而して、是を立派な御法事であつたなどと稱して居る。精進料理に對する意義などはトンと知不得です。是れも敎へざるの罪であらうと思へば佛弟子として甚だ慚愧に堪へぬ譯である。

盂蘭盆の深義

孝道は道德の大源、家庭和樂の根基であるが、其の功果を收むるには、家內中が盡く孝道を修むることに熱中せねばならぬ。孝といへば單に子弟たる者の行なひとのみ見るからいかぬ。前に申した通り、孝道の內容は甚だ寬弘である。なぜならば、父母の丹誠に依りて此の世に生れ且つ育てられたる此の身を尊重して、本性の美德を發揮するのも、父母に報ゆる所以の道であるからであります。然れば吾々の全生涯を通じて孝道を勵まねばならぬ。

ら、此の身を自重して其の天分の智能を開發し本具の德性を顯揚することが孝行の本である。父母既に此の世を去りたまふと雖も、死に事ふること生に事ふるが如く、所謂神を祀ること其の在すが如くするは、孝子の眞情である。佛教に於ては、唯だ父母祖先の靈に御供養をするといふ計りで無く、進んでは三寶の威神力を仰ぎ、其の冥福を資け其の菩提を莊嚴するを以て目的とするのである。

我が國では招魂祭といふことが常に行なはれて居る。軍隊などに於ける招魂祭は言ふに及ばず、民間に於ける法事追弔の儀も皆な招魂祭である。是れ洵に尊き意義の存する祭儀であるが、若し報恩の至誠に乏しかつたり、心靈に對する信念が薄かつたりしては、招魂祭祀の意義が徹底して居らぬこととなる。法事を營んだり年忌を勤めたりする世の人々の中には、唯だ世間の御交際や表向の御義理で勤める人が多い。其の席に招かれた人々の中にも、故人の靈に對する觀念などは全く無く、恰も宴會の席に臨むが如き量見で居る方がある樣に思はれる。主客ともにそんな風では、折角の法事追善も殆ど意味をなさぬこととなる。

盆會の如きは、家族全體が御墓に至りて父母祖先の靈を招待し、一家親族相集まつて、今日こそは亡くなりたまひし父上母樣や、顏も知らぬ御先祖樣と御一處に御飯も戴き御茶をも飲まれると思ひ、無限の喜びと樂みとを以て睦み合ひ、色々の形式に依て專ら其の靈を慰むるを專務とする。實に麗はしくも亦意味深い行事ではありませんか。更に進んでは三寶を請じ經典を讀み、父母祖先の靈に對し、見佛聞法の勝緣を結ばしむるのである。而して、施餓鬼會等を修行するのは、言ふ迄も無く、三界萬靈というて宇宙間の

古歌に『夏扇冬は蒲團を暖めて身には着ずとも親を養へ』とある通り、何處迄も全力を盡して御供養するは當然である。然るに、世には一家の主となつて居ながら、猶ほ親の物を當にして親の物を減すことを何とも思はぬ樣な人がある。是れは自分の徳を損するの甚しきものである。

二には『凡そ爲す所あれば先づ父母に白す』何事も父母には打明けて安心させることである。尤も、現代の如く事業が種々雜多である場合は、一々父母の承認を受くることも出來まいが、重大なる事は必ず之を告げて納得させる樣にするが宜い。家門の重大事の如きは父母祖先の君に迄も勸告する樣に致したい。我が皇室に於かせられては常に奉告の御儀を行なはせられて居る。

三には『父母の爲す所は恭順して逆はず』古歌に『二親に氣をつけものゝ孝行は少し言葉の鹽加減せよ』とある通り、父母の意に逆はぬ樣、言葉使ひまでも柔らかに優しくして貰ひたい。四には『父母の正令敢て違背せず』父母の命令でも全然間違つた事となれば適宜の方便を以て之を諫め改むる必要もあるが當然の命令ならば忠實に之を守らねばならぬ。

五に『父母の爲す所の正業を斷たず』父母の志を繼ぎて其の家業を勵み益々家運の隆昌を期すべきである。尤も、今日は從前とは違ひ、時勢の變化につれて職業を轉ぜざるを得ざる場合もあらうが、何れにしても父母に滿足を與へ父母の譽れを顯はす事を忘れてはなりませぬ。

六方禮經等にも子の父母に對する心得を細々と示されてある。要するに此の身は父母の遺體であるか

友に』云々とあるは忠孝を全うする所以の道を御示し下されたのである。故に眞に能く忠孝を爲し遂げんには、第一に父母等の尊親屬に孝養を盡し、兄弟に對して友愛の情を傾け、夫婦の間には和順の德を守り朋友間には信義の道を踐み、恭儉己れを持し博愛衆に及ぼし、學術を修め業務を習ひ、以て天分の智能を磨き道德の發揚に努め、進んでは社會の爲め國家の爲めになるべき事を營み、國家の憲法々律を守り、一旦國家の一大事といふ場合には義勇公に奉ずるの覺悟が大切である。

以上の德目は正しく忠孝を成す所以の道である。而して此等德目の中に含有する意義を擴張する時は一切の道德一として攝せられざるは無いのである。

孝道の二面

釋尊の御教へは粗より細に入て幾ど備はらさることは無いが、今暫く孝道の上に就て申せば、孝道に二樣ある。卽ち父母の現在に對する孝と未來に對する孝とである。又、現在一世の父母に對する孝と、過去幾生死の間に於ける父母に對するの孝とである。父母の父母、父母の父母の父母、乃至、先祖累代に對する孝道も亦此の中に含有されて居るのであります。

現在の父母に對する孝道としては長阿含經には五通りの心得を示してある。其の第一は『供奉能く乏きこと無からしむ』といふので、卽ち眞心をもて出來得る限り親切に親を養ふことです。親の大恩を思へば

る御聖訓であります。

教育の御勅語の普及といふことは尋常に奬勵されて居ることであるが、實際は却々一般に行き渡つて居らぬ樣である。之を行渡らせるには國民一般が每朝之を奉讀する位にせねばならぬ。小學校などに於てこそ每日奉讀する處もあるが、それ以外には餘り日課として奉讀する人は無い樣である。今更、七十、八十になつた老人の教育なき者に日課として奉讀せよといふたからとて實行の出來惡いことであらうが、壯年・青年の男女ならば、是非とも日々に一回宛は奉讀するものと覺悟すれば、容易に實行し得られることであらうと思ふ。

尙ほ前に述べたる如き敬神崇祖の觀念は忠孝の發露であるから、我が國の臣民、殊に佛教を信ずる人々は、每朝、洗面して手を洗ひ口を淨めなば、先づ伊勢の大廟と東京なる宮城とに向て遙拜をなし、それから神棚・佛壇に向て敬禮をなし、而して後、神前なり佛壇の前なりで、教育の御勅語を奉讀し、それから出來るならば御經文なり御佛名なりを讀誦唱念する樣にして貰ひたいのである。老人とか又は壯年・青年の人でも特別の信仰家は日課の勤行をせらるゝが、一般の青壯年者には一向勤行は無い樣である。そんなことでは却々徹底的信念を養ふことは出來ぬ。若し今上陛下の御聖影が奉掲されてあるとか特殊の佛像等が安置されてあらば、每朝、之に對して敬禮を行ふことの如きは勿論であります。

教育の御勅語には始に『克く忠に克く孝に』と忠孝の二道を標示されてある。後に『父母に孝に兄弟に

日と雖も其の人々に依て忠孝の爲振が多少儒型を異にして居るものである。孔夫子の如きも決して杓子定規に孝行を說かれては居らぬ。

魯の大夫孟懿子が孝を問ひしに答へて『違ふこと無れ』と言はれた。違ふこと無れとは萬事に儀禮を重んじ、苟も其の宜きを失うてはならぬぞといふ意味である。故に孔夫子自身が此の意を說明して『生るに之に事ふるに禮を以てし、死するに之に事ふるに禮を以てし、之を祭るに禮を以てす』といはれた。此の御語に依て孟懿子の人格も幾分想像し得らるゝのである。又、孟懿子の子、孟武伯が孝を問ひしに答へられては『父母は唯だ其の疾を之れ憂ふ』と言はれた。父母に疾があつたならば中心より不斷に之を心配せよ、醫士や看護人に任せて置く樣ではならぬぞといふのである。

御弟子の子游が孝を問ひしに答へては『今の孝は是れ能く養ふを謂ふ、犬馬に至るまで皆な能く養ふことあり、敬せずんば何を以てか別たん』と言はれた。父母の生活を安心にして上るといふだけでは畜類の中にも能く養ふものがある。故に養ふといふだけでは孝とは言はれぬ。眞の孝行は眞心より父母を崇敬する所にあるぞといふ御示しであつた。かやうに其の人の性情に依りて教ふる所が異なつて居るのを見れば孔夫子の理想とする孝道は最も圓滿なるものであつたらうと思ふ。併し、最も圓滿なる孝道とはどんなものかといふに、我が國に於ては先帝の賜はりたる教育の御勅語といふ一大寶典がある。此の御勅語の御趣意こそ實に完全無缺の標準を御示し下されたるものであつて、吾々日本國民としては暫時も忘るべからざ

用ゆと雖も猶ほ不孝と爲す』とある。然れば尊敬・偕樂・看護・哀悼・祭祀・恭謙・愼重・平和等の諸德は盡く孝道の要素である。

又、孟子は世俗の所謂不孝なる者五、其の四支を惰りて父母の養を顧みざる者は一の不幸である。博奕したり飲酒を好んだりする者は二の不孝である。貨財を好みて妻子にのみ私しする者は三の不孝である。耳目の欲を縱にして父母の戮を爲す者は四の不幸である。匹夫の勇を好みて鬪狠するは五の不幸であると申されました。併し、此等は多く消極的孝道の要素であるが、進んで積極的にいへば、人生の目的を自覺し、國民の本務を盡し、祖先の名を顯はし、國家の譽れを揚る樣にせねばならぬ。

然れば人として務むべき所有道德は盡く孝道を大成する所以の要素と申すべきである。更に一歩を進むれば佛果菩提の正行を勤修し、自覺々他の境界を莊嚴するが如きは、孝の最大なるものです。忠孝即佛道の道理は是に至りて益々甚深なるものと申さねばなりません。

敎育勅語の奉讀

或人は孝道は時代に依て變遷するものであるから、孔孟の敎ふる所や、佛敎に於て說く所や、我國の古風なる孝道の形式に囚はれてはならぬというて居る。併し、忠にせよ孝にせよ、之を實踐躬行するに當りては、其の對境と場合とに順應せねばならぬものです。敢て必ずしも時代の新古に依るべきでは無い。今

意味になるのである。我國は前にも申した通り忠孝一體であるから、大君は國民全體の大御親、父母は家庭に於ける小君主であるに依て、大君に盡し奉るのは國民的孝道、父母に盡すのは家庭的忠道である。此の意味よりすれば忠孝即佛道ともいふべきである。

凡そ道德なるものは其の境遇に依りて之を行ふ所以の方式は千態萬狀であるが、其の本は一であるべきものである。卽ち萬德一源です。されば眞に能く孝道を行ふ者は自づから一切の美德をも完成するに至るものです。支那の道德は其の國體も我國とは相違して居るから忠孝一體の觀念には乏しいが、それでも萬德一源の原理より見て、曾子は『孝慈は百行の先、孝に過ぎたるは莫し、孝天に至るときは風雨時に順がひ孝地に至るときは萬物化成し孝人に至るときは衆福來り臻る』というて居る。又、忠經には『其の孝を行ふ者は先づ忠を以てす、其の忠を竭せば則ち福祿至る』とある。殊に孔夫子は孝を以て至德の要道であるぞといはれました。

總て物事は一として單純なるものはありませぬ。孝道の如きも徹底的に之を行はんには、自づから衆德を兼ね備へねばならぬ。孝經にも『孝子の親に事ふる、居には則ち其の敬を致し、養ふには則ち其の樂みを致し、病には則ち其の憂を致し、祭りには則ち其の嚴を致す。五の者備はりて而して後能く親に事ふ、親に事ふる者は上に居て驕らず、下と爲て亂れず、醜(衆人)に在りて爭はず、上に居て驕れば則ち亡ぶ、下と爲て亂れば則ち刑せられ、醜に在りて爭へば則ち兵せらる、此の三の者除かざれば日に三牲の養ひを

一の善根ぞと仰せられた。そこで目連尊者は早速、その日、佛の敎の如く百味五果を盆に盛りて一心に大供養をせられた。大供養をなされると、さしもに業障深重なる母親も餓鬼道の苦しみを解脫せられたと申してあります。是れが盂蘭盆の起源です。

されば盂蘭盆會と申すは、父母をして業障の苦患を脫し菩提の妙樂を得せしむるの意味であつて父母への孝道、而も、最も徹底せる大孝道であるからして、人皇第三十七代齊明天皇の御時より、我が皇室に於かせられても、特に盂蘭盆會を設けて行なはせられ、且つ國民一般にも之を行はしめらるゝこととなつたのである。要するに我國に於て行はるゝ盂蘭盆會は全く佛式に依りたる御先祖祭りであります。

我が國は忠孝不二の大道を以て道德の大本となして居るから、敬神崇祖は此の大道を實踐する根本儀禮である。皇祖皇宗は皇室の御祖先にてあらせられ、其の他の神々は皆な吾々臣民の祖先である。故に神祇を尊敬するは取りも直さず皇室の御祖先及び吾々の祖先を崇敬するのであるから、敬神と崇祖とは同一の意義になるので、つまり孝順の道に外ならぬのであります。

釋尊成道後、最初の御說法であると稱せらるゝ梵網戒經には『爾の時に釋迦牟尼佛菩提樹下に坐して無上正覺を成じ已つて、初めに波羅提木叉（波羅提木叉とは別解脫と譯し戒法の事である）を結し、父母師僧三寶に孝順せしむ、孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲し又は制止と名く』とある。孝順とは孝行のこと、至道とは最尊最上の道で、換言すれば佛道のことです。故に此の御語は、孝行即佛道といふ

る、由もあらずして、忽ち餓鬼道の世界に墮落したのです。尊者は神通の力を以て之を知りしかば、其の悲しみは喩ふるに物なく、祇管母が飢渇の苦しみを救はんとて、多くの飲食物を整へて餓鬼道に赴き之を捧げんとせられしが、惡業の致すところ山海の珍味も忽ちに一團の焰と變じ、益々其の苦しみを增す許りであつた。

そこで目連尊者は釋尊の膝下に拜を設けて、具さにこれを述べ切に御救ひを願はれた。其の時、釋尊の仰せに、汝が母は慳貪の業に依りて飢渇の苦しみを招きたるものにして、所謂自業自得なれば、佛の慈悲力と雖も之を如何ともする事が出來ぬ。只だ最第一の善根を行ひなば、罪障を消滅することを得べし。幸ひに七月十四日十五日十六日の三日は、雨期九十日の間佛の弟子が淨行禁足して、夏安居を修し、身を淨め、心を正しうし、法を守り、道を行ひたる最終の日、自恣の日である。自恣とは自ら恣まゝにすといふ字の示す通り、無禮講をやるといふやうな意味の日である。(無禮講というても亂暴や惡戲を爲る事ではない。お互に恣まゝに人の非をも擧げ、又、自分の罪をも懺悔し、言はゞ双方の心の中に藏せる罪も無く、又、不快の念や危惧の思ひを留めて置かぬやうに、殘らず懺悔したり懺悔させたりするのである。最も宗敎的な、又、道德的な神聖の日である。故に之を佛歡喜の日とも稱して、佛樣が最も御滿足遊ばさるゝ日です。されば此の日に於ける佛弟子こそは身心淸潔にして一點の汚れも無い。眞に玉の如く花の如しともいふべきである)。此の日、この玉の如く花の如き佛菩薩や佛弟子を供養するは、功德中の功德で、卽ち最第

盂蘭盆會禪話

孝順は至道の法

光陰矢の如く、何時の間にやら春去り夏來りて、もうお盆になりました。顧れば、人生無常、朝にして夕を測るべからず、而して道業成り難く修養熟し難し、前を省りみ今を思へば轉た慚愧の情に堪へぬ。

お盆といふは毎度御話しに及ぶ通り、詳しく申せば盂蘭盆であります。盂蘭は梵語で此には救倒懸と譯し、倒に吊り上げられてゐる樣な苦惱を救ふの義である。盆は器の事です。百味五果と稱する種々の供物を盆器に盛り上げて、之を佛樣や佛の御弟子に供養し奉り、其の功德を以て衆生倒懸の苦しみを救ふといふ意味であります。

其の起原は釋尊御在世の砌、十大弟子の中に神通第一の目連尊者といふがあつて、天性孝心深く、親に事ふるの道に於ては、實に百世の模範とも謂ふべき程であつた。然るに其の母親は世にも稀なる慳貪無慈悲の人であつて、孝子目連の諫言すら糠に釘打つ如くにて更に其の甲斐なかりしが、惡因惡果の天則は遁

なつて、追々と世間に同情者も殖え、同志の士女も現はれ、兩人とも健かに活動して居られる。
毎月十八日を期して、各宗より布敎師を聘して佛敎講話を開設して居る。衲も、去る一月十六日に初めて同校に至り、一場の訓話を致した。生徒一同は、觀世音菩薩の和讃唱歌を唱ひて菩薩を禮拜し、それより法話に及ぶのであるが、生徒の態度といひ、風貌といひ、如何にも信仰の喜びに充ちて居る樣で、誠に末頼もしく感じたことであつた。

其の心にして善淨ならば、一切の施設も、自づと菩薩の大我に融合するから、常に百難を凌いで動かざること山の如く、必ずや彼岸に到達して絕大の至樂を感ずるものである。何事をなすにも、如何なる人でも、是非とも常・樂・我・淨の意義を明らかにして、能く之を守り、之を修め、之を發達せしめて、大彼岸の地に安住することが肝要である。此の意味に於て、春秋二期の彼岸中の如きも、完全なる宗敎日たる眞價を發揮するやうに致したいものである。

人々盡く一段の光明の在るあり

禪門の祖師は『人々盡く一段の光明の在るあり』と仰せられた。吾々は佛祖に變らず聖賢に異ならざる光明體を具へて居る。前の四德の如きは、最高の道德と申しながら、志だに堅く、行なひだに怠らざれば、必ず此の四德を兼ね現はすことが出來る。是れぞ眞に大彼岸行である。太祖大師は『汝等諸人、見聞を具足すること既に古人に異ならず、設ひ何れの處に到るも悉く言ふべし、汝等箇の人なりと』と御激勵下されてある。唯だ相續也大難といふから、如何なる困難に出逢ふとも萬里一條鐵に志を守ることが肝要である。半途にして怠屈したり疑惑をしてはならぬ。

東京小石川の私立東京家政女學校は河村つね子女史の創立で、其の長女たる淺村金子女史が校長となり、佛敎主義に依り信仰を中心として熱心に敎育を施して居る。河村女史は加州金澤の人で、淺村女史は早く夫に別れ、遺れ形見たる四人の子を連て生母の許に返り、兩人共に不幸なる境遇であつたが、明治二十四五年頃、此の學校を創立し、專ら佛敎主義、信仰中心にて生徒の德性涵養に努められた。其の頃は、敎育と宗敎とは殆ど沒交涉であつたのみならず、學校に於て佛敎の御話しでもすると、時代錯誤の樣に嫌はれた時代であつた。併し、信念鐵石の如き兩女史は、他の毀譽褒貶に動かされず、觀世音菩薩を本尊とし、大慈悲心を理想として、熱心に經營せられたので、次第に校運も隆盛に向ひ、今や堂々たる學校と

善は人類固有の至寶である。孟子も『性は善なり』と言うて居る。一切衆生悉有佛性とは佛敎の根本義である。此の善心が發露して道德となる。忠も、孝も、仁も、義も、和敬も、禮讓も、皆な一善心の分化せる光輝である。忠道正しければ國家の基堅く、孝道全ければ一家の礎強し、仁義存すれば國民其の宜しきを得、和敬備はれば國際其の誼を保つものである。人の人たる價値は善に依て現はれる。善心道德は國家民心の生命である。産業の發達も、綱紀の肅正も、敎育の進歩も、生活の安全も、勞資の協調も、國際の平和も、盡く善心道德が根本を爲して居る。精神が本であるから、眞に精神文明が發達すれば、自づと物質的文明をも完全ならしむるものである。

昭憲皇太后は、清潔といへることを御詠になつて『白妙の衣の塵は拂へどもうきは心のくもりなりけり』と御示し下された。心の穢れこそ最も恐るべきものである。孔子は『古の學者は己れの爲めにし、今の學者は人の爲めにす』と言はれたが、今日の政治家も事業家も、己れの爲めの修養といふことを閑却する人が多いかと思はれる。己れの爲めとは自覺のことである。本當に自覺して、完全なる自己の德性を訓練する考でなければ修養の實は擧り難い。敎育家でも、宗敎家でも、人にのみ修養を要求するのでは感化力は現はれぬ。先づ自ら己れの爲めに修養せねばならぬ。そうして、至善の家庭、至善の社會、至善の國土を實現してこそ、始て人生を淨化し美化することが出來る。是れ即ち淨德の顯現にして、人生淨化の基となることを知らねばならぬ。

故に、淨土といふは至善の世界である。之に反して、人類の世界を穢土と稱す。穢土とは煩惱・罪惡・業苦の世界をいふ　現に我々の生存して居る世界は、淨土であらうか、穢土であらうか、縱ひ物質的に非常なる發達を遂げたとはいふもの丶、一たび國民生活の狀態、社會一切の設備に就て眺むれば、多くの缺陷と弱點とのあることは勿論である。況てや、精神的方面から觀察すれば、虛僞の世界、煩悶の世界、罪累業苦の世界であることは言ふまでも無い。此の穢土を轉じて淨土に往生するのは、正しく佛教信者の目的である。

されど、此の淨土に往生することを必ずしも死後の問題とのみ見てはならぬ。尤も、佛教に於ては三千世界を說き、宇宙の無限大なることを說き、又、心靈の不滅を信ずる。故に、吾人の心靈は未來際に亘りて無限に活動し、無邊際なる三千大千世界を以て活動の領域として居るから、此土もあれば他土もあり、現世もあれば未來もある。だが、三世も十方も當處の一念心を離れて外には無い。故に佛教的修養の核心は吾人の一念に在る。此の一念心に淨土を建立し清淨身を莊嚴せねばならぬ。

六祖大師は、韶州の刺史韋據に示して、『使君、心地但だ不善なければ西方此を去ること遙かなるにあらず、若し不善の心を懷かば念佛往生到り難し』と仰せられた。故に、吾々は常に妄想邪念を誡めて、身にも、口にも、意にも善業を行ふことに努めねばならぬ。一人の善は一家の幸福を致し、一家の善は社會の幸福を招く、之に反して、一人の惡は一家の不幸を致し、一家の惡は社會の不幸を招くことになる。

ば爲さず、一言一行の中にも自づから法を存し、一擧一動の上にも自づから道を現はすのが、佛祖の身心である。吾々が佛に御歸依をするのも、自己の慾望・理性・生命・財產等一切を打忘れて、此の全身心を佛の大智慧・大慈悲・大願力の中に投入するのである。即ち無我境に住するのである。

斯くする時は、自づと面たり佛を見奉つることも出來、生死の問題に對しても、三世因果の原則に於ても、一點の疑惑も無く、廓然として識得することが出來る。是れ佛の大智慧光明が此の身心に輝きを漏らしたものである。又、自づから憎惡の念嫉妬の情も消滅し、公平に且つ普遍に溫かい愛情が現はれて、それが道德の源泉となるものであるが、是れ佛の大慈悲光明が此の身心に輝きを發したもので、此の智慧と慈悲とが不斷に相續して治生產業の上にも現はれ、應對進退の上にも現はれ、やがて眞純なる宗教的・信仰的の生活となり、神聖なる自我を實現することも出來るのである。是れが我德の顯現で、無我の大我と稱するのである。

人生の淨化

佛教では、佛の御國を淨土と稱し、佛の御身を清淨身と稱して居る。淨とは如何なる狀態のものであらう。之れを物質的に見れば、七寶莊嚴とも、蓮華臺上とも、色々なる形容を示すことゝもならうが、精神的に解釋すれば、淨とは善の變名である。

知識慾も所有慾も生じ、權利・義務の觀念も責任の觀念も生ずるのである。併し、凡夫の凡夫たる弱點も、小人の小人たる短處も、亦此の我が本となつて現はれる。親子の爭ひも、夫婦の喧嘩も、其の他、社會萬般の紛爭も罪惡も悉く我といふものゝ所爲である。さて〳〵我といふものは實以て容易ならざる難物ではないか。

眞理とか宗教とかいふ淨玻璃の鏡に照して見ると、我の活動の多くは醜惡の雲に包まれて居ることを感ずる。『人心鏡にうつる物ならばさこそ姿のみにくかるらん』といふ古歌も決して誤つて居るとは言はれない。此の醜い姿のある我見我執を矯正するには、一度は是非、無我の境に入らねばならぬ。無我といふは枯木死灰の如き無神經になることでは無い。吾々の、小さな曲つて居る穢れのある我見我執を、最も眞實にして善美なる光明體の中に投げ込んで融解して了ふことである。卽ち、氷の樣に斷片的に固まつて居る我見を鎔解して一大淸淨水となし大動力を發作することで、是れを無我の大我と稱するのである。

小我の所有主たる吾々が、家庭に在りては一家の法則を遵守し、國民として國憲・國法に隨順し、社會に對しては信義・禮節の德を守り、國際上には正義・博愛の道を履む、是れが小我の鎔解法である。佛の御身を法身といひ、聖賢の心を道心といふ。法身とは法を以て身となすので、此の身の全體が法になり切つたのが法身であり、此の心が道と一致したのが道心である。故に、法に非されば行なはず、道に非され

踏まば、運命は自然と開發し、幸福も亦自づと生み出さるゝものである。殊に、修養上からいへば、艱難は汝を玉にす、憂き苦勞があつてこそ、功をも積み德をも重ね、本當の自己鍛錬が出來るのである。また宗教的信念から見れば、一切の苦惱は皆な宿世よりの因緣約束である。此の苦惱に耐へ、益々善行を勵みてこそ、宿業の煩ひも次第に消滅し、一歩々々、光明の世界に足を進むる事が出來るのである。況てや、佛の御慈悲は潤はさゞる處なく、御法の光りは照さゞる隈とてもあらじ、吾々は常に佛の溫かき懷の中に抱かれて居るのである。此の事を能く信ずることを得ば、その樂みは實に極まりなきものである。

此の信仰眼を以て天地萬物を眺めたならば、一枝の花にも御法の香り豐かに一滴の水にも佛の御惠み最と滋し。高祖大師は『峰の色溪の響きもみなゝがら釋迦牟尼佛の聲と姿と』と詠ぜられた。斯かる樂みを自得する人は、書を讀むにも樂しみ、業を作すにも樂み、寢るにも起るにも樂むことが出來る。此の樂みが益々向上して、自利々他の大願行を營み、その活動の上に無限の樂みを獲得する、是れ即ち樂德の顯現で、之れを心地の妙樂といふのである。

無我の大我

人には必ず我執といふものがある。即ち『おれが』といふもの、此のおれがが土臺となつて、生命慾も

是れを至樂の資料となすことも出來る。

德川時代の大儒と謂はれた山崎闇齋が、或時、會津侯が『先生の樂しみとする所は何ぞ』と問はれしに答へて『私には三つの樂しみがある、其の一は、天地の間に生を受けて棲息する者多き中に、萬物の靈長と稱せられて物の道理を知り得る人に生れたることである、其の二は、時に治亂あり、世に盛衰あり、然るに、今、昇平の世に生れ、書を讀み道を學ぶ此の樂しみ實に大なり』というた。侯は更に次の樂しみを懇ろに聞かれしに、彼は、『次の樂みこそ最も大なるもので、或は侯の御機嫌を損ぜんかを恐るゝも、切なる御尋ねに依り申し上ぐべし、そは、吾が身幸にして卑賤に生れ、侯伯の家に生れざりしこと、眞に樂みの中の樂みであります。その譯は、今の諸侯は皆深宮の中に育てられて世の艱苦を知らず、婦女子の侍する所となりて其の柔弱なる性質に倣ひ、武なく、文なく、徒らに酒食を歡びて一生を游惰放逸に消費す、是れ人の人たる價値なきに非ずや、吾は、幸に貧賤の家に生れし爲め、衣食の儉を守り、人事の辛酸を觧し、道を聞き藝を習ひ、德熟し智成りて一家を治め、聊か世を益する事を得たり、是れ私が貧賤を樂む所以であります』と答へたそうである。吾々も亦闇齋の如く、此の人生の苦艱を以て却て樂みとなすの觀念が無ければならぬ。

人には各々定まれる果報がある、受くべき職分がある。その果報を明らめ職分に安んじ、妄りに不平を訴へず不滿に惱まず、日々の生命を喜び日々の業務を樂み、眞心を以て事を處し熱誠を以て業を

を存し道を守りて動かず、是れを常德といふ。此の德を養うて息まざる時は、自づから主人公の眞面目にも通曉し、順逆常なき浮世の波風にも亂されず、常に一定の道に止まりて心地湛然たることができよう。此の不動の境は、やがて生死の牢關を透破し、不生不滅の大安心に住することとなるものである。

心地の妙樂

苦を避け樂を求むるは人情の常であるが、元來、人生なるものは、一面から見ると全く苦痛の世界である。老・病・死・苦は此の身を襲ひ、種々の境遇は此の心を刺擊して息む時なし。故に、佛教にては四苦八苦の娑婆ともいうてある。釋尊の發心も、出家も、此の苦世界の相を觀ぜられた處が出發點となつて居る。併し、人生果して苦なりとせば、誰れしも此の世を執着する者はあるまいが、いくら苦しんでも、悲しんでも、此の世に活きんことを望むのは、此の世には、自然に、離れ難い樂しみがあるからである。要するに人生は苦樂相半ばするものと見ねばならぬ。

さりながら、吾々の精神には靈妙なる德用があつて、此の德用を發揮する時は、苦しみを化して樂みとなし、禍を轉じて福となし、逆境を變じて順境となすことが出來る。とかく人は物の爲めに束縛せらるゝから、自ら自由の天地を狹める樣になるのである。古人は『聖人は心を以て耳目を導く、小人は耳目を以て心を導く』というたが、心を以て耳目を導く計りでなく、天地萬物を心鏡に寫し來つて、盡く

となるも鬼となるも、善人となるも惡人となるも、心一つの作用である。國家の盛衰消長も、國民の精神が其の根柢をなして居る。然るに、此の心なるものが、動もすれば止まる所に止まらず、妄りに煩惱の境に走り、邪見の道に馳せ易いもので、暫くも油斷は出來ぬ。少しでも油斷をすると、謂はれなき慾望を起したり、謂はれなき忿怒を發したり、謂はれなき愚痴に沈んだり、それが度重なると、所謂習ひ性と爲りて、容易に拔き難き習慣を作ることになる。そこで、吾々は、時々刻々に自ら自己を覺醒することを忘れてはならぬ。苟も修養に志ざす者は、自己を覺醒し、鞭撻し、訓練し、善導することを忘れてはならぬ。明治天皇も『我れと我が心折々かへりみよ知らず〳〵も迷ふことあり』と御製あらせたまうた。瑞巖和尚が、毎日、大聲に主人公を喚出して、氣をつけよ、油斷をするなと警戒せられたのは、全く道念の叫びである。

　更に一歩を進めて、心とは何物か、心の本體果して如何といふ問題になると、これらは禪門に於ける唯一の公案で、是れを工夫研究して卽心是佛の妙趣に達するのが參禪の目的である。よしや、そこ迄の修行が出來ぬにしても、先づ自らその心を覺醒して、妄想邪見に陷ることを防ぎ、いつもかも泰然として不動の三昧に住せしむるのが常德顯現の第一步である。不動の三昧とは道に止まることである。西鄕南洲が『人を相手にせず、天を相手にせよ、天を相手にして己れを盡くし、人を咎めず我が誠の足らざるを尋ぬべし』といふたが、此の天はつまり道のことである。誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり、誠

大行が彼岸行の標準として示されて居るが、今は四德顯現の方面から修養的に演べて見やうと思ふ。

不動の精神

第一に常德、常習は不動不易の謂であるから、御互の精神を落着て、動亂せざる樣にするが宜しい。吾吾の精神は、とかく見る物聞く物に動かされて、夫れから夫れへと迷ひ出す習性を有て居る。明治天皇は人心の御し難きことを御諭したまはれて『ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ敎へがたきは人の道なり』また『ともすれば浮き立ち易き世の人の心の塵をいかで拂はん』と、御製あらせられた。故に、吾々は先づ以て修養の土臺を自己の心頭に置かねばならぬ。

支那禪門の高僧、瑞巖彥和尙は、每日、方丈に在りて、獨り自ら高聲に『主人公々々々』と喚ばれ、又、自ら『諾』(はい)と返辭し、再び『惺々着、他時異日、人の瞞を受くる莫れ』、惺々著とは氣をつけよといふことで、油斷をするなよ脚下に注意せよ、まご〱すると後々迄も人に瞞預せられ馬鹿にされるぞといふた。さうして、復、自ら『諾々』(はい〱)と返辭して居られたさうな。是れが、禪門に於ける主人公の公案といふ有名なもので、彼の最初に江戸城を築いた太田道灌入道は、芝青松寺雲岡禪師に參禪せし時、此の主人公の公案を授かり、二ケ年間の工夫を積みて遂に悟道の域に達したとある。

だが、主人公とは、つまり吾々の心である。心は巧みなる畫工の如く、能く種々の身境を描き出す。佛

彼岸といふは佛教の波羅蜜多といふ言葉より出でたものである。波羅蜜多を約すれば彼岸到となる。吾吾御互の凡夫地を此岸とし、佛陀の聖位を彼岸となし、その中流には生死の大河が激しく流れて居る。凡夫地に在る者は、常に煩惱の爲めに本心を昧まされ、種々の罪惡を造作して居る。それが爲めに、生死の苦惱永く絶えず、三界の業果に縛せられて解脱自由の境地に達することが出來ぬ。佛陀の聖位は、常・樂・我・淨の四德を備へたまひ、その身も心も常住にして生死の爲めに移されず、其の境遇は安樂にして四苦八苦の惱みなく、無我の大我を實現して、法に於て能く自在を得、その身も國土も淸淨にして罪惡の穢れなし、是れが彼岸の狀態である。佛教八萬の法門も、その目的は煩惱惑障の此岸を離れ生死苦患の中流を渡りて、常樂我淨の彼岸に達するが爲めに外ならぬ。さすれば、佛教に於て說く所、教ふる所は悉く是れ彼岸の行である。故に、佛弟子たる者、佛教信者たる者は、一年三百六十五日が不斷の彼岸行であらねばならぬ譯であるが、在家にして家事や業務に忙はしき者は、知らず〳〵その行持を怠り勝ちになる爲めに、春秋二期に於て故らに彼岸會を設け、是れを特別宗教日と定めさせられたものであらうと思ふ。佛教より出でたる國民的年中行事は、盂蘭盆會とか灌佛會とかを始め、多くの風習も傳はつて居るが、取り分け彼岸會の如きは最も意義の深き宗教日であるから、その眞意義を發揮するやうに致したいものである。前にも申した通り、彼岸は佛陀の聖地であつて、その聖地とは常・樂・我・淨の四德を具備したもので無ければならぬ。尤も、六波羅蜜というて、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六

彼岸會禪話

彼岸の意義

春秋二期、晝夜等分といへる好時節に於て、春分・秋分を中心に前後を通じて七日間をひ、が、ん、と稱して居る。是れは此の七日間を彼岸會と名け、我が國民の年中行事中、最も意義深い大切なる御勤としたもので此の時に、家族一同が御寺參りをして見佛聞法の緣を結び、神社に詣でゝ崇敬の誠を捧げ、御佛間を莊嚴して祖先に孝事し、親族相會して親睦の情を溫ため、貧民孤獨を賑はして慈善の德を積むが如き宗敎的行持を勵むことゝ致したものである。

その起原には色々の說もあるが、多分、聖武天皇の御代に始まりしことゝ思ふ。宮中に於かせられても、御鄭重なる御儀式を以て彼岸會を御執行遊ばされたものである。民間に於ける風習は其の地方に依りて夫々趣を異にして居るが、要するに、宗敎日として專ら信仰的・道德的・慈善的の實行に努めたものである。

思ひます。

今や釋尊の御降誕と云ふ目出度聖辰を迎へ奉るに就ても、唯だ花御堂や甘茶の御供養のみで滿足しては居られませぬ。我等の本性たる本來成佛といへる生佛の出現を圖らねば報恩の第一義とは申されぬ。其の活佛を出現せしむるには、平生の妄念妄想を截斷て天地の大道に合體し、承陽大師の御歌にも『峰の色溪の響もみなながら釋迦牟尼佛の聲と姿と』とあるが如き、宇宙遍滿の釋尊に相見することが肝要です。

それにはどうすれば宜いかと云ふに、先づ以て世の無常なることを觀じて浮世の仇波に漂されぬ様に致し、因果の理を信じて一點でも惡念惡業を起さぬ様に致し、至心に佛の御教を信じて從來の業障を懺悔し、誠を傾けて佛法僧の三寶に歸依し奉り、且つ佛祖正傳の御戒法を以て生々世々の生命とも珍寶とも思ひ、大慈大悲の念に住して分に應じて利他の行願を勵み、日々の行持を正しく守り、進んでは御國と父母と社會との恩惠に酬い奉り、退ては甚深廣大なる佛の御恩に酬い奉らんことを期し、寢ても寤ても怠り無く、立ても居ても忘るゝこと無くんば、煩惱の雲晴れて痕なく、菩提の光りは旭日の如くに輝き渉り、三寶の御惠みは九龍の甘露を噴くが如くに我身を潤ほし、御法の花は蓮華の葩よりも麗はしく我身を捧げ、此の身此の儘が唯我獨尊の小誕生佛となることが出來様と思ひます。眞の誕生如來の御供養は是の如き心懸を以てせねばなるまいかと思ひます。

ひ奉りしは、實に好箇の本堂ではありませんか。斯かる大殿堂を有しながら、果して胸中の佛樣が立派になつて居るであらうか、能々回光返照して見たならば御耻かしい事だらけであるまいかと思はれます。

又、或日のこと神贊が師匠と與に窓の下にて看經をして居られると、一疋の蜂子が飛で來て、窓にぶつかり、其處より表へ出でんとして、ブン〳〵と頻りに飛廻り跳廻りして居るのを見て、思はず『世界は許の如くに廣濶たるに肯て出でずして他の故紙を鑽るも驢年にし去るを得んや』と云はれ、直に『空門肯て出でず牕に投ず也太だ痴なり百年故紙を鑽る何れの日か出頭の時』と云ふ偈を作られた。是れは夏の事とて殿堂は四面共に明開け、何れからなりとも出入の路は自由自在にして、十方通暢、八面玲瓏である。然るに痴なる蜂だ、唯々自分の認めた處だけを出口と思ひ、窓の中の一小天地に執着するが爲め、愈々勞して愈々出づること能はず、迷に惱める凡夫も亦た是の如く、本來成佛の身を以て徒らに妄見に礙られて、三惡道四惡趣に彷徨ひ、生死去來の其の儘が唯我獨尊の佛なることを知らぬと云ふは、扨も〳〵不便なる者どもよとの意味です。

そこで師匠は大に驚き、『御身は何れの處に於て斯まで貴き安心を得たるぞ』と問はれければ、今は包むも詮なしと思ひ、百丈禪師の印可を受けたることを物語り、それより師匠の需めに應じて、詳かに百丈の佛法を說示されたので、其の師匠も大に悟る所あり、遂には兩人相携へて百丈禪師の處に赴き、共に禪師の法嗣となられたと云ふ因緣があります。此等は如何にも我等に取りては好箇の教訓であらうと

び『汝は行脚して如何なる修行をか爲せしぞ』と尋ねられたが、謙遜なる和尙の事とて『未熟なる私、何を爲す事も無く徒らに光陰を送過し、實に恥かしき限りなり』と答へられた。が、つく〴〵と師匠さんの態度を觀るに、朝夕の立居振舞が所謂脚下未穩在で、どうも落着た樣子が見えぬ。卽ち一擧一動が徒らに六根六境に驅使はれて、唯だ唯だ妄想が動いて居る樣な鹽梅であるから、常に御氣の毒に感ぜられて堪らなんだと見える。

或日のこと、風呂を沸して師匠さんを入れ、久し振で背を流してあげたが、此の師匠却々體格が好かつたと見え、全身肥滿して相撲取の樣であつた。神贊は背を流しながら『御師匠さんは何時もながら立派な大伽藍でありますな』と申した處『さうよどこへ出してもヒケは取るまいな』と答へた。其の時、神贊は心の中で嗚呼、體格は立派ぢやが、悲しい哉、精神の之れに應うて居られぬは實に氣の毒の至りなりと思ひました處から、覺えず口が滑つて『好箇の佛殿、而も佛聖ならず』と云うた。本堂は御立派ぢやが、惜い哉、中の佛樣が御疎末ぢやと云ふ語です。すると師匠は何事かと疑ひ、思はず振返つて神贊の方を眺められた。神贊も、最早、騎虎の勢、舒たるは縮め難し、直樣二の矢を放つて、『佛聖ならずと雖ども且つ能く放光す』と云はれた。佛樣は御疎末ぢやが、まだ生きて御座るだけ頼もしいと云ふ程の意味です。是は決して師匠を馬鹿にして言うたのではない。何卒、師匠を眞の佛道に引入れたいと思ふ孝心が、事に觸れて發したのであります。今日の我等とても亦た同じ事で、受け難き人間の身を受け、遇ひ難き佛法に遇

證得せず』と仰せられた。つまり釋尊御一代の說法敎化も我等衆生をして此の智慧德相を現前せしめんが爲めの御辛勞である。

邪見の雲さへ晴れぬれば心の月は自から圓かにして、十方世界、往くとして光り耀かざる處は無い。念佛を申すは何の爲め、眞言を誦するは何の爲め、題目を唱ふるは何の爲め、皆な此の道を現はさんが爲めである。こゝを行誡上人は『神佛名はことなれど玉ぼこの道の外には道とてもなし』と示されてあります。而して、此の道は佛に在ても增さず我等に在ても減らず、佛に一丈の道あれば吾等にも一丈の道あり、佛に一尺の道あれば我等にも一尺の道あり、一念迷へば直ちに是れ凡夫、一念悟れば忽にして是れ佛であるが、道の上には佛と凡夫との隔ては無い。所謂唯我獨尊です。此の道を深く信ずるのが成道の基礎である。夫故、承陽大師は『佛道を信ずる者は先づ須らく自己を信ずべし』と仰せられ、太祖大師は『百千の法門無量の妙義總に心源に在り』と仰せられてあります。

釋尊相見の時節

昔、支那に古靈の神贊和尙と云ふ御方があつた。福州の生れで、土地の大中寺で出家せられ、至つて師匠孝行な人でありましたが、十八九歲の頃、行脚に出で百丈禪師の門に投じ、修行すること三四年にして遂に悟をお開きなされたとある。それから元の大中寺に歸りましたが、師匠は待切て居られたから大に喜

に生れ來たりしは、全く夙の世に於ける願力の致す所であるからして『見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや』で面り釋迦牟尼佛を見み奉り、且つ其の敎を聞き奉りて稀有の因緣を自ら喜び自から樂しまねばなりませぬ。

併し、釋尊が御誕生の砌『天上天下唯我獨尊』と仰せられたのは、獨り大慈悲心の上より御宣言あらせられたのみでは無く、此の御一言の中には深甚なる眞理と吾人が道を修め德を養ふ上に就ての大目的を標示せられてある。何となれば、唯我獨尊と云ふは決して釋尊の上のみに限つたことではなく、我等も亦た唯我獨尊の境界なのであるからであります。

全體、天地萬象は其の源を尋ぬれば東西古今に通じて寸毫の變易なき大道に歸するのである。原因結果の理法も物質不滅、勢力恒存の原則も皆此の大道の變名です。我等は此の大道に孕まれ、此の大道に養なはれて居るのです。地の堅き水の濕ふ、火の熱き風の動く、盡く是れ大道の妙用です。佛は此の大道を悟りて四十九年の大法輪を轉ぜられ、菩薩は此の大道を學んで三祇百大劫の修行を積ませられ、孔子は此の大道に則とりて『吾道一以て之を貫く』と云はれてある。

此の道を我等人間の上に現はせば智慧と道德との二となる。此の二は我等が本來具有する所であるが、唯だ煩惱妄想の爲めに其の妙用を起さずに居る。こゝを或人の歌に『歸命頂禮釋迦如來、拜むとすれば雲かゝる、いかなる邪見な雲じやゝら、雲は邪見じやなけれども、我身が邪見で拜まれぬ』と云うてあります。故に釋尊は成道の時に於て『一切の衆生は皆な如來の智慧德相を具す但だ妄想執着の爲めの故に而も

智慧・道徳、兩ながら圓滿なるを最尊最勝と稱するのであります。釋尊は此の意味に於て、唯我獨尊と仰せられたのである。今日の語を以て言ふならば『我は天地間に於ける大導師なるぞ、一切衆生を濟度して智徳圓滿の者たらしめんが爲めに誕生せしものなるぞ』との御宣言であります。是れ決して高慢せられたものではない。法華經に「今此の三界は皆な是れ我が有なり其の中の衆生は皆な是れ吾が子なり」とあるが如く、釋尊は唯々此の世界を以て御教化の領域と見そなはし、衆生を以て我子と爲し、一人でも迷ひに惱む者、又は知徳を明らかにせざる者あらば、衆生無邊誓願度を以て之を濟度し盡さずんば止まぬと云ふのが御出世の御本懷である。これが大聖人の寬弘なる御慈悲であります。

抑も親の子を愛するは天然の至情にして、世に是程神聖なるものは無い。紀貫之が『世の中に思ひあれども子を戀る思ひにまさる思ひなきかな』と詠ぜし如く、藤原兼輔が『人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな』と讀みし如く、親心程親切なるものは無い。佛の衆生に對せらるゝや、其の慈念の深き、愛情の切なる、恰も親の子に對するが如くであるから一切衆生は皆な是れ吾が子ぞとも仰せられたものです。其の慈愛の結果が、釋尊の五百大願、娑婆往來八千返ともなり、阿彌陀如來の四十八願、觀音・普賢菩薩等の十大願ともなつたのであります。

我等御互は幸にして萬物の靈長たる人間の身に生れ、殊に我等の生々世々までも御救ひ下さるゝ釋尊の御法に遇ひ奉るといふは、喜びの上の喜び、幸福の上の幸福ではありませんか。我等が此の娑婆世界

に光明を放つに依りて晝夜の別も無い。其の上、五通と云うて天眼、天耳等の通力を具へて五官の作用が自在であると言うてある。斯く結構なる果報なれども、其の結構なるのが却て發心の妨げとなる。人間でも餘り果報の好過る者は却て眞の道心が起り惡い樣なものです。

娑婆論には三事勝とて天上界に勝れる力が三つあると說てある。一に勇猛、即ち所有困難に屈せず益々進んで息まざるの勇氣、二に憶念、即ち善法を記憶して知識を啓發する力、三に梵行、即ち心を正うし身を修め道を行ふの力です。

我々は幸にして宿世の善因緣あればこそ、斯くまで發心修行に好便宜なる人間の身を受けたのである。此の身今生に向て度せずんば更に何れの生に向つて此の身を度せん、返す〴〵も此の一生に於て佛果菩提の勝緣を結ばんことを忘れてはなりませぬ。況や大聖釋尊の如き御方が此の世に御出現遊ばされたは、普通の我等とは事變り、當節の言辭を假て申さば、最高の使命を帶びて御誕生あらせられたものであります。故に母君の胎內を出でさせらるゝや、錦を飾る無憂樹の下、珠を疊める蓮華の上に天地を指して『天上天下唯我獨尊』天にも地にも唯だ我のみ獨り尊しと獅子吼あらせられたるは、有り難しとも貴しとも讃歎し奉るべき語すらも無い程である。大善權經には『我れ一切天人の中に於て最尊最勝たり無量の生死今に於て盡きたり』と御唱へ遊ばされたとあるが、其の意味は同一です。

佛敎に於て尊貴と稱するは、本より人爵の上に名けたものではない。煩惱の根を斷じ生死の苦を離れ、

らう。されど世界無比の大聖人の降誕せらるゝに當り、常人の窺ひ知る能はざる瑞相のあることは決して偶然とは申されませぬ。況や信仰の眼に映じたる釋尊の靈妙なることは經論の記事以上であらうと思はれる。併し、其の邊の事は、こゝで略して今はたゞ諸君と共に誕生如來に對する眞の法供養を修し奉りたいと思ふのであります。

唯我獨尊の眞意義

凡そ三世の諸佛、十方の菩薩は、多くは此の娑婆世界に出現して佛道を成したまふ。釋尊も亦た今日を以て此の世界に御誕生遊ばされ、一切衆生を濟度せんが爲めに、十九歳にして出家し、三十歳にして成道し、而して四十九年間の御說法があつたのである。

顧ふに此の世界には諸の苦惱が充滿て居る。是を四苦八苦等と云ふのであるが、如何なる果報めでたき人にても此の苦みを免るゝことは無い。併し、此の苦みが却て佛道信仰の心を發する因緣となる。若し世に苦みと云ふものが無いならば、徒らに五欲六塵の樂境に耽着して發心修行の緣を結ぶの機會に逢ふことが出來ませぬ。

三界六道の中に人間より果報に優れて居るのが天上界である。法苑珠林には天上界の相を說て、天上の衆生の身には骨も肉も無きゆゑ肉體の苦みが少ない。又、大小便の如き不淨物も無く、身體よりは自然

『才德純備の聖王』と稱してある。佛本行經等に依るに、釋尊は一生補處の菩薩として兜率天に在まし、御名を護明菩薩と稱せられたとある。菩薩は娑婆世界に御降誕の時節到來せるを知しめし、降誕すべき世界と種姓と場處とを觀察せられ、遂に宿緣に依りて摩耶夫人の胎内に御托り遊ばされたとあります。

御懷姙前後に於ける奇瑞の事共は略して置きますが、彌々御臨月と思はるゝ四月八日の曉、摩耶夫人は頻りに御園の景色を眺めたく思はされ、幾多の婇女・童女等を召連れられて藍毘尼と稱する御園に行啓あらせられ、群臣百官等も美々敷御伴を申し上げられた。丁度、太陽が東の山の端に昇らんとする時、御園の中に無憂樹と云へる大木があつて、今を盛りと咲き亂れたる華の色の美しさ、殊に香氣さへ一層優れてありければ、夫人は御機嫌麗しく徐に玉歩を移して彼樹の下に進みたまひ、玉を綴りたらん如き一枝の華を、右の手を擧げて將さに手折らんとしたまひし一刹那、忽然として御誕生遊ばされました。

因果經・大善權經等に依るに、御誕生の時、不思議や大さ車輪の如き七寶七莖の蓮花が樹の下に生じ、釋尊は自から其の蓮華の上に生れ落ちたまひ、自ら歩ませたまふこと七足、一指は天を指し、一指は地を指して妙なる御聲を擧げて『天上天下唯我獨尊』と仰せられたとある。其の時、九頭の龍王が虛空の中に現はれ、香水を吐て王子の御身を灌沐し奉り、諸天善神は姿を現して御身を擁護し奉りし等の瑞相ありしことは諸經論に委く記されてある。

此等の奇瑞の中には、釋尊出世の御本懷を贊歎するの餘り、詩的、若くは神秘的の記事も或はあるであ

佛誕生會禪話

釋尊の誕生

今日は古今東西に比類なき無等々の大聖人、大恩教主釋迦牟尼如來御降誕の令辰でありまするから、我等は滿腔の赤心と全身の歡喜とを以て此の令辰を迎へ奉り、併せて諸君と與に報恩奉重の微志を表し奉りたいと思ひます。

此の御降誕の年月等には數多の說がありまして、何れが是、何れが非、俄に判斷することも出來ませぬが、夫等の穿鑿は後日に讓ることゝして、迂衲は我國に於て古來より多くの人の採用したる年月、即ち今を距ること二千九百四十一年以前の四月八日の早晨を以て御誕生遊ばされたるものとして御話し致す積りであります。

申す迄も無く、釋尊は中天竺迦毘羅衞國淨飯大王の御子に御生れ遊ばされ、御母君は王妃摩耶夫人、是は當時有名なりし善覺長者の御娘にして十善具足の賢夫人であつた。淨飯大王は稀世の名君にして經にも

子の美談は佛門にも世間にも澤山ありまするが、長くなりますから總て省略致します。此の正鞘の如きは眞に親の心を心とし、心と身と行とを以て親を滿足せしめ親の譽をも擧げたのであります。前にも申せし通り釋迦牟尼如來は我等の大慈悲父である。其の御恩は天よりも高く地よりも厚い。我等は生々世々を盡しても此の大恩に報い奉らねばなりませぬ。而して眞實報恩の正道は十五大行の御遺言を守りて日々の行持を勵み、受戒入位の大功德大光明を實現するのが一大事であらうと思ひます。

佛法の功德となり菩提の行願となるものである。斯くてこそ釋尊の御遺言も全く行なはれ佛法の光輝も明らかに放たれるのであるから、釋尊の御滿足は言ふも更なり、三世十方の諸佛諸菩薩や高祖太祖の御喜びは如何計りでありませう。これぞ報恩中の報恩、御供養中の大供養と申すものであります。

農夫正輔の孝道

昔、筑前宗像郡武丸村の正輔は一農夫の身なれども孝道の行は拔群にして、一生親の心に違うたことが無かつたとある。父親が老年に至り病の爲めに身體自由ならざりしが、正輔は常に背に負うて其の心を樂ましめ、兩親の沒後には毎日其の墓に詣でゝ香花をたむけ、御位牌に供ふる三時の供養物は世にありし時と少しも變らなんだと申します。殊に天性正直にして、村内の商人などが其の孝行に感じて酒や魚を惠んでも決して貰ひ切にせしこと無く、馬を曳て他に參りし際の如きも、其の勞を憐れみて可愛がること我子の如く、未だ曾て自ら騎りたることが無い。其の他の善行擧て數へ難かりしが、其の德天地を感ぜしめしものか、享保年間九州の大飢饉の時、筑前は殊に甚しく、稻苗は殘らず枯れ果しも、不思議や正輔の田地は例年の通り豐熟した。されど、正輔は之を私せず、盡く國内に頒つて翌年の穀種となさしめたさうです。後に藩主の知る所となりて、田地を賜ひ租税を免じ、且つ正輔の沒後には、藩主は特に墓碑を建てしめ孝子正輔之墓と誌し、其の邊を御通行の砌は必ず駕籠を下りて墓に禮せられたと申すことであります。其の他、忠臣孝

第十三には禪定、是は坐禪の第一門である。心を散らさず心を亂さぬ樣に、精神を下腹のドン底に落ち着くることです。坐禪の初には此の修養が大切です。足を組み手を組み、出入の息を調のへ、兀々として坐り込んだる時は、吾我を忘るゝと云ふ禪定の力が自然に現はるゝものであります。

第十四には智慧、是は强ちに學問の上の智識のみには限らぬ。總て正しき道を明らめて一心の邪見と妄情と疑惑とを離るゝのである。歌に『種々の道はあれども道といふ誠の道の道は此の道』とあるが、即ち誠の道を究め盡すのが眞正の智慧であります。

第十五は不戲論、是は凡夫根性を離れよとの御教です。戲論とは誠實の無いことを云ふので、言ひ換れば眞面目ならず着實ならぬことです。卽ち佛性常住の理を信ずること能はずして、單に世渡りの仕事として佛法を學んだり、又は何等かの報酬を目的に佛法を行うたりするのは、皆な戲論の法でつまり凡夫根性です。坐禪でも智慧でも其の人の心の底に、なあに之れで飯を喰ふのぢや、これで樂を爲るのぢやと云ふ樣な卑しい量見が微塵許りでもあらうものならば、信心も慈善も智識も道德も盡く妄想煩惱の變性たるに過ぎぬ。故に此の不戲論の一行は佛道修行の極則であります。

以上の十五大行が釋尊御涅槃の時の大轉法輪で、八萬四千の法門、三千餘卷の經文も自から此の中に具はつて居ります。此の十五大行を我等の絕對的標準としたならば、我宗安心の四大原則と稱する懺悔滅罪・受戒入位・發願利生・行持報恩も立派に成就せられ、日々の行爲は茶を飮むのも御飯を戴くのも皆な盡く

足は實に富楽安穏の本であります。
第十には遠離、是は紛々たる浮世の穢を離れ精神上の煩悶を解脱することです。併し、強ちに山に入り林に住むことを云ふのではない。濁れる世の欲垢に穢されず六根清淨にして正しき道を履み行く時は、泥中の蓮華の清きが如く、世に在りながら世を離れる。『世にすむと思ふ心を捨てぬれば山ならねども身はかくれける』である。若し心亂るれば縦や山家に住むとても『めづらしく住みなす山の菴にも心とむれば浮世とぞなる』で、矢張、欲垢凡夫の御仲間です。
第十一には精進、是は念々の上に勉強し刻々の間に自彊息まざるの力である。勉強は幸福の母、怠惰は貧窶の門、『如何に才能優勝なりとも、百折撓まざる勉強と萬事抜目なき注意なくては、事業の成功覺束なし』とは西哲の箴言です。古歌に『長壽と福を願はゞ働けよ流るゝ水にくされるは無し』とあるも正しく人生の秘訣である。さすれば『世の中は何のへちまと思へどもぶらりとしては暮されもせず』一寸の光陰をも徒らにせず、力のあらん限りを盡して正當なる業務に勵まねばなりませぬ。
第十二には不妄念、是は常に正しき觀念に住まりて暫くも忘るゝこと勿れとの御誡です。『惡しとも善しともいかにいひ果てん折々かわる人の心を』と弘法大師も歎かせられた通り、油斷の出來ぬは我等の心である、故に寢ても寤ても念を正しき道に住めて夢の間も迂濶ならぬ樣に用心するが肝要であります。吾々の念力には無限の勢力がある。諺に謂ふ『思ふ念力岩をも透す』で、念力の及ぶ所、事の成らざるはない。

ず暫時も睡眠に耽つたり懶惰に流れたりすること無く善法を行ふべきである。

第五には忍耐、是は瞋り腹立つ煩惱を制して柔和忍辱の德を守り、苟にも惡々しき言葉使ひや荒々しき振舞に渉らざること。

第六には恭謙、是は常に謙遜の德を守りて、如何に富み且つ貴しとも、如何に智あり才あるとも、決して他人を輕蔑する樣な擧動なきこと。

第七には質直、心を正直にして僞らず諂はず、上、天を欺かず、下、人を欺かざる時は『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん』其の心其の儘神の御國又佛の淨土である。『極樂はいづくの果と思ひしに家業精出す正直の門』で所謂直心是れ道場である。

第八には少欲、是は欲を制して非理非道に陷らされとの御敎である。栂尾の明慧上人は北條泰時に向ひ寡欲の二字を以て治國の大本なりと示された。泰時能く之を守りて一代の賢者となられました。孟子も『心を養ふは寡欲より善きは莫し』と云うてある。欲を少なくするは修養の源泉であります。

第九には知足、是は分を守り足ることを知りて、人を羨み又は嫉み、人に諂ひ又は阿ねると云ふ樣な惡德を離れ、縱や身に襤褸を纏ひ賤が伏屋に住するとも、是れ皆な其の身に定まる果報ぞと明らめて泰然道を樂しむの德です。歌にも『事足れば足るにまかせて事足らず足らで事足る身こそ安けれ』とあり古語にも『富は常に足ることを知るより富めるは無く、貴きは能く俗を脫するより貴きは無し』とあるが如く、知

を示して少欲を行へとか、知足を觀ぜよとか仰せられてある。今は本分に就て一々說明する時間がないから、初めの七箇條も後の八箇條に倣うて德行上の名目を附して御話しする積であります。

遺教十五箇條

先づ第一には正業、是を古人の注釋には『邪業を誡しむ』としてある。即ち御互の生計上の職業は必らず正當なる業務を守りて勵み、決して道德に背いたり人道に外れぬ樣に致すこと。

第二には修身、是は御互の精神を調へ治め、私根性を制して一身の品行を正しくすること。

第三には節食、是は常に食慾を節して決し、非法なる物や不潔なる物を食せざること、所謂『養生の人は食物と飲物とを撰び勉強の者は朝寢と晝寢とを戒む』の意です。

第四には慚耻、是は常に慚づると云ふ心を抱き、聊かにても良心が曇る樣ではならぬ。孟子の語に『人の道あるや食を飽までにし衣を暖かにし、逸居して教ゆること無き時は禽獸に近し』ともありて、人として人の道を守らず人たるの職分を盡さぬ程耻かしいことはない。又、孟子が『人は以て耻なかる可らず耻なきを耻づれば耻づることとなし、耻の人に於ける大なり』とも云うた通り、耻を耻とも思はぬ樣な者は殆ど人間の資格を失うたも同樣である、太田道灌は『直からぬ心をかくす我かげをいとはで照す月ぞ耻かし』と詠で、月に對してまで耻ぢたではありませんか。故に我等は深く其の身を耻ぢて一寸の光陰をも虛うせ

後漢書には『子の罪は父母を累はすより大なるは無し』とあり范子の語には『父母の心を以て心とすれば則ち孝なり』ともあり、釋尊は我等の御法の父、法身の親である。故に我等は釋尊の御心を以て我心とし釋尊に御安心をさせ申すが何よりの御恩報謝であります。

眞の法供養

然らば釋尊は如何なる御心であらせらるゝかと云ふに、四十九年の御説法は盡く御心の御寫眞も同然です。近くは御涅槃の砌の御遺言がソックリ御心の露出であります、して見れば其の御遺言を守り奉るのが取りも直さず最勝の法供養、御恩報謝の正道です。御遺言の內容は十五箇條の法門となつて居る。古人は是を二つに大別してある。初め七箇條を『世間功德分』と稱して普通道德上の御教訓、次の八箇條を『出世間功德分』とも八大人覺とも稱して宗教上、卽ち純佛法の行持に關する御教訓としてある。併し、必ずしても世間と佛法とを分けて見るにも及ばぬ。故に拙衲は極々通俗的に是を一括して十五大行と名け樣と思ふ。尤も、一言一句の上に就て御話を致せば、中には僧侶にのみ限る御誡もあり、また、僧俗に通ずる御諭もあるが、今は是を一般信者の實踐道德の標準として其の大綱だけを演べて見る考であります。

猶ほモウ一ツ御斷りして置くのは、御經文の初の七箇條の方は、斯ういふ事を爲すなよと云ふ御誡めの御語になつて居る。例せば瞋恚を制せよとか、憍慢を伏せよとか云ふの類です。次の八箇條は德行の名目

餘外の法とは尋常一樣の形式的供養や一時的の勤行を指したのです。或は香を燒き、或は拜を設け、さては、田舍で流行る涅槃忌の團子撒き、餠撒き、麗しき花飾り、山蔬野茗の供物を捧ぐること等も、皆な報恩の眞情より出でたる菩提道莊嚴の佛事には相違ないが、それのみを以て御恩を奉謝し盡したと云ふは不可能である。然らば如何にせば宜しきやと云ふに、『唯當に日々の行持其の報謝の正道なるべし』で、我等が日々の行持、卽ち平生底の行が能く佛の御敎に叶ひ佛の御心に隨ひ、此の心の操も此の身の働きも、ソックリ佛法に爲り切つたのが御恩報謝の正しき道なるぞとの御敎訓であります。

此の心も此の身もソックリ佛法に爲り切ると云うても、世を捨て身を棄つることではない『日々の生命を等閑にせず私に費やさゞらんと行持するなり』で、天地の間に生れ萬物の靈長と云ふ結構なる果報を受けたる此の身をば、自ら貴び自ら重んじて、日々の生命を等閑にせず、卽ちムダ使ひをせず、疎末なる取扱をせず、又、私に費さずと云うて、自分の身勝手、我儘に使ひ捨てぬ樣に勤むるのが眞の行持であります。兎角我等は此の心や身を疎略にしたがつていけない。些々たる事に精神を勞らして人知れぬ煩悶苦痛に沈む者なぞは、全く此の貴い心をば、つまらぬ事に費やして居るのである。

又、財慾や色慾の奴隷となつて、御話しにもならぬ事に此の貴き身を縛りつけ壓へつけ、徒らに一代の生命を驅つて五欲六塵の巷に飛び廻らしむるの類は、全く此の身の取扱が亂暴過ぎると云はねばならぬ。凡そ孝行の第一は親をして安心せしむるに在り、報恩の行持は、親をして歡喜せしむるに在る。故に

永劫安樂の勝緣

然れども釋尊御一代の大法輪は廣く宇內各國を風靡し、三百餘會の大法輪を遠く幾百千年の後に迄も活轉して、白毫光一分の功德は受用不盡である。今日の我等が坐ながらにして生死透脫の大安心を決定し、何の苦も無く永劫安樂の勝因緣を成就する所以のものは、抑も誰の御蔭でありませう。『たらちねの親の惠の厚衾臥すまも人のわするべきやは』で、皆な是れ釋尊の溫き惠の厚衾に包まれて居るのではありませぬか、況てや釋尊は法華經に於て『今此の三界は皆な是れ我が有なり其の中の衆生は皆な是れ吾が子なり』と仰せられた通り、一切の衆生は眞實の我が子なるぞとの御慈悲であるに依て、其の御遺言の如きは『傳へ聞く鶴の林の夜半の聲皆子を思ふ言葉なりけり』と云へる歌の如く、一字一句にも慈愛の涙を湛え一言一語も悲愍の腸より出でざるは無いのである。恩を知り恩を報ずるは是れ聖道なり、苟も佛の敎を信ずる程の者は心を傾け誠を盡して此の大恩を報謝し奉らねばなりませぬ。

報恩の正道

扨てその報謝の法はと申せば、修證義にある如く、『其の報謝は餘外の法は中るべからず』とありて、釋尊廣大の御恩に報い奉るには決して餘外の方法を以てしては報謝の實を擧ぐることは出來ぬ。

抑も釋尊は中天竺迦毘羅衛國の淨飯大王の御子として御降誕ましまし、十九歳にして御出家、三十五歳にして御成道あらせられ、一切衆生の爲めに説法敎化したまふこと五十年、今より二千數百年前の二月十五日最夜半を以て、拘尸那城跋提河の畔、娑羅林の間に於て御入滅遊ばされたのであります。

古今東西に雙び無き絶對の大聖人が御涅槃の光景は復た格別なもので、其の御涅槃を拜まんとて四方八面より聚り來れる衆生は五十二類の多きに及び、其の數幾百千なるやを知らず。釋尊は此等の衆生の爲めに、一晝夜の間御説法を遊ばされたのが、大涅槃經と題して四十卷に飜譯されてある。又、御息の引取際に及び、特に最後の御遺言を垂れさせられしが、佛遺敎經と題する一卷の經文になつて居ります。御涅槃の床を圍める娑羅と云へる樹が忽ち白色に變じ恰も鶴の如くでありしとて是を鶴林とも申します。釋尊の御生母摩耶夫人は忉利天と云へる天上界に生を受けて居らせられたが、阿那律尊者の御報せに驚き取る物も取り敢へず、尊者を先に立て、天上より御下降なされた。此の時、既に御涅槃の雲に藏れさせたまひければ、空しく雙樹に掛けさせられし御鉢と錫杖とを御覽じて大に歎かせられた。この時釋尊は寶棺の内より出でさせられて御暇乞の御挨拶を遊ばされたと申してあります。阿難尊者の如きは御別れを悲んで、御床の前に泣伏して人事不省に陷られたとあるが、尊者計りでなく、五十二類の衆生は皆な盡く同じ悲歎の淵に沈まれたことであらうと思ひます。

佛涅槃會禪話

報恩佛會

本月十五日は我が大恩教主釋迦牟尼如來の御涅槃の聖辰であります。我が禪門に於ては古來より二祖三佛會と稱して、報恩供養の大法會が一年中に五返ある。二祖は達磨大師と御開山、又、釋迦牟尼如來の御供養が三回あるに依つて三佛會と稱す。卽ち二月十五日の御涅槃と四月八日の御誕生と十二月八日の成道會とであります。只今では高祖・太祖の御降誕會を行ふことになつたから、一年に都合七返の大供養がある譯で、三佛四祖會とでも名づくべきである。殊に御涅槃會は三界の大導師、我等の大慈悲父大聖釋尊御入滅の法要であるから、我等は御涅槃當時の御模樣を想像して其の御恩德の甚大なるに感泣し、一層丹悃を抽で、報恩の供養を營み奉らねばなりませぬ。

双樹も色を失ふ

般若の妙徳を生計上・家庭上に應用したもので、斯くしてこそ始めて佛法が活きて來るのである。

さすれば、苟も佛法を信ぜんものは、專ら般若の本體と妙用とを尊重して他の枝葉に拘泥せざらんことを要します。而して、大般若の功德利益に對しては寸毫も疑なく、之を尊信し奉ると同時に、一面には日々夜々の立居振舞より社會百般の施設に至る迄、盡く大般若の大精神を自在に運用するの心得が肝要であります。先づ今席は是にて終結を告げ、更に他日を期して委しき御話しに及ぶこと〻致します。

日、漸く正氣に返りしが激烈なる痢病を發し、廿日餘りを過ぎて舌根に腫物を生じ、四十日間も非常に苦しんで恐ろしい死を遂げたと申す事です。

佛法は怨親平等の慈悲を以て國土國民を利益したまふのであるから、如何に之を誇ればとて復讎的に罰を當てるなどと云ふ事は無いが、正法を謗り眞理を昧ます爲め自然に天の罰を受くるので、所謂自業自得である。即ち邪見邪慢の爲めに善神身を離れ、惡魔便りを得るのであります。

次に實踐上の效驗に就て申せば、寛政年間、京都に大黒屋傳兵衛といへる人があつた。大の佛教信者で法名を智明と申し、經學を好み、粟田流の書を能くし、且つ非常なる慈善家であつて、貧民を恤み、洪水の患を救ひ、京都と大津との間三里の處に常夜燈を設けて旅人を益し、其の他癈疾不具を憐み、醫藥を施す等、四十年一日の如く專ら一身を公益と慈善とに貢獻した。或日、歌の中山清閑寺の智眞和尙、其の名を聞きて案内もなく傳兵衛の室に入りしに、傳兵衛は帳合をして居つた。和尙は唐突に『御身は常に佛法三昧との事なるが、今は何をして居らるゝや』と言ひければ、傳兵衛は隙さず『私は今、大般若經を轉讀して居ります』と答へた。更に和尙は『御身の大般若、未審、功德多少ぞ』と問うた。すると傳兵衛は、『左樣です、此の大般若を熱心に且つ正直に轉讀すれば、以て父母に孝養し妻子を扶助し、奴僕に至る迄飢を知らず寒を知らず、且つ窮民を惠み貧民を賑はす等、其の功德廣大にして、測り難し』と答へた。和尙大に感じて『御身は實に泥中の蓮花なり』というて、夫れより無二の知音となつたとある。此等は全く

として居る。すると、番頭のさして居て脇指が獨手に三寸許り抜け出る。大蛇は之を見ると頸を引込す。良ありて、再び呑ふとすると亦もや脇指がスルりと抜ける。そこで大蛇は到頭其處を立去りました。彼の旅人は此の刀こそ古今の神刀ならんと思ひ、大阪に出て之を刀師に見せしに、一兩の價も無い鈍刀とのことで、そこで不思議に思ひ能々其の刀を調べて見たるに、鞘の奥に大般若の御札が入つて居つたと申すことである。

次に信仰上の靈感は數へ切れぬ程であるが、支那に李通といへる者があつて、紺紙金泥の大般若を書寫せしに、或夜の夢に無數の金色の佛が空中に充滿するを見た。傍に一人の翁が居つて『是は六十億四十萬の大般若の文字の一々が、盡く佛體と爲つたのである』と申したそうです。其の他、門頭に大般若の御札を貼り置きし爲めに、怨靈の祟りを免れたとかいふ様な因縁も澤山ある。

其の反對なる誹謗の現前に就て申せば、天保十五年正月廿日、羽後國由利郡龜田町龍門寺の燒失せし時、高山某なる者、領主より本堂再建の事を命ぜられしに、或夜、親類の人と酒を酌みながら、『禪僧は常に大般若を轉讀しながら火災に罹るを見れば經文などには何の功德も無い、然るに之を再建せんとするは領主の不明なり』などと、散々に氣焰を吐いた。親類の人々は『其の様な勿體ない事を申さるゝな』といひければ、某は般若の札を袂より出して、『予は厠に行きて之を落紙にせん』とて厠に上りしが、何時迄も歸らざるに依り、其の妻が燭を點じて厠に至り見たるに、某は御札を握りしまゝ倒れ臥してをつた。翌

好く人間の道を守るもの、三には利口の利口、是は物の道理をも辨まへて且つ德行の好く修まれる者、四には馬鹿の馬鹿、是は智識もなく德行も無き者、此の中、馬鹿の馬鹿は昔は多かつたが今日は少ない。其の代り利口の馬鹿が段々と殖えて來る傾がある。故に、眞實の般若を普く一切に及ぼして、相共に智德圓滿の域に進みたいものであります。

故に、般若を以て或は眞空の一方を說いたる高尙なる敎理とのみ思つたり、或は現世利益のみに適用すべき法門とのみ思つたりしてはなりませぬ。般若は宇宙の大精神より發したる妙智妙德でありますから、六百卷の大經文は實に人間智德の總府にして今世安穩、後生善處の大功德は盡く此の中に存するものと心得ねばなりませぬ。

般若の功德

般若の功德利益に關する實例を擧ぐれば、古今の事蹟に於て數量りも無い事であるが、之を、目前の災禍を免れたる利益と、信仰上の靈感と、實踐上の效驗との三に分けて、簡單に御話しをして見やうと思ふ。

昔、大阪の或る商人の番頭が、主用にて丹波に赴くとて或一山中にかゝりますと、頻りに睡氣を催ふし、覺えず松の木の下に腰を懸けて居眠をした。其の時、他の一の旅人が其處を通りて、不圖、其の番頭さんを見ると、こは如何に、長さ丈餘の大蛇が番頭の頭の上に首を延ばし、大口を開て一口に之を呑まん

一體になつてこそ、始めて聖人賢人とも成る事が出來るのであります。

我と道と一體となるべき正徑は、唯だ我宗相傳の御戒法を以て最善最良の法門と稱すべきである。されば之を受戒入位と名け、如何なる惡人凡夫でも、一度至心懺悔の志を發し、心のドン底から從來の非を悔い改めて身・口・意の三業を清淨にし、而して佛祖直傳の御戒法を相續し奉り、寢ても寤ても之を信受して忘れざる時は、此の身此の儘が宇宙の眞理に契合して、取も直さず三世諸佛の御仲間入である。

扨て其の御戒法は總體で十六箇條であるが、之を約むれば、信と行との二門を出でぬ。信とは佛・法・僧の三寶を信仰することであるが、此の三寶は宇宙眞理の權化なのであるから、之を信じ奉るのが、やがて眞理を信じて眞理の德用を我等の心と身とに顯はすのである。次に行とは未來際を盡して諸〻の惡を離れ衆の善を行ひ、更に進んで一切衆生を利益するといふ三大行に歸するのである。此の三大行が緣に觸れ物に應じて種々の德を現はし、他の生命に對すれば、不殺生の禁となりて放生の業となる。他の財物に對すれば、不偸盜の禁となりて淸廉潔白の行となる。是の如き實踐的條項を十戒に分けて示されたのです。我等は一念之を守れば即ち一念の佛、一日之を持てば即ち一日の佛、生々世々之を護持すれば即ち生々世々の佛樣である。

凡そ世の中の人々を智と愚と、即ち利口と馬鹿とに區別すれば四通りある。一には利口の馬鹿、是は智慧ありて德行なき者、即ち論語讀みの論語知らずの類、二には馬鹿の利口、是は學問も教育も無けれども

の事は單に古代の神話として之を輕々に見るべきものではない。神佛の靈鑒は凡慮の測り知る能はざる所に歴々たるものがある。必ず能く之れを信ずれば感應の力は決して空しからざるものである。

唯だ之を信じて之に祈禱するに當り、原因結果の理法を昧ましたり、人倫道德の原則に背反したりしてはならぬ。勉强せずして富を求めたり、衛生を愼まずして健康を祈つたり、盜賊の商賣繁昌、不義者の願望成就、こんな間違つた御祈禱は幾許致したとて、罰これ當れ、効目のあらう筈はない。古人も『人事を盡して天命を待つ』といひし如き、己れの精力のあらん限りを盡して、而して其の及ばざる所を希ふこそ、眞の祈禱と申すものであります。

智德の總府

金光明經玄義には三種の般若を說き、圓常大覺、即ち佛の正覺には三種の德あるを三般若と名くと申してある。

第一は實相般若、是は宇宙に遍滿せる絕對の眞理である。第二は觀照般若、是は、觀照、即ち吾人智力を以て宇宙の實相を徹見たことで即ち證悟である。第三は方便般若、是は諸法差別の相を分別し、方便運用の德を現はすのであるから、四枚の般若等は盡く方便の妙德であります。觀照般若は智に屬し、方便般若は德に屬す。智と德の相合して始めて實相般若たる宇宙の大精神と我等とが一枚になる。我と道とが

なる誓願を發するのも亦た一種の祈禱と云ふことが出來る。孔子の『丘（孔子の名）の祈ること久し』というたのも全くそれである。

併し、我等の力は甚だ微弱なるもので、知識の點から云ても、道德の點から見ても、實に眇たる蒼海の一粟たることを免れませぬ。故に、子供が親の力を憑み、人民が政府の力を賴むが如く、誠心誠意を以て佛菩薩の加護力を賴み奉る事が必要であります。殊に大般若經には、十方三世の佛菩薩を始め、梵天帝釋四天王及ば十六善神等が守護神となつて、長へに大般若を守護せられ、常に大般若經を信仰するものを御護り下さるゝといふことは、明らかに御經の中に說てあります。

大般若の御本尊として安置し奉る畫像の正面は、釋尊と文殊・普賢の二大菩薩である。其の下なるは常啼菩薩と法涌菩薩で、此の二菩薩は、何れも般若を求めんが爲めに難行苦行せられた御方である。左右の神々は十六善神です。一番下に笈を負うて居らるゝは玄弉三藏、髑髏を頸に懸けたるは、神蛇大王とて玄弉渡天の時に姿を現はし『貴僧は今迄に六度も大般若經を支那に請待せられたが、其の度每に私は貴僧を殺して經文を奪ひ取れり、故に今は七度目である、斯まで精進不退なる御精神なるを以て、今よりは長く貴僧を守り、且つ大般若の守護神たるべし、貴僧の前身は髑髏として我頸に懸け置けり』と申して、玄弉と與に支那に來られたといふので、守護神の一つに列ねたのであります。故に回向の文には、『常啼、東に請ずれば、帝釋、形を復して歸崇し、玄弉西に求むれば、神蛇、邪を飜して擁護す』とある。是等

るゝに至つたのも皆な同事行であります。道の本源は唯一なるも、親に向へば孝となり、君に對すれば忠となる。夫婦の間には和合と爲り、朋友の間には信義となる。是れ皆な自然的同事行である。
以上の佛の御姿、御德の現はれの四つを四攝法と申すのですが、これはつまり盡く宇宙の大精神の活動にして、卽ち般若の妙用であります。『天言はず四時行はれ百物成る』で、眞空平等の理體より自づと斯の如き妙用が現はれるのであります。然れば、眞理の本體、般若の妙德は平等絕對なりと雖も、其の妙德は不染汚にして現はれ無罣礙にして行なはれて來る。是を名けて智慧とも道德とも慈悲とも神通とも申すのであります。

祈禱の眞意義

此の眞理の本體・般若の妙德を完全に具へられたのが佛であるから、佛樣は宇宙眞理の權化であらせられます。吾等の本來具有する般若の體を明らめ、之を事々物々に對して自在に運用し得べき妙德を現はすに當り、之を妨害する所の惡魔を降伏して本然の德に歸するが爲めに、眞理の權化たる佛の御加護力を仰ぎ奉るのが御祈禱であります。
祈禱と云ふは二字ともにモトムと訓じて、我等の希望を佛樣に訴へ、佛樣の加被力を蒙りて其の目的を達することです。廣き意味を以て申せば、佛樣許りで無く、天地の大道に向つて大なる志を立て、堅固

る』で、此の布施の心行こそ、取りも直さず佛の御姿であります。
此の御姿が言語の上に現はるれば愛語の行となる。愛語といふは言語を愼しみて常に深切なる語、道理ある語、柔和き語、優美き語を使ふことである。即ち妄語と云つて嘘僞、惡口と云つて惡まれ口、綺語というて莊飾のみを重んずる實の無い語、兩舌と云つて二枚舌を使ふ樣な事を離るゝ時は、自然に愛語の德を成就致します。『あい〳〵の返事一つで天も日も人の心も圓くなりけり』愛語は和合の根源である。若し之に反すれば、喧嘩口論是より起り、鬪諍怨恨も亦是より生ず。『三寸の舌で四尺の身躰をば養ひもする失ひもする』愼むべきは言語である。

佛の姿、佛の妙德が行爲の上に現はれたものは、これを利行と申します。衆生利益の行です。衆生と我と本來平等なりと明らめなば、どうして他人に不利なる行が出來ませう、『慈悲の眼に惡しと思ふ者ぞなき罪ある身こそ猶ほあはれなり』、獨り人間同志の間許りでは無い。慈悲心の妙用は普く萬境に通ずるものです。『行水の捨て處なし虫の聲』とは禽獸蟲魚に及べる般若の德で、『朝顔に釣瓶とられて貰ひ水』とは草木國土の上に發したる慈の光であります。

又、此の佛の妙德は、時と處と人とに依りては同事行となつて現はれます。『同事といふは不違なり』とありて、其の時と處と人とに依てキチンと當嵌る和光同塵の行である。釋尊が人を見て法を說かせられ、一佛法・一眞理をば、或は空と說き、或は有と說き、或は中と說き、遂に八萬四千の法門を開示せら

を備へて居る。故に、此の眞空の妙理に隨順する時は、其の智見は公平にして毫も偏頗に流れず、其の慈悲は平等にして普く一切の衆生を利濟し、萬事に處して染汚する事なく、萬事に接して罣礙する處が無い樣になります。

六祖大師が『本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん』と仰せられたは般若の本體をいうたので、釋尊が『一切衆生皆な是れ吾が子』と法華經に仰せられ、又、梵網經に『一切の男子は是れ吾が父、一切の女人は是れ我が母なり、我れ生々に之れに從つて生を受けざる無し、故に六道の衆生は皆是れ我が父母なり、(乃至)一切の地水は是れ我が先身なり、一切の火風は是れ我が本體』と御示し下されたは、正しく般若の妙德妙用であります。

四枚の般若

それゆゑ、佛敎にては菩薩の四攝法のことを四枚の般若なりとも申して居ります。四攝法とは布施と愛語と利行と同事との四大行です。

布施といふは慈悲仁愛の心を以て哀愍を人に施すことである。法を知るものは法を施し、財を有する者は財を施し、財法兩ら有せざる人は同情の心を發するのも一分の布施である。平等絕對の妙理を了ずる時は、自づと平等博愛の布施行が現はれて來ねばならぬ。『あはれみを物に施す心より外に佛の姿やはあ

なりて、盡未來際、解脱の分なきに至るのである。若し一歩を退いて能々諸法の實相を觀じたならば、此の身は是れ地水火風の寄聚り、此の心も念々に變化して暫くも住まることが無い。震旦(支那)の二祖慧可大師が、達磨大師に安心の法門を問はれし時『心を持ち來れ汝が爲めに安心せしめん』と仰せられたとある。心とは何ぞ、煩惱とは何物ぞと工夫して見たならば、是が心である是が煩惱であるというて押へて見るべきものは無い。

昔、或人が正眼國師に對して、『私は天性短氣で困り切ります、何卒短氣の習癖の直る樣に御化導下されたい』と申せし時、國師は『如何にも直して進ぜようから、其處で腹を立て御覽』と言はれた。彼者は『只今は腹を立ることは出來ませぬ』、『併し、天性とあれば何處にか短氣の塊があるだらう』、『いや、何處を探しても見付りませぬ』、『然らば、徹底不可得か』、『左樣、不可得であります』、『其の不可得である、其の不可得觀を忘れまいぞや、腹が立たら不可得觀を忘れまいぞ、腹が立つたら不可得觀に入つて見よ、欲が起つたら不可得觀に入て見よ、直下に短氣も欲も解脱することであらうぞ』と示されたそうです。

徹底不可得なることを覺悟すれば忽然として無我の狀態に入る。此の時、平等絶對の空理が現はれて一切の煩惱妄想を打破するに至ります。無我というても枯木の樣になる事ではない。所謂天地の公道に一致して所有私慾私情を解脱したる境界であります。宇宙の根源は平等絶對にして、而して能く生々化々の德

兵戈災害國のうちに入らず、庶民之を念ずるときは疾疫厲鬼家に入らず、悪を斷ち福を獲る是れに過ぎたるは莫し、宜しく天下の諸國に告ぐべし、男女老少を論ずる事なく、起座行歩にも口を閉て皆悉く念誦せよ、其の文武百官の人等は、朝に向ひ司に赴く路道の上にも、毎日常に念じて空しく往來する事勿れ』云々と仰せ下されてあります。是より日本全國、津々浦々に至る迄、等しく大般若經を信受し、讀誦し、書寫し、供養して、家を治め國を護り、災を除き害を禳ふの唯一寶典と爲す樣になつたのであります。

般若の大旨

然らば、大般若經とは如何なる妙義を開示せられて斯も甚深微妙の大功德があるのであるかといふに、前にも申した通り、一千五百七十二の義門を示されてある程であるから、一朝一夕に其の妙義を述べ盡すことは出來ませぬ。併し、其の原理原則を究むれば『空』の一字に歸するのであります。空というても斷滅とか落空とかいふ樣な撥無的の空では無い。つまり平等絕對の本體の換名とも見るべきである。凡夫は我を執するが故に妄想煩惱を起し、それが己れの愛する物に對しての貪欲となり、己れの愛せざる物に對しては瞋恚となり、貪れども得ること能はず、瞋れども斥くること能はずして遂には愚痴の繩に縛られて、益々煩惱を增長し、益々惡業を造作し、我と我手で三界生死の苦患を招き、鬼ともなり蛇とも

像の出來ぬ程であつたのです。

玄弉三藏は、一代に七十四部一千三百三十八卷を飜譯した人で、實に佛敎飜譯者の傑出なる者である。中に就て、大般若經は、唐の高宗帝の詔を奉じて、當時の鏘々たる儒官約二百人を助手として、飜譯に從事し、滿四年にして成功せられ、龍朔三年十月、嘉壽殿に於て大供養會を設けられた。其の時、大般若經より光明を放ちて遠近を照し、天花亂墜等の奇特もあつたとある。それより間もなく我國に傳來したものと見え、人皇四十三代元明天皇和銅元年十月の御詔勅には『今年より每歲、沙門を延て大般若經を轉ぜしめよ』と仰せられてあります。

四十五代聖武天皇は佛敎に對する御信仰最も深くあらせられ、奈良の都に金銅十六丈の盧舍那佛を建立したまひ、又、唐より鑑眞律師を請じ、戒壇院を創立して授戒會を御修行遊され、且つ諸國に國分寺等を建設して佛敎の普及を謀らせられました。猶ほ神龜元年の正月に、沙門六百人を請じて大般若經を宮中に轉ぜしめられ、當時、國大に饑え疫厲頻りに至りしことありしかば、特に釋尊の像高さ一丈なるを造り、及び大般若經六百卷を寫さしめられしに、其の功德空しからずして、それより風雨和順にして五穀豊かに穰つたとある。

其の後、天平寶字二年には御詔勅を發せられて『聞くならく、摩訶般若波羅蜜多は是れ諸佛の母なり、四句の偈等を受授し讀誦するもの福德を得ること思量すべからずと、是を以て天子之れを念ずるときは、

けを方便の教説とするのではないので、我が宗門の眼より見れば、一切藏經、一つとして方便ならざるの敎は無いのであります。併し其の方便は卽眞實であつて、一字一句の上にも宇宙の眞理を開闡し、一章一偈の上にも天地の大道が究盡されて居る。方便の敎說だといつて輕く見るべき點は毫頭ないのであります。大般若經は釋尊極大乘の法輪にして、一切藏經も悉く此の經中に包含されて居ると云ふことも出來るのである。

況てや我宗に於て大般若經を轉讀する時の如きは、啻に佛の說かれたる法として見るのではなく、六十億四十萬の文字の字を正しく實際の生きた佛として拜するのであります。獨り大般若經のみならず、一切藏經も亦た其の一字々々が全く釋尊の法身舍利、釋尊の皮肉骨髓であります。此の精神が解らねば、佛敎の大功德を現はすことは出來ぬのであります。

般若の傳來

扨て此の大般若經を天竺から傳來して、之を飜譯せられたのは有名なる唐の玄奘三藏法師であります。玄奘三藏は、唐の高祖の貞觀七年（我國人皇三十五代舒明天皇の五年）に天竺に渡られ、那蘭陀寺の戒賢律師に就て佛敎を研究し、且つ天竺に於て百三十餘の國々を經歷して各種の調査を遂げ、大般若經を始め多くの經論を傳へて、十三年目に支那に還られました。其の間の艱難辛苦は、今日の我々などはとても想

大般若會禪話

最大部の經典

本日、大般若轉讀の大法會に參り、皆さんと有り難い法緣に預りましたに因み『大般若』のお話を申述べ樣と思ひます。

大般若經と申すは、釋尊が十六の會座にて說かせられし法門にて、六百卷、二百六十有五品より成り、中に一千二百五十七の義門を開き、六十億と四十萬と稱して莫大なる字數から出來てゐる御經であります。釋尊五十年間の說法中、二十二年間は此の大般若を說かせられたといひ、又は十四年間に說かれたのだともいうてあります。兎に角、一切經の中、最も大部の經典であることは言ふ迄も無い。而して、其の六百卷の大說法は盡く佛の御悟りを示されたものです。

天台宗等の判敎には般若を以て別敎と稱し、究竟の敎說でなく、方便の敎說を帶びて居るとしてあるが、我が宗門の讀經眼より見ても、矢張り方便の敎說だと申すべき道理があります。然しながら、大般若經だ

ならば、其の言は忠信、其の行は篤敬、職を守ること至誠、他を待つこと眞實なるが故に、家庭も圓滿に治まり、國家に對しても貢獻する所少からざるべし。是の如き人は、自づから自己の品位を高むるのみならず、國家の品位をも高め、自己の信用を博するのみならず、國家の信用をも厚くするものである。

斯かる人格的向上の基礎となるものは禪的修養を第一とする。吾々は是の如き大理想の下に修養の土臺を造り、向上の進路を開き、以て廣く人類の福利を増長せんことを期するのが正しく是れ新年頭の佛法にして、是れ程めでたいことはあるまいと思ふのである。

道の中に安心立命する人ならば、商業を營みつゝも、その賣買その儘が道德の運用となる。例せば、眞實、親に孝行なる人ならば、學問をしながらも親の爲めといふ觀念を離れぬから、學問その儘が孝行となる。故に學問も着實となり、品行も正しくなるものである。よしや御飯炊をして居ても、兩親は御齒が惡いから、軟かに煮てあげ樣といふ心懸けがあれば水の加減にも火の引き方にも孝行道德が溢れて居る。萬事萬端、押して知るべきである。信の上の商賣、道の中の交際には虛僞も無く虛飾も無く、怠慢も無く油斷も無い。

太祖大師は、その師徹通禪師より『未在更に道へ』今少しく明白に答へて見よといはれし時に『茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す』と仰せられた。承陽大師が『世務は佛法をさゆと思へる者は、但だ世中に佛法なしとのみ知りて佛中に世法なきことを知らざるなり』と示されし如く、喫茶喫飯も決して世事に非ず、俗事に非ず、そのまゝが道の光り信の輝きである。此の道を體得し、此の信を體驗する時は、本心の佛性茲に現はれて平等慈悲の德を發し、他を視ること猶ほ己れの如く、禽獸蟲魚に至るまでも攝取し愛護して漏す所が無い。是の如きは全く宗教的信念、否、佛陀大悲の光明に照さるゝ人で無ければ得られぬものである。

故に之を小にしては一家・一社會、之を大にしては世界全人類の上にも、眞に能く恒久の平和を得ることは、實に佛教に依つて養はれたる大信念に俟たねばならぬことと思ふ。苟も大信念を獲得する底の人

和合の本は道である。道なき和合には決して恒久性は無い。その道なるものは世界萬國に通じて毫も間隔は無い。故に教育勅語には、『之を中外に施して悖らず』と仰せられ、今上陛下は『萬國の公是、世界の大經』と仰せられた。その道の本體は前にも言うた通り誠である。誠の道は吾々の方寸の中に具つて居るから、是を『平常心是道』といふ。

總持寺御開山太祖大師は此の平常心是道の話に參じて大悟せられ、その大悟の境致を其の師徹通禪師に告ぐるに『黑漆の崑崙夜裡に奔る』と仰せられた。黑い漆で塗り固めた崑崙が暗夜を奔る、眞黑な物が眞暗の中を飛び廻る、能所倶に少しも文彩が無い。(僅かも我見あれば忽ち文彩に屬す)全く無我の活動である。吾々凡夫は、或は名に迷ひ、或は利に迷ひ、或は勝負の念に駈られ、或は理智の爲めに囚はれ、一念動く處種々の文彩が續出してならぬ。

正月はめでたいと言へば其のめでたい正月に囚はれて、煩惱障や業障を造り出す。趙州禪師は『汝等は十二時に使はれるが、老僧は十二時を使ひ得る』と言うたが、兎角、吾々は十二時に使はれ、春夏秋冬に使はれ、聲に使はれ色に使はれる。所有外境に瞞着せらるゝが凡夫の常態である。之と反對に無我の境地に達すれば、道を信ずること深く、道を守ること堅く、自己の全身心を擧げて道に捧げ道を奉ずるを以て、その一擧一動も盡く道の作用となる。信仰の生活と爲る。是を無我の妙機といふのである。

承陽大師は法華經を詠じて『此の經の心を得れば世の中のうりかふ聲も法を説くなり』と仰せられた。

業障は自然と除くことが出來る。次に報障を脱する修養は、先づ三世因果の理を諦信して、宿世の因縁を觀ずべきである。大莊嚴經には『人の生るゝは父母に依つてなりと雖も、其の果報は父母に依つて招かず、善惡美醜は先業の爲す所なり』とある。故に人若し不幸に逢ひ不遇に處せば、先づ以て宿世の因縁なりと觀じ、進んで善業を積み善事を行ひ、更に新らしき運命を開拓するが宜い。

右の三障は、要するに、我等の精神及び境遇の穢れである。此の穢れを除かば、佛の淨土も吾々の目前に展開される。淨土の淨の字は善の異名である。言ひ換ふれば、道德といふ意である。道德的世界が淨土である。さればとて釋尊の敎へたまふ指方立相の説を疑ふのでは無いが、吾々の家庭及び社會の上が眞に能く道德的に發達せば取りも直さず淨土の實現である。佛法の功德を以て死後の消息とのみ思うてはならぬ。吾々の目前に佛敎の大精神を實現するのが娑婆卽寂光淨土の法門である。

恒久の平和

悲慘なる歐洲の大戰爭に懲りて、世界を擧げて平和を希望する樣になつた。釋尊は和合を以て佛弟子の生命なりとし、出家沙門を僧伽と稱せられた。僧伽は梵語、此に和合衆と譯す。卽ち平和の敎團といふ意味である。優婆塞戒經には『衆の離壞するを見ば能く和合せしめよ』と仰せられて、細々と和合道を御示しなされてある。

煩惱の障りといふは精神の穢れである。即ち財欲に穢され、色欲に穢され、食欲に穢され、名譽を貪る欲に穢され、睡眠・遊惰を貪る欲に穢されて居る。此の欲望を充たすこと能はざる所から、忿怒の念を起し、愚痴の情に囚はれる。一般的道德眼より見ても、此の世の中は隨分と罪惡に汚されて居る。況してや宗教眼より眺むれば、滔々たる天下盡く煩惱の海中に沒溺して居る。

業障とは、業、即ち行爲の障りである。吾々は煩惱障の爲めに習慣づけられて居るからして、身に於ても口に於ても、知らず〳〵不善なる行爲に陷り易い傾向を有して居る。萬一その惡習慣を增長する時は、遂には恐るべき五逆十惡をも犯す樣になる。

報障とは果報の障りである。吾々は宿世からの因緣によりて、夫々の果報を受けて居る爲めに、仁者にして短命なるあり、勉强して貧苦に惱むあり、正直にして災難を受くるあり、信心ありて不幸に陷るあり、所謂運命の逆轉に苦しむ人が少く無い。此等は皆な宿世以來の因緣約束で、是を定業とも稱す。

以上の三障は吾々の向上を妨げ、智德を昧まし、苦痛を招き、幸福の門を塞ぐものである。故に此の三障を解脫せんと心懸けねばならぬ。

解脫の方法は第一に佛の戒律を奉じて、煩惱に遠ざかることが大切である。佛の御敎に順ひ人間の道義を守り、常に自ら私情と私欲とを制し、信仰三昧に入りなば、煩惱の障礙は漸々に除かることであらう。

次に業障を脫する修養には金剛堅固の願力を立てゝ、常に好んで善を行ふが宜い。前の煩惱障を制し得ば

事に對しては必ずしも此の標準に從ふべきでは無いが、個人的に於ける世にありふれた事柄に對しては、此の淘汰法を守ることが、寧ろ自己の品性を高め、博愛心を助長する所以である。

第四に『將來に望みを置け』希望ある者は元氣がある。元氣ある者は必ず活動する。活動の意氣があれば身體各部の機關も自然に活力を呈するものである『人は希望に活く』とは確かに格言である。兎角、人間は中年までは色々の希望を抱いて居るが、晩年に至ると希望の力弱くなる者が多い。偶ま希望があつても、利己本位の希望では却て不平や失望の基となる。故に宗敎的・道德的に希望を抱き、斃れても止まずといふ英氣を以て、分に應じて進みたきものである。

第五には『人の爲めに善をなせ』人として最も大切なことは善を樂しみ、善行を好むことである。それも自分一個の爲めにするのでは價値が無い。人の爲め、社會の爲めといふ觀念から、善行を樂しみて之を勵む、世に是れほど貴き心懸けは無い。此の心懸けがあれば、一年三百六十五日、常に天下公衆と與に、めでたき生活を營むことが出來るのである。

淨土の實現

吾々人類の世界は種々の意味に於て穢れの多い世である。故に佛敎に於ては是を穢土と稱して居る。吾人類は常に煩惱障・業障・報障といへる三の障りを有して居る。

故大隈重信侯は長壽の秘訣として五ヶ條を擧げ、是を養生の標準とせられた。その五ヶ條の第一は『怒るな』即ち妄りに腹を立たぬこと。度量の廣い者は聊かの刺撃位に無暗に腹は立たぬ。無暗に腹を立つ樣な人は度量が狹いから、精神に餘裕が無い。かういふ人は每に此の世を不平の間に送る樣になるから、その肉體にも惡い影響を與へるに相違ない。

第二に『愚痴を言ふな』愚痴といふ奴は諦めの惡い、思ひ切りのよく無い人に多い。一たび此の愚痴に囚へられると、始終、不快な悲哀な恨めしい日を送らねばならぬ。從つて常に陰欝な氣に鎖されるから、健康上にも非常な害を招くことゝなる。

第三に『過去を忘れよ』即ち役にも立たぬことは忘るゝが善い。是れも愚痴を解脫する根本法である。菜根譚に『我れ人に功あらば念ふべからず、而して過は則ち念はざるべからず、人、我れに恩あらば忘るべからず、而うして怨は則ち忘れざるべからず』とある。即ち人に御世話をしたことは、いつまでも恩にきせてはならぬが、人に對して濟まぬ事があつたなら、それを心に留めて其の過失を償ふの心懸けが大切である。又、人から御世話になつた事は之を忘れずに、其の御恩に報ゆるの覺悟が無ければならぬ。人から苦しめられた事などは、全然忘れて了ふが宜い。是れ則ち心の淘汰法である。尤も、國家的公共的の

ぬ。要するに、道を根柢として發したる滿足でなければならぬ。又、信仰を土臺として得たる安心でなければならぬ。

人の人たる所以のものは道を離れぬ處にある。古今の忠臣義士・孝子貞婦を崇敬するのは、必ずしも其の形式を謳歌するのでは無く、その道を守つて動かざる處に尊き價値があるのである。乃木大將を崇拜するのも殉死せられたが爲めでは無く、誠忠一貫、身を君國に捧げられたる精神に向つて最大の敬意を拂ふのである。敎育勅語には忠孝の二道を以て道德の大本と爲し、忠孝を行ふ所以の方法を『父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ』云々の十五點に分けて御示し下されてある。忠孝の依つて生ずる本源は誠である。佛敎にては此の誠を佛性の孝順心慈悲心と御說き下された。その誠の本體が佛性であり、又、宇宙の眞源である。此の眞源を悟り佛性の德を彰はし、大慈悲力を以て道を傳へ德を敷き、一切の衆生をして其の歸依處を得せしめられたのが釋尊であらせられる。

故に吾々が釋尊の御慈悲を仰ぎ、其の御敎を奉ずるのは、卽ち道に歸命するのである。『嬉しくも釋迦の御法にあふひ草かけても外の道をふまめや』、因緣薄き人は佛法の弘通せる日本國に生れても佛法を知らずに居る。寶の山に棲みながら貧苦を訴へて居るに等しい。吾等は幸に此の御敎に値ひ此の御佛の御救ひに預ることの出來るといふは身にも財にも代られぬ喜びである。此の喜びを喜ぶこそ眞に安心滿足なれ。

歡喜三昧

新年を迎ふる時は何人でも歡喜に充ちて、總ての物をめでたく感ずるものであるが、そのめでたい中にも、矢張、不安の氣分が潛在して居ることを免れぬ。それは年が改つたといふのと、萬事めでたく裝飾せられて居るので、なんとなくめでたく感ずるので、別に確實なる根柢が無いからである。古語に『福は徼むべからず、喜神を養うて以て福を召くの本と爲すのみ、禍は避くべからず、殺機を去りて以て禍を遠ざくるの方となすのみ』とあるが、人間に喜びの心あるは福德安樂の本である。

佛敎に於ける菩薩の修行を、十地というて十段に階段を分けてあるが、その第一が歡喜地である。喜びにも一時的のものと永久的のものがある。何等修養の無い人は一時的の喜びを要求して居る。卽ち酒を飲むとか、遊興に親しむとか、投機に手を出すとか、小成功に誇るとかする。水戸黃門光圀公の壁書に『苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし、主人と親とは無理なるものと思へ、下人は足らぬ者と知るべし、恩を忘るゝ事なかれ、子程に親を思へ、子なき者は身にくらべ近き手本とすべし、掟におぢよ、火におぢよ、分別なき者におぢよ、酒と色とは敵と知るべし、朝寢すべからず、分別は堪忍なり、小なる事に分別せよ、大なる事に驚くべからず、九分は足らず、十分はこぼるゝと知るべし』とあるは一時的の欲念を誡めたものである。菩薩は永久的の歡喜心を養はれる。永久的の歡喜心は必ず精神的・道德的でなければなら

れは元旦に限つたことではない、日々の行持として、第一に靜坐して眞寂の境致を味ふことが精神を養ふ所以の道である。

新年を迎ふるに當りてめでたく、、、之を祝するのは、無事に越年して多幸多福なるべき新玉の年を迎へ、心機一新して更に幸福の門を開き、理想的天地に歩みを進むるためである。一休和尚が『門松や冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし』と詠ぜし如く、唯だ年を累ね齡を加へたといふだけではめでたいのやら、めでたくないのやら分らぬ。又、昨年といふ年を無事に送つたからめでたい樣なものゝ、その昨年は果して完全に過ごすことが出來たであらうか、他に誇るべき麗しき意義ある年月であつたであらうか、考へて見れば頗る怪しい樣な感じがする。身は限りあり、事は盡きせじ、年を重ぬるほど益々責任が重くなり、義務が殖えて來るばかり、却々以て呑氣に新年を迎ふることは出來ぬ。

要するに、吾々は此の機會に於て自己の向上を圖り、清新の氣を養ひ、以て益々將來の運命を開拓せねばならぬ。凡そ幸福も禍亂も、其の本は精神にある。『傀儡師胸にかけたる人形箱鬼を出さうと佛出さうと』一家の平和も、事業の發展も、國家に對する奉公も、君父に對する報恩も、皆其の源は精神より發するのであるから、その精神を打靜めて、之を調へ、之を養ひ、之を善處に安ずることが最も大切である。明治天皇の御製に『ともすればあらぬ方にとふみ迷ひ敎へがたきは人の道なり』とあるが、實に油斷ならぬ心であるから、先づ以て此の心を統一し調制して、無限に活動し得らるべき地歩を作らねばならぬ。

新年頭の禪

新年の禪儀

新玉の年を迎ふるはお互におめでたきことである。禪門と雖も世間の例に倣うて新年を祝するの儀がある。本山に於ては午前一時頃起床、若水を以て洗面し且つ身體を淨め、直ちに僧堂に於て端坐三昧に入る。此の間、大鐘を鳴すこと百八聲、聞聲悟道、耳根圓通、一切の妄念を脱落し、古佛心に證契し去るのである。次に放光堂に於て大般若を轉讀し、國家鎭護の祈念を凝らし、祝聖諷經を修して、天皇陛下の聖壽を祝禱し奉り、次に御開山及び列祖を供養し、檀信徒を始め國民の祖先を追祠し、本山の鎭守及び八百萬の神々を敬禮し了て、小參というて新年頭の佛法に就て師家と大衆との間に問答商量を打し、それより新年の祝辭を交換し、相共に茶を喫し、祝餅を喫して、新年を祝するのである。

世間一般、其の家其の人に依りて、夫々の新年の儀が行はれることであるが、先づ以て靜坐して其の心念を淨め、妄念亂想を打靜め、氣息を調へ姿勢を正しうし、暫時なりとも三昧に住するが宜いと思ふ。是

きも皆な此の御行持の精華であらせられます。

明治天皇が東北地方に行幸あらせ給ひし時の如き『おほみやのうちにありても暑き日をいかなる山か君はこゆらむ』、『初雁をまつともなしに此の秋は越路の空のながめられけり』と詠ぜられました。其の御親情の濃やかなる、貴とくもまた有り難き極みではありませんか。其の折、國民が聖上陛下に接近し奉りて君民の情を更に幾段の深厚を加ふべきを察したまひては『松島やをしまのあまも此の夏はめぐみの波に袖ぬらすらん』と詠じたまはれた。露國と戰を交へられし頃などは軍人の身を思ひ遣りたまひ『たゝかひのかちの便りを聞く每にみいくさ人の身を思ふかな』、『たのもしき何はあれども戰に勝たではやまぬ大和魂』等の御詠があらせられた。

要するに陛下は昭憲といへる御追號の通り御一代の御聖德は日月の如く昭らかに能く中外を照したまひ其の一動一靜が盡く萬民の芳範となり千載の懿型となりたまはれたのであります。而して其の御詠は全く我國の大陀羅尼にして、無量の妙義、最勝の道德も亦自づから此の中に備はつて居ります。故に苟も我が帝國々民たる者は、明治天皇の御製と與に永く陛下の御歌を記憶し奉り、以て益々其の御懿德を追慕し奉ると共に、今後一層吾人の道德を修養せねばなりませぬ。

御心の露はれならざるはありませぬ。『國のためくだしたまひしみことのりかしこさになく君がみよかな』『つたへこしふみありてこそ知られけれとほつみおやの神のみいづも』の御詠を拜しても、如何に御坤徳厚くましまして其の御徳の裏には確固たる根柢のおはしますことが拜察されるではありませんか。皇祖皇宗の御遺訓と、明治天皇の御叡旨とを體したまひて、以て國家の隆盛を御禱り下されたのであります。

尚ほ陛下が御信仰の深くおはせしことは今更申上る迄も無いことであるが、取分け、明治天皇御崩御後は御涙の乾かせたまふ間とてもあらせられず、毎日、御簾深く垂れこめさせたまひて、御机に御凭り遊ばされ頻りに御筆を運ばさせられ、殊に觀音普門品を御淨寫遊ばれし時の如きは、近侍の人々より『左樣に日々御筆をのみ運ばせ給ひ且つ御寫經あらせらるゝはそも如何なる御思召し立ちにておはしますか』と伺ひ奉りけるに、『此の程さるものに聞き及びつれば、國民として先帝の御冥福を祈り奉らんが爲めに色色の功德を積む者多しとぞ、されば毎日普門品を寫經して同じく御冥福を祈り奉るなれ』と仰せられ、御寫し濟みの後、村雲尼公に特旨を以て御下附あらせられたと承はつて居ります。

又、陛下は佛教に對せられその御見地も實に公明正大にてあらせられ、常々に、『佛の道はたゞ後生ありとのみにて信仰すべきに非ず、此の道は現在の人の心を修めて而して後の世の功德を積ましむるものぞ』と御仰せ遊ばされたと承はつて居ります。陛下の御坤徳は凡て崇高圓滿なる敬神奉佛の御信念より彰はれさせたまふに依て、其の御行持の如きは八面玲瓏、內外瑩徹して居らせられる。從つて平生の御詠の如

彼の誰も知る『水の器』の御歌は『水は器に隨ひて、その樣々になりぬなり、人は交る友により、善に惡に遷るなり、己れに優るよき友を、選びもとめて諸共に、心の駒に鞭うちて學の道を進めかし』といふのである。此の御歌は獨り修學者の好敎訓たる のみならず、佛敎修養の上にも、殊に剴切なる御聖諭であります。

『能は境に能たり』と信心銘にもある如く、人の心は境遇に依て色々に變り易いものです。廣き意味を以て見れば、御互の目に觸れ耳に觸れる者は皆な友といはれる道理があります。聖賢の書を繙けば自づと修養の資けとなる。卑猥なる文章を讀めば自づと妄想を惹き起すものである。併し、廣い世界の中に於て森羅萬象の間に在る吾々なれば、如何なる時と處とを擇べばとて、決して修養に適する境遇にのみ觸れるといふ譯には往かぬ。故に吾々は常に自己の觀念を養ひ、以て蓮華の淤泥に染まらざるが如くなるを要す。論語に『君子九思あり、視るには明を思ひ、聽くには聰を思ひ、色は溫を思ひ、貌は恭を思ひ、言は忠を思ひ、事は敬を思ひ、疑ひは問はんことを思ひ、忿りには難を思ひ、得るを見ては義を思ふ』とあるも、觀念の標準を示されたものである。

陛下の如きは殊に平素の御觀念が淸く正しくあらせられたるに依て、御歌を拜してもその一々が尊き大

第十一に『寧靜』の徳は、小事を以て心を動かさず大事に臨むでも心を亂さず、常に其の精神を落付て泰然自ら守る所あるをいふ。御歌は、『いかさまに身は碎くともむら肝の心はゆたにあるべかりけり』といふのである。此の身は努めて活動するが宜い。併し、精神は見聞の爲に亂されずして泰かに平らかなるを要す。二宮尊徳は常に不動尊を信じて、人は不動の精神が無ければならぬと申したそうです。此の不動の精神が宗教的安心の基ともなるのであります。

第十二に『公義』の徳『國民をすくはん道も近きよりおし及ぼさん遠きさかひに』フランクリンの所謂『人に損害を加ふること勿れ、己の施すべき恩惠は之を人に與ふるを怠る勿れ』で、凡て社會公共の爲めに盡すのが徳義である。されど一國の爲めにする者は一家を齊へさるべからず。一家を齊へんと欲する者は一家の家族に對する義務を盡さゞるべからず。夫婦とか親子とかいふも社會の最も單純なるものであるから、此等相互の間に於ける正義を盡し、進では向ふ三軒兩鄰りを始め、漸次に天下公共の爲めに徳義を守る樣にせねばならぬ。口に國家の爲めなどといひながら、鄰人の不幸をも顧みず、口に天下の爲めなどと稱しながら鄕閭の難儀をも度外にしたりする樣では、決して公義を全うすることは出來ませぬ。

以上十二の徳目と御歌とは最も深遠なる意義を含蓄して居るに依て、益々その內容を探究し、且つ其の應用を擴張したならば、所有人間の道德は盡く此の中に收め盡すことも出來やうと思ひます。

第七は『溫和』の德『みだるべきをりをばおきて花櫻まづ笑むほどをならひてしがな』櫻花は美しきものにはあれど、嵐に亂れ散る樣などは甚だ哀れ深きものです。霞の中に綻び初めたる笑ひ顏こそ天眞の微妙を彰はして得も言はれぬ風情がある。人も亦常に是の如く柔和しく麗しき心を有たねばならぬ。忍辱の心、慈悲の德あれば其の容貌風采より立振居舞まで優に柔和しく麗しきものであります。

第八は『謙遜』の德『高山の影をうつして行く水の低きにつくを心ともがな』水は高山の影をも寫す德がある。されど下へ〳〵と流れて少しも高ぶる素振はない。吾々も亦高尙なる志を抱き、人に勝りし力量を有するとも、決して傲り高ぶる心を起してはならぬ。釋尊は常不輕の行ひを修めたまひ、如何なる者に對しても輕蔑の念を起されなんだとある。此の德が益々向上して息まざる願行力となるのであります。

第九は『順序』の德『奧深き道も極めん物事の本末をだに違へざりせば』物に本末あり事に始終あり、何事にも順序を履まざれば規律を正うすることは出來ぬ。彼の投機的事業とか博奕とか其の他盜賊の類の如きも、皆な此の順序を無視するより起る慾望であるから、人をも損じ、倂せて己れをも損するに至るものである。九仞の功は一簣より始まる。大功を成さんと欲せば宜しく小事に愼むべきである。

第十に『節儉』の德『呉竹のほどよき節をたがへずば末葉の露も亂れざらまし』竹に上下の節あるが如く、己れを處するには必ず自ら適當の制度を定めて其の分限を踰えざらんことに注意すべし。是れ卽ち節儉である。安分知足は至富の法、分を踰え欲を恣にするは窮乏の本であります。

語、猥褻の語は啻に他人に迷惑を與ふるのみならず、己れの品位を傷つくることも亦甚だしきものである。多言は過ちに陷ゐり易く多辯は德を害し易し、故に言語を妄りにすること勿れ、是を沈默の德といふのである。

第五に『確志』の德『人心かゝらましかば白玉の眞玉は火にも燒かれざりけり』確乎不拔の志なかりせば何事をも成し遂ぐることは出來ぬ。一旦かうと志を起したのが發心で、その志が思想の中心となつて實行の基礎を造つたのが決定心、その決定心が如何なる場合にも動搖せないのが相續心である。此の三心の備つたのが、確志であります。一時的の志は人造の玉の如くにして損し易いが、心のドン底から發したる志は、眞玉の火に入りても燒けざるが如く順境に處しても逆境に處しても毫も改變せぬ。凡そ、事を爲し一業を起す、必ずや此の確志を存せねばならぬ。佛菩薩の御誓願といふも此の確志のことであります。

第六に『誠實』の德『とりどりにつくるかざしの花もあれどにほふ心のうるはしきかな』誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり。造り花は如何ほど巧みに出來ても香がない。心に誠實の德なき時は、如何に外部を飾ればとて決して人を感動せしむることは出來ぬ。又、始終を全うすることも出來ぬ。故に起信論には直心を說き觀經には至誠心を說き、維摩經には『直心是れ道場』とある誠實は實に信仰の基礎であります。

を定め之を壁上に書して日常己れを戒めたる事に就て御進講申上げたるに、陛下には御感斜めならず、畏くも十二徳の節目を御歌に詠ぜられたまうたと承はつて居ります。其の御歌といふは、

第一が『節制』で『花の春紅葉の秋の杯もほど〳〵にこそくままほしけれ』酒に量なし亂に及ばず、要は節制如何に依りて藥ともなれば毒ともなる。フランクリンは『昏迷するに至るまで飽暖すること勿れ、酩酊するに至るまで痛飲すること勿れ』というたが、獨り飲食物のみならず、何事にも規律節制を守りて過不及のなき樣にせねばならぬ。中庸を保ちて其の身を節するのが修養の基礎であります。

第二が『清潔』で御歌は『白妙の衣の塵は拂へども憂きは心の曇なりけり』といふのである。衣服・身體・家屋を清潔にするのみならず、進んでは心の塵をも拂ひ淨めねばならぬ。有形の塵は拂ひ易く無形の垢は淨め難し、精神の修養といふも、畢竟、清潔の實行である。佛の淨土といふも皆な清淨心より生ずるものであります。

第三に『勤勞』の徳の御歌は『磨かずば玉の光りは出でざらむ人の心もかくこそあるらし』といふのである。人間は其の天性に於て智能も徳性も具はつて居るが、教育・修養の力を借らざれば現はれませぬ。その代り、若し教育・修養の力を施して息まざる時は、神とも佛ともなることが出來るのである。故に光陰を無益に過す事なく、常に必らず有益の事を勤め不要の事を廢さねばならぬ。

第四に『沈默』の徳『過ぎたるは及ばざりけり假初の言葉もあだに散らさゞらなん』無益の語、無義の

も常盤の松の霜雪に色を變ぜぬ如く、所謂八風吹けども動ぜざる底の禪定力を御備へ遊ばされたのである。

六に智慧とは眞正なる知識である。陛下の御智慧は、進んでは其の天職を盡したまふに於て寸毫の誤り無く、退いては其の本分を守りたまふに於て微塵の過り無く、公明正大、寶鏡の能く萬物を鑒みるが如くにてあらせられた。『獨りのみ思ふ心のよしあしを照し分くらん天地の神』といふ御歌の如き、端麗至誠なる御信念の上より發したる御智慧であらせられますから、『花になれ實をも結べといつくしみ生したつらむやまと撫子』といふ御詠の如く、陛下御自らが花をも實をも具へさせられ給うたのである。文彩や儀禮に慣うても其の本分を自覺せざる時は、恰も花ありて實なきが如し、又、其の天職を自覺するも文藻も無く禮讓も無ければ、譬へば實ありて花なきが如くであつて、倶に圓滿なる智慧とは申されぬ。獨り陛下に至りては内に覺悟する所の實智と外に發揮する所の權智とを完全に具備したまうていらせられたのである。甚だ恐れ多き申分かは知らねど、陛下は實に大菩薩の權化にして、無上最勝の大願行を成就あらせられたのであります。

十二徳の御詠

陛下の御詠たる十二徳の御歌は、國民の寶典として永久に拜誦し奉り信受し奉るべき御教訓であります。此の御歌は明治八年の頃、侍講元田永孚氏が御前に於て、ベンジヤミン・フランクリンが十二の徳目

じさせらる。かく下々の事情に通曉させたまふのは、皆な御慈念の深くおはします爲であります。

二に持戒は德行の正しきことです。陛下の御行狀の淸く正しく麗はしくおはしませしことは今更申上げ奉るまでも無い。されば讀書言志の題にて『夜光る玉も何せむ身を照すふみこそ人の寶なりけり』の御歌の如く、陛下は常に聖賢の書を讀みて彌が上にも御修養怠らせられなかつたのであります。

三に忍辱は忍耐力である。霜後殘菊の題にて『霜をへてなほこそかほれ大君のかざしとなりし白菊の花』といふ御歌もあらせらるゝが、陛下の忍耐力も亦恰も霜に逢うても凋まず益々香豊なる白菊の花にも勝る御氣象であらせられたのであります。

四に精進は勉學力のことである。彼の金剛石の御歌の如きは、全く陛下の常に實踐したまへる御勤勉の德の相である。『金剛石も研かずば珠の光りはそはさらむ、人も學びて後にこそ眞の德はあらはるれ、時計の針の絶間なく廻るが如く時の間の、日影惜みて勵みなば如何なる業か成らさらむ』なんと有り難き御敎訓ではありませんか。

五に禪定とは一心の落着である。陛下の御心は玲瓏珠の如くにて微塵の曇りだもあらせられぬ。『よき友に交はる人は自づから身の行なひも正しかりけり』といふ有り難き御歌もあらせられるが、陛下御自身に於かせられても萬事萬端、此の御歌の如き御心を以て御修養遊ばされたのであります。松不レ改レ色の御題に『君と臣の心の色にうつさばやいつもかはらぬ松の綠りを』といふ御詠があるが、陛下の御貞德も亦恰

とりて教を天下に立つるの意である。禮の内則五帝憲の註には『其の徳行に法とる』ともある。說文には『憲は敏なり、目と心と應ずるを敏と爲す』とあり、謚法には『博聞多記を敏と爲す』とある。要するに智慧德行兩ながら備はりて、以て天下の典型とも萬世の儀表ともなりたまふをいふのであります。

皇太后陛下は其の御坤德、圓滿宏大にあらせられ、一動一靜、盡く範を天下に垂れたまひ、光明瑩徹、遠く萬世を照したまうて居らせられます。其の御懿德の精華が御文藻の上に形はれては多くの御歌となりて、片言隻字も御慈悲の御教訓ならざるは無いのである。依て今席は其の御歌の一部を拜誦し奉りて、御聖德の一端を稱揚し奉りたいと思ふのであります。

我が佛教に於ては、菩薩の六波羅蜜行といふことを最も大切なる行持として居る。三世の諸佛も皆此の六行を修めたまひ、十方の菩薩も亦皆此の六行を習ひたまふのである。自利々他の功德は盡く此の六行より生ずるのであります。即ち布施と持戒と忍辱と精進と禪定と智慧との六行です。

皇太后陛下の御歌を暫らく此の六行に配し奉りますれば、先づ布施とは慈善である。陛下の御慈愛は大海の窮り無きが如くにして、殊に窮乏を拯ひ孤獨を愍みたまひし事は數も量りも無い。御歌に『あやにしきとり重ねても思ふかな寒さおほはむ袖もなき身を』雲深き九重の宮殿に在しても民草を思召したまふ御心の尊とさ忝なさは言の葉にも盡されませぬ。樵路雨の題にて『いたゞきの眞柴しめりて重からむくだる山邊に雨そゝぐなり』漁村の題にて『妻も兒も出るを見れば海士小舟濱村近くこぎかへるらし』と詠

昭憲皇太后御詠法話

最勝の願行

我が至聖至慈にて在しましたる皇太后陛下は、御崩御後三十日祭の前一日即ち本年五月九日を以て、聖上陛下親しく御追號御奉告の御儀を行なはせられ、直ちに國民一般に御告示あらせられました。その御追號は昭憲皇太后と申し上げ奉るのであります。皇太后陛下の御坤德の偉大にてあらせ給ひしことは、到底、如何なる文字を以てしても、其の御懿德を表明し奉ることは出來ぬことでありませうが、『昭憲』と御追號あらせられし御文字の如きは、其の意味深長なるを以て、能々之を玩味し奉る時は、自づと御德行と御天性とを拜し奉ることが出來やうと思ひます。

昭の字は明也光也著也と注し、易には『君子は以て自ら明德を昭かにす』とあり、詩の大雅には『於天に昭かなり』とあり、書の舜典には『百姓昭明』とある。要するに、御德の光りが日月の如く萬物の上に漏れなく輝き渉るをいふ。憲の字は法なりと注し、書の説明には『維れ聖維れ憲』とある。是れ聖王天に法

仰せられた。若し吾々にして、能く至誠にして僞り無く、明智にして迷ふこと無ければ、此の心是れ鏡にして自づから神心と一致することが出來るのである。

明治天皇の御製の一部分を拜誦して餘のかたじけなさに、吾が禪門修養の上に擬し奉りて述べましたるは、實に畏れ多いことながら、吾々御互が以上述べたる意味を以て實踐躬行に怠ることが無かつたならば、眞正なる智德も自づと開發して、必ずや國民の道德を全うし、且つ佛敎の玄旨にも證契することを得るであらうと思ふ。然れば是ぞ正しく、明治天皇の御鴻恩に報い奉る所以にして、やがて今上天皇陛下の御叡旨に副ひ奉る所以であらうかと察し奉るのであります。

れてある。

此の祖訓を能く參究して貰ひたい。自己を習ふとは自己の本性を啓發し智德を莊嚴することである。自己を忘るゝといふは自己の妄想我執を放下することである。萬法に證せらるゝといふは天地の公道に一如ならしむることである。自己・他己の身心を脫落せしむるとは、自他平等の佛陀の大光明と融合し神明の至誠心に同化することであります。

昔より流れつきせぬ五十鈴川なほよろづよも澄まむとぞ思ふ

榊葉にかけし鏡をかゞみにてひとも心をみがけとぞおもふ

打ちむかふたびにこゝろを磨けとやかゞみは神のつくりそめけん

此の御歌の御心を能々正思惟して見るが宜い。我が大神の御心は取りも直さず天地の靈である。天地の靈は道の大本である。故に五十鈴川の水は永遠に澄み渡りて濁ること無し。此の濁り無き神の御心に叶うてこそ忠孝の德も全うせらるゝのである。且つ鏡は神の授けたまふ所の物、皇祖の神鏡を天孫に賜ふや、『此の神鏡は專ら我が神魂となして吾前に拜くが如く齋き奉れ』と詔らせ給うてあります。さすれば鏡は神魂である。其の性は堅固にして破るゝこと無く、其の象は圓滿にして缺くること無く、其の德は光明にして昧すこと無し、神心は常住なり、圓滿なり、而して、光明映徹して能く羣類を照し、能く暗黑を破る。我が佛教に所謂佛性の妙德である。故に高祖大師は『諸佛諸祖の受持し單傳するは古鏡なり』とも

こと無き御光である。此の御光と感應道交まします明治天皇は實に是れ光明遍照十方世界の御神靈であらせられるのであります。吾々御互も、甚だ恐れ多い事ながら此の貴き御德を最好標準として、以て大心を養ひ大心を現はしてゆくのが、正しく禪門の信念なり修養なりであります。

或る博士が宗教の要素を論じて、第一に超人格的勢力に對する信仰。第二に希望、その希望の種類を三種に分類し、一は健康に關する希望、二は財產に關する希望、三は戀愛に關する希望であるというて居る。此の外、幾多の要素を列ねて說明せられてゐるが、今は直接に必要も無いから一々紹介はせぬ。此の希望を單に健康と財產と戀愛との三種に限つたのは、信仰の內の最も淺薄なるものと、迷信に囚はれて居るものとを擧げて說かれたので、其の說明の餘りに愼重を缺て居らるゝのに驚きました。是の如く物質的欲望と性慾との滿足を以て信仰の希望としたならば、宗教なるものは實に淺ましきものと申さねばならぬ。こんな考へで宗教を見たならば、それは全く宗教上の盲目漢であります。殊に我が佛教の如きは決してそんな處に信仰の根據を置くものではありませぬ。

佛教信仰の希望は轉迷開悟である。自利々他の功德を成滿せんが爲めである。宇宙の大精神と融合し天地の妙德を自己の上に實現し、自ら佛陀の境界となり神明の御心を體して、普く法界の羣類を利濟せんが爲めである。我が高祖大師は『佛道を習ふといふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝといふは萬法に證せらるゝなり、萬法に證せらるゝといふは自己の身心及び他己の身心をして脫落せしむるなり』と仰せら

りはせぬかといふ恐れもあるのでございます。一方には黄金萬能主義の思想が精神道德の根柢を破壞するの傾向あり、生活難の結果は種々の惡德を暴露し、投機的思潮は民心の一部を侵蝕し、物質的文明の競爭は人心を驅て虛飾虛榮に奔らしめつゝありはすまいか。或人は奢侈の風、詐欺の流行、利己的思想、因循と遊惰と懦弱との弊あることを擧げて現代を警戒したが、全く杞憂とのみはいはれまいと思ふ。

そこで前に申した至誠の德を、普く國民の中心に堅く植付けるといふことが最も大切である。戊申の詔書に『上下心を一にし忠實業に服し勤儉產を治め、惟れ信惟れ義、醇厚俗を作し、華を去り實に就き、荒怠相誡め、自彊息まざるべし』と仰せられたは、正しく此の至誠の德に附帶せる必須の條件であります。

明治天皇は深く至誠の美德に富ませられ、其の御玉體の全部がソツクリ至誠の結晶體にて渡らせられたのであります。此の御至誠を以て皇祖皇宗に對せられ、御崇敬の御心の深厚にておわせしことは、殆ど皇祖皇宗の異體同心にて居らせられたのであります。御製の內に、

目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけり

わが心及ばぬ國のはてまでもよるひる神はまもりますらむ

かみつ代のみよの掟をたがへじとおもふぞおのが願ひなりける

といふ御歌があらせられる。至誠の御心を以て正直淸明の御神に對せらるゝ、恰も鏡と鏡と相對して中に彩像なきが如し、わが心及ばぬ國の果までも守りまします大神は、實に是れ天地を照鑒して、漏したまふ

は人の道なり、誠は勉めずして中り思はずして得、從容として道に中るは聖人なり』とあります。維摩經に『直心是れ道場』とあるも亦全く、至誠の心が卽ち成佛の道場なるぞとの意である。昔、一僧ありて藥山禪師に『如何なるか是れ道中の至寶』と問うた。禪師は之に答へて『莫謟曲』といはれた。謟曲は至誠の反對である。

御製に

人はたゞまことの道をまもらなむ高きいやしきしなはありとも

あめつちを動かすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

千早振神のこゝろにかなふらむわがくに民のつくすまことは

と仰せ遊ばされしは、いかに貴き御聖訓ではありませんか。

縱ひ人に上下貴賤の差別がありとも人の人たる道德を全うせんには、必ずや誠の道に依らねばならぬ。此の誠の道が言語の上に現はるれば、能く天地をも動かすの力がある。國民全體が此の誠の道を以て能く國家に盡せば、能く國運發展の基本を固むることも出來る。

然るに今日の我國の現狀は如何でございませう。國家の進運は駸々として息むこと無く、明治天皇の御盛德は天地覆載の恩力にも似て、僅々四十餘年の間に於て燦然たる東洋無比の文明國となつたのであるが、併し、他の一面より見れば、我國民の精神內に蟠まれる至誠の德が、動もすれば漸次に動搖を來しつゝあ

ることが出來る。楠公の大安心も亦た全く此處に在るのでございます。

修養の基礎

以上の如き三種の心術を備ふるは修養上最も大切なる要件であらうと思ふ。申すも畏きことながら、明治天皇は實に此の御徳を圓滿に御備へ遊ばされて居らせられしものと察し奉るのであります。而して此の御徳を御備へ遊ばされし其の本は、全く御信念に在ることかと察し上げるのであります。明治天皇の御信念は至誠眞實にして八面玲瓏、些の缺點もおはしまさぬ。吾々の信念は兎角に種々の混入物がありたがつてならぬ。

抑も信念の基礎は清明正直である。卽ち至誠である。至誠の徳は中庸に所謂『君子の道は費にして隱なり』である。費とは廣大にして見るべく隱とは幽微にして測るべからざるをいふ。至誠の徳は心の奧底より發して自づと言語進止の上にも現はるゝと雖も、其の心の奧底は、到底、凡人の凡智を以て測るべきものではない。

明治天皇の御心は珠の如く清く花の如く麗はしく、寸毫の汚れもあらせられず一點の塵だに留めさせられず、自づから天地と其の徳を同うし日月と其の明を同うして居らせらるゝことは、其の御左右を承はり其の御製を拜しましても明らかに感じ奉るのであります。故に中庸に『誠は天の道なり、之を誠にする

申した。併し、唯だ己に克ち私を制するのみではならぬ。更に進で道を明らめ道を守りて、其の心に大に安んずる處がなければならぬ。

建武三年、楠公が湊川にて戰死の際、明極楚俊禪師に謁して『生死交謝の時如何』と問うた。時に禪師は『兩頭倶に截斷して一劍天に倚て寒し』と答へた。兩頭とは生死のことである。生死ありと見るは一時の假の相で、實體には生死は無い。故に、般若の智劍を提げて生死の相を截斷せよ。さすれば天地法界は實相般若の妙體であるぞとの答話です。公は更に『落處作麼生』と問はれた。即ち結着に就ての一大事である。禪師は忽ち大喝を下した。此に於て公は通身汗を流して禮拜せられ、洞然として生死の一大事を究盡し、遂に七生報國の誓を立てゝ壯烈なる戰死を遂げられた。此の時に於ける公の眼中には、唯だ未來際を盡して國恩を報ぜんとの忠義三昧のみありて、更に生死の相に迷はれぬ。是れ公の偉大なる精神の存する所であります。

此の精神の中に永遠の希望あり、悠久の目的ありて、寸毫も迷ふ處が無い。恰も朝日の天に昇り、明月の水に印するが如く、光明古今を照し清影天地に輝くの光景があるではありませんか。是れが其の心を大海にして去つた境界であります。大海は百川を容れて漏らさず、清水も、濁水も、大河の水も平等に接して、盡く一大海水に同化するのが海の德である。吾々も日月の如き心を有つたならば、順境に處しても其の光りを昧まさず、逆境に在りと雖も其の影を亂すこと無く、萬里一條鐵に心地の光明を發揮す

さしのぼる朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり
わが心いたらぬくまのなくもがなこの世を照す月の如くに

實に有り難き大御心ではありませんか。

凡夫の心は兎角にケチ〳〵して瑣々たる事にも執着の念が強いから、常に見る物聞く物の爲めに束縛せられて、一生安心の分がない。故に、朝綠すみ渡りたる大空の、一點の雲だも無く、幾萬億里といふ限りも無きが如き廣き心を持つ樣にせねばなりませぬ。又、朝日の東天に昇りて全世界の暗を破り、大光明を放ちて普く萬物を照すが如く、又は、明月の中天に輝いて影を百川に浮ぶるが如き、所謂光風霽月とも謂つべき淸らかに且つ麗しき心を有たねばならぬ。

全く心の亂れたり動いたりするのは、一は妄念妄想があるからで、一は心に守る所が無いからである。故に先づ妄念や邪念を打拂ふことが第一です。禪門の師家が時としては惡辣の手段を用ゐて、或は棒を行じ、或は喝を下して、寸毫も假借する所なきは、主として妄念邪念を打破するの手段であります。參禪する者も亦た道の爲めには一身を捧ぐるも惜まずといふ氣槪があつたのである。何事を爲すにも己に克つの工夫が必要です。故に遺敎經には『此の五根は心を其の主となす。故に汝等當に心を制すべし』とあり、涅槃經には『心の師たらんことを願うて心を師とせざれ』とある。論語にも『己れに克ち禮に復るを仁と爲す』とある。トーマス・ブラオンも『戰て敵に克つよりも己の熱情に勝つ者は却て眞の大勇なり』と

順逆の渦中に處するも其の操を變ぜざる底の心である。是れが禪の禪たる三昧力です。高祖大師は是を釋して『其の心を大山にし、其の心を大海にし、偏ねく黨なき心なり、兩を提げて輕しと爲さず鈞を扛げて重んずべからず、春聲に引かれて春澤に遊ばず秋色を見ると雖も更に秋心なし』と仰せられてある。此の大心こそ禪の眼目とする所です。其の心を大山にすとは、山には不動の德があつて、東西南北如何なる風が吹き來るとも一微塵も動着せぬ。吾々の心も亦是の如くならねばならぬ。

昔、景春が孟子に向て大丈夫を論じた時、孟子は眞の大丈夫を說明して『天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ひ志を得れば民と之に由り、志を得ざれば獨り其の道を行ふ、富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、此れ之を大丈夫と謂ふ』というてある。卽ち、公明正大なる位地に立て能く道を行なひ、志を得て其の職に就く時は衆と共に樂しみ、志を得ざる時は己獨りにて其の道を行ひ、如何なる境遇に處し如何なる事情に迫らるゝとも、毫も其の志を動かさゞる者が眞の大丈夫であるといふ意味である。

然るに吾々御互は、兎角に心の駒の手綱が弛み易くて困るものです。此の不動心を養ふには是非とも定力に依らねばならぬ。定力とは一心を寂靜にして、意識が散亂したり、感情が激發したり、意志が混線したりせぬ樣なる習慣を造ることである。御製に斯う云ふ御歌があります。

あさみどりすみ渡りたる大空のひろきををのが心ともがな

こと殆ど絶倫である。されば御製にも詠まれてあります。

　照るにつけ曇るにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと
　夏の夜もねさめがちにぞあかしけるよのためおもふこと多くして
　國のためあだなすあだはくだくともいつくしむべきことなわすれそ

ねてもさめても國民の事をのみ思召して、御身の御艱苦をも忘れさせられ、寒さ暑さすらも御感じ遊ばされぬ程の御慈悲であらせられた。

　まつりごと出てきくまはかくばかりあつき日なりと思はざりしを
　賤がすむわらやの樣を見てぞ思ふあめかぜあらきときはいかにと
　とこしへに民安かれと祈るなるわが代をまもれ伊勢の大神

『佛心とは大慈悲是れなり』とは觀經の金言である。明治天皇の大御心は廣大圓滿なる佛心の發露と見奉るの外は無い。兎角に、禪者は知見にのみ走りたがる爲め、動もすれば溫情を缺くの恐れがある。佛祖を驀過する程の大機を撥轉すると同時に、胸中萬斛の涙を湛へるの慈念が無ければなりませぬ。菩薩には三時の涙がある。卽ち長上に對しては敬愛の涙を流し、他の善根を見ては歡喜の涙を濺ぎ、苦惱の衆生に接しては哀憐の涙に咽ぶ、此の涙ありてこそ献身犧牲の精神も發するのである。

　次に大心といふは所謂大丈夫の心、卽ち金剛不動の精神である。水火の間に投ずるとも其の心を動ぜず、

ことの出來るものではありませぬ。

慈悲と安心

次に老心といふは慈悲同情の心である。年老たる父母が其の子孫を愛するが如く、全く天眞の情より出でゝ毫も報酬の如何には拘はらぬ。所謂無我の愛念、無條件の慈悲であります。殊に我が禪門に於ける慈悲心は、天地同根、萬物一體の見地より現はれたる佛性の發動であるから、他を見ること己の如く、一切衆生を視ること同胞兄弟よりも切なる眞情が、恰も泉の湧くが如くに本心の底より迸り出るものである。此の老心が萬境に應じて其の妙用を現はし、所謂大君に對し奉りては忠となり、父母祖先に對しては孝となり、兄弟には友愛となり、夫婦の間には和合となり、朋友には信義となり、社會人類に對しては博愛となる。獨り人類の上ばかりで無く、其の愛念は禽獸蟲魚にまでも及び、草木國土をも包容せずといふことは無いのである。

人間の本心を害するものは貪慾と瞋恚との二つが其の重なるものであるが、老心一たび發すれば貪慾・瞋恚は自づから消滅するものです。苟も慈悲ある者であつたならば、どうして他人の財物等に對して貪求の念が起りませう。又、縱ひ如何なる惡人・邪見人に出逢ふとも、毫も憎み恨む心などの發すべき餘地は無い。否、却て益々彼等を濟度せんとの念が強くなるものです。明治天皇の御仁德は、其の御深厚なる

おのが身を修むる道はまなばなむ賤がなりはひいとまなくとも

とる棹のこゝろながくも漕ぎ寄せむあしまの小舟さはりありとも

自己の尊重なることを知らば、何して此の身を徒らに過さるべきや、人として耻ぢざる者とならねば人に生れし効は無い。啻に人として耻ぢざるのみか、吾々は更に佛弟子として耻ぢざる徳を備へねばならぬ。『佛祖の往昔は吾等なり吾等が當來は佛祖ならん』その志だに堅固ならば如何なる道にも昇り得べし。縦ひ卑賤の身なりとも、心は花になさばなりなん。唯永久不磨の志操を有することが大切であります。かくしてこそ始て此の身の貴き徳性も現はれ、眞にその優勝なる果報を喜び樂しむことが出來る。明治天皇は國土を以て其の家とし國民を以て其の子とし給へば、其の御樂しみも亦格別であらせられた。

天の下にぎはふ世こそたのしけれやまのおくまでみちのひらけて

よろこびをいひかはしつゝ國々のをさまる時にあふぞうれしき

しづかにも世はをさまりてよろこびのさかづきあげん時ぞまたるゝ

所謂天下と共に喜び天下と共に樂しみ給ふのが明治天皇の大御心であらせられる。斯る貴き大君の御惠みを蒙りて、今後千代も變らぬ大正の御代に逢ひ奉る吾々の身こそ、實に難値難遇の勝縁ではありませんか。自ら此の果報を喜び、此の勝縁を樂しみなば、必ずや益々道に進み徳を養なひ、以て世の所有艱難にも打ち克ち、辛苦をも安々と凌ぐことが出來るものです。此の心得が無ければ迚も禪の妙味を會得する

無術、聲色に殉じ遊戲に耽るに反し、幸に卑賤に生れ、幼にして辛苦を嘗め、長じて事務に習ひ、師教へ友輔け以て其の智慮を益するを得たるは三の樂しみであるといはれた。實にや、人間に生れても不學無術にして、唯だ聲色の奴隷となつて空しく一生を過しては、人間に生れた效が無いと申さねばならぬ。

故に、眞に能く己を自覺して之を喜び之を樂しむものは、必ずや、內、己に省みて其の非を改め、外、道德を實踐して其の職分を盡すの覺悟が備つて來ねばなりませぬ。明治天皇の御製に反省の心得を御示し下されてある。

我とわがこゝろ折々かへりみよ知らず〱もまよふことあり

何事も思ふがまゝにならざるがかへりて人の身のためにこそ

つもりては拂ふ方なくなりぬべし塵ばかりなることゝ思へど

『生死事大、無常迅速、各々宜しく醒覺すべし、愼んで放逸なること勿れ』とは、禪門日用の龜鑑である。吾々の心は動もすれば妄動し易い。妄動して、而して、遂には萬物の靈たる德をも失却し易いものです。時々刻々に其の身を顧みて、苦痛をも堪へ、瑣々たる事をも愼み、朝な夕なに內心を調へもてゆくが、精神修養の基であります、是の如く、內、其の己を顧みると同時に、外、其の職分を盡さねば、永遠の喜びと樂しみとを持つことは出來ませぬ。御製にもこの點を詠まれてあります。

大空にそびえて見ゆる高嶺にものぼれば昇る道はありけり

つであります。
初めに喜心といふは歡喜の心であります。吾々は先づ第一に萬物の靈長たる人間の身を禀け、殊に東洋第一の文明國にして而も世界に比類なき國體と歴史とを有し、且つ神聖無比なる天皇陛下を戴き奉ることを得たる果報を喜ばねばなりませぬ。此の喜びの心が正しく己に對するの自覺であります。而して、一たび此の大自覺が發しますれば、從つて胸中に無限の樂しみが生じて來るものです。

孔子の時、榮啓期なる者が我に三の樂しみありというた。即ち一には人の身に生れたるを樂しむ、二には男子の身を受けたるを樂しむ、(是れは女子教育の道の開けぬ時代には當然の感想ですが、今日では此處を大日本帝國々民の身を受けたるを樂しむと訂正したいと思ふ)三には老て終りを取ることを樂む。(是は一生を全うすることを得たるを喜び樂しんだのであります。)

孟子の三樂は更に一歩を進めて居る。即ち『父母倶に存し兄弟故なきは一の樂しみなり、仰で天に愧ぢず、俯して人に怍ぢざるは二の樂しみなり、天下の英才を得て之を教育するは三の樂しみなり』といふのである。

徳川時代の鴻儒といはれし山崎闇齋が會津の藩主保科正之公に告げたる三樂は頗る時弊を警誡するの意味が含まれてある。即ち、萬物の靈たる人身を享けたるは一の樂しみ、昇平の世に生れて書を讀み道を學び古の聖賢と臂を一堂の上に把ることを得たるは二の樂しみ、當時の諸侯多くは婦人の手に長じ、不學

抑も禪門といふは坐禪を以て宗門の基礎とする所より名けたものであります。其の坐禪といふは、足を組み手を組みて端坐し、以て正傳の三昧に入り、此の身心に於て佛境界を顯現するの妙術であります。併しながら其の極致に達すれば、必ずしも坐る時のみが禪ではない。所謂『行も亦禪、坐も亦禪』で日常の起居動靜がソックリ佛心に相應して佛德を現はすのが禪の眞面目であります。故に六祖大師は最も適切に『此の法門の無障無礙、外、一切善惡の境界に於て心念起らざるを名けて坐と爲す。內、自性の不動を見るを名けて禪と爲す』と仰せられた。然らば、日用光中、外、萬事に當り萬境に對して、心念不起とて毫も妄念妄想を起さないのが坐で、內、自性の不動と、煩惱にも汚されず、罪障にも縛られず、生死去來の相にも拘はらざる本來具有の本性を徹見するのが禪である。言ひ換れば、自己心中の佛を悟りて、萬事萬境に佛德を發揮するのが禪であります。

佛といふは智慧・道德の妙體でありますから、佛を悟るといふは眞正なる智慧と圓滿なる道德を開發するので、つまり『智能を啓發し德器を成就』して完全圓滿の域に達したのが佛樣です。されば、成佛といふことは決して禪門のみの目的でもなく、佛敎のみの所期でもない。つまり、人道の目的、敎育の歸趨であります。

此の境界に達することはなか〳〵容易の業では無いから、吾々は、先づ三心というて、三通りの標準に依りて身心を調制せねばなりませぬ。その三心とは我が高祖大師の御示し下されし喜心・老心・大心の三

自覺の要

謹んで按ずるに、明治天皇の御盛德御大業は古今に秀でさせ給ひ、洋の東西を通じて稀れに見奉る所の大聖にて在せしことは今更申し上げ奉るまでも無いことである。而して其の御盛德の要素たる平素の御修養と優秀なる御智德とは、其の御事業の跡に就て明らかに窺ひ奉ることも出來るが、直接吾々臣民の腦裡に顯著なる貴き印象を御與へ下され、且つ吾々臣民の德性を涵養する上に偉大なる御敎訓を賜はりましたのが、御製の御歌であります。尤も、吾々は御製の全部を拜し奉ることは出來ぬが、其の一部分の、雲深き九重の天界より漏れ出でたるものを承はるに、全く活きたる神佛の御聖敎を拜し奉ると寸分變らぬ感じが致すのであります。否、正しく活きたる神佛の御敎訓にてあるのでございます。依て今は吾々が專門とする禪門の信條に照して、聊か御製の一部を拜誦し、吾々が日常修養の最高指導として、永久に其の御聖旨を服膺し奉りたきものと思ひます。

可らざる覺悟であります。

此の國家をして益々吉祥ならしむるの道は別でない。第一には國體の動かざること山の如く、護國の精神は津々浦々の隅までも行き渡り、國民の心は上下一體にして如何なる場合にも二心なく、御國の爲めには忠義の誠を捧げ、聊かも我が敷島の大和心を緩むることなく、古人が『命をも輕きになして武士の道より重き道あらめやは』と詠み『みことのり亂れぬ國のさはりなく豊葦原の國ぞ治まる』と詠ぜし歌の如き心を以て心とし、國憲は太陽の天に當るよりも明らかにして光の及ばぬ隈も無く、國威は富士山の東海に聳ゆるよりも高く列國の上に臨み、萬民業を勵んで國益々富み億兆徳を守りて道愈々明らかなりと云ふ様にせねばならぬ。是れが國家の吉祥を致す所以であります。

以上五の吉祥も其の根元は我等の心に在のでありますから、湯の盤の銘に『日に日に新にして又日に新たなり』とあるが如く、常に我等の心を清新にして淀なく、汚れなく發現せしめゆくことが肝要であります。

れ、皇后陛下は社會の秩序を亂さぬ樣に道を守ることを御祝ひ遊されてある。然れば社會の吉祥は我が大君の取分け御聖慮を煩はせられたまふ所であります。

國家の吉祥

第五に國家の吉祥と云ふは、申すまでもなく社會には各種の階級がある。其の各階級を包括めて一體となし、國體を定めて中心とし大君を戴いて主腦とし以て全體を統一したのが國家である。我國の如きは建國の始めより大君と臣民との秩序は確然不動に定まりて、爾來幾千年の今日まで一絲亂れず連綿相續せり。是れ實に世界萬國に類例なき最も貴き御國である。抑も吉祥なる國家と云ふは、敎育の御勅語に『朕惟ふに我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に德を樹つること深厚なり、我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我が國體の精華にして敎育の淵源亦實に此に存す』云々と御諭しくだされたのが是で、實に萬世不朽の國家の基礎であります。猶ほ今日は昔とは違ひ、世界列國との關係益々深くなるに連れ、國家としての責任は一層其の重きを加へて來た。故に、天皇陛下に於かせられては、明治四十一年十月十三日、特に我等五千萬の臣民に賜りたる詔書の初めに『朕は爰に益々國交を修め友義を惇し列國と共に永く其の慶に賴らむことを期す。顧みるに日進の大勢に伴ひ文明の惠澤を共にせむとする固より內國運の發展に須つ』云々と御敎へ下されたは、正しく我が國民の方針であり、我等國民の忘る

し、詐僞、泥棒、それは〱大變な事である。巡査さんが目を廻はし裁判官が欠息する暇も無い程であらう。人込の中に入れば巾着切がチヤンと控へて居る。眞面目になつて話をきけば半分以上は嘘か懸値がクツ付て居る。風俗は華奢に流れて男書生の紅粉、人情は浮薄に傾いて證文あつても安心がならぬ。先づ今日の社會は吉祥四分不吉祥六分と云ふ有様であらうかと思はれる。尤も、我國の文運は日に月に隆盛に進み、物質上の開明は驚くべき程ではあるし、殊に昔と今とは社會の形勢が違うて居る。拙衲は勿論東海の一仙島と云はれた時代を夢みて彼是申すのではありませんが、道德眼を以て今の社會を見たならば甚しき缺陷の有ることは誰でも否定する譯には參るまい。泰西式の理想眼を以てしても決して滿足なる社會とは申されまい。其の不滿足なる點を取調べて十分改善を施し、漸々に進歩向上して遂に滿足に至らしむるが佛教の本領であります。

故に我等佛教徒たる者は、率先して社會の風紀を改め教育の發達を謀り、各種有益なる事業を奬勵して、世界の模範とも爲るべき社會を造り固めねばなりませぬ。明治卅九年の新年に於ける、天皇陛下の御製には

天の下にぎはふ世こそ樂しけれ山の奧まで道のひらけて

と御詠じ遊され、皇后陛下も

天つ日の光をうけて位やま身のほど〲に昇る御代かな

と云ふ御詠があつた。卽ち、社會の隅々までも眞實の道の行はるゝを、天皇陛下は第一の御樂しみと思召さ

家内中なかのよいのが寶船、こゝろ安々世をわたるなり
船と水中よくてこそ世はわたれ心のあらき浪風ぞうき
世は海よ身は浮舟よ心をば舵ぞと思ひ深く愼め

と三首並べて書いてありました、一寸面白い趣向であります。斯くする時は大晦日が來ても驚かず、正月になつたからとて心に少しも緩みが出ぬゆゑ、益々家門太平である。或る商人の家の柱に『大晦日に晝寢すべし元日より算盤に向ふべし』と云ふ文句が貼てあると云ふが、此等も平日の嗜の程を示したものでありませう。

社會の吉祥

第四に社會の吉祥と云ふは、世の中の總體に眞實の幸福の現はるゝことです。此の目的を達することは中々困難の中の困難である。今の世の樣を見渡したならば所謂缺陷世界の狀態を遺る所なく露出て居るやうに思はれる。生存競爭の波に搖れて、多くの人の心は浮舟の漂ひつゝあるが如く、更に落着いた樣子がない。教育も未だ充分に行屆いて居るとは言はれず、道德は傷だらけ穴だらけ、一部の人は脚下がヒヨロついて定まらず、一部の人は鬱々として世をはかなみ、此方に無暗と欲張る者があると思へば彼方には喰はれさへすれば宜いなどと云うて呑氣に寢て居る者がある。親子の喧嘩、夫婦のいさかひ、火放け、人殺

身を受くるの因緣を結びたるは『願生此娑婆國土し來れり』で、前世に於ける大願力がありたればこそ此の娑婆國土に生れ來たのであらう。殊に『見釋迦牟尼佛を喜ばさらんや』で、易々と釋迦牟尼佛の御敎に遇ひ奉りたるは、面り佛樣に見え奉るも同然であるに依て、誰れか此の幸多き好因緣を喜ばずに居られませう。

之を喜ぶにつけても益々此の貴き身を疎略にせず虛しうせず、敎育勅語に御敎訓を下したまひし如く、『恭儉己れを持し博愛衆に及ぼし、學を修め業を習ひ以て智能を啓發し德器を成就し』て行かねばなりませぬ。こゝを伊藤仁齋は『思ひとれば此の身の外に道も無し身を守るこそ道を知るなれ』と詠まれてある。斯くの如く此の身がソツクリ道の器となつた時に眞の吉祥が現はれます。

家の吉祥

第三に家の吉祥と云ふは、家內中の人が、前に述べた樣に心も身も吉祥になりさへすれば、親も子も、夫も婦も、兄も弟も、主人も奉公人も、能く和合して、互に正直を守りて勉强し、互に堪忍を旨として儉約し、銘々が忠實に業に服するから何時でも家庭の內には春風の樣な溫かき空氣が漂うて、自然と家運が繁榮に赴きます。是が家の吉祥です。或る書物に『世は海なり、身は船なり、志は舵なり、舵の操り樣があしければ船覆るが如し』と書いて、下の如き三首の歌が記してありました。

あしきに似るななべて世の人の心は自在鍵なり』と云ふ歌の通り、斷じて煩惱の敵に生捕らるゝこと無く進んで、功德の福田を耕やすことに努めなば、精神上の大吉祥は即座に現はれて永く快樂と平和とを收むることが出來ます。

身の吉祥

第二の身の吉祥には二通の道があります。一は生存上の吉祥、他は道德上の吉祥である。生存上の吉祥とは、此の身は天地の恩力に依て生れ、父母の慈惠に依て成長したのであるから、飽まで此の身を大切にして十分健康に注意し、平生の攝生は申すまでもなく、特殊の場合に臨んでもなるべく無理に身體を毀傷せざらんことを心懸け、精々長く立派な大丈夫な體力を保存し、力を竭して其の天分の職務を全うするのが何よりの身の幸福と云ふものです。

次に道德上の吉祥とは所謂一身の品行を正しく守りて完全なる人格を具ふることであります。殊に高祖のお語にも『此の發菩提心多くは南閻浮の人身に發身すべきなり』とある通り、人間は萬物の靈長なるのみならず、其の智能、其の身體の構造及び其の境遇までが眞の菩提心を起し誠の道を行ふには最も適當であります。菩提とは佛道のこと南閻浮とは此の人間界のことです。三世の諸佛多くは此の人の身を受けたる時に於て實地の御修行を遊された。我等も亦た『今是の如くの因緣あり』で、幸にも受け難き人間の

りや蔓一筋の心より』である。

元來、一心の本體は佛性とも眞如とも云ひ、世の中では良心などとも稱して佛にも神にも變らぬものであるが、それを昧まして鬼にしたり大蛇にしたりするは、心の中に煩惱と云へる大敵があるからです。その煩惱とは見る上、聞く上に起る所の私情私欲、我慢我見であるから、其の數の多いことは無量無邊であるが、根本の大將は貪瞋痴の三毒である。卽ち、道を逸れてむさぼる貪欲と、非理に腹を立つ瞋恚と、眞理を辨へざる愚痴との三である。三界六道苦患の世界も人世の所有罪惡も皆此の三毒に依りて造り出される。故に、我等は修養の手始として此の煩惱の鬼を追拂ふことに努めねばならぬ。これが精神上の節分です。正信心の煎豆の力で煩惱の鬼が逃げ出せば忽ちに平和の福の神が入り代になる。こゝを白隱禪師の『寢惚の眼覺』には

高天原も我心、彌陀の淨土も我心、淸き處が神佛の、宿る處で御座るぞや、必ず心に惡心持な、嫉妬恨みは、地獄の元手、五欲妄想不淨の種ぢや、胸に妄想ある時は、心曇りて理が知れぬ。知れぬが故に迷ひが起る、迷ふが故に損がある、神や佛に嫌はれる、其處で聖人賢人も、いらぬ御世話を申すなり

云々と面白く書て置かれた。斯く心の鬼の恐ろしいことが知れると、自然に懺悔の念が起り、吾知らず佛法僧の三寶に歸依し奉りて眞の道を求むる樣になるものです。處が反對に此の鬼を可愛がつて『歡樂極つて哀情多し』と云ふことに氣が付き惡いから困る。お互は常に油斷なく我心を警戒して『よきに似て

何の爲めに勵むか、殖産興業は何の爲めに必要かと云へば、皆幸福と滿足と快樂と自由とを得んが爲めと云ふに歸します。唯だ其の範圍の定め方に依て善惡邪正の隔りが生ずる。自分だけの幸福を貪ぼつたり自身一家だけの快樂を求めたりして、他人の迷惑をも難儀も顧みぬと云ふ樣では人情道德の原理に反するから決して眞の吉祥を得ることは出來ませぬ。今、五大吉祥と云ふは、心の吉祥と、身の吉祥と、家の吉祥と、社會の吉祥と、國家の吉祥の五である。國家の要素は家庭にして社會の成分は個人の身である。而して、一身の善惡は心を以て本と爲す、故に此の五のものは相離るべからざる關係あるは勿論です。この五をして盡く吉祥ならしめたいと云ふが佛敎の本意で、政治も道德も敎育も經濟も決して此の理想を離れたものはありませぬ。

心の吉祥

第一に心の吉祥を得るにはどうすれば宜いかと云ふに、先づ心の中の大敵を追拂つて平和の位置に落着けることが肝要です。御互の心は修養の如何に依りて、花の樣に美くもなり玉の樣に淨らかにもなり、柳の樣にやさしくもなり石の樣に堅くもなる、若し少でもユルミが出ると、鬼の樣な角も生え棘の樣な刺も立ち、泥の樣に汚しくもなり芥の樣に不潔になる「曳かれなば惡き道にも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな』極樂も地獄も只一心の動く處に在り、佛の淨土も鬼の棲家も總て心が製造主である。所謂『せんな

五大吉祥

佛教の本義

吉祥と云ふ語は華嚴經の中に出て居りますが、我が高祖承陽大師が、今を距ること六百六十餘年(明治四十二年より)寛元二年に只今の大本山永平寺を御建立遊ばされ、山號を元は傘松峯と號せしを『燃燈如來大功德、諸吉祥中最無上、諸佛倶來入此處、是故此地最吉祥』と云ふ偈を御唱へになつて、吉祥山と御改めなされた。

吉祥と云ふ文字は何れも『サイハヒ』『ヨシ』と訓じて、つまり幸福と云ふ意味であります。殊に說文には『理を得て失はざるは吉なり』とあるから、委しく申せば、吉祥とは道理に基く善良なる幸福といふことで、最もお目出度語であります。要するに自他内外に於て、禍なく、憂なく、苦しみなく、不自由なく、極幸で極喜はしく、極樂しみな極自由なのが吉祥です。

抑も人の目的は何であるかと云へば、吉祥を得ると云ふの外はない。政治は何の爲めに施すか、學問は

活の本旨をも貫徹し、我が帝國をして錦上に花を舖くこと百千萬重たるの大理想をも實現し得られることと思ふ。是れ報國三昧の活機輪である。」

く、微塵の野心も無く、所有嫉妬・猜忌・邪推・妄想等の無い光風霽月の境界で無ければならぬ。明治天皇の御製に『あさみどり澄み渡りたる大空のひろきを己が心ともがな』『さしのぼる朝日の如くさはやかにもたまほしきは心なりけり』と仰せられしは實に有難き御示しであります。次に事あれば嶄然、嶄然とは氣象が堅固で、勇猛の力ありて、水火をも辭せずに其の本務を務め果すことである。明治天皇の御製に『くろがねの的射し人もあるものを貫ぬき通せ大和心を』と仰せられたるがそれである。次に得意の時には淡然、順境に處したる時とか物事の成功した時には、動もすれば傲慢に流れたり、我儘が増長したり奢侈に耽つたり、勤勉力を弱めたりしたがつてならぬものである。此の場合、淡然として少しも誇らず、傲らず、油斷せず、益々其の志操を高尚にし其の品性を純潔にすること、彼の張良が封を辭して風月を山中に樂みたらん如き雅懷を有せねばならぬ。又、失意の時には泰然、人間萬事決して己の思ふ通りに行くものではない。失意の場合に遭遇することのあるべきは常々覺悟して居らねばならぬ。此の場合にも更に絶望せず、懊惱せず、怨みず、嫉ます、泰然自若、益々一心を不動の地に置きて、徐ろに將來の企劃をなすが宜い。明治天皇の御製に『思ふこと思ふがまゝにならさるがかへりて人の身の爲めにこそ』と仰せられたはこゝである。

吾々も常に此の六然を學びて、宜敷く七生報國の志を立て、進んで殺人刀を振りかざし、更に進んでは、活人劍を提さげて、俯仰天地に愧ぢさる獨露身の行持を保ちなば、國民の天職をも全うし、佛教的生

を以て國家に盡し、報國を以て絶對的目的となし、一切の行動は皆な國家中心主義より發することである。されば とて、決して世界的思想を蔑視することではない。吾々は世界的の思想をも養ひ道徳をも修め知識をも進め、競爭をも致さねばならぬ。だが、その世界的の活動も、我が帝國の光榮を宣揚し我が帝國の幸福を增進するといふことを以て基礎とせねばならぬ。又、良は善良・純良・溫良等と熟字して、正しき道を履み、國憲・國法を守り、家庭及び國家社會に對して最も親切に最も柔順に且つ最も有益なる行持に懋む者をいふのである。而して、眞實忠良の民たらんとするには、金剛の如き堅固なる精神を鍛へ置くことが大切です。

金剛の精神とは、彼の勝海舟翁が座右の銘とせしといふ『自ら處する超然、人に處する靄然、事なければ澄然、事あれば嶄然、得意には淡然、失意には泰然』といふ風でなければならぬ。卽ち自分の一身を處することには超然として名聲利慾等の欲望を解脫するが宜い。翁が曾て子爵に敍せられし時、陛下の御洪恩には淚を流して感激せられたが、爵位そのものに對しては少しも誇りとはせなんだ。人々がワイ〳〵いうて喜び祝ふてくれるのを却て愧しく思ひ『今までは人なみの身と思ひしに五尺にたらぬ四尺（子爵）なりとは』と詠じたそうだ。次に人に處することは、靄然たるを要す。靄然として春風の霞を送るが如く、『面を吹けども寒からず楊柳の風』何事も優しく和らかに、親切にて愛敬のあることである。又、事の無い時は澄然、寒山詩に『我が心秋月の如く、碧潭淨うして皎潔たり』とあるが如く、心に一點の邪念も無

御繼紹あらせられたることは申し上げ奉るまでも無い。大正三年十一月三日に在鄉軍人會に對して賜はりたる御勅語の如きは、軍人ならざる他の國民一般も必ず心得べき大切なる信條であらうと思ふ。即ち『朕惟フニ國防ノ完備ハ汝在鄉軍人ニ待ツモノ洵ニ多シ、汝等戮力協心陸海一致シテ益〻軍人精神ヲ鍛錬シ軍事能力ヲ增進シ、鄉ニ在リテハ忠良ナル臣民トナリ、軍ニ從ヒテハ國家ノ干城トナリ、以テ其ノ本分ヲ盡サムコトヲ期セヨ』といふ有り難き御勅語であります。一般國民とても鄉に在りては忠良の民となり、軍國に對しては、忠實武勇の志氣を磨勵して以て報國の大義を盡さねばなりませぬ。何事も皆な報國といふ觀念を中心として行動することが大切です。御飯を戴くにも御國の爲めに働き度いと思ひ、御掃除をするにも御國の爲めに働きたいと思ひ、學問をするにも御國の光輝を發揮したいと思ひ、農工商業を營むにも御國の富强を圖りたいと思ふ樣にすれば、一切の言語・事業皆な報國の行持となるものです。國民全體が此の報國の行持を勵む樣になれば、我が帝國の文明は更に益々發達して、所謂錦上花を鋪く又一重といふことになるであらう。又、是非ともさうならなければならぬ。

それに付けても、吾々國民は非常なる覺悟を以て、報國の精神をば最も價値ある最も神聖なる方法を以て所有行動の上に實現せねばならぬ。偏れる個人主義に囚はれたり、謬れる物質主義に執したり、何等の理想も無くして無闇に新しき者にのみなりたがつたり、浮雲の樣な榮華を夢想したりして居る樣なことでは駄目である。先づ第一には忠良の民たらんことを目標とすることが肝要である。忠良の忠は忠實・忠誠

馳せて御見舞を申上げられた。その時、禪師は特に書面を侯に與へられて『齊家治國も亦菩薩行道なり、篤く仁政を鋪き上下相信じて乖戻あること勿れ、是れ老衲が末後の赤心なり』と垂誨せられました。是れは治國安民上に於ける獨露身を示されたものである。佛法はかういふ風に活きて働くのでなければ死佛法となります。

錦上に花を鋪くまた一重

我が帝國は、明治維新以來、先帝陛下の御盛德に依り旭日登天の勢にて文明の果實を結び、日清・日露の兩大戰役を經て世界一等國の位地に進んだのである。今回は端なくも歐洲大戰亂の餘波を受け、獨逸に對して戰鬪を開始せらるゝに到りしものゝ、我が帝國の目的は公明正大、唯だ〳〵東洋の平和を維持し帝國の光榮を宣揚するといふの外は無いのである。文中子が『亡國は兵を戰はし、覇國は智を戰はし、王國は仁を戰はし、帝國は德を戰はし、皇國は無爲を戰はす』というたが、我が國の如く全く仁義道德の師を以て無爲昇平の世界を建立するといふのが、天皇陛下の御理想であらせられます。されば、吾々國民は深くも深く陛下の御理想を頭に戴き奉りて、常に自ら世界文明の模範を以て任ずるの抱負が無ければなりませぬ。

今上（大正天皇）陛下は允文允武、至誠至仁の御鴻德を具へさせられ、明治天皇の御聖德と御宏圖とを

のも、つまり天地の大道を實踐することになるのであるから、是を萬象之中獨露身と言ふのである。萬象之中獨露身といふのは天地間の第一人といふことです。天地間の第一人といふのは、此の心が既に天地の心であつて、此の身がそのまゝ佛身であるといふことであります。

太祖常濟大師は『平常心是道』の話に參じて工夫研究に努められ、遂に大道を明らめられ、本師徹通禪師に向つて『黑漆の崑崙夜裡に奔る』と答へられた。眞黑な玉が眞暗な中を奔るとは何であるか、卽ち無我の活動といふことである。天地の大道と合致した境界には私心私慾の煩惱がない。煩惱の塵垢なきは無我である。無我の活動は天地の活動、佛陀の妙用、大道の作用である。徹通禪師が『未在更に道へ』もう一歩進んで道うてみよと再驗せられた時『茶に逢うては茶を喫し飯に逢うては飯を喫す』と答へられた。佛法も禪道もかくなければならぬ。茶を飲み飯を喫するは日常の生活である。その日常生活の一々がソツクリ無我の活動、大道の作用であるのである。若し能く此の理に達せば、寐るも佛法、起るも佛法、親子・夫婦の親しみも兄弟・朋友の交はりも、商法も農業も皆な活佛法である。故に任運にして慈愛孝貞の光を放ち友悌信義の輝を發する樣になるものである。されば軍人が劍を執て戰に臨むも、軍國民が勇を皷して國威の宣揚に努むるのも、全く生死の兩頭を截斷して孝順慈悲の一大寶劍を横拈倒用するのであるから盡く是が佛德の顯現です。

昔、阿波德島城主蜂須賀侯は天桂禪師に參じて禪を學ばれしが、禪師が病に罹り甚だ篤しと聞き使者を

針芥を失はずとは感應といふことである。卽ち今日以後生々世々佛法三昧に任せんとの誓文である。公はその翌日湊川に於て、武勇絕倫の働きを爲し、弟の正季と共に七度人間に生れて以て皇恩に報ぜんとの誓を立て、壯烈の最後を遂げられました。吾々も亦是の如き大安心を決定せねばならぬ。

此の大安心は決して軍人のみには限らぬ。又、軍國のみには限らぬ。縱ひ平和の時と雖も人生の一面は慥に戰爭である。學者には知識上の戰あり、商業家には商業上の戰あり、政治・宗敎・產業・工藝一として戰鬪的態度を脫することは出來ぬ。我が釋尊の如きは勇猛精進の志氣を皷し給ひて、煩惱と戰つて遂に之を服し、惡魔と戰つて遂に之を服し、外道と戰つて遂に之を服し、而して後始めて正法を弘通し、民人を御化導下されたのである。此の戰爭に於ける唯一の武器は道である。道の大本は無二亦無三であるが、その妙用に至つては千態萬狀窮りあることなし。君に對し奉れば忠となり、父母に對すれば孝となり、夫婦の間には和合となり、朋友の間には信義となる。而して其の根源は佛性の孝順心・慈悲心に歸するのである。その孝順心・慈悲心は何れより發するかといへば全く自己本心の妙用である。然れば自己の本心卽ち是れ大道の本體である。孔子は『吾が道一以て之を貫く』と仰せられ、曾子は之を解釋して、『夫子の道は忠恕のみ』といはれた。忠恕といふは孝順心・慈悲心と同じ意である。天地も此の道に依りて其の德を成じ、萬物も此の道に依て其の生を遂げ、國家も此の道に依て榮え、民人も此の道に依りて安らかになるのである。されば一家の中に於て孝を盡し和を守るのも、一鄕の間に在りて德を修め道を行ふ

大楠公の如きも實に堂々たる禪者である。曾て一禪僧に遇ひ『道を以て軍に勝つの法』を問はれた時、彼僧は『至善を兵となす』と答へた。至善の兵、仁義の軍、世に是程の武力はあるまい。公は此の語によつて戰の道を悟られた。建武三年五月、足利の大軍に當らん爲めに兵を湊川に進め、一日廣嚴寺（俗に楠寺といふ）の明極楚俊禪師に參見し、『生死交謝の時如何』生死の境目に於ける佛法如何と問はれた。禪師は『兩頭倶に截斷して一劍天に依て寒し』と答へた。兩頭とは生と死との二途である。生死は開花落葉の如し、唯だ是れ變化の相たるに過ぎず。その本體に至りては不生不滅、常住不變である。故に、生死の兩頭を截ち斷つてしまへ、その時こそは忠義を以て鍛へ上げたる日本魂の一劍が天地に輝き渡るであらうぞ、唯だ箇の忠義の一劍、是れ卽ち佛陀の斷德、宇宙の大意志である。公は更に『落處作麼生』その時の安心はどうかと問はれた。すると禪師は威を震つて一喝した。忠義の劍光天に倚つて輝く、是れぞ佛の天地、神の御國ぢや、此の外更に安心の地ありと思ふ可からず、脚跟下直に是れ佛國土ぢや『どこの土にならうと儘よ落葉哉』、『咲くもよし散るも見事の櫻哉』此の際に於て東を尋ね西を探るの妄想は起されまいぞといふの提撕であつた。公は思はず起立して三拜し、通身に汗を流された。禪師之を見て曰く『徧徹せり』公曰く『若し來りて和尙に見えずんば安んぞ向上の關捩子を超出することを得ん、今より代々針芥を失はず』

呈せられた。その時『春夏の交、博多の邊に騒がしき事あらん、されど日ならずして靜謐を得べければ、決して心配せらるゝに及ばず、唯だ莫煩惱なれ』というて、暗に元寇の襲撃を警告せられた。此の莫煩惱の三字こそ相模太郎をして百萬倍の勇氣を振はしめたものであらう。果せる哉、孟秋に至りて元虜百萬艨艟海を蔽ひ來りて筑紫を侵した。此の時、時宗公は武裝して鐵馬に跨り、師の處に來り見えて『大事到來せり』天下の一大事が彌々到來致したりと言はれた。師曰く『如何か向前せん』此の一大事に對する覺悟はどうぢや。公は忽ち身を躍らして大喝した。覺悟は既に定まれり、我に日本魂あり、殺活の劍あり、百萬の大敵も之を視ること土芥の如し、一喝の下に喝破すること何の難きことかあらん。實に公の一喝は乾坤を呑却する底の大勇氣である。師は莞爾として曰く『眞の獅子兒、能く獅子吼す、驀直に進前して回顧すること勿れ』さすがに獅子兒ぢや、能くこそ哮えられしぞ、さあその覺悟を以て驀直に進まれよ。公は欣然として拜謝して出られた。師は其の從者たる長崎治郎左衛門を顧みて『御身も亦直に吹毛を振つて向前せよ、必ず首を回す勿れ』といはれ、此日より毎朝楞嚴呪經を誦じて敵國降伏を祈願せられたといふことであります。

是の如き禪機は、畢竟、生死を以て眼中に置かず、唯だ常恒不變なる絕對の大眞理を捉へてゐる所から現れて來るのである。卽ち、生死の境を飛び超えて未來永劫を一貫したる一大信念があるから斯る活機を得ることが出來たのである。

ると彼の僧は憤然として『某、生死事大の爲めに特に來つて參見す、和尚何に因てか罵詈せらるゝや』といひけるに、師は直ちに『我が這裡生死なし』と答へられた。生死といふは何の事だ、開花落葉を見て生死と思ふべからず雨降るとも水生れたりと謂ふべからず、凡夫眼を以て見れば或は生死ありと思はん、佛眼を以て觀れば宇宙萬象盡く常住不滅である。吾々佛敎家の宗敎的安心は全く此にあるのであります。

鎌倉圓覺寺開山大覺禪師は諱を祖元というて、支那宋の慶元府の人である。十二歳の時、父に伴うて山寺に遊び、一僧が『竹影掃レ階塵不レ動、月穿二潭底一水無レ痕』と吟ずるのを聞いて覺省する所があつたといふ程の英靈兒であつた。徳祐元年、元人大擧して中國に寇す。師は兵を溫州の能仁寺に避けしに、翌年、元の兵は溫州に亂入した。寺僧は殘らず逃竄したが、師は獨り堂中に端座して居られた。虜將は刄を執て師に逼り、既に其の頸を斬らんとせしも、師は神色自若として動かず、徐に吟じて曰く『乾坤無レ地レ卓二孤筇一、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裡斬二春風一』元虜之を聞いて其の偉人なるを知り、慚謝して去つたとある。秋水三尺の劍を提げ、電光の閃く如く斬り下す、知らず箇の何物をか斬る、恰も春風を斬るが如し。斬られても斬られぬ、斬られぬ物を斬る、是れ卽ち宇宙活動の妙である。近代の俊傑山岡鐵舟居士は深く禪道を究めて劍法の秘奥を悟り、殊に此の句を愛してその道場を春風館と名けられた。

後、弘安元年、北條時宗公の招きを受けて我が國に來り、鎌倉建長寺に住し、五年、時宗公は圓覺寺を建てゝ開山に請ぜられた。是より先、弘安四年の春、公の來參せし時、師は『莫煩惱』の三字を書して公に

の渭濱に釣せしは屈であるが文王武王を佐けて天下を統一したるは伸である。張良が履を圯上の老人に擎げたるは屈であるが、漢の高祖の師となりたるは伸である。戰爭も亦是の如く、敵艦を撃ち、敵壘を攻め、敵兵を敗り敵の根據地をも百雜碎ならしむるのは屈であるが、平和を克復し國運を發展するのは伸である。故に禪門では大死一番、大活現成というて居る。吾々は常に自ら殺人刀を揮ひ、之れと同時に活人劍を揮ふことを忘れてはなりませぬ。

電光影裡春風を斬る

前に述べたる殺活の理を能々明らめて、萬事萬端の上に於て殺活自在ならば、その時こそは内に一點の私を存せず、外、國家の興隆と人類の幸福とを以て大理想とするのであるから、眇たる此の身も直に是れ道の身、法の身である。換言すれば、佛菩薩の權化身である。既に道を以て心となし、法を以て身となせば、其の身心こそは宇宙の精神と一致し、天地の大道と合體するから最早凡夫身ではない、生死の身でもない。大道に生死が無いから此の身にも生死は無い。佛心に變異が無いから此の身にも變異が無い。然れば則ち此の心が卽常住佛性、此の身が卽無量壽佛である。

京都妙心寺開山無相大師は機峰嶮峻にして、僧の來りて參禪する者あれば、頭から叱咤つけて彼の肝膽を奪ひ、その知識妄想を打碎いて了ふのが例であつた。或時、一僧ありて來り參ず、師乃ち呵罵つけた。す

斷することが出來やう。徹骨徹髓、大君の爲め、御國の爲めといふ觀念が深ければ己れを制する事も決して難事では無い。『仙臺萩』を見ると、千松といへる一少年ですら、『お腹が空いてもひもじうない』といふて居るではないか。お腹が空けば飢いに極つて居るが、君の御爲めと思へば飢さをも忘れて了ふ。これ報國の心情である。宗良親王が『君のため世のため何か惜しからんすてゝかひある命なりせば』と詠じ、工藤惟徳が『よしや身は土となるとも魂は御代の守りとならでやまめや』と詠ぜしも、皆な己に克ち私を制し、以て報國の赤心に酬ひたものである。三祖大師は『但だ憎愛なければ洞然として明白なり』と仰せられたが、憎愛の二つは妄想の代表者である。此の妄想を截斷すれば至道自づから通じ、本心乃ち現はる。本心一たび現はるれば知識も其の正しきを得、道徳も其の宜しきに適ひ、精神的文明の花は自づと國家の安康、世界の平和、人類の幸福を生み出す、是れが活人劍である。之を一身一家庭の上から見ても、能く殺人刀を用ゆれば、品性も高まり、素行も修まり、言語動作にも愼みが深くなり、從つて親子・兄弟・夫婦の間に於ける道徳も義務も完全に行はれる樣になるから、始めて眞の幸福と快樂とを占め得られる樣になる。さすれば、殺活は同一體である。殺中には必ず活あり、活は必ず殺より現はる。是を屈伸感應の理とも見るべきである。

太田錦城は梧窓漫筆の中に委しく此の理を示して居る。即ち、舜が大聖徳ありながら歴山に耕し、河濱に陶し、雷澤に漁せしは屈であるが、後に堯帝の位を紹ぎ、南面して天下の治まりしは伸である。太公望

類の幸福を壞破するの怨敵を、天に代りて片端から粉碎するのは殺人刀である。而して、世界の平和を克復し人類を塗炭の苦みより救ひ、以て永遠の福利を增進せしむるのは活人劍である。人の病を療するにも苦い藥を進めたり、事に依ると切開手術までも施すのは活人劍である。然れば、戰爭の上から申せば、殺人刀を揮ふのは手段であつて、活人劍を用ゆるのが目的とも見ることが出來る。日清戰役媾和の際、支那の李鴻章が馬關に來りて媾和談判をせし時、一凶徒の狙擊に遭うて負傷したことがある。その時之を治療したのは軍醫總監佐藤進先生であつた。最初、佐藤先生が李鴻章の病床に臨みし時、彼は先生が軍刀を佩びて居るのを見て心頗る穩かならず、『卿は醫師であるのに何故に佩刀せらるゝや』と問うた。その時、先生は『是は活人劍である』と答へたので、彼は大に安心して先生の治療を受けられたと申すことである。併し禪門に於ては先づ自己に向つて此の二振の劍を用ゆべきことを敎へて居る。

然らば殺人刀はどうかといふに、先づ己れの妄想や邪念を截斷のである。豐後の詩人廣瀨淡窓は、『余に三の大病あり、一には懶惰、卽ち休まう遊ばうといふ量見、二には畏怯、卽ち臆病根性、三には鄙吝、卽ちケチ〳〵して物を惜む心、此の三つは同じく出でゝ名を異にす、若し攻めてその一を破れば、二者は自ら破る』というて居る。吾々御互にも此の三病が始終離れずに喰附いて居るものである。先づ此等の惡魔を打殺して行かねばならぬ。だが王陽明が『山中の賊を破る事は易く、心中の賊を破る事は難し』といひし通り、此の妄念妄想は容易に破り難いものである。併し、若し報國刀といふ利刀を以て向ひなば必ず一刀兩

らぬ。その一大信念とは卽ち忠節である。忠節は我が大君に對し奉りての信念の主腦である。我が大君の御爲めとあらば、我が身も我が命も更に惜まぬ、我が全身心を忠義の道に捧ぐるのである。此の忠節の心にして堅固不動ならば、縱ひ水火の中に投じ劍樹刀山の間に陷るとも、一微塵も志を變ぜぬ。彼の孟子の所謂『富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず』といふ眞個の大丈夫である。此の志氣ありてこそ本當の武勇も現はるゝのであります。

吉田松陰先生が二十九歳を一期として幕府の手に殺されんとする時、思はず一滴の涙を浮べ『親を思ふ心に勝る親心今日の音信なんと聞くらん』と詠じ、母親の心事を察して至孝の涙を注ぎ、彌々白刃の首に臨むに當りては、泰然自若、顔色常の如く『よしや身は武藏の野邊にくちるとも留めおかまし大和魂』といふ辭世の一首を殘し、悠然笑を含んで刑に就かれたとある。一面には涙もあり血もある溫き愛情を存しながら、一面には鐵壁をも碎くべく銀山をも破るべき大勇氣を存すること、是れ卽ち靑天白日の處怒雷閃電を劈く底の靈機と謂ふべきものである。吾々は自己の天職に對しても亦此の忠節と武勇とがなければならぬ。

殺人刀は是れ活人劍

佛にも折伏と攝取との妙用あり、劍にも殺人と活人との靈機がある。東洋の平和を攪亂するの惡魔、人

ば不狂人も亦走る。走る事は一なりと雖も走る所以の者には雲泥の相違がある。狂人は盲動的に走るのであるから甚だ危險であるが、不狂人は狂人を取押へんが爲めに走るのであるから、その走る足下には立派な慈愛が存して居る。維摩居士が『我は衆生の病を以て病とす』と言はれたのはこゝである。獨逸國の大野心は恰も癌腫の如く、頑然として益々其の毒惡を凝結して居たのである。而して、墺塞の關係が彌々大破裂を來すと同時に、獨逸の一大癌毒が俄然爆發して、有史以來未曾有の世界的大動亂を惹き起すに至つたのである。我が帝國が蹶然劍を執て起たれたのは此の癌腫に對して一大治療を施さんためである。卽ち大慈大悲の大手術である。

吾々國民は、此際、我が帝國の大理想を體得して、擧國一致の態度を以て國家の目的を大成せねばならぬ。これに要する覺悟というても別なことは無い。唯だ忠節三昧に安住して、眞箇の大勇氣を發して、軍人は軍人、國民は國民、皆な夫々の本分を盡すことである。内には慈愛の德を貯へ、外に忠勇の威を現はし、心に觀音大士の御慈悲を備へ、形に不動明王の勇威を示す、是れ軍國民の覺悟である。故に、其の願力は専ら平和に在るを以て、常に道德を重んじ、仁義を守り、禽獸蟲魚の末にまで愛憐の情を注ぎ、其の行力は毅然たる大節を存し、外、其の侮を禦ぎ且つ國家の大理想を實現するに於ては、雷霆をも喝散し鬼神をも呵り飛ばし、金城鐵壁をも打碎くといふ大威力を發揮するのである。是を靑天白日怒雷を奔らす底の活機輪ともいふのである。此の活機輪を轉ずるには國民を擧げて金剛不壞の一大信念を有せねばな

青天白日怒雷奔

兎角、世の中は無常である。飛鳥川にはあらずとも昨日の淵は今日の瀬となり、隱顯出沒、暫しも定まらぬが、浮世の有樣である。歐洲の大禍亂は恰も火山の爆發の如く、寢耳に水の大騷動、それが東洋に迄も波及して、遂に我が帝國をして蹶然起つて大和魂の勇威を全世界の人々に示さざるを得ざるに至りしは、青天白日怒雷奔る底の活機輪である。この活機輪は順逆縱橫に撥轉して、遂に獨逸の東洋の根據地として經營せる青島の要塞も、物の見事に粉碎して、總攻擊を開始して僅々八日目に占領し、全世界をして驚嘆せしめたのである。併し、歐洲の禍亂の平定せざる限りは、我が帝國の任務は此より後も澤山あるであらう。是を禪的見地より見たならば、吾々は此の際に於て如何樣に覺悟して如何なる妙用を活轉すべきや、是れ實に吾人の暫時も等閑にすべからざる一大公案である。

抑も戰爭は凶事である、逆事である。決して人道の常軌ではない、聖賢の所期ではない。されど狂人走れ

世帯を持て居ても、大信心の力は能く無量の樂味を感ずるものである。

超然として古今不變の大道を樂むには、深く因緣の理を明らめ、無常の相を悟り、心を無我の境に遊ばしむるの一大安心が無ければならぬ。

彼の越後の良寛和尚が、國上の山中にいぶせき草菴を構へ、常に市井に托鉢して五合の米を得れば便ち歸る、依て自ら五合菴と號したが、此の小菴の中に無邊の風月を樂みて『住なれてこゝも廬山の夜の雨』の句がある。落葉、庵を埋むるも恬然として『焚く程は風がもて來る落葉かな』と詠じ、月に對しては『いざ歌へ我れたち舞はんぬば玉の今宵の月にいねらるべしや』と吟じ、幼なき小供を唯一の友としてそれを相手に手鞠をついては『つきて見よひふみよいむなやこゝのと十とをさめてまたはじまるを』と歌ひ、月夜に畑中を吟行し、芋盜人と見誤られて打擲せられける時『打つ人も打るゝ人も諸共に如露亦如電應作如是觀』と吟じて、少しも怒れる色が無かつたとある。かういふ無我的安心を得て、而して、眞面目に其の業務を勵みて一家の繁榮を期したならば、無限の快樂と無邊の幸福とは常に其の家に充ち滿ちて行くことであらうと思ふ。

善を行へば凶日なく惡を作せば良辰なし、身心と道と合致すれば日々是れ好日、年々是れ好年である。萬一、逆境に處することありとも、一心が寂靜なれば自づと禍を轉じて福と爲すの風流があります。亦此の大安心があるならば、順境に處しても傲ることなく、逆境に處しても怨むことなく、生死の境に臨んでも悠々然として佛の慈光を拜し、佛の恩波に浴することの出來るものです。又、縱ひ貧乏

を執るに當り、能く天地の公道を踐み行く時は、其の業務が取りも直さず活きたる御經であります。

昔、文化の頃、京都に澤井智明といふ人があつた。生國は大和で、非常な佛教信者であつたのみならず、經書にも通じ、粟田流の書をも能くし、且つ道學にも達して居り、通稱を大黑屋傳兵衞と申した。天性慈悲深く、自身は節儉して常に人を救ふを樂みとせり。文化中、攝津・河內の洪水の折などは金品を投じて大に救助に努めた。殊に每年極寒の季節になると、每晚、京都の中外を徘徊し、極貧の者を視れば潛かに米や飯を施すが、決して名前などを名乘らず、專ら陰德を積んで居られた。けれども、自然に官の知る所となりて五六回も賞與に預かりました。

或日、歌の中山淸閑寺の知眞長老が傳兵衞の賢名を聞て尋ねて來たが、ヅカ〳〵と店先へ這入り込み、いきなり『大黑屋傳兵衞、お前は何を爲し居る』と問うた。其の時、傳兵衞は算盤を彈きながら帳合をして居たが、チツとも擬議せず『私は今大般若經の轉讀中です』と答へた。長老は更に『其の功德如何』と問うた。彼は之に答へて『私は每日之を轉讀するによりて、父母・妻子・奴僕に至る迄飢寒を知らず、其の他多くの貧民を救ふことを得たり』といふた。長老曰く『御身の家業は質屋なりと聞く、願くば我が念佛を質に取らんか』傳兵衞曰く『昔は熊谷蓮生の如き荒法師の念佛すら質に取りたる人ありと聞く、況や和尙の樣な高德の念佛、何程にても質に取るべし』長老大に喜び『寔に御身は泥中の蓮華なり』と歎稱し是より無二の法友となつたといふことです。併し、此の泥中の蓮の如く、人生の泥の中に在りながら

る人は多くは親切なものです。心底から親切なる者は、自づと品性も正しくなり、行狀も立派になるものである。親に對して本當に親切なる子ならば、どうして、道樂をしたり、不正の事などをして親に心配がかけられませう。妻に對して本當に親切なる夫ならば、どうして、妻に難儀を與へる樣な振舞が出來ませう。高祖大師は『身を苦くし一切を省約して慈あり道あるを、まことの行者と云ふなり』と仰せられたが、親切ある者は獨り手に勉强も儉約も出來るものであります。以上の五則を標準として、家庭全體の人が心を齊へて能く之を守りますれば、幸福自然に至り快樂も亦自然に備はりて、家庭的淨土を建立すること疑ひ無きものである。

日々是れ好日

家庭の幸福は、必ずしも巨萬の財が有るからではない。金殿玉樓の上にも無い、美酒嘉肴の上にも無い、唯だ家內中が打揃うて正しき道を樂むのが眞の幸福である。古人が『平常心是れ道』といはれた通り、家庭に於ける日常の生活が、自づから佛の心に契ひ御法の道に合體する樣になれば、算盤を彈くも鍬鎌を持つも、針仕事をするも、御料理をするも、皆その儘の佛行菩薩行である。故に、承陽大師は法華經に詠じて『峰の色溪の響きもみなゝがら我釋迦牟尼の聲と姿と』とも『此の經の心を得れば世の中の賣り買ふ聲も法を說くなり』とも仰せられた。商法も農業も皆人間の生活上必須の業務である。此の業務

御老體には、部下の若い者に命ぜずに、獨り親ら此の苦役に服せらるゝや』と仰せられしに、老僧は『他は是れ我れに非ず』即ち、他人にさせては自分の勤めにはなりませぬと答へられた。そこで大師は重ねて、『只今は餘りに暑さが酷烈である、少しく涼しくなりし時になされては如何』と仰せられると、老僧『更に何れの時をか待たん』老衰の身を持ちながら、今日は暑い、今日は寒いというて居たなら、勤める時節は無くなつて了ひますといふ挨拶であつたので、大師は深くその精力の堅固なるを感稱せられたといふことである。殊に家庭内に於ては、老人は老人、青年は青年、それ相當の要務を、忠實に、親切に、而も機嫌能く勉强せねばなりませぬ。

次に堪忍は人間一生の寶です。堪忍は心を和柔くし、面に愛敬を備へ、漫りに腹を立てぬことです。明治天皇の御製に『時はかる器の針のともすれば狂ひ勝なる世にこそありけれ』と仰せられし通り、思ふままにならぬが世の習ひです、併し又の御製に『思ふこと思ふがまゝにならざるが却りて人の身のためにこそ』と御示し賜はれし如く、まゝならぬ事で却て修養の因となりて、爲めに立派な道德を積むことも出來るものです。此の堪忍が萬事の上に守られるば、遂には無我の三昧にも住し、不染汚の境界にも達せられます。然るに一家庭の中に在りて、些々たる事に腹を立てゝ厭な顏ばかりして居る樣では、全で自分で針の莚や劍の山を造る樣なものです。

次に親切とは所謂慈悲心です。堪忍と親切とは姉妹のやうなもので、親切な人には堪忍があり、堪忍あ

とでは、つまり一家の基礎を危くするものです。正直の頭に神宿り、誠の心にこそ佛の光りは輝くものである。又、言語の上計りでなく、立ち働きにも裏表の無い様に正直にせねばならぬ。『松が枝の直な心を保ちたし柳の糸のなびく世の中』

昔、藥山禪師に僧問ふ『如何なるか是れ道中の至寶』道を行ふ上の肝要を問うたのである。禪師は此の時『莫諂曲』卽ち曲つた事をするなといふ答です。又、支那に五台山といへる文殊菩薩の靈場がある。其の御山の麓に一老婆があつて、參拜の僧が『台山の路何れの處に向つてか去る』文殊樣に參詣するにはい、どちらの路が宜いであらうと尋ねると『驀直去』眞直に行かれよと答へた。その僧が『さやうでありますか』というて出懸けると、彼の老婆は『好箇の阿師復た恁麼にし去る』立派な坊さんぢやがやつぱりあれだから困るというては嘲評た、といふ名高い御話しがある。此の婆さんには氣高い見識があるのです。文殊は智慧の菩薩である。己れを明めるのが眞の智慧である。己れを明むるには眞直な道を踏んで一切の邪見妄心を拂ひ除けねばならぬ。換言すれば正直ならねばならぬ。その意を驀直去というたのであります。

次に勉强は吾々の原動力です。萬兩の黃金が前に列なるとも、進んで取らざれば己れの物とはならぬ。實に勉强は富貴を生み、學藝を生み、幸福を生み、快樂を生むの母である。

承陽大師が支那の天童山に御修行の砌、極暑堪へ難き時、佛殿の前を通られしに、本府の用典座といふ重役を勤めて居る六十八歲の老僧が、たつた一人で頻りに作務に從事して居られるを御覽なされ、『何故に

は『ひとりのみ思ふ心のよしあしを照し分くらん天地の神』とある。此の貴き御信念こそ御盛徳の基であらうと思ふ。守田寶丹翁の家憲十條は

一、仇は恩で報ずべし
二、人の惡きは先づ我が惡きと思へ
三、禍福は皆我が行ひより來ると知るべし
四、後悔ある時は之に代るの善を行ふべし
五、艱難より來る所の安樂ならざれば甘んずること勿れ
六、天然の樂を樂み自ら求めて樂むこと勿れ
七、己正直にして人を疑ふこと勿れ
八、人に欺かるゝとも人を欺くこと勿れ
九、心は活潑にして常に鬱すること勿れ
十、全家の和合を以て富貴の基と爲す

人生禍福皆品行にあり、誠實勉强する事懼るゝ勿れ、既往の非挽回するに今日の良心を以てす、自治積善、私慾を去り是非を決斷す、心明鏡の如し。

といふのであるが、此の家憲は信心に依て製せられたものである。次に正直、家内の中で欺し合ふ樣なこ

て庖刀を取れば、此の庖刀の上にも道德の實が結ばれるものである。『平常心是れ道』とは此の事であります。併し、それには精神の修養があらねばならぬ。修養の力ある時は日々の行動がソックリ佛菩薩の行持となるのである。

日日の行持

家庭に於ては、毎日々々同じ様な事を繰返して勤めて行くのであるが、此の勤めの中に信仰と修養とが加はりまするど、朝夕の立振舞が一々善根となり功德となるものである。而して、一身の安樂も、一家の繁榮も、社會に對するの義務も、皆此の中より產み出さゝるものであります。

先づ家庭行持の原則となるべきものを大別すると五通りになる。此の五則を守れば立派に佛教的家庭が造り出されます。通俗的なる詞でいへば、信心と、正直と、勉强と、堪忍と、親切との五です。

第一の信心、これが百行の基礎となる大切なる德である。信心を分析すれば、第一には神明を敬ひ尊ぶこと、二には佛に歸依し奉りて安心を決定すること、三には因果の昧ますべからざることを信じて、少惡をも畏れ愼み、少善をも喜び求むべきこと、四には佛の冥鑒、神の照覽を畏みて、佛樣や神樣は吾々の心の底迄も常に見そなはせらるゝものと確信することである。

明治天皇の御製には『わが心及ばぬ國のはて迄も夜晝神は守りますらん』とあり、昭憲皇太后の御詠に

時は、御經文か祖師方の御語を誦みながら作れよ、苟にも役にも立たぬ世間話しや猥りなる談をするなよ、御齋や御粥の安置してある處を通る時は、手を合せて問訊せよと仰せられ、最後に、此等の行持を以て『佛祖の命脈衲僧の眼睛なるぞ』と宣うてある。

又、典座教訓（典座とは庫院に在りて辨食を營掌する役名なり）の中には『凡眼を以て覗る莫れ凡情を以て念ずる莫れ、一莖艸を拈じて寶王刹を建て一微塵に入りて大法輪を轉ず』と仰せられた。天地の大道を實踐するとか、最高の道德を實行するとかいうても、決して別途に生活をすることのみでは無い。山に入て苦行するとか、世を離れて觀心を凝らすとかいふのは、寧ろ大道を實踐する心の準備である。心の準備が出來たならば、活世界に出でゝ各自の實務に從事し、その實務の中に立派なる解脫の德を現し、慈悲の用を示してこそ、道德の實行とも稱せらるゝのである。その實務といふはつまり親は親の務、子は子の務、夫は夫、妻は妻、下男は下男、下女は下女、皆その受持を守るのが務めである。而して、此の務めの中に佛法も聖賢の道も現はれて來なければならぬ。

故に、釋尊は靈山會上に於て、一枝の花を拈じて大衆に示された。迦葉尊者が之を見て破顏微笑せられた時、釋尊は『我れに正法眼藏あり摩訶迦葉に附囑す』と仰せられた。洞山の守初禪師は、臺所に於て胡麻を取扱つて居られし時、一僧が『如何なるか是れ佛』と問うた。禪師は直ちに『麻三斤』胡麻三斤と答へられた。信仰の誠を以て一莖の艸を拈ずれば此の草の上にも萬德圓滿の佛樣が拜まれる。忠孝の念を以

飯がある、桶の中には水がある。毫も不思議な事は無い、ソツクリその儘の佛法である。主人が店に出て御客に接するも家内が臺所に在りて御飯立をするのも、子供が學校に通ふのも、下男が肥桶を擔ぐのも一として佛法ならざるは無い。然るに、悲しい哉、吾々凡夫は却々是を佛法として働くことが出來ず、動もすれば却て罪惡の作業となる。是れ畢竟、三昧力がないからです。即ち天地の常道に住まることを知らないからであります。

承陽大師は示庫院文の中に、僧家の臺所に於ける佛法の心得を御示しになつて居るが、如何にも有難い御教訓だ。此の御教訓の御旨意を守りて日常の總ての行動の上に應用したならば、どんな麗しき行持が實現するか知れませぬ。其の大意を申せば、臺所に於て飯膳等の供養物を調へるに當りては、最上の敬意を以てせよといふのが大體の御旨意であります。

故に、朝の粥をば『御粥』と呼びて御の字を附けて、必ず『粥』と呼び捨てにするな、晝の齋も『御齋』と呼べ、米を搗くをも『米つけ』と言はず『米しろめ參らせよ』と言へ、米をとぐ時も『米かせ』と言はず『米洗ひ參らせよ』と申せ、御汁を煮るにも『汁煮よ』と申すな『御汁のもの、し參らせよ』と申せ、御羹を調へるにも『羹せよ』と言ふな『御羹し參らせよ』と言へ等と御教へ下されてある。又『齋粥を入るゝ道具に對しても同樣に敬まへよ』と仰せられ、齋粥を調へる時は、必ず口の息にて品物を吹くなよ、着物や衣を品物に觸るゝなよ、頭や顔に觸れたる手を洗はずに品物を取扱ふなよ、御粥や御飯を作る

屠肆糟塵も居然たる淨土』とあるでは無いか。

鉢裡飯桶裏水

昔、雲門禪師といふ高僧があつた。此の方は雲門宗の開祖である。雲門宗は我が國には傳はらないが禪宗五派の一つであります。或る僧が禪師に向つて『如何なるか是れ塵々三昧』と問うた。塵々とは事々物々といふに同じ、三昧は梵語で正定と譯して居る。卽ち心を正くして一道に安定し更に動搖すること無きの意である。

念佛の時は念佛になり切て外に心を散さゞるは念佛の三昧である。坐禪の時は禪定に住して少しも妄念を起さないのが坐禪三昧である。何事でも三昧にならねば其の事に成就せぬ。今は佛法の變名と見るが宜い。佛法は心を至善に住め、身を佛心の中に投じて、能く一切の妄想邪念を遠離するが故に三昧といふのである。『釋迦阿彌陀作りかへれば下駄足駄變れば變る物にぞありける』迷の前の善惡は善惡共に迷なり、悟の前の善惡は善惡倶に悟りなり、心淨ければ爲す事も自づと淨らかになり、心濁れば境も自づと濁つて來る。されば佛法というても遠方にあるので無い。『道といふ詞に迷ふことなかれ、朝夕己が爲すわざと知れ』これが塵々三昧である。

此の時、雲門禪師は『鉢裡飯桶裡水』と答へられた。是れ實に家庭的佛法の御示しです。鉢の中には御

『潜に難値難遇の想あらば必ず和合和睦の顔を見ん』と仰せられた。親子となり夫婦となり、兄弟・主從となりて一家の中に住し、而して苦樂を與にす、是れは一世や二世の因緣では無い。過去幾百千劫の因緣に依りて、此の世に親子・夫婦となりしものなれば、未來も亦無間に此の因緣が相續さるゝに相違ない。加之、親子・夫婦等が互に助け合ひ親み合うてこそ、自分の身も立ち且つ安心して其の職を盡すことも出來るのであると思へば、縱ひ妻子たりとも、或る意味に於ては自分の恩人である。斯く想念すれば自然に和合和睦の顔を見る樣になるものです。

次に順とは相手の心に背かず逆はぬ樣にすることである。親は子の心に順應し、夫は妻の心に順應し、子は親の心に隨順し、妻は夫の心に隨順して、互に向ふの心に滿足を與へ、向ふの境遇に同情を持つのが順の德です。此の四德をば、家庭內に於て完全に實行し去らば、此の中より無量無邊の大功德をも顯現し得ることであらうと思ふ。而して、是を禪門の見地より見れば、家庭も直に是れ無碍解脫の禪界である。

昔、鵝湖大義禪師に、法師あり問うて曰く『欲界に禪なし禪は色界に居す、此の土何に憑てか禪を立つ』、師答て曰く『法師只だ欲界に禪なきを知りて禪界に欲なきを知らず』と、凡夫心を脫せざれば佛淨土に至るとも其の樂みを感ずることは出來ぬ。若し禪的信念を有すれば娑婆即寂光淨土の功德を成滿することを得ん。迷ふが故に三界成、悟るが故に十方空、菜根譚に『纒脫は只だ自心に在り、心了ずれば則ち

は、家庭の基礎は牢として動くべからざるものとなる。而して、此等の道徳を以て單に世間的道徳とのみ思うてはならぬ。慈孝和順の四徳は何れも廣大なる菩薩行である。

中に就て、慈愛の徳は佛心の露現である。佛心とは大慈悲是れである。慈愛は尤も公平無私でなければならぬ。慈愛の發動は必ず合理的でなければならぬ。愚痴と愛執と偏頗とは慈愛の毒藥である。常濟大師は『常に大慈大悲に住して坐禪無量の功德、一切衆生に回向して憍慢、我慢、法慢を生ずること莫れ』と仰せられたが、眞に能く慈愛の德を養ふ時は、我見・我慢は起らぬものである。

又、孝道は百行の本です。梵網經には『孝順は至道の法なり』と仰せられてある。一切の報恩的觀念は皆此の孝心より發するに依て、眞に能く親に孝なる者は必ず君に對して忠、子に對して慈、社會に對しては信なるものであり、殊に宋の明教大師は孝論の中に『夫れ佛の道たるや、人の親を視ること猶ほ己れが親のごとく、物の生を衞ること猶ほ己れが生のごとし、故に其の善を爲すときは昆蟲悉く懷き、孝を爲すときは鬼神皆な勸む、其の孝に資て世に處すれば世は平和にして忿爭なし、其の善に資て世に出づれば世と大慈にして其の世を勸む』と論ぜられし通り、孝心と慈悲とは同一心に歸するものである。

次に和の德は家を齊へ國を治むるの本です。推古天皇の御代に御發布あらせられたる十七憲法第一條には『和を以て貴しとす忤ふ無きを宗とす』と仰せられてある。家に在りては一家和合、國に在りて上下一心、實に是れ幸福の源泉、快樂の根本です。和合の秘訣は因緣を尊重するに在ります。故に承陽大師は、

次に家庭は吾人修養の學堂と見るが宜い。吾人の情操を調へ、忍耐を守り、陰徳を積み、紀律を整ふる等の修養は、家庭ほど簡易にして且つ適切な場處は無い。溫かく麗しき人情が無ければ家庭は治まらぬ。互に堪忍し合はねば治まらぬ。腹の底から親切に働く樣でなければ家庭に幸福は得られぬ。是れ即ち陰徳である。互に相當の規律を守らねば家庭の整理は出來ぬ。而して此等の諸徳が、少しも骨折れずに、愉快に、心嬉しく行ひ持つことの出來るのが家庭の特長である。

以上の三點を標準として立派な家庭を作つたならば、天地の大道も此の間に通じ、人間の道徳も此の中に行はれ、吾人最勝の快樂も此處より現はれる。して見れば、家庭は決して凡夫地ではなく、直に是れ菩提を成就するの大道場なりと參究すべきである。

縱横の道徳

我が國の家庭は恰も一卷の反物を織出したらんが如く、縱絲と横絲とが交叉して成立て居る。縱絲の中心は親子、横絲の中心は夫婦である。双方とも堅固でなければ、決して健全なる家庭を造ることは出來ぬ。然らば、此の縱横の絲を堅固にするの法は如何といふに、親子の縱絲は慈孝の二を以て製し、夫婦の横絲は和順の二を以て製すべきである。父母は慈愛の念を以て其の子を教養し、子は孝の道を以て其の父母を敬養し、夫は溫和の徳を以て其の妻に順應し、妻は柔和の情を以て其の夫に敬順す、斯くする時

學事を擬ねる樣になつたので、遂に其處を永久の住處と極めた。これを孟母三遷の教といふ。孟子が、他日、絶世の大賢人となつたのも、かういふ家庭から生れたのであります。

次に家庭は人としての樂園と見るが宜い。又、樂園の實なき者は是を樂園たらしむべく改善を加ふるが宜い。吾人の心の裸體になつたのが宗教で、身體の裸體になつたのが家庭である。宗教は信仰を基礎とするから、胸中の所有我見・我慢・我執等を拋棄して無我的狀態になり、此の全身心を佛陀大悲の願海に投ずる處に眞箇の安心が決定せられるから、精神を全裸にした樣なものです。家庭は身體の赤裸になつた身輕な樂地である。軍人も家庭に入れば軍服を脫し實業家も家庭に入れば算盤を片付け、政治家も家庭には政治を忘れ、法律家も家庭には法律を忘れ、老人と小兒と相抱き、學者も無學者と相戯れ、一家團欒として、茶を喫し飯を喫し、相對して相笑ふ。此の時こそは資格も階級も權利も義務も一切超絶し去つて、淨裸々赤洒々である。此の場合には一日の辛勞も、煩悶も、爭諍も、憎嫉も、知らず〳〵忘却して了ふのである。家庭の眞趣味は全く此處にあるのである。

然るに、若し一家團欒たる際に、親爺が無暗に小言を並べ、女房がクド〳〵しく愚痴を言ひ出し、兄弟が反目合ひ、息子が嘘をつくといふ樣では、家庭の樂園は忽ちに變じて劍の山、針の莚と化して了ふ。我が國の如く親子・兄弟・夫婦が一堂に在りて家族生活を營む處では、猶更以て家庭を最も愉快なる樂園に造り上げねばなりませぬ。

家庭是れ道場

凡そ人として家庭を有せざる者は無い。家庭は實に個人の根據地である。苦みも樂みも、地獄も極樂も、多くは家庭から造り出される。家庭の多數が相集まつて、遂には村を成し、町を成し、郡を成し、縣を成し、而うして國を成すのであるとすれば、家庭の良否善惡は自ら社會及び國家の盛衰消長にも關係を來すものである。

故に吾々御互の家庭觀としては、第一に家庭は人類活動の根據地と見るが宜しい。吾々は家庭に於て生長することを得たのであるから、將來、社會及び國家の上に立つて演ずべき大活動も、皆な多くは家庭から生れて出るのである。彼の孟子の母は其の子の教養に心を盡し、初め其の宅が墓所に接近して居りし爲め孟子が葬儀の眞似などをするのを見て、居を市街に遷した。處が、今度は商人の眞似ばかりして居る。此處も亦適地ならずと思ひ、更に學校の傍へ轉宅した。すると常に宗廟を祭る事を擬ね、遊戲にも

必ず恭敬なるべし。夜は九時を過ぐれば燈を消して寝に就け、閑話を講じて人の睡を妨ぐる勿れ。汎く交る勿れ、有無相通ずるを要せず。病を忍んで告げざる勿れ。言語は卑俗を遠けよ。衣褌は淨潔なるべし自ら醉ひて他人を勞せざれ。是の如き古今の自警文を擧ぐれば數も限りも無いことであるが、要するに吾々は一日一時の行持たりとも、必ず心に期する所があり守る所が無ければならぬ。果して然らば一日の行持に百千劫の功德をも植え付けることが出來る。故に修證義には、一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり』とある。さすれば一日の行持を以て一年三百六十五日の中の一日と思うてはならぬ。盡未來際を包含し盡したる一日なりと觀ずべきである。此の一日の行持こそ全く諸佛の種子たり諸佛の行持たることを忘れてはなりませぬ。

人は必ず自ら誡め自ら守る所が無ければ、此の一日の行持をして價値あらしめ意義あらしめ、又、大功德あらしむることは出來ぬ。故に禪林に於ては『人身受け難し今既に受く、佛法値ひ難し今既に遇ふ、此の身今生に向て度せずんば、更に何れの生に向てか此の身を度せん』といふが如き警訓を以て自ら誡しめ、夜分就眠前には板を打ち大聲にて『謹で大衆に白す、生死事大、無常迅速、各々宜しく警覺すべし、愼で放逸なること莫れ』と警告した向もある。此等もどれ程深き警誡を大衆に與へるか知れませぬ。又、或人は左の如き心得を定めて一日の行持を誡めてある。

今日一日の事

一、今日一日、三の御恩を忘れず、不足申すまじき事。」
一、今日一日、決して腹立てまじき事。
一、今日一日、嘘をいはず無理なる事をなすまじき事。
一、今日一日、人の惡きをいはず我が善きをいふまじき事。」
一、今日一日、存命を喜び家業を大切に勵むべき事。
右は唯今日一日の愼しみにて候

又、嘗て文部大臣たりし故井上毅氏の家憲は左の如くである。

早く起きて門戸を開き、室の内外を掃へ、食は必らず同時に案に就け。偃臥する勿れ、高歌謠吟する勿れ、賓客を待つ

息は鼻よりするを宜しとす。

一、眼は細めず張らず、所謂中眼なるべし。其の人に依り眼を閉づるも敢て妨げ無し。

一、調息の法は、唯だ心氣を落着け姿勢を正うして靜かに呼吸すれば自づから調ふべし。

一、調心の法は、一切の是非善惡を放下して、何事をも思ふこと無く、思はじとだに思はず、徹底沒我の狀態たらんことを要す。但し師家の提撕に依り公案の工夫を爲すも妨げなし。啻に妨げ無きのみならず、其の根機如何に依りては最も緊要なり。今工夫すべき問題の二三を擧げて例を示すべし。

萬法唯一心、一心畢竟是れ何物ぞ。

道は須臾も離るべからず、如何なるか是れ道、不思善不思惡の時那箇か是れ本來の面目。

佛身は法界に充滿すと、即今何れの處に向てか之を拜せん。

本來無一物、山河大地何れより出生し來る。

坐禪は何回にても之を修すべし、其の時間も敢て長短を論ずべきに非ず。縱ひ坐禪せざる時も下腹部に力を籠め呼吸を深くし心氣を平らかにし、脊梁骨を堅立して、所謂坐禪の如き姿勢を取るべし。是れ調心の妙法である。公案工夫の如きは師家の提撕を受くることが必要である。

自誠の必要

と思はずとも、觀念力が現はれて、獨り順逆の二境に支配せられざるのみならず、從晝至夜、悠然として天地の大道を履み佛祖の妙法を樂み、身心ともに健全無病となりて、能く自利々他の行持を全うするものである。

坐禪をするには靜かな場所を擇ぶべきであるが、狹き家や家内の大勢なる宅では、靜室を擇ぶことも出來兼ねるものであるから、今は夫等の人を標準として、簡易なる坐禪の仕方を左に述ぶることゝ致します。

一、每朝、起床の後、寢室又は佛壇の前又は床の間に向ひて、約二十分間以上坐禪すべし。但し必ずしも場所を擇ぶに非ず、唯だ成るべく心を調ふるに便宜なる室を宜しとす。若し時間なき時は五分にても十分にても宜し。

一、坐禪の時は成るべく、蒲團を敷くべし。

一、先つ右の足を以て左の腿の上に安じ、次に左の足を右の腿の上に安ず(結跏趺坐)或は唯だ左の足を以て右の腿の上に安ずるのみ(半跏趺坐)但し坐久うして足痛む時は左右の足の組方を前後するも妨げ無し。右兩樣とも出來ざる者は、平日の坐り方にて靜坐し漸次熟練の後本儀に基く。

一、次に右の手を足の上、下腹部の中央に掌を仰ぎて安じ、左の手を右の掌の上に仰ぎ安じ、兩手の大拇指を向ひて相拄へしむべし。

一、姿勢を端直にして下腹部に力を入れ脊梁骨を直立し、寂然不動の狀態に安住すべし。

一、坐し了りて後靜かに身體を動かすこと七八返し、口を開いて欠氣すること一兩度し、それより口を閉ぢて出入の

一、艱難は汝を玉にすとの古言を觀じて、萬事に堪忍すべし。

一、樂は苦の種、苦は樂の種なりと念うて、油斷なく一層勉強力を勵ますべし。

一、神の守りと佛の救ひとを仰ぎて、苟も卑屈の精神を起さゞれ。

一、正直の道を守りて、如何なる場合にも、己れを欺き人を欺くの言行あるべからず。

人生萬事意の如くなるべきものではない。明治天皇の御製にも『時はかる器の針のともすればくるひがちなる世にこそありけれ』と御示し下されてある。幸あれば幸あるにつけ。その心亂れ易く、禍ひあれば禍ひあるにつけ、其の心狂ひ易し。此の間に立て能く眞の道を踏み行くことは唯だ觀念の力に依るの外は無い。觀念の力は能く苦しみを轉じて樂みとなし、禍ひを轉じて福となすの妙用がある。又の御製には『何事も思ふがまゝにならざるが却りて人の身の爲にこそ』『開けゆく道に出でゝも心せよつまづくこともある世なりけり』等の有り難き御諭しがある。故に、妄りに世を恨まず妄りに人を恨まず、唯だ自己の觀念力を養うて、人生の荒海に願行の船を進むることが大切であります。

坐禪法

觀念の力も時に依ると邪智や妄情の爲めに遮らるゝ樣なこともあるに依て、吾々は邪智妄情の根本を截斷るべき修養を積まねばならぬ。是れ卽ち坐禪法である。坐禪の法に依て心地寂靜に歸すれば觀念しやう

誓願は道に進み善に勵むの基なるを以て、寸時も放過してはならぬ。この誓願だに堅固ならば、何事をするも皆な永世不滅の功德を成ずるの勝因となるものである。

觀念法

兎角、人は順逆の二境に對して心の動き易いものである。平素修養の心懸けある者でも、特殊の場合に臨むとフラ〳〵と心が動き出して、遂に其の志を紊す様になるものであります。依て朝夕左の觀念法を習ふことが必要である。

順境に處したる場合は

一、凡て一身の幸福は、天地神明及び父母祖先等の賜ものなることを觀じて、其御恩を報謝するに足るべき義務を盡すべし。

一、又、現世の幸福は、過去の善根力に依るものなりと觀じて、更に今日以後の幸福を繼續し得べき善根を積行せんことを期すべし。

一、些々たる幸福にも、深く歡喜の心を發し、快活に己れの本分に向って努力すべし。

逆境に處したる場合は

一、何事も、皆な宿世の因緣なりと諦めて分に安んじ足ることを知るべし。

（五）家事の取締り火盗の用心台所の整理等萬端に注意して夫をして安心せしめよ。

以上は善生子經・長阿含經・六方禮經等に依りて意譯的に記したものであるが、要するに父母は慈に止まり、子は孝に止まり、夫は親愛に止まり、妻は和順に止まつて、相互に和合と堪忍と正直と親切とを以てすべし、其の他兄弟主從等の關係も皆これに準じて、夫々の心得あるべきは言ふ迄も無い。

今日一日の誓願

今日一日の行持は左の如く誓願を發し、此の誓願を實行する樣心懸けたいものである。

今日一日の誓ひ。

一、今日一日、四の御恩、天皇陛下と父母祖先と社會と神佛との御恩を忘れず、厚く之れに酬ひ奉るべし。

一、今日一日、如何なる場合ありとも、腹を立てず、又、虚僞を申すまじ。

一、今日一日、縱へ仇敵に對ふとも、之を恨み憎むこと無く、心氣を靜めて柔和の德を養ふべし。

一、今日一日、何人に對しても必ず眞心を以て之に接し言語動作凡て親切なるべし。

一、今日一日、必ず己れが職分を果し、又、分に應じて善き業を勸むべし。

一、今日一日、上を敬ひ下を憐み、一身の樂しみを棄つるとも、必ず他人の爲めには忠誠なるべし。

一、今日一日、神明と佛陀と祖先とに對する拜禮の儀を缺くことあるべからず。

(一)教育を施して其子をして正しき人格の者たらしむべし。

(二)必要なる智能を啓發せしむべし。

(三)規律を守り品行を正しうせしむべし。

(四)結婚に關しては其子將來の幸福と安心とを得せしめんことを期すべし。

(五)所有の財物は適當に之を給與すべし。

二、夫の妻に對する心得

(一)正しき心を以て妻に接し、常に敬意を存し如何なる場合にも奴隷の如く遇することあるべからず。

(二)妻に缺點ありとも妄りに之を恨みて怒り罵ることあるべからず。

(三)夫たる者は其身の品行を愼み妻をして不安の心を抱かしめざれ。

(四)身分に應じたる衣食を給與すべし。

(五)妻の心をして常に愉快ならしむべし。

一、妻の夫に對する心得。

(一)夫を敬ひて出入ともに眞心を以て送迎すべし。

(二)家庭を整理して內助の德を全うすべし。

(三)品行を愼しみ貞節を守り如何なる場合にも不快の色を作して瞋り罵ることあるべからず。

(四 柔順に夫の命を守り萬事の行なひに蔭日向なからん事を要す。

與へても宜い。猶ほ唱へ文は其の場合次第で唯だ心の中に默念するも妨げは無い。

縱横の道德

家庭道德の中心には縱と横とがある。縱は親子、横は夫婦、此の二つが中心となるのである。親子間の道德は慈孝、夫婦間の道德は敬愛である。佛說にある標準に從ひて絕えず德行を修むべきである。

一、子の父母に對する心得左の如し。

(一)眞情を盡して父母に供養すべし。

(二)己れの爲す所は必ず父母に告げて安心せしめよ。

(三)父母の爲す所に同情して其心に逆らはざれ。

(四)父母の命ずる事は快よく應じて背かざれ。

(五)父母の正業を相續せば益々之れが發展を期せよ。

父母の命令や遺業とても、從ふべからざる事、繼ぐべからざるものは、敢て必ずしも盲從せよといふではない。要するに至誠眞實の心を以て父母に事へ、父母をして安心せしめ滿足せしむることを主とし、又己れの身を立て道を行なひ祖先の名をも揚ぐる樣に心懸けねばならぬ。

一、父母の子に對する心得。

一、次は朝食又は午餐の内に新らしき御飯の時、初穂として七粒程を取りて膳の上方に安じ、左の偈文を唱へて偏法界の餓鬼に供養すべし。

汝等鬼神衆、我今施汝供、此食遍十方、一切鬼神共。

一、次に御飯を盛りたる椀を捧げて左の文を一唱すべし、但し三時の食膳とも漸く念唱するを宜しとす。

上分三寶、中分四恩、下及六道、皆同供養、爲斷一切惡、爲修一切善、爲度一切衆、回向於佛道。

一、食し了りなば左の文を一唱すべし。

處世界如虛空、如蓮華不著水、心清淨超於彼、稽首禮無上尊。

凡そ人は生んが爲めに食物を取るのであるが、何の爲めに生きるかといふに、人の人たる道を盡して人生の目的を達せんが爲めである。我が佛教に在りてはそれ以外に、未來生々世々の大安心を決定して、永久に自覺々他の覺行を成就せんが爲めに生きるのである。又、涓滴粒米も、御國の御恩、天地の御惠、親祖先の御恩、農民辛苦の賜なりと念ぜば、聊かも不足の念は起されまじ、縱ひ麁食を喫するとも『箸とらば御主や親の恩を知れ我が一力で喰ふと思ふな』の心を忘れざれば、有り難く喜んで戴かれる。喜んで食し愉快に働けば、食物の消化も宜く、氣血の循環も宜く、自然に營養の効果をも奏するものである。殊に朝食か晝食の内一回新らしく炊きし御飯の内、御初穂を取りて諸餓鬼に施すが如きは、大なる功徳がある、施し了つた御初穂の御飯粒は庭石などの淨き處に置きて、小鳥に與ふるか、又は池水に投じて魚に

ら消息せよ』ともある。されば就眠の時と雖も、油斷なく精神の修養に努めねばならぬ。又、一日の中には腹の立つ事もあらうし殘念と思ふ事もあらうが、此等の事は就眠の際に綺麗に諦めて、快活なる心持に復することを忘れてはならぬ。家の取締りとしては就眠の前に火の元や戸締りの用心等に注意することは言ふ迄も無いことである。

食時の行持

一、食膳に對ひし時、先づ左の如き觀念を爲すべし。

（一）一粒の米、一莖の菜も、皆な祖先の恩と天地の惠みと農民の辛勞とに依りて生じたることを念ぜよ。

（二）この食物を得たらん身は祖先の恩に報じ、天地の惠みに酬ひ、農民の辛勞に背かざる、麗はしき德行を守るべき義務あることを念ぜよ。

（三）我身を誤まるものは我心なり、我身を苦むるものは我過なり。故に常に自ら貪り瞋り僞り高ぶるの心を起すまじと念ぜよ。

（四）食物は我身體を養ふ爲めの良藥なるを以て、妄りに美味に愛著すべきものならずと念ぜよ。

（五）食物を用ゆるは、徒らに生きんが爲めに非ず、生きて人の人たる道を修め、更に進んで永劫不變の樂因たる菩提を成ぜんが爲めなりと念ぜよ。

回向を爲すべし（若し讀誦の暇なき時は、直ちに回向を爲すも妨げなし）

その回向文

願くは此の功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆な倶に佛道を成ぜんことを。

十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅密。

明治天皇の御製に『つもりては拂ふ方なくなりぬべし塵ばかりなる事と思へど』と仰せられし通り、日日の行持に於て深く自ら反省する所が無ければ、自然に惡き習性をも造り出すこととなるものである。故に晩課の勤めの折に能く一日中の所爲を顧みて、佛の御前に懺悔し且つ佛法僧の三寶に歸依し奉りて、身口意の三業を淨め、信念を新らしくする必要があります。これがやがて祖先累代の御追善ともなる道理あることを知らねばなりませぬ。

就眠時の心得

一、蒲團の上に端坐し、掌を合せて、三度、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧を唱ふべし。

一、次に明朝起きべき時間、明日の爲すべき仕事及び其の順序等を豫め取り極めて、確かなる覺悟を定め置くこと肝要なり。

梵網經の序文に『夜は卽ち心を攝めて三寶を存念せよ』とあり。遺教經には『晝は卽ち勤心に善法を修習して時を失せしむること無かれ、初夜にも後夜にも亦廢することと有ること勿れ。中夜に誦經して以て自

願くは我と一切衆生と、今生より乃至生々を盡して正法を開くことあらん、聞くことあらんとき、正法を疑著せじ、不信なるべからず。まさに正法に値はん時、世法を捨てゝ佛法を受持せん、終に大地の有情と共に成道することを得ん。

願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて障道の因緣ありとも、佛道に依りて得道せりし諸佛諸祖、我れを愍れみて業累を解脱せしめ、學道障り無からしめ、其の功德法門普ねく無盡法界に充滿彌綸せらん。哀れみを我れに分布すべし、佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならん。佛祖を仰觀すれば一佛祖なり、發心を觀想するにも一發心なるべし。哀れみを七通八達せんに、得便宜なり、落便宜なり、この故に龍牙の云く、昔生未だ了せずんば、今須らく了ずべし。此の生、累生の身を度取せよ、古佛未だ悟らざれば今者に同じ、悟り了れば、今人も即ち古人、靜かに此の因緣を參究すべし、是れ證佛の承當なり。

二、次に左の懺悔文及び三歸戒文を一唱又は三唱すべし。

懺悔文

我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔。

三歸戒文

南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、歸依佛無上尊、歸依法離塵尊、歸依僧和合尊、歸依佛竟、歸依法竟、歸依僧竟。

三、次に高祖大師發菩提心訓（學道用心集の第一章）又は甘露門（施食法）又は其他の經文を適宜に讀誦して、左の

にし奉り、上罔極の鴻恩に報い奉る、更に願くは先祖累代(此處に於て父母祖先等の法名を讀み上ぐべし)精靈、六親眷屬七世の父母、有緣無緣一切の群靈に回向して、覺路を莊嚴せんことを。

十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅密。

一、次に四弘誓願文を誦じ了て、正坐の儘三度禮拜すべし。

四弘誓願文

衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成。

以上は普通一般の人々の爲めに最も簡易なる勤行法を示したものである。老人其の他閑散なる方々にありては今一層叮重なる勤行法を修せらるゝことは猶更結構の事であります。

黄昏以後の行持

出來得るならば、御夕飯の前後に於て、神前と佛前の勤行を營まれたきものと思ふ。若し多忙にして勤むる能はざる時は、就眠前に之を行ふも妨げず。

晩課勤行法

一、先づ神前に敬禮すべし。其の心得は晨朝の時に同じ。

一、次に正坐して左の願文を讀むべし(此文は發願文と稱して、高祖大師の御親訓なり)

一、初めに三度拜を設け（坐拜にても妨げなし）一拜毎に左の御文を一句づゝ唱ふべし。

自ら佛に歸依したてまつる、當に願くは衆生とともに、大道を體解して、無上意を發さん。

自ら法に歸依したてまつる、當に願くは衆生とともに、深く經藏に入りて、智慧海の如くならん。

自ら僧に歸依したてまつる、當に願くは衆生とともに、大衆を統理して、一切無礙ならん。

一、次に正坐して低頭し、至心左の文を唱ふべし（一回又は三回、時の宜しきに從ふ）

南無釋迦牟尼佛、南無高祖承陽大師、南無太祖常濟大師、生生世世値遇頂戴

一、次に般若心經を讀誦して左の回向文を唱ふべし（但し平素讀み慣ひし經文あらば必ずしも心經に限るに非ず）

その回向文

上來、般若心經を諷誦す、集むる所の功徳は、十方常住一切の三寶、日本國内大小神祇の爲めにし奉る。

伏して冀くは、上、四恩を報じ、下、三有を資け、法界の含識とともに同じく菩提を圓滿せんことを、更に祈る

皇圖鞏固、國土昇平、家運興隆、災障消除、諸緣吉祥ならんことを。

十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅密。

一、次に修證義を讀誦して左の回向文を唱ふべし。（但し修證義は前三章と後二章とに分ちて讀むもよし、また外に讀み慣ひし經典あらば必ずしも修證義に限るにも非ず）

その回向文

仰ぎ冀くは三寶諒かに照鑒を垂れたまへ。上來、修證義を諷誦す、集る所の功德は、歷代天皇神儀の爲め

一、洗面し了らば、必ず神前に向ひ敬禮をなすべし。

一、神前に向ふ時は、其の心に一點の邪念をも存せず、鏡の如く淨らかにして、唯だ神恩の忝さを觀じて、感謝の正念に住すべし。

我が國民の家庭には必ず神棚を設けられてある。我が國の神は卽ち、皇祖皇宗を始め奉り、國家に大功ある臣民の祖先を祀り奉つたものである。故に國民は衷心より敬神の誠を捧げねばならぬ。禪門の寺院に於ける毎朝の勤行中、最初の法要は日本國內大小の神祇を供養して、國家の安寧と興隆とを祈念することになつて居る。神に向ひし時は全身が誠一つになる樣でなければならぬ。その誠とは明治天皇の御製に『目に見えぬ神に向ひて愧ぢざるは人の心のまことなりけり』と仰せられたる御聖旨に順がひ奉り、神の御照覽に對して愧かしからぬ程の淨き心を持つべきである。神の御光は國の內外をも照したまはざるは無し、同じく御製にも『我が心及ばぬ國の果までも夜晝神は守りますらむ』とあり。又、後宇多天皇の御製には『天つ神國つやしろをいはひてぞ我葦原の國は治まる』後醍醐天皇は『皆人の心もみがけ千早振神の鏡の曇るときなく』とある。此等の御製を拜して常に敬神の誠を存せねばならぬ。

佛前に於ける勤行

一、神前の拜禮旣に了らば、直ちに內佛に對して、朝課の勤行を爲すべし。但し佛前には燈燭を點じ、線香を立つる等、適宜の供養を營むべし。

禮辭すべし。

『早起は三文の徳あり』とも申せば、勤めて早起の習慣を作るべし。禪宗の叢林などにては午前二時又は三時に起床するも、一般の人々は其の家業の狀態に依りて起床の時間に遲速あるは勿論なるも、成るべく太陽より先に床を離れ、新しく淸らかなる空氣を吸收し、縱ひ睡たさを感ずるとも、ウンと腹の底に力を入れ、又は全身に力を籠め、且つ活々したる元氣を振ひ起し、思ひ切て起きるが宜い。

又洗面の時の觀念も必要である。華嚴經淨行品には多數の觀法を示されてあるが其の中に楊枝を執る時の觀法は『手に楊枝を執り、當に願ふべし。衆生とともに心に正法を得て、自然に淸淨ならむ』。水を使ふ時は『水を以て穢を滌ふ、當に願ふべし、衆生とともに淨念を具足して、畢竟無垢ならむ』。手を洗ふ時は『水を以て掌を盥ふ、當に願ふべし、衆生とともに上妙の手を得て、佛法を受持せむ』云々の願文を示されてある。要するに、面を洗うたならば心も亦た是の如く淨らかならしめんと念じ、手を洗うたならば、此の淨き手を以て正しき道を持ちたしと觀ずるのである。

朝日の昇るを觀たならば、明治天皇の『さし昇る朝日の如くさわやかに持たまほしきは心なりけり』の御製を念じ、霽れたる空を望みなば『あさ綠すみ渡りたる大空のひろきをおのが心ともがな』の御製を念ずるが宜い。是等は一日の行持力を進むるの第一歩であります。

神前に於ける拜禮の心得

下されてあります。

されば我が曹洞宗の檀信徒諸彦は、世間一般の人々に率先して、一日の光陰を虚うせず、勤めて最善なる行持を勵まるゝ樣に致したきものである。以下述ぶる所は、吾が宗檀信徒諸彦の行持上の心得を擧げた樣なものゝ其の實は一般佛教信徒の標準ともなるものがあらうと思ふ。

晨朝の行持

『一年の計は元日にあり、一月の計は朔日にあり、一日の計は鷄明にあり』とも申せば、一日の中でも、先づ第一に晨朝の行持を嚴守せねばならぬ。

起床及び洗面の時の心得

一、朝は早く起き、新鮮なる空氣を吸收し、適度の運動を爲し、心持は最も快活なるべし。

一、洗面の時は、精神までも洗ひ淨めて、一點の穢れだも遺さゞらんと願ふべし。

一、洗面後は、其場に於て掌を合せ、天地と四方に向つて頭を低げ、禮を施すべし。(南方は至尊陛下、東方は父母祖先、西方は兄弟妻子等、北方は師長及び朋友等、天は佛陀及び神明、地は奴婢眷屬等なり)、若し一々に禮を行はざる時は、直立低頭心中に於て禮を爲すべし。

一、次に父母及び祖父母又は兄姉等ある者は、恭しく朝の禮辭を述べ、召使奉公人は其の御主人等に對し叮嚀に

禪門信徒一日の行持

行持の功德

高祖大師は行持の功德を示して『この一日は惜しむべき重寶なり。尺璧の價値に擬すべからず、驪珠にかふることなし、古賢惜むこと身命よりも過ぎたり、靜かにおもふべし驪珠は求めつべし、尺璧は得ることもあらん、一生の百歲の中の一日は一たび失はんか再び得ること無からん』と仰せられた。實にや人間の吉凶禍福も全く一日の行持如何にありて存するのである。一日惡を作せば一生の悔を招き、一日善を行へば永劫の福を遺す。

人言草の中に『一日道を忘れば一年の流行におくれ、一日業を怠れば百年の身を失ふ、いづれ恐るべきは今日只今』とあるが、實に愼むべきは『今日只今』である『盛年重ねて來らず、一日再び晨なり難し』とは陶淵明の格言、『あすありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは』とは親鸞上人の自警ならずや。故に釋尊は法句經に『人壽百歲なりとも、情怠りて勤めずんば、一日身心を策勵するに如ず』と御誡め

の意旨を擴張して、貧民を救助するとか、慈善會等に寄附するとかいふの類は、格別の大功德があるに相違ない。此等の道理は十分に心得て、進んでは追孝報恩の大義を全うし、退いては絶大の功德を成就する樣に致したいものであります。

正法の加被力を仰がざれば飲食會と擇ぶ所が無い。此の邊の事は能々注意して貰ひたい。又、供養

れるから益々邪見な心を起されぬ。佛様の御照覧を喜ぶが故に、逆境に處するとも自づから安んずる處がある。儒教に天命を畏るゝとあるも、つまり此の信念に外ならぬ。されば、太田錦城も梧窓漫筆の中に『古の聖人は天地鬼神を畏敬したまふ事詩書の二經にて明白なり、天地鬼神を畏敬するは吾道の大本なり』云々というてあります。

ウエルヘルン、ヴント氏は道德に四の階級あることを說たといふことである。其の第一は名譽の爲めに不道德を愼むのである。これは名譽が第一の目的であるから道德は借り物です。借り物の道德は決して永久に持續することは出來ぬ。第二には慣習の爲めに不道德を愼む。これは大分賴母しい道德ではあるけれども、生命の無い人の樣なもので、發展することが出來ませぬ。第三には良心の滿足を求むるが爲めに不道德を愼む。これは、畢竟ずるに自己本位であるから、本當の道德的活動は覺束ない。第四には最高の指導に依て最終の圓滿に達す。これが宗教的道德で、取りも直さず信念の發動したる善行である。

佛教に於ける追善は、其の心を至誠にして佛の加護力を仰ぎ、佛の正法を以て父母祖先に供養するのであるから、通身是れ至誠、渾心是れ佛心である。故に、一枝の花を捧げ一器の水を供へても、其の功德は甚深無量にして、自他平等に成佛得脫の大利益を成就するものであります。

世には追善を營みても追善の本義を忘れ、唯々飲食會の樣になつて了ふのもある樣に思はれて情け無く感ずるのである。尤も、父母祖先等の爲め供養會を設くることは結好ではあるが、追孝の至誠に住して

夜、其の室に至りて生前と同じ樣に挨拶を申し上げ、他出の時も必ず其の室に赴いて、行く先きや歸りの時間迄も、屹度、報告したといふことです。是れ卽ち信念が親に對して發動したる一例であります。

支那の曾子は孝行で有名なる賢人であるが、曾て山中に入つて薪を採て居た時、自分の家に不時の客來があつた。生憎、曾子が留守であつたので、母親がどうしたら好からうと思ひ、心配の餘り、思はず指を咬だそうだ。すると、山中に在りて曾子が胸に異樣の痛みを感じたので不思議に思ひ、倉皇、家に還つたといふ話しがある。その事を詠じて『母指纔方嚙、兒心痛不禁、負薪歸未晩、骨肉至情深』といふ詩を作つた人がある。是れ等も心靈感應の力であつて、別に不思議な事では無い。父母恩重經にも『母親が他出した後で、幼兒が母を慕うて泣く時は、その母親は胸騒ぎがして御乳が漏れ出すものぞ』と說かせられてある。これも亦感應作用の致す所であります。

併し、此の感應は、天地を貫く程の至誠心で無ければ容易に現はれぬに依て、感應の原動力は一片の誠心である。心誠なる時は妄念自づから去り、本性自づから現はる。縱ひ一日でも、一時でも、一刹那でも、誠の道に叶ふ時は、必ず天地の道を通じ本性の德を現はす。故に 明治天皇は『天地を動かすばかり言の葉の誠の道をきはめてしがな』と御製遊ばされてある。敷島の道は天地を動かすの力があるといふ至誠より出るからであります。

此の心がありてこそ、始めて佛樣とも交通が出來る。佛樣と交通が出來れば、常に佛樣の御照覽を恐

此の信念と行持とは、至誠天地を感動するの力があるから、高祖大師が『濁りなき心の水にすむ月は波もくだけて光りとぞなる』と詠じたまひし如く、此の至誠心が萬事の上に發揮すれば、任運に孝悌忠信の道を現はし、恭儉博愛の徳に愜ふものであります。獨り人と人との間のみならず、其の至誠の光明は禽獸蟲魚の上にも輝き、土石砂礫の上にも輝き、天地法界を攝して盡く至誠の中に收め盡す樣になるものです。

海軍中將藤井較一氏の母堂は、明治四十三年が八十三歳であつたそうだ。氏が毎日海軍省に出仕する時、必ず玄關迄見送りをされた。氏は餘りに勿體なしとて之を止めんとせしに、母堂は『玄關迄見送るのは、昔から此の家の家風なれば、之を廢しては御先祖へ申譯なし、それのみならず、男子たる者は門口を踏み出すと七人の敵ありといふ位ぢや、何時如何なる出來事あらうも知れず、其の場合、必ずとも未練なる振舞を致されなよ、私が門口に送るのは、一ツには別れを告ぐるの意味もある、義の爲めには一命を捨つることあるとも、私は却て嬉しく思ふであらうぞ』と言はれたそうであります。是れ即ち信念が子に對して發動したのである。

昔、越後新潟に五十嵐俊明といへる書師があつた。非常な篤信家で、曾て母親が病に臥せし時、普門品を血書して平癒を祈つたことがある。其の至誠が通ぜしものと見え、頗る重態であつた母の病も、一旦は本復したといふことである。兩親の歿後には、兩親の居りし室内は生涯自分用に使うたこと無く、毎朝毎

坂本龍馬は、伏見の寺田屋騷動に不慮の死を遂げたる勤王家であつた。そこで、寺田屋の親戚荒木英一等が相謀りて、京都靈山に在る坂本の墓畔に碑を建て、此の事を記して永世に傳ふることと致した。其の碑の撰文は、時の遞信大臣大浦兼武氏で、題額は皇后宮太夫從二位香川子爵の筆である。此等の事緣は決して輕々しく見るべきものではありませぬ。皆な是れ心靈の感應に依るものと信ずるの外は無い。

乃木大將も幽靈の存在を信じて居られたと申すことです。日露の役に、二人の令息と共に戰地に赴かれ、長男は金州城に於て戰死せられ、二男は大將に從つて旅順包圍軍に加はつた。一夜、大將は椅子に凭て、ウツラ〳〵として居られた時、遠き陣中に居るべき令息が、一人で大將の前に來た。すると、大將は大に叱りつけられ『明日、大包圍の計畫ある今宵に臨み、私情に驅られて此處に來ること言語道斷なり』といはれしに、令息は一語をも發せず、悄々として立ち去られた。大將は翌日に至り、始めて令息戰死の事を聞かれ、時間を考へて見たるに、前夜室に入り來りし時と、戰死の時とが同時刻であつたと申すことであります。是れ亦心靈感應の致す所で、不思議でも何んでも無いのである。

絕大の道德

此の心靈感應の道理を確信することが出來さへすれば、殆ど生死の爲めに幽明の隔てを執する樣なことが無いから、父母祖先の靈に對しても生者に對すると同一の心を以て追孝の佛事を營むこととなります。

製の如き靈鑑を垂れさせらるゝのである。

明治天皇は『とこしへに民安かれと祈るなる我が代を守れ伊勢の大神』と宣ひ、『わが心至らぬ隈のなくもがな此の世を照す月の如くに』と願はせられたる大御心は、自然、六千萬の國民の腦裏に大なる感應を御與へ下されてあるに相違ない。此の感應力に對する信念がありてこそ、神を祭り、佛を供養し、及び父母祖先等に追孝するの行法儀式も神聖なる意味を具へて來るのであります。

故に高祖大師は『一向に佛法に身心を投ぜんことを深くたくはふる心とせるは、佛法必ず人をあはれむことあるなり、おろかなる人天なほまことを感ずるおもひあり、諸佛の正法いかでかまことに感應するあはれみなからん、土石沙礫にも誠感の至神はあるなり』と御示し下されてある。無情なる土石や、草や木にも感應の道理あることを知らねば、本當の信仰心は發せられぬものです。

明治三十七年二月六日、我が國と露國とは遂に戰端を開くこととなつたが、時に皇后陛下は葉山の御用邸に在らせられた。或夜の御夢に、白衣にして袴を穿ちたる三十七八歳の男子が、恭しく御前はるかに跪き『微臣は坂本龍馬にて候が、今回、露國と戰端を開かせたまふとも決して御心を煩はせたまふこと勿れ、微臣等も及ばずながら、我が海軍を護り候へば、我邦の勝利を得ること疑ふべくも候はず、冀はくは御心安く思召したまへ』と言上するや、忽ちに其の姿は失せたるも、陛下には深く龍馬の忠魂を嘉みせられたまはり、後に亡靈弔慰の爲めにとて金若干を下賜せられました。

追善供養に大功德あることは、心靈上に感應力が存するからである。此の事は、之を學理的に研究したならば、實に心靈上の大問題であるが、一般人は唯だ心靈の不滅なることを信ずるが宜らうと思ふ。吾々の本心は、宇宙の大靈と合一して、元より大小長短の量を絶して居る。されど、之と同時に、因緣業力は無限に相續して窮まりあること無し、身口意三業は善惡等の主體であるが、その業勢力を執持するものは心識である。阿賴耶識といふも此の心識の異名であります。心識の本體は法界平等にて不垢不淨なるも、其の性相と作用とは業力に依て變々化々して往く、これを心靈の不滅といふのである。此の心靈が中有の身をも產み出し、來生の果報をも造るのであります。

而して、心靈には不思議なる感應力がある。現在の吾々の精神も亦同一であるから、矢張、不思議なる感應力が無ければならぬ。子を思ふの親、親を慕ふの子は言ふに及ばず、夫婦・兄弟・朋友の間にも、自然に此の感應力が現はれて居ることを自覺せねばならぬ。追善の佛事の如きも、至誠眞實の心を以て之を營む時は、其の孝心、又は法力は冥界にも通じ、顯界にも感じ、佛菩薩にも鬼神にも感應するものである。佛は此の感應力に乘じて佛身法界に充滿し、普く一切群生の前に現ずるの慈悲妙用を現はしたまひ、神は此の感應力に乘じて『我心及ばぬ國のはて迄も夜晝神は守りますらむ』と詠じたまひし明治天皇の御

し、佛に道交し去るのが唯一の方法です。

我が國で神をカミと呼ぶのはカムガミの義であるというて居る。カムガミは鑑がみるの意で、卽ち鏡のことです。鏡といふものは正直淸明にして一點の私曲が無い。神の心も正直を體とするに依て、斯く名けたものであります。天神七代・地神五代・其の他歷代の天皇方は皆な正直淸明の御德を備へさせられ、天地の心を以て御心と爲し、日月の明を以て御行ひと爲せられたから、盡く至誠正直の德が現はれて居ります。

我が國の神樣といふには三種ある。一には、皇祖皇宗を祭り奉りしもの、二には歷朝の天皇皇族等を祭り奉りしもの、三には明臣賢將、孝子烈婦等の國家に功勞あり、又は國民の龜鑑となすべき人の神靈を祭りしものです。縱ひ臣下の者と雖も、一身の私を棄てゝ、國家及び社會に盡すが如きは、全く至誠心の發動に外ならぬに依り、神樣として祭ることが出來ます。

至誠の靈に對するには、至誠の心を以てせざれば感應は現はれませぬ。正直の體に向つては、正直の德に非ざれば冥合することはならぬ。故に明治天皇は、『目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけり』とも御製遊ばされてあります。此の正直至誠の神體が國體の基礎、道德の根柢となり、是を以て祖先に事へ、是を以て臣民を愛撫したまふのが、我國二千五百餘年の歷史を一貫したる精華である。是れ實に皇國の最大美風ではありませんか。

天道を守つて居るから、改めて御祈禱をせんでも、平生底が御祈禱の爲通しであるといはれました。是れ全く祈らずとても神や守らんの意味であります。之に反して、縱ひ何程の御祈禱を致さうとも、若し天理に背き人道に悖つたならば、御利益のあらう筈はありません。經を讀み呪を誦ずるも亦是の如く、日に萬卷の經を讀むとも、其の心正しからず、其の念誠なき時は決して御利益を被むることは出來ぬ。

昔、東印度の國王が、達磨大士の御師匠さんであつた釋尊より廿七代の祖師般若多羅尊者を請じて齋を設けられた。然るに、尊者は一向に經も讀まず回向もせられぬから、國王は怪みて『なぜ貴僧は御經文を讀まれぬぞ』と問はれた、其の時、尊者は『貧道、出息衆緣に涉らず入息陰界に居せず、常に如是經を轉ずること百千萬億卷』と答へられた。卽ち、私は出息にも入息にも、萬境に迷はされず、妄念に汚されず、常に佛心に相應したる道念に住して居りますから、朝から晩までが御經文の讀み通しでありますといふ御挨拶なのである。佛敎を信ずる人はからでなければなりませぬ。所謂『誠の道に叶ふ』て、全身心が道と一致する時は、此身此儘が活きた御經文になるのである。

支那の郝隆といふ者は、七月七日に、日中に出て仰臥して居るから、或人が『何故に、そんな熱い所に寢て居るか』と問ひしに『我は腹の中の書物を蟲干するのぢや』と答へたそうな。郝隆の振舞は些と氣違ひじみて居る樣だが、併し、吾々も亦、自分の腹の中に活きた御經を藏め、活きた佛を安置して居る樣でなければなりませぬ。併し、此の心を經典にし、此の身を大道とすることは、至誠眞實の心を以て神に感應

祭りの大典にして、即ち御追孝の御行事である。四方拜の如きも、天地四方の神々に對せらるゝ御儀式であれば、矢張、廣い意味に於て御追孝の御趣意より出でさせられたものとも見奉ることが出來ます。而して、我が皇室に於かせられて皇祖皇宗を御祭り遊ばさるゝのは、純潔なる御信念と、至誠に祖宗の恩惠を感謝あらせらるゝ御孝心とより出でさせられたものであります。故に、其の間には微塵許りも曖昧なる情想は無い。

明治天皇の御製に『人は唯誠の道を守らなん高き賤しき級はありとも』と仰せられたが、此の誠の道を以て人の祖宗に對せらるゝのでありますから、自づから神の御心と一致融合したまふのである。『千早振神の心に叶ふらむ我が國民の盡す誠は』と御製あらせられしが如く、一片の至誠心は能く神人一體の奇特を現はすものであります。菅公は『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん』と詠ぜられたとある。是れは神佛を祈るには及ばぬといふ意味では無い。唯だ、誠の道を守る時は其の心が自づから神佛に冥合することを示されたものです。

孔夫子が病氣に罹りて、次第に重くなる樣であつたから、子路が心配して御祈禱せられんことを請うたことがある。其の時、孔夫子は『古より天下の爲めに祈ることはあるが一人の爲めに祈ることもあるか』と尋ねられると、子路は答へて『それは有ります、誄といふ行狀を書た祭りの文に「爾を上下の神祇に禱る」といふことが書てあります』というた。すると孔夫子は『丘の禱ること久し』私は日々夜々に

要するに、父母祖先等の恩分に報ぜんが爲めに追善供養を營むことは、常恒不斷でなければならぬが、僧を請じて特殊の佛事を修し、親戚故舊を招いて供養を營むが如きは、平生に於て常に之を行ふことは出來ぬに依て、便宜に忌日・命日等を定めたものである。殊に祖先を敬崇し孝道を尊重する我が國の事であれば、支那の風儀でも其の可なるものは盡く採用して、遂には、上は皇室よりして、下、一般人民に至る迄、慇懃叮嚀なる佛事を營辨する樣になつたのであります。

皇國の美風

父母祖先を崇拜し追祀するは、我が國に於ける最大美風である。神武天皇は、中洲の賊を平げたまひて橿原に宮居を築き、御政を敷きたまふに當り、靈の時を建てゝ皇祖の尊靈を祭らせられ、『以て大孝を伸ぶ』と仰せられてある。是れ正しく崇高嚴肅なる御追孝の御勤めであります。故に、中世までは神祇官を太政官の上に置き、世々の天皇は大嘗祭を始めとして、年中の御祭祀を以て政治の第一としたまうたのである。

明治天皇の如きは、取り分け崇祖の大御心深くあらせられ、御在位四十五年の間、皇祖皇宗に對せらるゝ御孝心と、御祭祀の莊嚴懇切にてあらせらるゝこととは、國民一般の感泣措く能はざる所でありまず。されば一年中の大祭祝日は十一日もあるが、四方拜・紀元節・天長・地久の兩節を除けば、何れも御

いふ。小と大とは第一期、第二期といふ位のことである。これより後は、七七日の七の數に擬らへて、七年・十三年・十七年・廿三年・廿七年・卅三年等の追善期を定めたものである。廿五年忌を行ふ處があるが、これは廿三年と廿七年との中間を取て、廿五といふ滿數の時に於て祭祀を行ふこととしたものであらう。五十年・百年等も亦、何れも滿數に依つて佛事を修するのである。

此の追善の事は梵網戒經に『若し父母兄弟死亡の日は、應に法師を請じて菩薩戒の經律を講じ、福をもて亡者を資け、諸佛に見え人天上に生ずることを得せしむべし』とあるを始めとして、正法念經・地藏本願經・灌頂大寶積經等に委しく御示し下されてある。又、大佛頂經に、佛在世の時、波斯匿王が父王の爲めにとて、忌日・命日に佛及び佛弟子を請して齋を設け、王自ら食を引いて供養せられたことが書てあります。

「忌日といふは、禮記の祭義に『君子は終身の喪あり、忌日の謂なり』とありて、其の注に『忌日は親亡の日、他事を擧ぐることを用ゐず』とあるから、一心不亂に、追慕の意を存して祭祀を行ひ、他の雜事に涉るを忌むの意で、忌日というたのである。又、命日といふは、灌頂經に命過日とあるを略した語である。命過日とは一期の壽命の過ぎ去りたる日といふ意味であります。祥月、又は征月といふ語は、正忌日といふのが正しいというた人がある。卽ち、正しく死亡したる月の命日といふことである。正月と書いては一月の正月と混ずるから、祥の字や征の字に改めたものであらうと思ふ。

は死後三日に必ず僧を請して齋を營む、之を見王齋と謂ふ』とある。昔、北齊の人で姓を梁と稱せし者が、死に臨むで其の妻に告げて『吾が生前に愛せし召使の奴と馬とを殉死せしめよ』というたので、死後に、土嚢を以て奴を壓殺した。其の奴が四日目に蘇生して『冥界に於て御主人の鎖に繋がれたまふを見た、然るに、御主人の死後三日といふに、妻子が齋して經を讀みたる功德に依て、御主人は獄苦を免れたまうた』と告げたといふ神話的物語より、三日齋の儀が始まつたらしい。併し、今日では此等の物語りなどに拘はらず、死後三日位に於て、叮嚀なる御供養を行ふのが最も適當のことであらうと思ふ。敢て必ずしも三日目には限らぬ、少くも最初の七日間位は、出來得るならば毎日毎夜に追弔の法要を營む樣に致したいものであります。

百ケ日の佛事は支那の禮法に倣うたもので、卒哭忌ともいふ。哭泣の禮を卒るの義である。父母等の死に當りて、哭泣して息まざるは孝子順孫の至情である。併し、何時迄も無限に悲み泣くは、悲んで傷るに至るを以て、百日を以て哭禮の卒りとして制限したものです。『士は三ケ月、大夫は五ケ月、諸侯は七ケ月』と禮記にあるから、百ケ日といふは、それらを折衷したものであらうと思ふ。併し、父母等に對する哀悼追慕の至情には、固より際限のあらう筈はありませぬ。

次に一周忌・三年忌等の佛事も矢張、儒敎の禮に倣うたのである。禮記に一周年、即ち十三ケ月祭を、小祥忌といひ、三周年、即ち二十五ケ月祭を大祥忌と稱するは、凶服を去りて吉服になるの意味にて祥と

では見ることは出來ぬとある。而して此の中有の壽命は七日に極つて居る。中有七日の中には來生の果を受くるのであるが、若し未だ來果を受くるに至らざる時は、再び中有の身を受くるのである。如何に久しき者と雖も、七度中有の身を受くる間には、必ず來生の果が定まるとある。併し、經論の中には『果報拙なく父母の緣薄きが爲め、幾百萬年の間、中有に迷うて居る者もある』と說てある。佛家に七七日の佛事を行ふのは、中有の交謝する時期に依たものです。

高祖大師は道心の卷に於て、歸依三寶の心得より中有の事を示して『この生を捨て丶未だ後の生に生れざらんその間、中有といふことあり、その命七日なるその間も、常に聲も息まず三寶を唱へ奉らんと思ふべし、七日を經ぬれば中有にて死して、また中有の身をうけて七日あり、いかにひさしと雖も七日をば過ぎず、此の時、何事を見聞くも障り無きこと天眼の如し』云々と仰せられてある。信仰の願力が堅固であれば、中有の間にも歸依三寶の行持が繼續される。併し、願力の薄弱なる者や信念の輕微なる者は、迚もそういふ譯にはゆかぬから、孝子順孫たる者が、其の死者に成り代つて善根を修するに依て追善と申すのである。七七日以外の追善も矢張、此の意味と心得るが宜い。七七日の追善の事は、地藏本願經等に出て居ります。中有のことを中陰といふは、中有中の五陰の意である。五陰は色・受・想・行・識の五でつまり肉體と精神との和合體に名けたものである。

此の外に死後三日目に法事を勤むることがある。是は支那に始まつたことで、釋氏要覽には、『北方の人

院に保存してあるそうです。此等の御話も決して不思議な事ではありませぬ。

至誠の一念内に發する時は、天地も之が爲めに感動し、無情の草木迄も之が爲めに奇特を現はすものである。行誡上人の歌やらに『釋迦阿彌陀造りかへれば下駄足駄變れば變るものにぞありける』とあるが、同一の木材でも、信念を以て造れば佛となり、然らされば履物となる。履物となりては、單に歩行の道具たるに過ぎぬが、佛となれば、其の木材より諸〻の功德を生み諸〻の利益を與へ、時としては大光明を放ちて絕大の神異を現はすこともある。況や吾々の心靈に於てをやである。されば、追善の場合にも、唯飮食物の饗應などに心を用ゐるのみでは決して完全なる御供養とは申されぬ譯である。

佛事の由來

抑も佛敎には生有・死有・中有といふことを申して居る。人が此の世に生れて一期の壽命を保つ間を生有といふ。無常の風に誘はれて一息截斷し、此の世の壽命既に盡きたる時を死有といふ。死有より次の生を受くる迄の間を中有といふ。有とは因果不亡の義と釋して、過去の業因に依て現在の果を稟け、更に未來の報を招くべき定業を有するに依て有といふのであります。

極善の人と極惡の人とは、此の世を去ると同時に來生の果報を感ずるから、中有といふものは無いが、普通の人は、死の一刹那に中有の身を受くるのである。中有の身分は極めて稀薄なるを以て、凡夫の肉眼

を盡し、以て報謝の正道に於て遺憾なからんことを期することである。古今の忠臣義士や、功勞ある者、勲績ある者を祭祀するには、亦前述の如き精神を以てせねばなりませぬ。

更に、佛式の行法と清淨なる布施行とが頗る大切で、是れ亦前に所謂善根功德である。佛式の行法とは禮佛讀經の儀である。卽ち三寶の冥加を仰ぎて菩提道を莊嚴することである。此の場合には其の心を清淨にして一點の妄念をも挾まず、只至誠の氣のみが全身に充ち渡る樣にせねばならぬ。此の至誠の心こそ、神と佛と交通するの最好機關である。先帝（明治天皇）の御製に『目に見えぬ神の心に叶ふこそ人の心の誠なりけり』と御示し下されてあるは、洵に有り難き御歌であります。此の誠の心を以て佛に對する時は、一聲の稱名にも、一句の讀經にも、多大の利益が現はれて來るものである。父母祖先等の靈に對するにも、此の誠の心がありてこそ、不思議の感應力をも現はすことが出來る。

德川時代に、江戶傳馬町の佐久間勘解由といへる人に奉公して、御飯炊をして居たお竹といふ女があつた。主人に事ふることが、最も忠誠にして、殊に慈善心に富み、平生、水盤の隅に網を張りて洗ひ流しの物を受け、自分は其の洗ひ流した物のみを食し、自分の喰ぶべき食物は盡く非人乞食に施した。又、佛法の信心も世に超て最とめでたく、朝夕不斷に佛名を稱へて居たが、遂に立派なる大往生を遂げた。其の時、水盤より光りを放ちて、室の内外に迄も照り輝たといふことです。世の人々は、彼女の事を『大日お竹』と稱して、其の信念と行持とに感ぜざる者はなかつた。其の水盤は、今猶ほ芝增上寺の支院たる心光

を仰ぎ、之に加ふるに、神を祭ること其の在すが如く至誠の供養を營むのであるから、取りも直さず世間と出世間との融合したる、眞俗不二の善根功德であります。

此の眞俗不二の善根功德を過ぎ去りたまひし父母祖先等の爲めに勤め行ふのが追善の佛事であります。つまり父母又は祖先等の爲めに善事を行なひ、その行ふ處の善根功德を以て、父母又は祖先等の離苦得樂、成佛得道に回向するのである。父母又は祖先等の冥福を增進するといふ意味から、之を追福とも稱し、過去の父母又は祖先等に孝道を盡すといふ意味から、之を追孝とも名くるのであります。

獨り父母祖先許りで無く、他の有緣の精靈、若くは無緣の靈に迄も、此の佛事を薦めて以て其の菩提を弔ふのが、平等大悲を以て精神とする佛弟子及び佛敎信者の行持である。尤も、父母祖先等に對しては報恩謝德といふ意味があり、惡人・邪見人、若くは無緣の靈に對しては、慈善救濟といふ意味のあることは言ふ迄もありませぬ。又、釋尊や宗祖等の御年回を勤むるとか、又は先帝陛下の御奉悼會を營み奉るとかいふのは、正しく御洪恩を報謝し奉る所の御供養式であるから、純一なる追孝の佛事であります。

抑も追孝の佛事を行ひまする精神を分解すれば、大略三通になる。一には父母祖先等の恩德を追念して敬慕の誠を盡すこと、二には一枝の花、一瓣の香、一盆の飯なりとも、在すが如く供養して報恩の實を表すること、三には生前の麗はしき逸事や功績などを話し合うて昔を偲び、佛なれば其の敎旨を觀想し、君主なれば其の仁德を讃仰し、父母なれば其の遺訓等を追念して、將來、益々自己を策勵して報恩忠孝の道

追善禪話

追善の本義

佛教に於ては、父母六親は言ふに及ばず、總て先亡後滅の精靈に對して、供養を設け佛事を行ふことを稱して追善と申します。又は御追善とか追善供養とか御追福とか追孝の佛事とか申して居ります。是は佛教道德の上より出たる報恩的行持であるから、能々其の意義を心得て置かねばならぬ。追といふは論語に『終りを愼み遠きを追へば民の德厚きに歸す』とある追遠の意に當る。卽ち、現在の子孫たる者が、既に過ぎ去りたまひし父母祖先の後を追うて、之に盡すことであります。善といふは善根功德の義である。善根功德に世間と出世間との別がある。世間的の善根功德といふは、或は供物を整へて靈前に備へるとか、又は親戚故舊を招いて饗應の莚を開くとか、又は世の貧民を賑はすとかの類であります。出世間的の善根功德といふは、佛法僧の三寶を勸請して、其の加被力を仰ぐとか、又は甚深微妙の經典を讀誦して、滅罪清淨を祈るとかいふ類であります。併し、總ての佛事は、皆盡く三寶を奉請して佛の御加護

草木瓦礫皆佛事を爲す

昔、尾州犬山の城主成瀬隼人正は有名なる明君であつた。其の城下に八郎兵衞と云へる者代々米商を營みしが、父子二代とも、强慾にして潛に二樣の升を製し、賣る時と買ふ時との升を異にし、永年の間非道の利を貪つて居つたと申すことです。然るに隼人正領主と爲るに及んで、政令頗る嚴重にして不正の輩は寸毫も假借せず、之を嚴刑に處し弊風を一洗して、能く領内を治められた。そこで八郎兵衞は恐ろしさ言はん方なく、到底、發覺は免れぬものと諦らめ、是非なく自首して寛大の處置を願出でた。隼人正は十分に取調べ、今迄不正を働きし事を誡しめ、『暫く其の罪を赦すに依つて、其の代り向後七年の間は今迄の賣升を以て買ひ買升を以て賣るべし』と嚴重に申渡された。八郎兵衞は據なく其の命令通りを守りしに、廉賣との評判俄かに高まり商賣大に繁昌し、却て以前よりも身代が榮えたと云ふことです。

此の話は大槻磐溪の文章中に記してあります。唯だ升の用ひ方を違へた許りで、前には不正の惡人となり、後には最も親切な、立派な商人となつて、子孫永久の繁榮を見るに至つた。我等も亦た是の如く唯だ一念の升の使方一つで、佛ともなり鬼ともなり、淨土ともなり地獄ともなる。苦樂昇沈も決して他より强らるゝ譯のものではありませぬ。されば、我等御互は常に萬法唯心の理を信じて深く一念の轉處を愼しみ、益々暗黑世界に遠ざかりて歩を光明の佛界に進め、以て唯心の淨土を建立する事が肝要であります。

き御國といふ名であるけれども、唯是を物質的にのみ解釋してはならぬ。法華論には『煩惱なき衆生の住處を名けて淨土と爲す』ともあれば、煩惱惡業の塵起たず、生死流轉の汚れの無いのが淨土である。其の淨土を得るの道は、唯だ我等の心を淨らかにするに在るのだ。心淨ければ身自づから淨し、身淨ければ國も亦た自づから淨し、是れ則ち必然の道理である。心淨しといふは一切の惡心惡業を離れて、佛の御戒法に隨ひ參らすることです。私は曾て或人の需めに應じて『御佛の國はと問はゞ蓮葉の濁りにそまぬ心にぞある』といふ腰折を與へた事がありまするが、貪瞋癡慢の濁りにそまぬ心こそ全く十方淨土の源であります。

して見れば、佛樣を遠方に拜むのが、やがて心の佛を現はす所以であつて、御淨土を未來に望むが如きも矢張り現在の唯心に淨土を建立するの法門を離れぬのであります。是に至りて佛法も世法も終に一如に歸し、眞諦も俗諦も決して隔てのあるものでは無いのであります。純他力宗と言はれる眞宗の蓮如上人が、曾て道西坊に與へられたる御文の中に斯樣な御示しがある『先づ朝起は天道の冥加と存じ、親孝行は我身の福德、學問は五常の道案內、書物を讀むは心の洗濯、手習ひは眼の療治、堪忍は生涯の守り本尊、短氣は我身の腹切り刀、御內佛に參るは旅立の祝ひ、我身の懺悔は疊の上の御舊蹟參り、と心得べきもの也』とあります。此の文を仔細に玩味しますれば意味甚深にして、自づと眞俗不二の妙理が含蓄して居る樣に思はれる。是れ皆な唯心の淨土を開くの方法と云ふ事が出來るのであります。

が、法我れを轉ずると云ふのであります。

淨土の建立

之を信仰の上から申せば、自分の我慢我見を抛棄て唯一心に佛法僧の三寳に歸依し奉り、三寳の御指圖に從ひ參らせて、毛筋程も自分勝手の量見を交へないのが、正しく法我れを轉ずる境界です。又、之を倫理上から申せば、我が一身を擧げて忠孝仁義の道を守り、縱ひ死すとも此の道を破るまじとの大決心を定めゆくのが、法我れを轉ずであります。我等御互は是非一度は法我れを轉ずる身と爲らなければ修養の効果は現はれませぬ。法に轉ぜられなければいけないのです。『身の爲めに君を思へば二た心君の爲めには身をも思はじ』と歌にいふ如く、忠君といへる大法に轉ぜられねばいけないのです。古今の聖人賢者、忠臣孝子、貞女烈婦といふも皆な法に轉ぜらるゝ事を實行せられたのであります。

サア斯樣に一身の私を抛つて法に打任せますれば、唯だ法のみありて我れといふものが無くなる。故に、我身は卽ち法の身、我身の活動は卽ち法の活動となるに依つて、此の時こそは此の一身を以て自由自在に法を使つて法を運用し、所謂心の欲する所に從つて矩を踰へずと云ふ樣になる。是を我れ法を轉ずと仰せられたのであります。されば、釋尊は唯摩經の佛國品に於て佛の淨土を求むるの心得を示して、『淨土を得んと欲せば當に其の心を淨むべし、其の心淨きに隨つて佛土淨し』と仰せ下されてあります。淨土とは淨

す。行誡上人の歌に『夜もすがら唱ふる三世の御佛の御名は昔の我が名ならずや』とあるが如き、三世の御佛は客觀的なれども我名と爲り了る時は、最早主觀的です。故に唯心の淨土と申したからとて、淨土門に反對するのではありませぬ。

承陽大師は、佛法を習ふ者は、法我れを轉ずると、我れ法を轉ずるとの兩節を心得よと仰せられてあります。法とは佛法と世法とに拘はらず、總じて宇宙の大道より現はれたる一切の法則を云ふのである、我宗門の上から申せば、即ち佛の御戒法です。御戒法と申しても佛敎に限つたものでは無い、即ち前に演べましたる大智慧と大慈悲と大勇氣との三德の事です。大智慧の力に依りて一切の善根功德を實行し、大慈悲の力に依りて一切の衆生を濟度し、大勇氣の力に依りて一切の煩惱惡業を遠離するの法則である。宗敎と云ふも敎育と云ふも、つまる所は此の三大法則に歸するのであります。

法我れを轉ずると云ふ時は、我れと云ふ考を、すつかりと抛捨てゝ天地の法則に打任せ、其の法則に隨順して少しも之れに逆らはぬことです。孔夫子が論語の中に『富と貴きとは是れ人の欲する所なり、其の道を以てせずして之を得れば居らず、貧しきと賤しきとは是れ人の惡む所なり、其の道を以てせずして之を得れば去らず、君子仁を去らば惡んぞ名を成さん、君子は食を終るの間も仁に違ふこと無し、造次にも必ず是に於てし顚沛にも必ず是に於てす』と云はれた通り、縱ひ一身の幸福を犧牲にするとも誓て法には背くまじ法には違ふまじとの大確信を有し、日用光中の作す事、爲る事、盡く法の儘に行ひもてゆくの

黒色とすべきかと云うて泣いたとある。是は一度感染すれば本色に回り難き事を觀じて、人心の染まり易きを慨いたのである。故に未曾有經には『前心、惡を作るは雲の日を覆ふが如く、後心、善を起すは炬の暗を消すが如し』ともありて、我等の一念心が光明ともなり暗黒ともなるのである。古人が、『世を照す光りは人をわかねども我が身に暗き法の燈』と詠んだ通り、兎角、暗黒の方へ足が向てならぬものです。

主觀と客觀

凡そ修養には主觀的と客觀的との兩方面が無ければなりませぬ。主觀的とは自己を中心として觀察すること、客觀的とは模範を他に取ることです。佛の淨土を西方の極樂とか東方の瑠璃光とか云ふ處に求むるのは、客觀的に淨土を欣求するのであるし、我が心是れ淨土なりと明らむるのは、主觀的に淨土を建立するのである。故に、一方には十萬億土を隔て丶佛國ありと說き、一方には玆を去る事遠からずと說く、一寸聞くと大そう反對の樣に思はれますが、其の實は決して矛盾して居るのではありませぬ。喩へて見れば、好き師匠取をして手習をする樣なものです。一字一畫も師匠の手本通りにして聊かも自分勝手を出さないのが客觀的の行き方です。自ら筆を執り自ら字を書き師匠の筆意をソックリ自分の物と爲し了るのが主觀的の行き方です。御手本が無ければ手習は出來ぬが、御手本を御手本とせず、自分の物としなければ、習字の効を奏せぬ。自分の運筆を御手本の通りにするのが他力で御手本を自己に化すのが自力でありま

頗る危險なる鐵橋があつて脫線でもすると迷信河に落ちますから、心を落着けて徐行せねばならぬ。四時には『克己澤』に着し、これより段々と社會の廣野へ出て行きます、五時には『忠が淵』、同く三十分に『和合村』、六時には『實業町』に着し、七時には『根機が崎』にて水を入れ、車輪には油を差し、八時には『儉約の關』を超え、同く四十分に『信義が岡』を經、九時頃には『知足谷』に着し、身分不相應なる欲情を誡しめ、此の精神を相續して、同く二十分に『みさを村』を發し、十時には『博愛港』に着し、是よりは眞正なる宗教國に入り、同く三十分に『敬神臺』、五十分に『奉佛樓』、此の兩驛は倶に宗教市内に在るのである。十一時十分には『ほまれ驛』を通過して眞實に光榮ある境界に入り、彌々正午十二時の眞晝中に最終點なる『成功府』に安着するのである。これで光輝ある人生の道中を無事に經過し未來永劫の後までも智德圓滿の大光明を發揮することが出來るのであります。此の鐵道の切符は寺院と學校とで發賣して居るが、其の人の志が堅固でさへあれば何處でも求める事が出來ます。

それに暗黑線の『卷煙草村』停車場と光明線の『をとなし川』の停車場とは、背なか合せになつて一ツ處にありますから、うつかりすると光明線を行く積りで暗黑線に乘込む事があります、餘程注意せねばなりませぬ。

支那の楊子は岐路に臨み以て南すべきか北すべきかと云うて哭したとある。是は一歩の違ひ萬里の隔たりを爲す事を觀じて、人心の忽ならざるを憂へたのである。又、墨子は白絲を見て、黃色とすべきか

り坂、二時がナマケゲ淵、三時十二分が貧乏森、四時三十分に質貸澤、五時が乞食町、六時十五分には盜賊池、八時十五分に錯亂崖、同じく四十七分に蝮沼、もう人間の資格が消滅である。九時十分が獄屋村、十時五分が暗黑谷、同く五十分が鬼塚、十一時廿分に黃泉河、同く四十分に落膽沼、十二時の最夜中に地獄谷の終點に到着する。此の鐵道の切符は主として酒屋と煙草屋とで賣捌くさうである。併し、己が心に聊かでも油斷があると、どこへ行ても此の切符を推しつけられて、無理無體に乘込せらるゝものであります。

光明世界

此の暗黑鐵道に反して、人道の花を眺め菩提の月を賞して、無限の樂しみを永久に享くべき光明世界に赴かんと思はゞ、光明線の鐵道に乘込まねばなりませぬ。依て私は光明鐵道の時間表を御紹介致さうと思ひます。

此の鐵道は幼年の時代でまだ善惡の理を辨じ得ざる夜分の十一時に親や師匠に逆らはぬ『をとなし川』の驛から發車します、十二時には『立志が濱』を發して一身の方向を定め、同く三十分には『まなびが浦』を出で、一時には『堪忍岬』に着し、同く卅分には『はぢ知りの森』を出で、人の笑ひを招がぬ樣になり、二時には『孝の峰』に着して孝行の道を樂しみ、同く卅分には『正直が島』に至り、三時には、『思ひやりの驛』を通過して慈悲心の源を探り、同く廿分には『信仰嶺』に着するのである。此處には

善惡にあらず』と仰せられてある。善惡は、時に依つて發し法に依つて生ずるが、時そのもの法そのものは、善とも惡とも固定しては居らぬ。例へば我等が五指を固めて拳となす、此の拳は善でも惡でも無い、併し、此の拳を擧げて人の頭でも撲てば亂暴といはれる。之を以て老親の肩でも扣けば孝行者と褒められる。五指を伸せば掌となるが、その掌も善惡超絶である。之を以て人の頬端でも撃けば忽ち喧嘩の種となり、子供の頭でも撫てやれば親切な人だと言はれる。

此の世界も亦た同じ理合にて、衆生の業力次第で淨土とも穢土ともなる。而して其の業力は畢竟一念の轉處である。之を一個人の上に就て惡い方から申せば、人の此の世に生るゝや親や先祖の性質を遺傳することもあり胎內教育の關係もある事は必然なれど、先づ大概は渾沌未分の狀態である。稍や長ずるに從つて親の躾や周圍の事情のために、知らず〳〵の間に第二の天性を形作りて『生れ子が次第〳〵に智慧づきて佛に遠くなるぞ悲しき』といへる歌の樣に、段々と惡業煩惱の暗黑に陷いつて了ふ樣になります。

『ときのこゑ』と題する雜誌の中にワキグルと云ふ人が暗黑鐵道の時間表といふ面白い事を出してゐた。是は人間墮落の徑路を叙べたものである、先づ午前七時卅分に卷煙草村を發車するのだといふ。青年が卷煙草でも喰へて見たがる時が墮落の幕開となる。八時廿分には味淋ヶ原に着いて、同じく四十分には醉加減ヶ瀧、九時廿分には酒飲町に着、十時ヨッパライ坂、十一時十分が亂暴町、十二時喧嘩ヶ濱、此處で家庭に大波瀾を惹起す、此處は難處であるから停車時間も長い、午後一時に同處を發し、一時十五分がヒヨロ

世間の人の上から云うても、ニユートンは墜る林檎に敎へられて引力の理を悟り、ワツトは湯の沸騰に依りて動く鐵瓶の蓋に敎へられて蒸汽を發明し、ヨングは石鹼の水玉に映れる五色の光りに敎へられて光線斜行の理を悟り、ブルーネルは材木を蠶蝕する小虫に敎へられてテームス河に隧道を穿つ事を發明したとある。況や禪門に於ては、靈雲禪師は桃の花の開くのを見て三十年來の迷ひを晴らし、香嚴禪師は小石の竹に當りて響くのを聞いて自己本來の面目を大悟し、東坡は溪聲山色に依りて八萬四千の法藏を覺悟し、太田道灌は山寺の鐘の音に主人公を徹見した。

されば佛の御眼より見れば、此の世界の其の儘が七寶嚴飾の御淨土である。若し惡人の心を以て見れば見る物聞く物が 盡く罪惡の種子となる。『傀儡師胸に掛けたる人形箱鬼を出さうと佛出さうと』自由自在である。心迷へば淨土も穢土となり、心悟れば娑婆も寂光土である。仁者の前には敵なく、邪見の前には佛なし、善惡苦樂は唯だ一念の轉處に依つて分るゝのである。

暗黒世界

我々の肉體その物は善とも名けられず惡とも名けられぬが、一たび動いて、善業ともなり惡業ともなる。我等の心も其の本體は善とも惡とも定められぬが、一たび動いて、善心ともなり惡心ともなる。之を一念の轉處といふのであります。承陽大師は『善惡は法なり、法は善惡にあらず。善惡は時なり、時は

瓔珞經には『理に隨つて心を起す之を善といふ、理に背ひて心を起す之を惡と名く』と示されてあつて、善と惡とは宇宙の本體の理に隨うか背くかに依て分れる。宇宙の本體、天地自然の理とは、抑々何んなものであらうか。

之を人格的に申せば、大智慧と大慈悲と大勇氣とである。原因結果の道理が古今東西を一貫して一絲亂れざるは、宇宙の大智慧力である。天覆ひ地載せて萬物化育し、日月天に輝き雨露地を濕し、山澤氣通じ水火相扶くるは、宇宙の大慈悲力である。易に『天行は健なり君子は以て自彊息まず』とある如く、春夏秋冬、四時循環して息まざるは宇宙の大勇氣である。吾々御互が正しき信念を發し善を勸め惡を去り、常に宇宙本體の理に隨ふ時は、自から宇宙の大精神を感受し、智慧となりては理を辨まへ、慈悲となりては物を憐れみ、勇氣となりては實踐躬行自彊して息まぬ様になる。此の三大力が益々向上して、佛陀大聖の位地に達すれば、遂には智德・恩德・斷德と云へる佛の三德となるのであります。是の時こそは所謂十方世界に、有らゆる土地でも草木でも、牆や壁でも、瓦や礫でも、そつくり宇宙の大精神を發揮して自利利他の佛事を爲して居るといふ事が解る。松に吟ずる風の聲も、一度我耳に觸るれば、我鬱を散じ我情を慰めて、廣大なる利益を與へてくれる。岩に咽ぶ溪河の水も、一度我眼に映れば、我憂ひを拂ひ我心を爽かにして、甚深の功德を施してくれる。仔細に見來れば、吾々は常に宇宙萬象と云へる生きた佛の御利益に預かり、其の御教化に冥資けられて、人の人たる道を盡し、神明佛陀の御德を蒙むつて居るのである。

あれば、西藏・蒙古の樣な國もある。同じ一國の中でさへ、都もあれば鄙もあり、寒國もあれば暖國もありて、各々不同である。又、同じ一町村の內でも、幸福なる人もあれば、不幸なる人もあり、喜んで居る人もあれば、悲しんで居る者もありて、十人十色、百人百色であります。

歐米の如きは野蠻國より漸次に進歩して文明に至つたもの、支那の如きは世界最古の文明國なりしも漸漸に退歩して今日の狀態に至つたものです。昨日の惡人も今日の善人となることあり、少き時の愚者も豈に老後の智者ならざる無きを保せんや。一國の興亡も人事の盛衰も、始めより定まれる運命あるに非ず、皆な善惡の業力に依りて變化常なきものである。

されば同一の世界でも佛が在ませば佛土となり、鬼が住めば惡道となる。所謂一切の萬法は唯業力の所成、一心の所造である。業力といふも本は一心である。故に、七寶嚴飾の佛土も、光明遍照の佛身も、畢竟、唯心の所造ならざるは無い、佛教では是を萬法唯心といふのである。華嚴經に『心は巧なる畫師の如く、能く諸の世間を畫く』といひ、天台にて『十界一念』といふも此の理を示したものです。歌に『神といひ佛といふも世の中の人の心の外の物かは』といひ、加賀の千代女が『千なりや蔓一筋の心より』と詠みたるも、皆な此の意であります。

唯心の淨土

萬法唯心

唯心の淨土と云へる事を御話して見樣と思ひます。元來、淨土といふは淸淨なる國土といふので、佛樣の世界を指すのであります。彌陀如來の在ます西方の極樂世界、藥師如來の在ます東方の瑠璃光世界等を始めとして、經文の中には無數の佛國土が說てある、此等を總じて淨土と稱します。

併し、吾々御互の棲息して居る世界は、宇宙の本體より見れば平等無差別にして、始めより淨土と區別して穢れた世界に作られたものではない。淨き世界といふも穢れたる世界といふも、皆後から名けたものです。第一此の娑婆世界といふものが、好い世界か惡い世界か、文明國か野蠻國かというて尋ねたならば、誰れでも之れに對して確然たる定義を下す事は出來ませぬ。淨土といひ穢土といふも、畢竟ずれば、その土に棲む人次第のものである。

同じ世界の中でも、歐米の如く開けた國もあり、亞弗利加の樣な野蠻國もあり、支那・朝鮮の樣な國も

餓鬼道は百味の飲食も火になると云ふ所で、何所へ往つても貪慾の火が燃え上つてゐるのである。

然るに禪的觀念を有する境界から觀る時は、此の世界は到る所寂光淨土である。寂光淨土とは佛の圓滿なる理想的の淨土を言うのである。淨土の『淨』は淸淨、綺麗と云ふ字であるが、綺麗と云ふ事は、肉眼に映じたる物質的方面で申すと、文明の設備が完全に整つて居ることである。卽ち風儀風俗も善良に、一般の秩序も能く整うて居り、文明的の總ての機關が完全して居るのが淨土である。所が精神的方面から申すと、仁義道德が發達して、身修まり家和ぎ、知識操行の善美なる處が淨土である。

して見れば、今日吾々御互が修養に努めて能く道德的の活動が現はれ、信仰的の妙用が發揮せられて往く時には、現在の此の世界の儘が實に立派な御淨土である。斯くして吾々は精神の力の充實に依つて、人生其のものが既に結構なる安樂淨土の世界となつて現はれ、安心の人は必ず安心の世界に住み、安樂の人は必ず安樂の境遇に處して往くといふ樣になるのであるから、此の場合に於ける吾々の精神上の愉快幸福は實に此の上も無い。所謂絕對の快樂を得る事が出來るのであります。

わかれ路の道ははるかに距つれど心はおなじ花のうてなぞ

と云ふ歌を以て慰め、自分の身は罪無くて配所の月を眺むるとはいふものゝ、心は何時も極樂淨土の眞ん中に在ると思へば、苦痛を苦痛とは感ぜられぬ。斯の如きは皆な安心の上から現はれたる活動である。況や禪門の大安心は、苦樂昇沈盡く是れ一段の風流、隨時隨處皆な遊戲に非ざるなし、故に無限に活生命を相續し保任し運用することを得るのである。

娑婆卽寂光淨土

活きた佛陀の大生命を相續し得る時は、吾々の向ふ所、働く所、悉く佛陀の妙用ならざるものはありませぬ。煩惱の眼を以て觀れば、此の世界は淺ましき凡夫世界、苦しみ多き迷ひの世界であるが、佛眼を以て之を觀る時は、此の世界は佛の世界、眞理の世界である。瞋恚の衆生より觀れば世界中が火の世界で、自分の顏までが火になつて了ふ。又、愚痴の衆生が此の世を觀れば、此の世界は眞つ黑暗がりの譯の判らぬ世界に見えるから、洵に詰らない樣な氣がして、遂には

世の中は四尺五寸になりにけり五尺のからだ置き所なし

といふ樣になつて、果ては鐵道や細曳などの厄介にならねばならぬ。誰が四尺五寸しか無い狹い世界を造つたかと云へば、皆自分で拵へて行くのである。貪慾の人は金が有つても無くても餓鬼道に陷ちて居る。

られ、法然上人は『一文不知の尼入道の身と爲して』と申して居られる。兩上人とも大智者であるが、其の智識才能を一段飛び越えて、無識無能の愚に歸つて、唯だ一心に信仰を捧げられたのであるが、其の信仰的大安心が土臺となり、一生涯を通じて、衆生濟度の爲めに非常なる大活動をされたのである。

法然上人が或寒さ強き夜中に自分の着て居られた着物を脱ぎ、薄着となつて念佛を唱へて居られた。弟子達が『何故此の極寒に御召物を脱がれまする』とお尋ねすると『今晩は殊に寒さも強いが、それに就ても、古への佛様や祖師方の御艱難を思ふと實に有難うて、愚かなる自分は暖かにして居つては勿體なう思うぞ』といはれ、態々着物を薄くして念佛を唱へてござつたと云ふ。其の心の中には如何に有難いといふ感謝の念が溢れて言ふに言はれぬ樂しみが漲つて居るかゞ判るのです。

又、法然上人が四國土佐に流されると云ふことになつたので、親鸞上人が小松谷に法然上人を御訪ねして見られると、實に七十五歳の老僧が、明日にも京都を辭し、波濤を越え土佐に流されたまふ、夫れも罪無くして配所に赴かるゝことの如何にも御氣の毒に堪へられず、親鸞上人は同情の涙禁じ難く

　會者定離ありとはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりけり

と詠み、黑染の袖を濡して慨かれるのを見て、法然上人は『御身の歎きはさる事ながら、予は御法の爲めに土佐國に渡るのは思はず知らず佛縁を邊土にまで結ぶかと思ひ、最も愉快に感ずる、假令御身と吾とは萬里を距てゝ住むとも、心は同じく信念の中にあつて、倶に淨土の花の上を離れないぞ』とて

が多い。禪師は新聞を讀で三面記事にある悪い出來事を見ると『嗚呼、社會にこんな悪い人の居るのは誰の罪である、みんな吾々の敎化が屆かぬからぢや、お前方は何んと思つて此の新聞を見るか知らぬが、吾々敎導の任に在る者の不勉强をば、新聞屋から小言を言はれて居るやうなものぢや、お前方宗敎家として衆生濟度の任に在る者は、斯う云ふ事を見たならば一層警戒を加へるが宜い、新聞を見て社會の狀態に厭ふべく憎むべき事があつたなら、皆んな自分の責任ぢやと思うて、益々信仰を凝し敎化に努めて往かねばならぬぞ』と仰せられた。是等は寔に有難い御言葉だと思ふ。

一軒の家でも、子供の悪いのは何故であるかと云へば、家庭敎育の缺陷から起るので、父母として實に恥しい事である。自分の家に信用が無いと思うたなら、是れは自分の方に缺點があるからだと觀念して自ら改善に努むる、此の所にはじめて眞面目なる修養が行はれる。此の修養の力に依つて、吾々の精神は根柢より正しき道を履み淨き行ひを修むるやうになる。それが皆な精神的進歩の工夫が現はれたのであります。卽ち退歩は正しく進歩の基であります。

大活動は大安心に基く

眞實、大安心が決定せらるれば、その大安心は全身全世界をも支配するの活氣があるものです。大安心は決して死物でない。卽ち大活動が自然に現はれて來るものです。親鸞上人は自ら『愚禿親鸞』と稱して居

併し、斯かる境界に到達するには、是非共退歩の工夫と云ふことが必要である。即ち歩を退いて自己の精神に向つて、内觀反省して往くのが退歩的修養である。他人より惡口を言はれた場合に、忌ま〳〵しいと思うて腹を立てたり、徒らに煩悶したりするのは、内觀の工夫が足らぬからです。退いて思惟して見よ、惡口を言はれるといふは何等か自分に缺點があるからであらう、煙の在る所には必ず火が在る。して見ると惡口を言はれるだけ自己に缺點があるに相違ない。進で惡口をする人を憎まんよりは、退いて惡口の種子を斷つの勝れるに如かず、そこで將來一層の修養を勵んで往かうと云ふ覺悟が起つて來れば、惡口を言はれたのが一つの大刺戟となつて、修養上一段の向上發展を見るべき動機となる。萬一何等の原因も無く、惡口を言はれた場合には、過去世に於ける罪過の爲めならんと觀念し、將來は益々善根を積み、功德を修め、以て罪障の消滅を圖るやうに運心して往かねばならぬ。

渡邊崋山先生は非常な苦しき逆境に立つて、遂に自刃して死なれたのであるが、其の頃に詠れた歌に

とりつみて世を炭竈の烟たきはおのが焚き添ふ薪なりけり

とある。何故、自分が斯く苦しめらるゝかと云ふと、決して人の罪に非ず天の作せるに非ず、皆自己の罪業から來るのであると諦められた。斯う云ふ觀念を以て天をも怨まず、世をも恨まず、安然として死に就かれました。故に無闇に人を怨むと云ふは退歩的修養が無いからである。

星見天海禪師は、曹洞宗の高僧で貴き方であつた。近年亡くなられたが、其の行狀には有り難き御話

此段宣布執奏有之度候也

西方極樂世界二十五菩薩御廳

閻魔王府

と認められ、筆を抛つて莞爾笑はれたと云ふなどは、生死巖頭に立つて、毫末も生死の束縛を受けない大安心の狀態です。行誠上人の境界の如きは、禪門の夫れと少しも異ならぬ。

私は小僧の時代に親く行誠上人の御傍に在ること一ヶ月餘、御別れに臨んで『御前は禪宗の御小僧となられたは仕合せぢや、禪宗は結構な御宗旨である、お前の爲めに餞別を上げやう』と仰せられ

少林の雪にしたゝる紅に染めよ心の色淺くとも

といふ歌を短冊に書て下さつたが、其の短冊は今でも大切にして所持して居ります。少林とは達磨大士の居られた所で、二祖大師は雪庭に臂を斷ち達磨大士の前に差出して入室を願はれたその因緣を詠じて、斯の如き大勇猛心を以て心地を染めて修行せよとの御教訓であります。

退歩は進歩の基

斯くの如く、生死透脫の大安心が決定さるれば、生死の中間に於ける順逆の諸境に對しても、毫末も束縛を受けぬ。生死去來の間に處して泰然自若たる事が出來る。

又、寶となるは能く使うて往くからである。故に、總ての上に於て、自分が自ら主人公の位置に立つて境の爲めに心を動かさず、己れの理想信仰を曲げないやうにして、隨時隨處に主たるべきの修養を積んで往かねばならぬのである。

生死透脫

隨處に主と爲る底の手脚あるに非ざれば、生死海中に在りて游戯自在たることは出來ぬ。新論と題する書に『聖人は心を以て耳目を導き、小人は耳目を以て心を導く』とある。心を以て萬境を使役し、一身五體を指導するの大機用が無ければならぬ。禪的修養を積んで往く時には、啻に耳目見聞に使役せられざるのみならず、生死巖頭に立つても、生死の束縛を受けず、生死を自由にするの分がある。

行誡上人は淨土宗近代の高僧で八十四歲で死なれたが、智恩院に住して淨土宗の管長であつた、臨終の時、弟子達が、來迎佛の尊像を枕元に懸けやうとして、誤つて閻魔王の畫像を懸けた。そこで其の大失態に驚きそれを懸け變へやうとせし時、上人は夫れを押し止められて懸け變へるには及ばぬとて、筆と墨を取寄せ、亡くなる前日であるといふに、ふるへる手に筆を執り、閻魔に爲り代つて極樂への書面を書れた。

右老病臨終の趣に付點檢中候處御本願相應の者と斷定候に付御都合次第御來迎の御用意可然

大日本國　行誡　八十四歲

て了ふといふ一段の勇氣がなければなりませぬ。

隨處に主となれ

吾々は常に精神の獨立を護持して、如何なる場合に於ても、自ら萬境に對する主人公となるの見地がなければならぬ。主人公となることは精神の獨立である。書物を見るにも、書物に讀まれぬやうにするは、書物に對して主人の地位に立つのである。金錢に對しても金錢に使はれずして、能く金錢を使うてゆくは金錢の主人公となるのである。精神の獨立は己れに確實なる信念・理想・目的が有つて、夫れに向つて斷乎として其の心操を保持するのである。斯くして金錢を使うたならば、假令萬兩の黄金と雖も最も公平に且つ有益に使はれるものです。然るに其の心操が薄弱であると、却つて金錢の爲めに使はれ、金錢の爲めに志操を墮落し、品行を壞り、信用をも失ふと云ふ事になる。

『酒を飲むとも飲まれるな』とは正成公の遺訓であるが、吾々は動もすると酒に飲まれる恐れがある。御經文の中にも『衆生は迷ふが故に物の爲めに使はれ、佛は悟るが故に能く物を使ふ』とあります。昭憲皇太后樣の御詠には

　持つ人の心に依りて寶とも仇ともなるは黄金なりけり

とある、大切なる黄金でも、持つ人の心に依つて却て身の仇ともなる、是れは黄金に使はれるからです。

し得た、此の六かしい謙遜の功を收めたのは己だといふやうになつた。是が亦傲慢の一であるといはれた。凡て煩惱は無くなつたと思うて、知らず識らず煩惱を起して居る場合が澤山ある。丁度、無言の行者の話のやうなものです。

玆に三人の僧が無言の行を行ひ、七日間の行がもう一晩だけとなつた。その夕方玄關の方でドン〳〵と戸を叩いて『御頼み申す』と呼ぶ者がある、外來の賓客に接する給仕僧が居るのだが、何處へか行つたと見えて返事をせぬから、門外では頻りに呼んでゐる。無言の行者だから口を利かれぬので、默つて眼をパチ〳〵さして居るのみであつた。餘りに戸を甚しく叩くから、たうとう堪まらなくなつたと見えて一番下座の僧が『吾々は無言の行をして居るに依て、御挨拶は出來申さぬ』と怒鳴つた。中座の僧は大に驚き『これ〳〵無言の行者が口を利くと云ふ事があるか』と呵りつけた。上座の老僧苦い顏をしながら『扨て困つた人々かな、口を開いて折角の行を破つて了つた、此の中で破らぬ者は拙僧一人だ』と遂に三人共に六日間も勤めた行を破つて了つた。吾々の修養にも、之に類して自ら其れと知らざる場合が多いのである。

次に疑とは正法を信ずることの出來ぬ疑惑の妄想をいふので、これは實に恐るべき惡魔です。

　　われと我が心折々顧みよ知らずしらずも迷ふことあり

自分では大丈夫な積りで居ても、何時の間にか煩惱の惡魔が精神内に蟠まつて、良心を昏まし道念を破り、道德性を毀けることが多い、依て自身で自身を時々刻々に點檢して、心内の惡魔を悉く降伏し盡し

か害とか云ふ意味になる。即ち、吾々修道を妨害し、吾々の信仰を妨害し、其の他一切の幸福と安寧とを害するからであります。此の内外二種の惡魔の中、先づ内より發する惡魔を第一に心得て降伏せねばならぬ。古人の語に、

君子は心を治めて境を治めず、小人は境を治めて心を治めずというてある。小人は氣に入らない人に逢ふと、是非彼の人を氣に入つた人間にしてゆかうと思ひ、即ち相手の境を治めんとして自分の心を治めることは第二にするから、何時までも苦惱は絶えぬ。所が眞の君子にして修養に心ある者ならば、氣に入らない人は氣に入らぬ人として手をつけず、先以て自分の心を治めるのである。それでないと人間は何處まで往つても安心は出來ませぬ。

三毒の魔とは貪慾・瞋恚・愚痴の三煩惱で、五使と云ふは吾々の精神を攪亂し使役する者で、これは三毒に慢と疑と二つを加へたものをいふ。此の外にも多くの煩惱魔があるが、今は此の三毒五使だけを代表的煩惱として擧げて見たのである。慢は高貢我慢である。誰にも慢心なるものがあつて我見を増長させる。此の慢心を離れる事は却々容易でない。米國のフランクリンは非凡な賢人で且つ修養家で、一生涯を捧げて修養に盡されたが、一番困難を感ずるのは傲慢心であると申して居る。所謂欲念を制し盡して一番の最後は漸く傲慢心を離れる事を得たと思ふた。奚ぞ計らん其は何時の間にか再び姿を替へて出て來て居たのである。何な風に出て來たかと云ふと、自分は謙遜の徳を守るまで修養

艱難辛苦を偲ぶ事が出來るのである、之れも佛恩であるぞと更に憂ふる所なく、益々喜んで念佛を唱へてござつた。其の中に此の家の亭主が壁越に其の話を聞いて大に驚き、之れは非凡の御人に相違あるまじとて、外へ飛び出て上人の手を執りて家に導き焚火をしてあたらせ申した。上人は猶ほ以て喜ばれ、夜中斯うして暖めて戴くのも、矢張、佛の御導きであるとて其の夜は鷄鳴までも御法の物語りがあつた、追出されても喜び、中へ入られても喜ぶ、如何なる場合でも、信心歡喜の念は離れぬ。されば臨終の苦しみに沈む時でも同じく歡喜心に包まれて安樂の心を以て死ぬる、是れが正念往生である。

内心の魔を降伏すべし

禪門の安心も此の安樂の境界まで進んで往つてこそ、眞の安心が得られたのである。之れは決して空想ではない。信仰の修養を進むれば必ず安樂無量と云ふ大安心にまで、進む事が出來るものです。併し、此の大安心を得るには第一に精神上の惡魔を平げねばならぬ。

夫れには禪定力が最も近徑です。足を組み手を組みて息を調へ心を調へ、兀々として坐り込む時は、修養の妨げを爲す所の一切の惡魔を打破る事は決して難事では無い。吾々の精神内には常に三毒五使と云ふやうな大惡魔が居るのである。之れは内から起る魔であるから内魔と稱す。此の外に色々と外から此の身を妨げ苦しめるのがある。その惡魔を外魔と言ふのである。魔と云ふは天竺の言葉で、飜譯すると、惡と

も宗教生活も、何れも自己を向上し自己を圓滿ならしむるのであるから、決して隔別では無い。人間修養の道行から申すと、人間を本位として往くのが道德で、佛陀を中心にして往くが宗教である。として完全たらんとするを以て目的とするか、佛陀たらんとするを以て目的とするかに違ひがあるのである。併し、其の違ひは火と水との違ひでは無く、溪川の水と大川の水との違ひです。溪川は大川に流れ込む、大川は直ちに大海に流れ込む、そこに階段はあるが終には同入大海です。故に宗教は佛陀を以て目的とし、佛陀に歸依し奉りて、佛陀の行を修むる。つまり人生に處しながら人生に超越したる理想境に向つて進み、その精神には人欲を飛び越えた大なる樂しみを生ずるのである、されば宗教的安心の上には非常に愉快極まり無き樂しみを生ずる。之れが宗教の特色であると思ふ。

親鸞上人が越後柿崎の濱に於て日が暮れたなれども泊めて吳れる所が無いので、漁師の家の軒下を借り、雨風に打たれながら一夜を明し、半夜に至り寒氣を感じて眠る譯にも往かぬから、夜中靜かに御坐りになりて頻りに念佛を唱へて居られた。弟子達が如何にも御氣の毒に思ひ『貴き上人が一夜の宿をも得たまはず、斯く雨曝しになつて一夜を御過しになるといふは道の爲めとは云へ、御痛はしい事でございます』と御同情申上げると、上人は弟子達を誡めて『決してその樣なことをいうてくれるな、予は今晩程愉快な有り難きことは無いと思ふ、何故ならば、此の家の人が泊めてくれたならば只今頃は白河夜船で眠つて居るであらうが、泊めてくれない爲めに、夜中雨に曝されながら御念佛を唱へ、以て古の佛樣や祖師方の

未だ薄弱なることを免れぬ。然るに、彌々砲門の火蓋を切つて敵彈が雨の如く飛んで來る、自分の戰友がべた／＼と斃れると云ふ時になると、更に數層强大なる覺悟が定まる。是れが第三の決死の精神で、此の時の決心に較ぶれば、第一の決心の如きは殆ど用に立たぬ樣な感じがすると言はれた。

安住不動の安心も亦是の如く、精神が本當に落着いたと申しても將校の所謂第一や第二の決心の如き、未だ淺薄な微弱なものであれば、一度猛烈な境遇の刺撃に遭ひますと、グラ／＼と動いて來るもので、役に立ちませぬ。そこで此の安住の境界を確實ならしむるには、幾多の修養訓練を積んで往かねばならぬ。併しながら、單に安住不動着と云ふだけでは、未だ宗教的安心の極致に達したものとは言へぬ。もう一歩進んで大安樂大歡喜と云ふ位地に達せねばならぬ。

歡喜踴躍の大安心

宗教と道德との關係も、其の究極する所に至つては同一歸であらうと思ふ。なるほど、之れ迄が道德、之れから之れ迄が宗教と云ふ區別は出來ないが、併し、形の上から申せば、道德は人相手の道であるから、人間が道德の中心である。宗教は普通に所謂人道より一段超越したる佛とか神とかゞ、中心である。卽ち神人感應である。佛教から申せば佛陀を中心として佛陀に向つて向上し往くが宗教であるから、此の意味に於ては宗教の信仰と道德の觀念とは其の形式に於て違つて居る。併し、其の根元に至つては道德生活

ば、道是心であるから眞の落着が出來ます。

道を以て精神と爲す、道は力なり智なり仁なり、故に如何なる惡魔が來て襲ふとも、必ず其の惡魔に打勝つべき大權威が現はれて來るものである、夫れを『安住不動須彌山の如し』と法華經に仰せられてあります。例へば春になつて、溫然たる春風に吹かれても、爲めに心が浮かれ出して動き廻ることなく、秋になつて蕭然たる秋風が吹いても爲めに心が寂しくなつて物思ひに沈むといふことなきをいふのであります。彼の甲州慧林寺の快川和尚が信長の爲めに、山門頭上に於て燒き殺されるといふ時

安心は必ずしも山水を須ゐず心頭を滅却すれば火も亦涼し

と、唱へ、莞爾と笑を含んで身を火中に投じた、と云ふ如きは非常に精神力の剛健なるを示すもので、心が道の上に安住して動著しないのであります。

現代の海陸軍の軍人諸君が、戰場に臨んで壯烈なる最後を遂ぐるといふが如きも、此の安心の現はれであります。忠君愛國といふ大道德の基礎の上に、精神が安住して居るからです。私が日露戰役後、滿洲を巡錫して各守備隊を慰問した時、或る將校の實歷談として、死を決すると云ふ精神狀態には、經驗上三段あるといふ話を聞いた。

愈々戰場に出發すると云ふ時に、死に對する第一の決心が定まる。併し夫れは薄弱な決心である。愈々戰場に臨んで敵前に進んだ時は、更に一層强固なる覺悟が定まる。是れが第二の決心である、併し之れも

常に其の精神が安心の狀態で無ければならぬ。修養の訓練が無いと、善いにつけ、惡いにつけ、無暗に頓着して其の境遇に役せられる。他人の痴氣まで氣に病む樣に自ら煩悶に陷るものである。或時自分の家が火事に遭つて全燒けになつて了つた。之れでは如何な先生も平氣で居られまいと思ふに、先生は矢張平氣である。或人が『お醫者さんいかに御匙がまわるとて家の黑燒何んに爲さるぞ』と言うて揶揄ひましたところ、先生は莞爾笑つて、『黑燒は大工左官の腹藥、夫れに世上の氣附にもなる』と返歌して、矢張、平氣で居つたさうです。これでも極端であらうが、併し、吾々は斯ういふ大度量をも養ふ必要がある。

精神を道の上に落着くべし

吾々は此の人生に處して種々の境遇に逢ひ、眼に種々の色を見、耳に種々の聲を聞く、此れ等の際に自然に執着せぬやうになるといふのは、要するに自ら信ずる所守る所があつて、心を動搖させぬからである。併しながら單に無執着のみでは未だ眞の安心とはいはれぬ。そこには遠大なる理想が無くてはいかぬ。守るところの道が無くてはならぬ。故に、吾々は更に進んで精神に堅牢な守る所の道があつて、其處に自己の精神を落着けて、大盤石に安住して往くことが肝要である。是れが第二段の安心で、之れを安住不動の境界と云ふのです。孟子は四十にして心を動かさず。卽ち安心を得られた、心に堅く守る所の道を存すれ

先づ第一に自分の精神を安靜にして往く、所謂安靜的安心です。これには是非相當の修養を積ねばならぬ。如何なるものが外界にありて、我が心を動搖せしめんとするも、それらの者に對して濫りに頓着しないと云ふ、卽ち無頓着の稽古をするが宜い。此の修養法は非常に感情の昂奮し易い方とか、氣の勝て居る婦人などにはチト稽古が困難かも知れぬが、或は經文を讀み、或は聖賢の敎を聽き、或は古人の金言を聽き、或は現在せる立派な人の高尚なる人格にでも觸れて往きますると、自然に些々たる事物に心を費やさぬ、ツマラヌことを氣にせぬ、と云ふ無頓着の修養が出來るのである。王陽明が死際に門弟等が枕許に侍して、何か仰せらるゝ事はございませぬかとて、先生の御遺言を聽かんとせしに、王陽明は微かに眼を開いて

　我が心公明正大、又何をか言はん

と、今や三寸の息正に絕えなんとする時に、此の一着子あるは實に立派な大安心であります。併し、極く普通の人の上に就て申すと、或は風流に親しみ、或は何か自分の精神の上に淡泊な無頓着な趣味的修養のある人は、夫れが爲めに束縛せられぬものである。是の如きことは何んな御方でも、或程度迄は必ず修養の効を奏する事が出來やう。複雜なる人事に列して、ツマラヌ事にまで心を煩はして居てはたまつたものでは無い、役にも立たぬ事には成るべく頓着をしない方がよいのです。多少氣に入らぬ事があつても、濫りに怒らぬが宜い、氣に入つた事があつても、濫りに執着してはならぬ。何處に在りても何れの時にも、

安心の決定

安心の三階段

如何なる宗教でも安心を教へぬ宗教は無い。而も禪門に於ける安心は如何なる狀態であるかと云ふと、是れも一言にして盡すといふことは困難です。そこで唯今は淺きより深きに至るまで凡そ三段に分けて御話をしたならば安心といふ意味と効果とが判ると思ふ。其の三段とは第一には精神上の苦痛煩悶を解脫すること、第二には安住不動如須彌山といふやうに精神が落着いて、順逆の二境に對して心を動かさゞること、第三には現在未來を一貫して、無量の快樂と歡喜と滿足とを得ること。尤も、安心そのものは幾通りもあるに非ずして、安心を得た人の効果の程度に依て分れるに過ぎませぬ。此の安心を得るには種々の修養を要する。それを簡單に述べて見やうと思ふ。

先づ精神を安靜にすべし

『廬山烟雨浙江潮、未到千般恨不レ消、到得歸來無二別事一、廬山烟雨浙江潮』と吟ぜられた。實際、廬山の面目を眺めて見れば別段變つたことは無い。朝の烟、夕の雨も、盡く天地の活きたる畫圖である。潑風流の人は其の趣味を知らずに居らうが、一たび風流の眼を開きなば、宇宙絶大の美觀は自づから此の間に現はれて來るものであります。

東坡居士は後に洞山の常聰禪師に參じて、無情說法の話を參問し、辭して匹馬を驅て山水明媚の間を過ぐるに當り、雄大なる山嶽の光景と壯麗なる溪澗の風趣とに接し、頓に大悟の妙致に通じて『溪聲便是廣長舌、山色豈非二清淨身一、夜來八萬四千偈、他日如何擧二似人一』の一偈を打せられたとある。吾吾御互も亦此の大美を觀取することを得ば、無量壽の佛身に接觸し、無盡藏の功德聚を把捉し、玆に始て人生の妙處を獲得することが出來るであらうと思ひます。

精神上の滿足も得られず、徒らに名利の巷に奔走し、五欲の窠窟に出入して居るといふ事は思へば氣の毒千萬のことではありませんか。

我が曹洞宗の宗祖は御年五十四にして涅槃の雲に藏れさせたまひたるが、其の盛德大業は七百年後の今日に至りても、赫々として全扶桑國を御照し下されて居るでは無いか。是れ實に永久不滅の壽命と申すものであります。又、高祖大師の御生涯を拜し奉りますれば、御身を深山幽谷の間に置き、猿鶴を友とし雲水を眷屬としてゐられたが、大師が道德上の御寶は殆ど無盡藏である。

永嘉大師は其の證道歌に於て『貧なれば身常に褸褐を被す、道あれば心に無價の珍を藏す、無價の珍は用ゆれども盡ること無し。物を利し緣に應じて終に惜まず』というてあるが、智慧と道德とは實に是れ精神上無盡藏の福分であります。是の如き壽命と福分とを有する人にして此の人生を見渡したならば雲に聳ゆる峯の色、岩に咽ぶ水の聲、霞に歌ふ鳥の音も、花に戯るゝ蝶の影も、盡く天地の妙道を通じ宇宙の秘藏を開いて居る。吾々お互が生るゝより死するに至る迄の起居振舞も、皆な佛作佛行の活潑々地であることを自知自得することが出來るに相違ない。

昔、宋の東坡居士は廬山に遊んだ時『横看成レ嶺側成レ峰、遠近高低無二一同一、不レ識廬山眞面目、只緣身在二此山中一』と詠んだ。廬山の中に居るから廬山の全面を見ることが出來ぬ。人生の中に迷ひ込んで居ては人生の實相は見られませぬ。居士は此の如く感じて更に一段の工夫を積み、遂に大に悟る處があつて

せばそばこをもつて申入候』といふ歌を添てやつた。澤菴和尚は直に『そば子とて賜はるからは我子なりまゝこにすなと申付候』といふ返歌に及んだとあるが、此の中に限り無き樂みの存することを味うて見るが宜い。

此の澤菴和尚が、或日、德川三代將軍家光公に謁せし時、西瓜に砂糖をつけて出されしに和尚は砂糖を拂つて喫せられた。公は之を怪みて『何故に砂糖を拂ふや』と問はれければ『西瓜を賜はりしに依り西瓜を頂戴致します』と、公は重ねて『砂糖を添へなば更に風味あるべし』といはれしに『物には各々持前のあるものにて候、西瓜も亦然り、拙僧は西瓜を好み候ゆゑ、その純粹の風味を賞翫仕るのみ』と答へたさうであるが、此の御話しの中にも多少の禪味と敎訓とが存する樣に思はれる。

現代の社會狀態を見るに、西瓜を食べるに西瓜よりも砂糖を餘計に甞める樣な連中が多い。菓子よりも菓子箱の方が立派で、實質よりも裝飾の方が進んで居る。滔々たる天下は虛飾と虛禮とに充たされて居る樣な鹽梅である。人生觀も亦是の如くで、人生の趣味を觀ずることを知らずに、人生の皮相に迷ひ、繩を以て蛇と思ひ、白地の浴衣を幽靈と誤まり、木の株を鬼の頭として驚き、不平の上に不平を重ね、煩悶の上に煩悶を添へて居る。

物質的文明の有樣は實に嬉しき限りではあるが、人心の內部を顧みれば依然として修羅道以下の苦果を招いて居る。語を換へていへば、宗敎的生命と宗敎的福分に乏しいのである。故に未來の目的も立たず、

昔、或人が八十の春を迎へ『松契千年』の題で祝詞を集めた時、蜀山人が『八十の賀樂多親爺生き延てまだも齢ひを松に契るか』と詠んださうであるが、世の中の厄介物となつて居た分では、縦ひ百年の壽を保つたからとて何の役にも立たぬ。學問をしても名利にのみ制せられて居ては實學が出來ぬ。三浦梅園の語にも『學問は飯と心得べし腹にあくが爲めなり、掛物などの様に人に見せんずる爲にはあらず』、『學問は置所によりて善惡わかる、臍の下よし鼻の先あしゝ』、『足の皮はあつきがよし、面の皮はうすきがよし』などというてあるが、却々面白い教訓である。兎に角、御互は眞の道を習ひ眞の徳を修むれば、之を外にしては永久に其の遺徳を子孫及び社會に傳へて朽ちること無く、之を内にして未來永劫其の善根を相續して佛果圓滿の妙果を成就することが出來る。是ぞ最も貴い壽命と申すものであります。

又、福分の方も、單に金持になるとか、立派な邸を構へるとか、贅澤をするとかいふことだけを目的として居るのでは餘り有り難いものでは無い。無限の快樂は自己方寸の中から涌き出したものでなければならぬ。一禪者が山居の同參を尋ねし時、山中には別に展待べき物とては無かりければ『何をがな參らせたくは思へども達磨宗には一物も無し』と詠ずると、禪客は『何物も賜はらざるを賜ふこそ本來空の妙味なりけり』と答へたさうである。顔回が陋巷の中に在りて一箪の食一瓢の飮といふ淡泊な境界ながら王侯も及ばぬ程の大なる樂みを有して居たといふも、其の樂みは外に在らずして内に在るからである。

美濃の江月和尚が信州より蕎麥粉を貰ひしを、江戸の澤菴和尚に贈る時『子供すら持たぬ法師の身なり

箱の中に在りては箱は持れぬ。人生の束縛を受けて居ては人生を救ふことも出來ねば人生の趣味を感ずることも出來ぬ。

若し能く人生の束縛を解脱すれば、人生は恰も天地の悠久なるが如くにして、其の樂みも亦窮りが無い。東坡居士が『江上の淸風と山間の明月とは是れ造物者の無盡藏なり』というたのも、全く人生無窮の妙味を感得したのであらうと思ふ。吾々御互も亦是の如く、眞に能く此の妙味を感得したならば、人生即淨土、人身即佛身であるからして、自づと永遠の佛壽を得ることが出來るのであります。

福壽海無量

全體、長命を保つとか、富貴を得るとかいふことは、誰れも望む所ではありますが、唯だ有形の福壽のみを求めて無形の福壽、即ち道德的生命、精神的財寶を求むることを知らされば、凡ての行が名利一點張となつて、遂に人間の價値すらも認むることの出來ぬ樣な人が出來て來る。西鄉南洲が『人を相手にせず天を相手にせよ、天を相手にして己を盡くし人を咎めず、我が誠の足らざるを知るべし』というたも名利以外に於て理想を確立すべきを示したものである。熊澤蕃山も『仁者の心動なきこと大山の如し、無欲なるが故によく靜なり』というたが、無欲といふは天を相手とし道を目的として名利の束縛を受けざることである。

此を高祖大師は『邪枉にして身命を名利の羅刹にまかす、名利は一頭の大賊なり、名利を重くせば名利をあはれむべし、名利をあはれむといふは佛祖となりぬべき身命を名利にまかせてやぶらしめざるなり』と仰せ下されてあります。されば吾々は常に名利の念を離るゝことが却て眞正の名利を得る所以であるといふことを忘れてはなりませぬ。

況てや禪を修するは胸臆裡の妄想煩惱を坐斷して、自己天眞の本性を開顯するが爲めであるから、一微塵も名利の念に侵さるゝ樣なことではならぬ。坐り込んだ正當時には名利の念どころか、迷とか悟とかいふ閑名目すら脫落して了ふ。所謂『坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』といふ樣にならねばならぬ。換言すれば、徹底無我の境界になり切るのである。此の時、忽然として宇宙の本源、本來具有の佛性が顯現して、之と同時に此の身心が浩然として大安樂になるのである。是を佛向上の事というて最早や凡夫界の人では無い。

峩々たる岩石の間に彷徨へば何となく恐ろしさを感じ、漠々たる雲霧の中を辿れば何となく寥しさを感ずるものだが、其の身を安心の位地に置きて、遙かに寒巖雲烟の景色を眺むれば忽然として爽快なる天地の光景に觸れるものだ。又、孤舟に棹して烟波蒼茫の間に漂へば甚だ危險を感じ、蓑笠を被して泥深き水田の中に勞役する時は甚だ苦痛を感ずるものだが、其の心を風流の道に置く者の目から見れば、一葉の漁舟には無邊の風月を帶び、風笠烟蓑にも不盡の雅致を存するものである。籠の中に居ては籠は擔がれぬ。

名利を捨てよと申せばとて、名譽も要らぬ利益も要らぬといふことでは無い。我が帝國々民としては一身の名譽を重んずるのみならず、一家の名譽、一國の名譽を最も大切にして、益々譽れを擧げることに努めねばならぬ。又、一身一家の利益は勿論であるが、更に社會の利益・國家の利益を增進し、現在の狀態よりも幾十百倍の富をも造り財産も殖す樣にせねばならぬ。是れ實に國家の急務であります。言ひ換れば、前に御話したる五の濁を一掃するの方法を實行することです。然れば高祖大師が名利を抛捨せよと仰せられたのは、つまり利己的欲望を離れよといふことである。梁の武帝が始て達磨大師に相見せられた時、『朕、卽位以來多くの僧を度し多くの殿堂を建立せり、其の功德如何』と問はれしに、大師は『無功德』と答へられたのは、矢張、武帝の利己的欲望を誡められたものである。

元來、名譽とか利益とか云ふものは己の善行若くは勤勉の力に依て生じ來れる一種の報酬であつて、決して唯一の目的では無い。吾々の最大目的は必ず名利の外に別に存せねばならぬ。褒められたい爲めに孝行をするのは決して眞の孝行では無い。樂をする爲めに學問をするのでは決して眞の學問にはならぬ。況や國家の名譽を重んずるとか、社會の公益を謀るとかいふ場合は、事に依ると一身の名利を犧牲にして掛らねばならぬことが往々ある。唯だ吾々は道の爲めに道を守り、國家の爲めに國家に盡し、佛法の爲めに佛法を行ふべきものである。卽ち名利の念に支配せられず、名利の念を訓練し教養して國家的名譽、社會的利益とすべきである。

珠數を廻して『やろや〳〵』と言はれると、彼の猛犬は俄かに尻尾を振て禪師の衣にヂヤレ付き出した。そこで將軍は武力と道力との差を感ぜられたと申すことである。勇者は敵を退け仁者は敵を服す。佛の遊ぶ所は地獄の火の坑も蓮の池と變じ、劍の山も七寶莊嚴の臺と化し、三界到る處、念佛念法の聲高く、六道往く處として吉祥安樂の境に非ざるは無い。是に於てか人生は實に吾人の樂園となるのであります。

永遠の佛壽

前に演べし通り、此の心に迷なく累ひなくして念々清淨なる時は、人生も自から極樂の遊園地となります。而して、此の極樂は精神の奧底より現はれ出たるものであるから、法華經に所謂『常在靈鷲山』で、此の世ばかりか生々世々に渉りて樂しみの盡きるといふ事は無い。卽ち永遠の佛壽を得ることが出來るのであります。永遠の佛壽といふは未來際を盡して窮りあること無き佛の御命といふことです。

併し、此の心を淸淨にして此の身の上に佛の御命を得るには、佛祖の御敎に隨順したる修養を積まねばなりませぬ。承陽大師は『生前に名利をなげすてゝ一事を行持せん佛壽長遠の行持なり』と仰せ下されてある。卽ち名を貪ぼり利を愛するの凡夫根性を打捨てゝ道といふ一事を堅く行ふのが佛の御命を得る所以の法であります。

る。一心生ぜざれば萬法に咎は無い。一念の妄動は、卽座に鬼の世界も現はれて來るのである。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道といふも皆一心の影法師である。地獄といふも煩惱の塊物、餓鬼・畜生も迷の影である。『恐ろしき氷りの角も元は水』煩惱の塊が融解すれば心外別に六道の見るべきは無いのである。

或る經文には地獄の閻魔大王の顏が美玉の如しと說てあつたが面白い御說であると思ふ。何の閻魔樣を見ても卵に目鼻とも拜まれぬ樣だが、其の實際は美玉の如しとも見られる譯である。惡人が見ればこそ怖くも感ずるが、善人が見れば怖い閻魔樣のあらうはずが無い。警部や巡査は人民保護の役目であるから、良民の目で見ればどれほど安心を與へて吳れるか知れぬが、犯罪者の目からは閻魔以上に怖く映ずるに相違ない。吾々にして、若し天地の大道を達觀して法界一佛體の妙理が徹底したならば、煩惱の雲長へに霽れ、菩提の月獨り朗かにして、天地萬物を盡して悉く淸淨無垢の佛土である。地獄の火も消えて了ひ餓鬼・畜生の苦みもソックリ解脫して了ふ。若し地獄に漫遊でもすれば靑鬼・赤鬼が萬歲を唱へて歡迎するだらう。餓鬼道に散步にでも出懸くれば無數の餓鬼が嬉し淚に咽ぶであらう。

德川三代將軍が柳生但馬守の武勇を試さんとて、拜謁の砌、唐突に猛犬をして吠えつかしめた。但馬守はチツとも動ぜず、扇子をピタツとにらみつけた。流石の猛犬も其の武勇に恐れてクン〳〵いうて後すざりして逃げ出した。更に澤菴禪師の膽力を試さんとて同樣の手段を取られしに、禪師はニコ〳〵しながら

一心清淨なる時は法界盡く淨土となり、一心不淨なる時は萬象皆穢土の法となる。故に華嚴會上に於て覺林菩薩は『心は巧なる畫師の如く、能く諸の世間を畫く、五蘊悉く從つて生ず、法として造らざるは無し』とも仰せられたのであります。我が禪門の見地から見たならば如何であるかといふに、天地法界は盡く大道の相である。此の大道を覺りたまふのが佛樣で、此の大道を開通するのが即ち禪である。

唐の韓退之の高弟李翺が藥山禪師を訪うて『如何なるか是れ道』と問うた時、禪師は無言のまゝ手を上下せられ、良あつて『會すや』解つたかといはれた。李翺は『不會』ちつとも解りませぬといふと、禪師は『雲は青天に在り水は瓶に在り』それ見よ雲は舊に依つて青天に靉いて居るでは無いか、水は何時もの通り淨瓶の中に湛へて居るでは無いか、一草一木も何れか道に非ざる、喫茶喫飯も何れか佛に非ざる、盡世界の佛の大光明が御身の目には見えざるか、偏法界の道の妙用が御身の心には通ぜざるかと言はれた。此の時、李翺が豁然として省悟し、直ちに『鍊ニ得身形一似ニ鶴形一　千株松下兩函經　我來問レ道無ニ餘説一　雲在ニ青天一水在レ瓶』といへる詩を作つて呈せられたとある。

又、李翺が、或時、禪師を訪うて『觀音經に、黑風が船を吹て羅刹鬼國に飄ひ落すといふ事があるが、如何なる意味であらう』と問うた。其の時、禪師は『李翺小子此を問ふは何の爲ぞ』此の小僧奴何しに馬鹿な事を聞くぞと言はれた。餘りの語に李翺は怫然として怒の色面に形はれた。すると、禪師は大に笑つて『それ其の腹立ちがもう羅刹鬼國に落ちたのであるぞ』と言はれたといふ話もある。妙なものであ

ある。佛祖統記には、張杭學士が臨終に家人に告げて『西方の淨土は只だ堂屋の上に在り』と言うたとある。して見れば佛の加護力と己の信願力と相合する時は、娑婆に在りながら淨土を見ることの出來るものだと斷定して置かれました。併し、西方は西方、東方は東方で、チヤンと其の位地が定つて居りながら、一微塵を動ぜずして其の儘ソツクリ吾々の目前に現はすべき道理のあることを明らめねばなりませぬ。

京都東福寺開山聖一國師の弟子で有名なる兆殿司が、まだ小僧さんであつた時、庫院で御飯を炊く役を勤めて居た。天性畫を好む所から、竈の前で灰をならしては畫を習うて居る爲めに、毎度御飯を焦げつかしてならぬ。國師は屢ば戒められたが却々直らぬ。或朝、國師が庫院の傍を通られけるに、またもや御飯の焦る香ひがするから『嗚呼困つたものよ』と思召しながら潜に其の樣を窺はれしに、こはいかに、燃上る炎の中に嚴然として不動明王が立て居られた。國師は覺えず三拜して歸られ、餘りの不思議さに翌朝再び窺はれたるに、此度は思ひ懸けずも一疋の牛の臥して居るのが見えた。國師は大に驚き悲しみ『淺ましや彼れは生きながら畜生道に墮しつるか』とて、早速、兆殿司を呼び涙を流して此の事を告げられた。すると兆殿司は却て大に喜びて『私は昨朝は不動明王を描き、今朝は牛を描いて居りました』と申した。國師は深く之に感ぜられ『今より汝に畫を描くことを許し遣はすが、其の代りに必ず佛菩薩の像のみを描くべし』とて、大に將來の心得を教訓せられたと申すことであります。吾々御互の心も亦是の如くで、佛を念ずれば佛となり牛を念ずれば牛となる。

名は變れども同じ道なり、我本心を悟る人を則ち佛と名く』といはれてある。永覺禪師は『一句の彌陀佛提起して金剛の若くにして俗情都て粉碎せば坦蕩として西方に遊ぶ、但だ自ら其の心を淨うせば何ぞ土の淨からざるを愁へん』とも『瑠璃の寶地黄金の相、西方に在らず、東に在らず、妄想盡く銷して一佛に歸すれば、自然に身は藕花の中に坐せん』と申されました。故に一念清淨になりさへすれば『極樂は西にもあれば東にもきた（北）道さがせ南（皆んな身）に在る』といはれまする。

さすれば、佛の世界と人生との距離は唯だ是れ一念心の轉處に依て分れるのである。迷ふ時は忽ち苦惱の世界となり、悟る時は忽ち快樂の淨土となる。古人が『傀儡師胸に懸けたる人形箱鬼を出さうと佛出さうと』と詠まれたるは、全く千古不滅の眞理であります。

六道輪廻轉た風流

諦忍律師も空華隨筆の中に於て『法界本より圓融するが故に、西方の淨土といふも斯を去ること遠からず』とある。故に釋尊が無量壽經を說かれた時の如きは、佛の威神力を以て、阿難及び一會の大衆をして、座を起たずして西方極樂世界を觀せしめられたとある。方等陀羅尼經の會に於ては、華嚴菩薩が極樂淨土を以て掌の中に接して一會の大衆に見せしめられたとある。迦才の淨土論には、僧衍法師が臨終の時弟子に告げて『彌陀及び諸々の聖衆が虛空に充滿して居る、此より已西は純ら是れ淨土なるぞ』と言はれて

十惡とは殺生（生物の命を殺すこと）、偸盗（他の財物を侵すこと）、邪婬（不義婬行をすること）、妄語（虚僞を言ふこと）、綺語（人の心を狂はすやうな語を使ふこと）、惡口（惡口を言ふこと）、兩舌（二枚舌を使ふこと）、貪欲（非理に貪ること）、瞋恚（無慈悲に恚ること）、邪見（方針を誤ること）の十である。之に反して、他の生命を愛護し、他の財物を保護し、男女の禮を愼みて夫婦の操を正しうし、正直を旨とし、正しき語を使ひ、慈愛なる語を用ひ、他を和合せしむる語を發し、布施を行じ、忍耐を守り、正信に住するのが十善である。

我が曹洞宗に於て相傳する十重禁戒もこれと大同小異であるから、我宗の信徒たる者は我宗正傳の御戒法をだに受持すれば、一切の罪惡は盡く消滅して一切の善法を備うることが出來るのであります。

八邪といふのは、大集經には我見・衆生見・壽命見・士夫見（人相に執すること）・常見・斷見・有見・無見とを擧げてある。要するに我見を執することである。以上の惡業と邪見とを除き去れば卽座に御淨土を實現することが出來る。

一切の法は心を以て本とするに依て、一心清淨なれば一切の諸法も自づから清淨となる。諸法清淨なれば國土も亦自づから清淨となる。こゝを維摩經には『淨土を得んと欲せば當に其の心を淨むべし、其の心淨きに隨って則ち佛土淨し』と仰せられたのであります。されば一休和尚も假名法語の中に、『極樂淨土とて外に在るべからず、汝が心中の三毒を拂ふ所卽ち淨土なり、佛といふも、悟るといふも

假に之を當世風にいへば、一に社會風紀の頽廢、二に堅實なる信念の缺乏、三に人情の浮薄、又は思想の墮落、四に體力の不健全、五に物質文明の缺點といふことになる。つまり精神界と物質界との不完全であるのが世界の穢れである。此の穢れたる人生を指導し開發して、社會の風紀を改善し、神聖なる宗教、即ち我が佛教の普及を圖り、一般の人情を醇厚ならしめて思想の向上に努め、衞生の發達、財界の進步、殖產興業の作振等に全力を注ぎ、個人・家庭・社會及び國家の發展を圖るのが、取りも直さず穢土を轉じて淨土となすの行持であります。

我が聖上（明治天皇）陛下は、畏れ多くも明治二十三年十月三十日を以て教育勅語を煥發せられ、四十一年十月十三日には戊申詔書を下し賜はりて、吾々國民の爲めに、教育の大方針と道德の標準とを御示し下され、猶ほ刻下の急務として、擧國一致、必らず當に努むべく進むべき一大覺悟を御諭し下されたのであります。故に、之を佛教的に言へば、五濁惡世を一掃して、現在に於て佛陀清淨の國土を實現するのが、實に我國家の大方針と申すべきであります。さればとて指方立相の御淨土を輕視する譯では無いが、現在の御淨土を建立するのが正しく未來の御淨土を莊嚴する所以であることを忘れてはならぬ。

六祖大師は此の旨を示して『西方此を去ること遙ならず、若し不善の心を懷かば念佛往生到り難し、今、善知識に勸む、先づ十惡を除て卽ち十善を行じ、念々に見性し常に平直を行はゞ、到ること彈指の如くにして便ち彌陀を覩ん』と仰せられてある。

佛菩薩の淨土

吾々の理想とする世界は言ふ迄もなく佛の御淨土である。阿彌陀如來は西方十萬億土を過ぎたる極樂世界に淨土を構へ、無邊の光明を放つて徧く十方の世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはぬとある。阿閦如來は東方歡喜世界に在し、藥師如來は瑠璃光世界に在し、本誓願力に乘じて衆生を濟度したまふこと窮盡あるべからず。是の如く十方の世界に無量の佛在して無量の淨土を構へたまふといふことは諸經論に說く所である。その御淨土といふは讀んで字の如く、最勝淸淨なる國土といふことです。之に反對するのが濁惡不善の世で、穢土といふのである。

濁惡の相を五通りに分けて五濁といふ。五濁とは、一に衆生濁、卽ち衆生その物が濁つて居る、所謂風俗の紊亂、秩序の不整理等である。二に見濁、卽ち斷見・常見等の邪見に陷りて正知見の現はれざるをいふ。今日の如く佛敎の敎化が未だ普及するに至らず、社會の指導者とも爲るべき者が、徒らに唯物論的頭腦を以て信仰を破壞したり、又は迷信者流が倫理道德に悖つた信仰を抱いたりするのは皆な見濁の御仲間である。三に煩惱濁、卽ち貪瞋痴慢の煩惱の盛んなるをいふ。四に命濁は人類の生命が短縮することで、取りも直さず身體の不健全なるをいふ。五は刧濁、刧は時節のことであるから、天變地災が多いとか戰亂があるとか、一般に生活の困難を感ずるとかいふ類である。

と問はれたるに、居士は『身を以て本となす』と答へた。『然らば身の本は何ぞ』、『慾貪を本とす』父母愛染の一念が此の身の本である。『慾貪の本は何ぞ』、『虚妄分別を本とす』愛染の心は互に顔や姿の幻相を見るより忽然として起つたものです。『虚妄分別の本は何ぞ』、『顚倒の想を本とす』衆生の身分は血肉の塊物であるから、愛すべきもなく、執すべきもない。それを妄りに愛染するは假の姿に迷うたものといはねばならぬ。『然らば顚倒の想は何れよりか起る』、『無住を本と爲す』唯是れ一念の發動、忽ちにして顚倒の想を生ず。その一念の本を究むれば、迷も無く悟も無く、善も無く惡も無い。卽ち善惡を超絕したものである。是を無住と稱するのである。そこで菩薩は更に『無住孰か本と爲す』と問ひたまひし時、居士は之に答へて『無住は本なし、文殊師利無住の本より一切の法を立つ』と仰せられた。無住なれば眞空平等である。本來無一物である。眞空平等の上には是非善惡の種は無い。その平等海中に萬法差別の波が現はれたのであるから、差別の波は全體がソックリ平等無差別なる一大海水なることを知らねばならぬ。

　さすれば人生を以て厭ふべきもの苦み多きものぞと、佛様の御示しになつたのは、吾々衆生の迷妄を救はんが爲めに、其の煩惱罪障の最と深きことを自覺せしめ、併せて吾々の弱點と缺點とを指摘して、大なる警誡を加へられたのであります。法に定相なく世界に苦樂の自性は無い。仁者は之を見て仁と言ひ、智者は之を見て之を智といふ。迷ふ者は自ら苦みを招き、悟る者は自ら樂みを享く。人生畢竟是れ何物ぞと其の實相を參究して見よ。人生元來一如平等の遊戲道場ではあるまいか。

に満足することが出來ませうか。煩惱の犬は追へども去らず、菩提の鹿は招けども來らず、四つの苦しみは常に此の身に逼り、八つの風は常に此の心を襲ひ、生死の中に在りながら生死の理に昧く、聖賢の道に逢ひながら聖賢の道に悖ることが多い。寸善尺魔、苦多くして樂少なく、福は得難く禍は招き易いといふのが、全く人生の半面に於ける一大事實ではありませんか。敢て必ずしも釋尊の仰せを承はる迄もなく、人生其のものが衆苦充滿して甚だ怖畏すべきことを證明して居る。吾々の境遇そのものが實に三界皆苦なることを敎へて居るではありませんか。

併し、かく申せばとて無茶苦茶に人生を悲觀してはなりませぬ。實の處は人生其のものが苦痛を與ふるのでは無くして、苦痛を感ずるの本は全く吾々御互の方に在るのであります。甘泉一掬の水も牝牛が之を飲めば乳となり、毒蛇が之を飲めば毒となる。齊しく是れ長江一脉の水なるも魚は己の世界となし、人は之を飲むべきものとなし、天人は見て瑠璃と思ひ、餓鬼は見て火なりとす。齊しく是れ財嚢一塊の寶、慈善家は之を以て慈善の資となし、道樂者は之を以て遊蕩の費となす。飲酒家は酒となし、茶人は茶となす。魚ともなり、衣服ともなり、猫ともなり、杓子ともなる。故に皇后陛下は『持つ人の心に依りて寶とも仇ともなるは黄金なりけり』と御詠じ遊ばされてある。人生も亦是の如く、四苦八苦の世界と見るも、常住安樂の國土と見るも、皆な是れ見る人の知見と業力の如何に依るのである。

維摩經には維摩居士と文殊菩薩との諸法の根源に關する問答がある。菩薩が『善と不善との本は何物ぞ』

行の外は無い。

抑も天地間に於ける萬有諸法の起滅變幻は皆原因結果の法則に依るものである。吾々人間も亦此の原因結果の法則に支配せられて、苦樂趣を異にし淨穢科を同じうせぬのである。されば同一の國土に住し同一の社會に在りても、其の人々に依りて受くる所の果報が皆別々である。中阿含經には七事不齊というて、人間の果報を七通りに分けて其の因果關係を示されてあります。

第一は壽命の點に於て短命と長壽とがある。短命の因は無慈殺生で、長壽の因は慈心不殺である。次に多病な者と少病な者とがある。衆生を嬈ました業に依りて多病に生れ、衆生を嬈まさゞりし因に報いて少病健康の身を受く。次に容貌の上で、不端正なるは多惱瞋恚を因とし、端正なるは性坦無恚、即ち堪忍行を因とす。次に人格の上に於て威德のあるは嫉妬を懷かざりしに因り、威德なきは他物に妬を生ぜしに因る。次に位地の上で卑族に生るゝは驕傲大慢の結果で、尊貴に生るゝは性驕慢ならざりし結果である。又、財産の點に於て、財物に乏しきは慳悋にして布施を好まざるに因り、財物に富めるは布施給使の德である。又、智識に就て性來惡智に長ずるは智者に親からざるの結果で、善智に優れたるは智者に親近したる結果であると仰せられてある。固より此等の說は因果關係の一例を引ての御示しに過ぎませぬが、併し一斑を知りて粗全豹を察することが出來る筈のものであります。

是の如き因果の理法に基いて現在の我身と我が國土とを觀察して見たならば、吾々は果して現在の狀態

人生と佛界と相距る多少ぞ

人生是れ何物ぞ

『三界は安きことなし猶火宅の如し衆苦充滿して甚だ怖畏すべし』とは法華經の御文である。『三界は皆苦なり國土も何の賴かあらん』とは仁王經の御示である。『是日已に過ぎぬれば命は卽ち隨つて減ず少水の魚の如し、斯に何の樂みかあらん』とは出曜經の敎訓である。此等の御文を拜して佛敎は厭世思想だなどと早合點してはなりませぬ。なぜなれば、此の世に苦惱の多きも、此の身に無常の逼れるも、正しく人生目前の事實であるからであります。

山は高いもの海は深いものというたからとて、是れ全く必然の事實であるからして、思想も主義もあつたものではない。火は熱いといへばとて別に厭生主義でもなければ、水は冷たいといへばとて別に樂天主義でもないではないか。全體、釋尊は如何なる方針を以て吾々衆生に對せられたものであらうぞといふに、唯だ衆生をして迷を轉じて悟を開き、惡を止めて善を行ひ、苦を離れて樂を得せしめんとの大誓願

妄想窟を脱することが出來ぬ。哀れなることである。

故に大死一番というて一たびは所有凡情を掃蕩するが宜い。或は信仰に依りて自己の身心を佛陀の光明裏に投げ込んで了ひ、或は禪定に入りて無念無想の境界に安住せよ。必ずや、大活現成して、森羅萬象古佛の家風、碧落青霄道人の活計、喫茶喫飯の上にも天地の大道を履踐し、擧手投足の間にも宇宙の精神を實現する樣になる。

天地の大道とは何ぞやといふに、諸惡莫作、衆善奉行の道德の外には無い。『春は花夏ほとゝぎす秋は月冬雪さえて凉しかりけり』花の散るのも葉の落るのも皆な是れ變化常なき佛性の妙用である。『晴れてよし曇りてもよし不二の山もとの姿はかはらざりけり』思へばおもしろの世や、思へば樂しき身の上や。

『今日ほめて明日わるくいふ人の口なくも笑ふもうその世の中』と詠じた樣なものである。さればとて世の中の事を輕視せよといふのでは無い。唯だ假りの相に迷はないのが淺果敢なる夢をば見じといふ所である。

假りの相に對する迷執を離るれば天地法界は皆宇宙大道の靈動である。霞に笑ふ花、雲間に輝く月、何れか天眞の風景に非ざる。石に激する波、松に吟ずる風、何れか大道の消息に非ざる。蜷川親當の所謂『世の中は乘合舟のかりずまゐよしあしともに名所舊蹟』である。無門和尚は此の端的を『春有二百花一 秋有レ月 夏有二涼風一 冬有レ雪 若無三閑事挂二心頭一 便是人間好時節』と頌せられた。曹洞の太祖大師は『人々悉く道器、日々是れ好日なり』とも仰せられた。

又、醉もせずとは無顚倒の境界をいうたものです。衆生の邪見邪執は恰も酒に醉うたるもの〻人格全く一變して是非を判斷するの能力をも失ひ、何事をも正しく見ることが出來ぬ樣なものである。泥醉せる父子が相對して、父は其の子を視て『汝の樣な頭が幾つもある、化物には此の身代は讓られぬぞ』といふと、倅は亦其の父に向つて『こんなにぐら〱動く樣な危險な家は讓るというても受けられぬ』と申したそうである。一つの頭が幾つにも見えたり、動かぬ家を動くと思ふ、是れ皆な酒狂の所爲である。世に處して正見を得ることは甚だ難い。人生は苦なりと聞けば厭世思想を起し、人生は樂なりと聞けば五欲に耽着して飽くことを忘る。空と觀ずれば空に沈み、色と觀ずれば色に着す、何處までいつても

い。坐禪は能く煩惱を斷じて本性を開悟し、受戒は能く三業を調へて本德を莊嚴す。而して何れも信念より入りて結局は禪戒一致に歸するのである。吾々は此の御敎へに隨ひ奉る時は、此の現身に於て有爲の世界を超越して驀然として佛地に證入することが出來るのである。

あさきゆめみしゑひもせす

是は寂滅爲樂の一段である。寂滅というても身心共に滅却して單に空寂に歸することでは無い。煩惱の妄動を離れたのが寂で、生死の苦みを脱したのが滅である。語を換へていへば眞の大安心を得たのが寂滅であります。

眞の大安心は、妄念妄情を離れ一切の繫縛を脱するより得られます。天地の大道に隨順する時は妄念を離れ、生死の中に在りて本性の德を發揮する時に繫縛を脱することが出來る。その狀態を淺き夢見じ醉もせずといはれたのである。

吾々凡夫の妄念妄執は恰も夢の中に種々の妄想を描いて居る樣なものである。或は敵を見て怒を發し、或は親しき者を見て愛念を起し、或は萬金を得て喜び、或は寶財を失うて悲む等、千差萬別であるが、夢が覺めて見ればその身は安全なる床の上に眠つて居たのであつた。敵も味方も無ければ、損も得も無い。今までありし儘がありつぶれである。人生に於ける喜怒哀樂も多くは夢中の妄想と同じ事です。一休和尙が

る。又『われとわが心折々かへりみよ知らず〳〵も迷ふことあり』とも御教へ下されてある。

或處に酒呑の先生があつて飲んで許り居て一向に教育して呉れぬ。門人共は嚴重に先生に迫りしに、先生も一言の申譯が無いので、明日よりは決して酒を飲むまじと誓ひ、其の誓ひを證明する爲め『くろがねの門より固き我が禁酒修羅朝比奈も破らざりけり』といふ歌を書て與へた。門人等は翌朝早々先生の所に至りしに、こは如何に、先生ははや朝酒を聞召してなか〳〵の上機嫌である。門人等は呆れ果てゝ『先生此の有樣は何事でござる、貴方は昨日の誓を御忘れになりましたか』と責め付けしに、先生は平氣なもの『まあ〳〵酒の席に四角張た理窟は無用じや、こゝにも歌が書てあるから之を見られよ』というて差出した一枚の短冊、手に取り上げて見ると『我が禁酒破れ衣となりにけりそれさしてくれそれついでくれ』といふのであつたそうです。酒好きな人はなか〳〵之を止め惡いものと見える。

煩惱の性も亦是の如くで、之を斷ずることの困難は山の奥を越えるよりもむつかしい。故に佛は三祇百大劫の修行を積ませられ、祖師も臂を斷ち指を斬るの難行があるのである。然れども佛祖の大慈悲は攝取不捨の願力を以て濟度利益の方便を施したまひ、斷じ難き煩惱を斷し證し易からざる菩提をも證することの出來る樣に御化導下されたのである。

佛教八萬の法門は皆其の御化導である。眞言も、法華も、念佛も、稱名も盡く垂手の慈悲より發したる貴い御敎である。我が曹洞宗に於ては坐禪と受戒との二門があるが、此の二門は決して隔別の法では無

是れは生滅々已の一段である。生滅々已とは生滅の法中に在りながら、脱然として生死の束縛を滅却し已ることである。

前にもいふ通り、生死無常は宇宙變化の妙用であるから決して厭ふべきものでは無いが、悲い哉、吾々凡夫は多くは生死の爲めに苦み無常の爲めに惱まされて、四苦八苦の淵に沈んで居るのである。何故に生死無常が斯くまで吾々を苦しめるかといふに、是れは宇宙の罪には非ずして吾々が自ら招く所の報いである。然らば何物が此の苦みを招くかといふに、そは正しく吾々の心中に紛起する煩惱の所爲であります。

吾々は恥かしながら此の世界を常に煩惱世界として使うて居る。是を有爲の身土といふ。有爲とは妄想煩惱を以て種々造作を施すことで、つまり凡夫世界の異名である。迷ふが故に三界成、悟るが故に十方空、凡夫世界というて別に實在するのでは無い。皆な是れ妄想の幻影である。されど容易に此の幻影を脱することが出來ぬから、奥山に比したのである。深山大澤には今日でも人間の足跡を印せぬ處が澤山ある樣なもので、山の奥になると却々越え難いものであります。

吾々には、無始劫來、煩惱が習慣性となつて居るに依て、動もすれば善には移り難く惡には染り易い、明治天皇の御製を拜するに『ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ敎へ難きは人の道なり』と仰せられてあ

居たならば、天に漲るほどの大波も却て船を進める便りともなるものである。之に反して、船も粗末、船手も粗末であつたならば忽ちに大波小波の爲めに苦しめられ、結局は波底に沈沒して浮ぶ瀬もなき終りを遂げねばならぬ。波には憎愛の念は無けれども、船の操つり方一つで苦樂昇沈の差を生ずるのであります。吾々も是の如く變化無常の波頭に在るも、此の身の船が堅牢で、此の精神の船手が熟練であつたならば、變化の大法を利用し善用して益々理想の彼岸に進むことが出來る。同一の世界に生れながら苦樂其の相を異にするは、決して世界の罪では無い。罪の根本は畢竟、銘々各自の上にあるのである。

唐僧元曉法師は元と海東の人であつたが、海に航して支那に至り道を諸方に訪うた。或時、途中日暮れし爲め塚間に宿せしに、夜中に喉が渴きて堪へられぬ所より、水やはあると尋ね廻りて、破れた皿の樣な物に水のあるのを發見し、大に喜びて之を飮みたるに其の味ひ甘露の如くであつた。翌朝になつて再び之を見たるに、破れし瀨戸物と思ひしは人間の髑髏であつた。すると俄かに氣持が惡くなつて、昨夜飮んだ水までも皆嘔き出して了うた。此の時忽然として猛省し、『嗚呼、心生ずれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅す、佛の三界唯心と說きたまひしこと眞に我を欺かず』というて、大安心を得られたことがある。吾々も亦た此の生滅無常の世に在りながら無常の爲めに迷はされず、生死卽涅槃なりと心得て、こゝに大安心を決定せねばなりませぬ。

は如何に覺悟すべきやといふに、無常を利用し善用し應用することが大切である。

抑も宇宙は渾然たる一大靈體である。其の本體は絕對平等とは申すものゝ、決して空々寂々ではない。天眞の活動體である。活動體であるから一法より萬法を生じ平等體より差別の相を生じて、無間斷に活動すること恰も水の波を起すが如きものである。その活動の狀態に名けたのが無常といへる語です。人間の生死も萬物の起滅も皆活動の相であります。這へば立て立てば步めの親心も、小兒が何時までも小兒ではなく時々刻々に發育して居るから、そこに大なる樂みも生じて來るのだ。昨日の惡人も今日の智者となり、曾ては野蠻國たりしもの忽ちにして文明國となる。我が帝國の如きは、明治の初年より僅々四十有餘年間に於ける變遷の有樣は如何であります。是れ皆な無常變化の大法に則りて、之を利用し善用した結果である。

之に反して、彼の支那國の如きは、どうでありませう。嘗ては中華と自稱するだけの價値ある國であつたのだが、現今では非常に墮落して實に淺ましき姿になつて居るではありませんか。是れは國民に氣高い品性が無く國家に鞏固なる方針なく、上下を通じて利欲に走り安逸を貪ぼりしが爲め、無常變化の大法に飜弄せられ、斯かる惡變化を來たしたのであります。

吾々の此の世に於ける、恰も船を大海に乘り出した樣なものです。大海には必ず波瀾が起つて隱顯出沒の相を呈して居る。若しその船が堅牢で一定の方針を定め、精緻なる機關を備へ、熟練なる船手を有して

人が道を求むることの急なる恰も頭に火の着いたをけす樣に暫時も躊躇することが無い。又、道の業に精進することは恰も釋尊が過去に於て弗沙佛の出現せし時、掌を合せ一脚を翹て七日七夜の間『天上天下佛に如くは無し、十方世界亦た比ひ無し、世間有らゆる我れ盡く見るに、一切佛に如く者あること無し』といふの偈を唱へて彼の佛を讚歎したといふが、丁度その樣に非常に勉强することになるものである。『一時もあだにはなさじ覺りてもあひがたき身の暮れ易き日を』と古人の詠ぜし如く觀念せば、朝日の影を視ても此の一日を空うせじと念ひ、一刻の油斷もなるものでは無い。

能く斯の如くなれば自づと吾我の見というて己が我がといふ我見も起らぬ樣になるものです。刹那無常の心とすれば何處に己がといふ樣な固まり物があらう。縱ひ萬兩の黄金ありとも、一息截斷すれば一錢たりとも私することは出來ぬ。此の身といへども、燒けば灰、埋むれば土である。『世の中に我が物とては無かりけり身をさへ土に返すべければ』己が物といふも己が身といふも此の息の通ふ中の假りの符合に過ぎぬでは無いか。諸行無常を觀ずれば何れの處に執着すべき物のあるべき。

わかよたれそつねならむ

是は是生滅法の一段である。天地間に所有物柄は一として無常ならざるは無い。我が世の中誰ぞ常なる物あらんやである。併しながら、此の無常といふことは敢て必ずしも厭ふべきものではない。然らば吾々

しく、朝日に匂ふ風情こそ何に喩へん樣も無けれど、惜しや夕べの嵐にはハラ〳〵と散り果てゝ、忽ち跡も殘さず消え失せて了ふではないか。『明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは』『世の中は三日見ぬ間の櫻かな』である。小野小町も『花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に』と歎いて居る。生者必滅、釋尊未だ栴檀の烟を免れず、樂み盡き哀み來る、天人猶ほ五衰の日に逢ふ。況や吾々御互の生命は如何であらう。三寸息絶ゆれば卽ち是れ未來の人、今日は存すと雖も日明んまで復た保ち難し、思へば果敢なき人生ではありませんか。

併し、此の無常が却て吾々の道業を勵ます基となるものであることを忘れてはならぬ。承陽大師は學道用心集の初めに發菩提心を示したまひて、深く無常を觀ずるのが菩提心であると仰せられた。而して、其の旨意を說明して『誠に夫れ無常を觀ずる時、吾我の心生ぜず名利の念起らず、時光の太だ速かなることを恐怖す、所以に行道は頭燃を救ふ、身命の牢からざることを顧眄す、所以に精進は翹足に慣ふ』と御示し遊ばされた。

吾々の肉體が時々刻々に變遷して停らざるのみならず、吾々の精神も亦た刹那々々に移り易りて、決して一定しては居らぬ。況てや光陰の迅かなることは矢よりも疾く、愚圖〳〵して居れば一生の百歲も夢の如くに過ぎ去て了ふ。能く此の事を觀ずれば自づから三通りの用意が現はれて來ます。一には肉體の變化常なく生命の賴むべからざることを念じて、一心の動機を愼み以て自ら深く散亂妄動を防ぐ樣になる。古

安心を決定することが出來る。即ち、生滅の迷想が滅し了れば煩惱生死の苦本を解脱して、眞常不壞の寂滅を樂みと爲すことを得べしといふ意味であります。石州の履善といふ人が此の伊呂波の解釋を左の如く作つてある。

咲く花の色は匂へどやがてまた散りぬるものを、わが世には誰ぞ常あるものあらむ、いざこの有爲の奥山今日越え出でて、あさはけき夢はまた見じ、やがてかく涅槃の都につきぬれば、明りなき酒にはもとより醉さめもせず

大體に於て盡して居る樣に思ふ。

此の伊呂波を禪學の上から觀れば、また一段の趣がある。弘法大師も『禪默を心と爲す』といはれて、常に禪を修められたものである。高野山の如きも修禪の道場として開創せられたのであつて、終には彼の山に入定せられたほどであるから、禪的見地を以て伊呂波を解したならば、或は眞に能く弘法大師の本懷を滿すことであらうも知れぬ。

いろはにほへとちりぬるを

是れ諸行無常の一段である。諸行の行は遷流の義と釋して、天地萬象は皆な變遷して停らぬ物であるから、諸行というたのです。故に此の諸行は無常というて常住することが無い。露に開く櫻花の色麗は

色は匂へど散りぬるを　諸行無常
我が世誰ぞ常ならむ　是生滅法
有爲の奥山けふ越えて　生滅滅已
淺き夢見し醉もせず　寂滅爲樂

此の諸行無常云々の四句の偈文は、其の意義なか〳〵甚深微妙にして、見樣によりては佛敎大綱の偈とも大乘佛敎の目的とも見ることが出來る。而して、其の說く所のものは全く吾人精神修養の好標準であります。

此の偈は無常觀より涅槃寂滅の聖域に證入するの法門を示されたのであつて、その意義は極めて明瞭である。卽ち花の色は匂ひ豐かに咲き初めて珠を綴れる如く美しけれど、夕べの嵐には忽ちに散り果て跡も留めじ、されど、花ばかりがかく移り變るのでは無い。我が世の中を通觀すれば、誰れ一人として常住なるは無く、何一として不滅なるは無い。所謂世間に所有諸行は皆な無常にして盡く是れ生滅變易の法である。有爲轉變の此の世にありて、身を生死の巷に置き心を煩惱の林に留め、朝には五欲の峯を走り夕べには六塵の谷間に宿り、容易に之を脫することが出來ぬ。されど佛祖の御敎への忝なさは、斯る迷ひの奥山も、今日といふ今日こそは脫然として越え過ぎて、晏然として涅槃の床に穩坐し得べし。此の時こそは淺果敢なる妄想の夢も見じ、無明の酒に醉もせず、諸の迷妄を破り、諸の顚倒を離れ、生々世々の大

いろは禪話

修養の標準

以呂波四十七文字は正しく佛敎唱歌である。我が國に於ては此の歌ほど上下一般に普及したものは無い。而して此の歌は敎育上、文藝上、最も多大の功績を擧げて居る。此の歌を作りし人は實に我が國民の大恩人といはねばならぬ。

此の歌の作者は一般に弘法大師であると認めて居る。或は『い』より『を』までは護命僧正の作で、『わ』より『す』までは弘法大師の作ともいひ、或は石淵寺の勤操僧正と比叡山の傳敎大師と及び弘法大師との合作ともいうてある。兎に角、伊呂波なるものは、其の後、漢字を省略して新たに假名文字なるものを製し、佛敎々義の唱歌を之にて綴り以て國民全般に普及せしめたものである。

伊呂波に寫されたる佛敎上の典據は、彼の雪山童子が一身の生命を擲て得られたといふ涅槃經の四句の偈文を詠じたものであることは云ふまでもありませぬ。偈文に配當すれば下の如であります。

世間に法華經を口ばかり詞ばかりは讀めども心に讀まず、心に讀めども身に讀まずと歎かせられた。世間では口で法華經を讀むが、心で讀む事を知らぬ。心で讀んでも身體で讀む事を知らぬ、日蓮は身體で經を讀むぞ、と仰せられて居る。教育の御勅語に

克く忠に克く孝に云々

と宣はせたまうてあるが、此の御勅語も口で奉讀する許りでは不可ぬ。心で奉讀せねばならぬ。即ち、誠心誠意、大御心に感泣して拜讀し奉らねばならぬ。

心で拜讀し奉つて、吾々國民の平生の生活が、忠となり孝となり和となり信となりて活現するに到つて、初めて本當に御勅語の奉讀が出來たと申すべきである。」

考へては大間違ひです。

戒法、卽ち佛祖相傳の道德律なるものは、畢竟、自家の珍財であります。此の自家の法寶を見得するのが禪門の敎へである。承陽大師は

佛法を習ふと云ふは自己を習ふなり

と仰せられた。各宗の祖師とても、各々偉大なる信仰を有して佛敎を御弘めになつたのであるが、其の祖師方の御精神を仔細に吟味して見ると、此の佛法をば全く自己の佛法として活用されて居るやうに思ふ。淨土眞宗は他力往生の敎へで、禪門とは正反對の樣に思ふ方もあるかは知らぬが、彼の蓮如上人は一心の二字を釋して

一心とは彌陀を賴めば如來の佛心と一つになしたまふが故に一心と云ふなり

と仰せられた。阿彌陀經には『一心不亂』とある。一心とは彌陀如來を賴み參らせて彌陀の御心と吾々の心とが合致したのが一心である。卽ち。如來の廣大なる御心が吾々の心の上に現はれ、吾々の小なる心が佛心に融合したのが一心である。不亂の二字は正しく禪の端的である。眞言宗を御開きになつた弘法大師の御言葉には、

空海は、弱冠より知命に及ぶまで山藪を宅と爲し、禪默を心と爲す

と仰せられた。日蓮上人の御言葉を拜見しても、

大道に向つて歩を進めよ、徒らに草鞋を踏み破つて何にかせんといふ、活文殊に同參底の道を注意したので、普通の草鞋を履いて居る足で眞つ直ぐに出懸けよと言うたのではない。然るに、雲水達がハイ左樣ですかというて出だすから、おや眞の文殊菩薩の參拜の仕方を御承知が無いやうだが、御氣の毒と冷評かしたのである。

此の『驀直去』と云ふ三字、是れ亦吾々參禪家の工夫に値する一大公案である。吾々は此の人生に在りて、或は順境に處し、或は逆境に處す。然も驀直に大道を濶歩するを要する。如何が進前し去らん。是れ豈好個の問題にあらずや。此の驀直去の修行が徹底的に出來上つたならば、其の人は禪門に於ける大安心を得たる鐵漢と言ふべきである。

此の禪戒十箇條には一々斯くの如き禪的の深い眞理を備へて居る。故に吾々は唯だ單純なる道德上の制裁法であるとのみ見ないで、此の一箇條一箇條を以て佛教の大精神、禪門の大公案として研究し工夫し開示し悟入して往かねばならぬ。之れが禪戒の一大特色でございます。

無盡の戒品は一心に歸す

併しながら、此の戒なるものは何れより發生し來りしかと申すと、吾々の一心上に具有する德相である。所謂自家の寶藏、外より來らず皆自己の心性に具つてゐる德相であるのである。それを釋尊の手製の樣に

案で、吾々は此の公案を奉戴してこそ、轉迷開悟、離苦得樂の彼岸にも導かれるので、所謂法界の一大標準であるから、之を公案と稱するのである。併しながら、單に達磨大師の言葉、承陽大師の御垂誨、趙州の『無』、白隱禪師の『隻手の聲』等にのみ限られたものではない。此の戒法の一つ〳〵が實に吾々の大公案である。此の公案を提示して大問題となし、之に向つて研究して其の蘊底を盡すといふが禪門に所謂工夫である。而して此の十ケ條の戒法の一々が、吾々參禪者の一大問題で、此の十ケ條の鐵關を通過する事が出來たなら、玆に禪の眞面目が現はれる。古人の言語行狀を見ましても一として公案ならざるは無い。

例へば『臺山婆子話』の如き、支那の五台山は文殊菩薩の道場として屈指の靈地である。其の山の麓に茶屋があつて、其處に一人の婆サンが居た。門前の小僧習はぬ經を讀むで、其の婆さん禪機を備へて居る。時々雲水の禪僧が此の山に登らうとして、此の婆さんの處へ來ては路を尋ねる。乃ち問うて曰く『台山の道何れの所に向つてか去る』五台山に參詣したいと思ふが、何の道を往けば宜しいかと尋ねますと、婆さんは『驀直去』と答へる。驀直に去けとは、實に味のある言葉である。大概の雲水はたゞ有難うございますと言うて行きかゝる、と、婆さんは『好箇の阿師還た恁麼にし去れり』好いお坊サンぢやが可愛想に足許がフラ〳〵して出懸けなされたといふ厭味をあびせかける。どの雲水も〳〵お婆さんに冷評かされるのであつた。併し、此の老婆は台山の麓に居つて、多年禪機に觸れて居たので『驀直去』の一言には甚大なる意味がある。眞つ直ぐに往けと云ふは、眞の活文殊に參拜しやうと思はゞ、毫末の妄想我心を挾まず一直線に

へて居ることは明かです。吾々が一事の道徳をも、之を完全に現はすには、必ず無數の道徳が相伴はなければならぬものです。

夫れで、私は常に自分の徒弟や門人に向て申すのであるが、人間といふ者は、道徳的一箇の目標を定めたならば、其の目標に向つて間斷なく修養を積まねばならぬ。或は忍耐力を完全に守るとか、或は誠實と云ふ徳を完全に修めて往くとか、唯だ一箇條でも宜いから、それ丈は萬難を排して是非とも正しく守らうといふ大決心を以て進めば、必ず其の一箇條を修むる間に無數の道徳が自然に培養され、無盡藏の妙用を發揮することを得るものであります。

諸戒は禪門の一大公案

禪門の戒法は、一戒毎に無盡藏なる絕大の妙用を有して居るのみならず、又、一戒毎に最高微妙なる深理を有して居る。故に一戒々々悉く我が禪門の一大公案であります。

公案と云ふのは公府の案牘と云ふを略して公案と申したと云ふのです。例せば、政府の提出案に對し、議會で決議を與へ、その決議案に天皇陛下の御裁可を賜はりて、總理大臣の机の上に載せられたのが公案である。此の公案が總理大臣の机の上に上つた時、日本全國の國民をして、盡く此の法戒に服從せしめ、遵奉せしむると云ふ絕對的權威が備はつて來るのである。古の佛祖の一言一行は悉く萬代不易の活公

全に實現したる御境界であるから、絶對的に佛に向つて信仰すると云ふは、此の身心を絶對的に大道德の中に投げ入れると云ふ事になるので、其の道德の身上作業の上に顯現したのが戒法である。然れば禪と戒との關係は本體と發現とである。即ち禪は戒法の本體であり、戒法は禪心の發現である。佛心の作用である。故に禪も戒も共に道を離れたものではない。道の本體に證入したのが禪であつて、道の妙用が三業の上に顯現したのが戒法であります。して見ると、戒法は佛德の表示であつて、又、佛心の顯現であります。

此の戒法は縱ひ十ヶ條の項目に分れて居ても、其の內容は互に相關聯して離れない。故に十戒は即ち一に歸するのです。例へば殺生を禁ぜられたる戒法に就いて觀ても、不殺生と云ふ一ヶ條の戒德を修めて往くには十戒を悉く備へねばならぬ。例せば、不偸盜戒を犯す者は、他の財物を得んとして貪求の念を起し、遂に强盜などともなり、其の結果人の生命を傷つけると云ふ樣な事になる。又、邪淫を犯すやうでは完全に不殺生戒は保たれぬ。淫慾を縱にして男女の禮を紊し、顚情亂心の結果、殺生と云ふ恐ろしい罪惡を遂げることは、社會に現はれた實例に徵しても明かである。又、不妄語戒を犯して噓僞の振舞ある者は、眞の不殺生と云ふ戒德を完うする事は出來ぬ。噓僞の精神を以て萬事に接すれば、其の結果樣々な罪惡を生み出し、遂に殺生といふ大罪をも犯すに至るからである。

斯くの如く一々に就て其の原因結果を調べて見れば、不殺生と云ふ一戒を保つにも、自ら他の九戒の德を修めて訓練の効を奏するに非ざれば完全に保つことは出來ぬ。して見れば、一戒の中に自然に十戒を備

戒の實相を究めたので、是に於て、遂に人法二空の妙諦に達して大羅漢になつたと云ふ因緣がある。誠に廣大なる悟道ではありませぬか。

斯くの如く禪戒は其の一ケ條々々が實に悟道の公案であるから、禪門に於ては深く研究工夫して往くのである。故に禪戒を研究すれば實に痛快極まりなきものであります。一面には完全なる道德上の標準を獲得し、更に進んでは此の戒德に依り超然として物外の天地に逍遙し、此の身心を擧げて禪的王三昧に安住する、其の道を戒法として、御傳授になつて居る。而して此の戒法なるものは、畢竟佛が新たに御制定になつたのではない。所謂天地の公道、宇宙の眞理、卽ち法性天眞の大道なるものが物に應じ機に從つて活動する狀態を、戒法として御開示になつたのであります。

一戒に無盡の妙用あり

佛の境界は偉大なる道德體である。一口に佛の事を功德聚と稱へて居る。卽ち善根功德を以て造り上げられたる御身で、言葉を換て申せば卽ち道德體である。

其の道德は智識・道德と相竝べて云ふ相對的道德に非ずして、智德の二つが一如融合したる絕對道德であります。其の佛に向つて吾々が信仰を表するのは、取りも直さず偉大なる道德體に向つて信仰を表するのである。卽ち、吾々の大理想が佛陀の大道德に依つて標準が定まる。而して、佛は人格の上に吾々の理想を完

のみ拝する事が出來る。吾々も佛陀の大精神を證得し去る時は、其の大智見の中に佛陀の大生命が活動し、盡未來際死滅したまふことはない。是れは禪師の答處で楠公安心の樞機となつたのである。若し佛は涅槃に入つて御歿去れになつたのであるなどと云へば、夫れは眞の佛を殺す樣なものである。佛は常住不生不滅であらせられる。此の理を明めて往くが最向上の不殺生である。佛法の上に殺生といふことは言はれぬと云ふのが曹洞宗の御開山承陽大師の御教示である。

不偸盜戒の一戒も其の通りで、佛向上の宗意がある。釋尊の御時代に寶間と云ふ比丘があつた。佛より戒法を得て後『私は何を標準として修行したものでございませう』と御尋ねをした。すると、釋尊が『自分の物でない物に貪着するな』と被仰た。寶間は自分の物と然らざる物とを區別して、能く〳〵觀察して見たが、妻子眷屬も、財産の如きも、出家して了つたからには、今では最早自分の者ではない。御袈裟が一枚と應量器が一箇、之れだけは自分の物として用ゐて居る。併し、之れとて仔細に調べて見れば、永久に自分の物とはいはれぬ。火事に遭へば燒ける、水に遭へば流れる、古びれば形を損ずる。永久に自分の物とは言へぬ。然らば、此の身體だけは自分の物であらうか、だが身體とても何時迄も自分の物とは言へぬ。僅か出入の息の通ふ間は自分の物らしく思はるゝが、出入の息絶ゆれば未來に屬し、燒けば灰、埋めば土、三魂七魄天地に歸す、永久に自分の物でない。凡そ天地間を眺めて見れば一塵一芥も自己の物といふべきは無い、畢竟不可得である。それを執着するは盡く妄想顚倒であるといふ處に工夫がついた。是れ正しく不偸盜

性の眞理眼より觀れば生命不滅である。人力を以て斷つ事は出來ぬ。若し出來ると見るは斷見の外道である。諸法本來常住不滅である。大生命の眞理は決して刀劍や毒藥の力で、之れを亡す事は出來ぬ。佛性は不生不滅である。常住寂滅の生命に向つて殺害をしやう、彼の生命を斷つたらと云ふやうな觀念を起したなら、夫れは一つの妄想妄見である。故に、眞に不殺生戒を保たんとせば、佛性常住の眞理を究め、不生不滅の大生命を護持せねばならぬ。楠公が戰死の前日、明極禪師に參じ問うて曰く『生死交謝の時作麼生』と、卽ち生より死に移る境目に於ける大覺悟・大安心は何うでございますとの問着である。明極禪師答へて曰く、

兩頭俱に截斷して一劍天に倚つて寒し、

と、吾々が若し肉眼を以て觀る時は、生もあり死もある。去れば其の本體實相には生死の實は無い。生死の假相は開花落葉なり。天地間に於ける萬物の活動變化の狀態、凡夫は之を生死と觀る、達人は達觀す、大活眼を開いて觀破すれば宇宙間一物の生死すべきは無い。生死卽ち不生不滅である。不生不滅の本體原理を究めて往く時には生死など問題にならぬ。釋尊も法華經の中に、

諸法住㆓法位㆒　常住寂滅相

と被仰つた。一切衆生其の儘常住法身である。故に吾々衆生の上に佛陀の大光明が現成して居る。故に生死の兩頭を固執せし妄想を裁斷せよ、自己の大智劍は蓋天蓋地である。彌勒菩薩は大慈悲心の心裡に於て

しき信仰を保任せよと云ふ御戒めである。要するに吾々の從前の信仰に動搖を來たす樣な事があつてはならぬ。眞の信仰は其の精神の奧底に佛教的妙德が顯はれて來るでなければならぬ。例へば、朝夕佛前に勤行し自ら佛教家を以て任じて居る吾々であつても、其の精神及び行ふ所、守る所が、佛教の精神に反して居つたなら、矢張り戒法の違反者たるを免れぬ。又、宗派の異動に依つて自讃毀他し、妄りに罵詈讒謗を敢てするが如きも謗三寶の咎を免れぬ。日蓮上人の如き折伏門を開いて各宗を罵倒せられたが、此等は外に大なる目的があるので、決して我慢增上慢より出たものではあるまいと思ふ。然るに唯宗派心にのみ駈られ憎嫉の情、利己の念に囚はれて、妄りに讒謗を恣にすると云ふ樣な事があつては、佛意に反くの甚しいものである。依つて吾々は常に淨信を把持し、最も淸らかなる信仰、正しき信仰、不偏不邪の信仰を守りて、我慢剛情の妄信や迷信に陷らぬやうに淬礪に努むることが大切なことである。

以上十ケ條を微細に解釋する時は、信仰も、道德も、禪理も、哲理も、一戒毎に網羅し得ざるは無い。佛教には八萬四千の法門があるが、此の戒法は其の八萬四千の法門をも盡く含蓄して居ると云ふ程に、非常に意味の深遠なる戒法である。

然るに此の戒法を、一面、禪門の見地に依て觀る時は、一ケ條毎に禪門の一大事が含まれて居る。暫く初めの不殺生戒の一ケ條に就て申せば、不殺生戒は殺生するなと云ふことであるが、殺生は果して出來るものかが問題である。吾々凡夫の眼から觀ると、生命を斷つ事が出來ると思ふが、一步を進めて、常住佛

六、不説過戒　他人に對する惡口を言はず、荒々しき詞や惡まれ口をきかず、進んで愛語の行ひを修めよとの御戒めです。

七、不自讃毀他戒　自ら自己を讃て他人を毀りて侮蔑するなとの戒めです。所謂傲慢不遜の心を抱かず、如何なる人に對しても、必ず恭謙の行ひを修めよと云ふことになります。恭謙己を持すと御勅語にある如く、吾々は常に恭敬謙遜の徳を養ふことが肝要であります。

八、不慳法財戒　之れは法と財と二つに於て、貪り慳むことなく、常に親切を施して他の爲めにせよとの敎へである。法は吾人の精神を資益するもの、財は吾人の身體を饒益する所の物質である。精神に屬する法と、物質に屬する財、此の有形無形の二つが相依て人類の要求を滿足せしむるのである。吾人が資産の增殖も、商工業の發達も、敎育の進歩も、文明の發展も、皆法と財との二力に依らねばならぬ。故に吾々は自己の力量に應じて、此の財と法との二つを廣く他人に施して毫も惜む所なく、益々利他的事業を擴充せねばならぬ。之れ即ち布施の行である。

九、不瞋恚戒　堪忍を守つて腹を立てるなよとの御戒めです。縱ひ逆境に處するとも、又、自己の感情に逆らうやうな場合に遭遇しても、飽まで忍び耐へて、決して憤怒・怨恨・憎嫉等の念を起さず、益々慈忍、即ち慈悲忍辱の行ひを修め養ふことが肝要である。

十、不謗三寶戒　三寶は佛法僧の三寶である。詰まり佛敎に反對して邪見に陷ることなく、常に淨く正

法の上では、沽る方を一層強く誡められるのは當然です。然しながら、此の戒法の精神は之を沽るは勿論、自ら飲むのも人に與ふるのも、都て禁じられたものと見て差支ない。何故かならば、若し己れの精神が紊れたならば、他人に對しても苦痛迷惑を與ふに至るは必然の事であるからです。そも佛は酒をば何故斯くやかましく誡められたかと云ふと、之れを二つの意味あるものと見るが宜い。第一は身體の健康を害し、第二は精神を攪亂せしむるからである。凡そ吾々が其の精神を迷狂に陷らせたり、或は身體の健康を害したりする時は、道德の器を害するのであるから、總ての道德の根柢を打破つて了ふことになる。自分の身に執つては、之れ以上の損害は無い。此の意味から申しますと、單り酒類のみならず、總て吾々の身體を毀損するもの及び精神を錯亂せしむるものは皆一種の酒魔であります。斯う云ふ風に廣い意味を以て、此の戒法を解釋して往く時は、吾人の精神を顚倒錯亂するものは盡く酒である。世に財物の爲めに心を奪はれる者ありとすれば、財物も亦酒である。衣服の爲めに心が奪はるれば衣服も亦酒である。名譽の爲めに心が狂ひ、利益の爲めに心が迷ひ、其の他博奕に耽り女色に溺れ、碁・將棊に夢中になり、相撲・芝居に馬鹿になる、皆是れ酒である。そこで此の戒めを守つて往くには、如何なる場合でも常に心を正しくし、身を守ると云ふことが大切です。『あさきゆめみしゑひもせす』とイロハにあるが此のゑひは無明の酒に醉ふことです。故に一切處に迷狂を起すなといふことが、此の戒法の精神と見るが宜い。故に正心行といふのです。これが不沽酒戒である。

ちは、殺生を禁じ進んで積極的には、所有一切の生物に向つて慈愍を注ぎ、愛護を加ふる事を勸められたのです。是を護生の大行と言ふのです。

二、不偸盜戒　竊盜、强盜、詐僞、貪婪は言ふに及ばず、或は賄賂を貪り、暴利を敢てするを始め、凡て取るまじきを取るは皆偸盜である。斯かる不義を働かず、萬事萬端の上に義を守り廉直を持つことを勸められたのであります。

三、不邪淫戒　又は不貪淫と云ふ。不義淫行の戒めであります。道ならぬ戀路に迷ひ、邪曲なる淫慾を貪り、以て品行を愼まず不貞の振舞をしてはならぬ。進んで常に貞潔の德を修めよと云ふのです。

四、不妄語戒　正直を守つて噓を言ふなよとの御掟、總じて禪戒は身口意三業に於て護持すべきものであるから、單に口で噓を言はざるのみならず、精神に於ても露僞りを懷かず、所有行爲の上にも虛僞の振舞なく、內外玲瓏、進んで誠實の行ひを修めよ、淸く正しき眞つ直ぐな道を履み行くべきであります。

五、不沽酒戒　一寸見ると妙な戒法の樣に思はれる。酒を沽るなと云ふ御戒めであるから、十箇條の中に毛色の變つた條項の樣に感ずる方も或る。曾て東京のある席上に於て禪戒談をした時に、鈴木充美先生が居られて、酒を沽るなと聞いて大に安心した、飲むなといはれるかと思うて、實は心配して居たといはれて笑つたことがある。尤も、同先生も晩年は一向酒を召し上がらぬと聞いて居る。飲むのは自分一個の身心を害するに止まるが、酒を沽るのは一般の人に狂氣水を與へる譯であるから、佛性の慈悲心を根柢としたる戒

たからとて、金貨を出す譯には往かぬ。第二は軍馬の話だ。然し軍馬は政府が彼等に下げて居るから、その話を聞いても金貨を寄附する氣にはなれない。第三の話は何んであるかと云ふと要するに婦人の話である。して見ると彼等青年士官の心の奥底には何が這入つて居るかと云ふと、戰爭と、軍馬と、婦人、これだ。彼等の精神の中樞を爲して居るものは、この三つのみである、如何にも遺憾に堪へぬ」と言はれたといふ御話しがある。是は彼等青年士官ばかりではあるまい。吾々の精神の奥底にも動もすると、名譽とか、利益とか、享樂とかいふことのみが中心卽ち主人公となつて、信仰とか道念とかいふ好題目は隅の方へ小さくなつて居りはせまいか。處が三根本戒を受けて堅く將來を誓つて參る時には、精神の中樞には動かすべからざる道德の根柢が築かれて往くのであるから、非常に大切なるは戒法である。

十條戒

此の三根本戒が具はれば、その道心的大佛心より一切萬境に對して、活動を起して往く標準を十ケ條の戒法に分けて御示しなされたので、之れを十重禁戒とも名ける。而して、一ケ條毎に深甚微妙の義を含んで十條の內に、世間一切大勇・大智・大仁を具備して居るのであるから、之れを細かく說明する時は、殆ど際限もないことでありますから、ホンの名目だけを列ねることにいたします。

一、不殺生戒　之れは總ての生物に對して殺害を加ふるなといふ戒法です。諸惡莫作と云ふ消極的か

われと我が心折々顧みよ知らず〳〵も迷ふことあり

と仰せ給はれました。口に道德を談じ、筆に宗教を述べましても、精神の中心はどうかといふと、却々道德や宗教にかなつて居らぬが多い。或は名譽、或は利益、或は情慾等、さう云うものを遂げんと欲するやうな事が、稍もすると精神の中樞を支配して居る。

ショツペン・ハウエルが、晩餐を喫する爲め、毎晩一定の時間に、或料理屋へ參ることに極めてあつた。所が隣室に二三人の青年士官が、同時間に來ては晩餐を喫して居る。ショツペン・ハウエルは此の樣子を見て自分のポケツトから一箇の金貨を取出して、卓子の上に置き、彼の青年達の話を面白さうに聽いて居る。而して、晩餐が濟むと其の金貨を又ポケツトに收めて歸る。かう云ふ風に每日同じ事計り繰返して居るので、何うも何んの爲めに金貨を出し入れするか一向に判らぬ。或時、給仕人が『先生貴君は金貨を每晩出したり、入れたりなさるが、一體何う云ふ譯でありますか』と聞くと『イヤ、別では無い。隣室に青年士官が來て居るが、今日國家に於て最も望みの多いのは青年である。國家の干城と言ふもこの青年を措いては外にない。何か立派な考へを以て、立派な計劃でもいたす相談など爲すであらう。其の時には、予は第一着に些少なれども寄附しやうと思つて待つて居るのだ。所が、今日に至る迄數十日を經てるが、金貨を彼等に贈呈すべきほどの談話を彼等はなさない。彼等青年士官の話を聽いて居ると、失望してしまふ。彼等の話すところは第一に戰爭の話だ。之れは然し當然なことだ。然し古今東西の戰爭談を彼等がし

爲め、國家の爲めに諸の惡を止め、衆の善を行ひ、益々世界の人に對して向上發展を圖つて往くといふに在るので、是れが度一切衆の戒法であります。

此の三根本戒は實に諸佛の基本、道德の根源です。是れを智仁勇の三德に當て嵌むれば、斷一切惡は勇である、修一切善は智である。度一切衆は仁である。佛には斷德・智德・恩德の三德が完備せられてある。

佛の御生涯に通ずる御德を分解して見れば、此の三大德の妙用です。就中、斷德は果斷決斷の勇德である。凡そ何事を決行するにも、先づ其の善行を妨ぐる諸の煩惱を裁斷し、自己の目的に向つて驀進して、何者が妨害を試みるとも、盡く斷破して進むと云ふ大勇氣が無ければならぬ。此の大勇氣があつてこそ佛は四十九年間に渉る說法敎化の大活動、十二年間の難行苦行をも爲し遂げられたのです。佛に偉大なる智德の存したまへることは申す迄もない。また恩德を有したまふことも勿論で、この御德あるが故に一切の衆生は救濟されるのである。佛には此の三德が完備して居られる。而して三聚戒は三德の根本たるべきものなるが故に、三根本戒と稱するのである。吾々は先づ以て、此の三根本戒なる道德上の基礎を、精神の中樞に確立して居るは、修德成佛の本であるが、その基礎が、ともすれば動搖し易いから、常に修養の力を施さんことが大切である。

明治天皇陛下の御製を拜しましても

ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ敎へ難きは人の道なり

尤も、頓誓漸修と申して居る、惡い事は致すまいと云ふ決心は今でも起されるが、之れを實行して成功の域に達するは容易なことでない。そこで頓に誓ひ漸くに修めるのである。即ち、即今發心の端的に、至誠を傾けて佛陀に對し、今日以後、身口意三業の上に於て、斷じて惡しき事はなすまじと誓ふのである。佛に誓ふは即ち良心に誓ふのである。良心に誓ふはやがて天地に誓ふのである。斯くの如き大決心を確立し、今日以後の所有行動を清く聖しく美はしくして往くのである。されど其の目的を完全に實現するは、容易ならざる事であるから、日進月歩、漸々に實行の歩を進めて往かねばならぬ。是れ頓誓漸修である。所謂禪的修養であります。修養は無限に修養して往かねばならぬ。

攝善法戒と云ふは、修一切善で、身口意三業の上に於て一切の善を行ふ事を誓ふのである。故に必ずしも佛教に說く所の出世間的の善のみならず、我が日本帝國に於ては、忠孝の二道を以て道德の大本と爲し、その道德を全うする所以の法則は、教育の御勅語並に戊申の御詔書等に於て御教諭を賜うた。是を奉戴して國民の覺悟を守り、臣民の大義を重んじ、親族・社會及び人類全體に對し、至誠眞實の精神を傾注して愉快に滿足に善行を勵み勤めなくてはならぬ。

攝衆生戒は度一切衆の戒である。惡を止めて善を行ひ、以て自利の功を收めて後は何を爲るのが目的であるかと云ふと、唯だ自己一分の解脫と道德とを完成するが爲めにはあらずして、歸する所は一切の衆生を濟度して、全體の幸福を進め、相共に佛陀大聖の域に達せしめんが爲めです。つまり人類の爲め社會の

いふは、殆ど無いに依て、道徳は無限に實行して往かねばならぬ。道徳の實行される所に佛陀の生命が現はれ、天地の公道が圓通する。道徳無限なるが故に、活動も無限である、從つて快樂も亦無限である。

然らば、禪門の戒法は何を以て其の根柢とし源泉とするかと云へば信仰である。信念である。其の信仰の標準を定められたのが歸依三寶卽ち佛法僧の三寶に歸依するのである。吾人の大慈悲父たる佛陀は旣に御涅槃に入らせられても佛の生命たる法が遺つて居る。法に依つて修すれば目前に佛陀を拜する事も出來ます。而して、此の法を修行し學得し悟達して往くには、其の傳道師たる僧寶の力に依らねばならぬ。そして、信仰の唯一標準は佛陀であるが、佛陀に接觸するには法と僧とに依るの外は無い。故に佛法僧の三寶は、恰も鼎の三本足の如くにして相離る可らざる關係を有するのである。

三根本戒

禪門の戒法は十六箇條より成立て居る。其の中、初の三箇條は前に述べたる歸依三寶戒である。次に三根本戒、是を三聚淨戒と名く。卽ち、攝律儀戒・攝善法戒・攝衆生戒の三條です。

攝律儀戒は斷一切惡を期するのである。諸〻の惡きことは誓つて致すまじ、身口意一切の作業の上に諸惡を斷ぜんとの誓を立てるのである。律儀とは非法を制するの法律威儀である。その律儀を總括し、ひつくるめて護持せんとの大志である。

聖武天皇は深く佛教を御信仰遊ばして、日本全國の者に戒法の貴き因緣を結ばせたいと云ふ御思召で、勅命を以て、三箇所に戒壇を築き、戒法の道場を設けられました。卽ち奈良の東大寺と九州筑紫太宰府附近の觀世音寺、東國下野の藥師寺、此の三ケ所です。之を三戒壇と稱す。最も是れは狹小の戒壇です。卽ち小乘と大乘とを混融した戒法であつた。其の後、傳教大師が天台宗を開かれて圓頓戒を傳へ、弘法大師は金剛三昧戒を傳へられ、はじめて我が國に純粹の大乘戒法が傳はつたのである。其の後、鎌倉時代に至り臨濟宗の榮西禪師、曹洞宗の承陽大師、佛祖正傳の禪戒を傳へ來りて弘通せられた。此の禪戒は天台宗等に傳ふる戒法と、其の源は同じである、唯だ說明の點に於て多少趣を異にして居るに過ぎぬ。又、之を守る人、信ずる人の根機に依つて、戒法に對する研究程度に多少の相違はある。從つて戒法の理致にも、淺深の別なきこと能はず、併しながら大體に於ては、同一戒法であります。

受戒は入禪の初門

道德は吾人の生命である。戒法は道德の精華なるを以て、吾々は先づ戒法に依つて佛教の門に足を踏み入れ、而して暫時も間斷なく戒法を受持し、護念し、運用することが大切である。吾々御互は如何なる場合に處しても、道德を離るゝ事は出來ぬ。吾々の位置が氣高くなればなる程、此の一身を環匝する社會の事情關係が複雜になつて參るから一層道德を實行する上に於て訓練を要するのである。道德には成功期と

を戒法と名付けたのである。して見ると戒法は吾々の暫時も離る可からざるところの、人々箇々の大生命とも謂ふべき道徳上の原理原則であります。道は暫らくも離る可からず、離る可きは道に非ず、一刹那の間も離る可からざる大道をば戒法として御授けになつたのである。故に此の戒法に對して、吾々は誓つて之を守り、必ず之に背くまじと云ふ覺悟を有せざれば、佛教に歸依したる佛教信者と稱すべき資格は無い。

人多き人の中にも人ぞなき人となれ人人となせ人

萬物の靈長たる人間の身を受けても、人道を守らうと云ふ考へも起らぬやうな者は、未だ人間とは爲れないのである。卽ち人間の姿をして居ても、人間たるの德を備へない以上は、決して眞の人間とは言はれませぬ。佛の戒法は佛の德であるから、釋尊は懇ろに、佛弟子たる者は必ず此の戒法を受けよ。此の戒法を守らうと云ふ觀念を持たぬ以上は、佛弟子たるの資格を備へた者では無いぞと、最と嚴重に御誡めになつて居る。

我日本に於ては、一千餘年以前より戒法相續の儀が行はれた。支那の南山律師と云ふ方は佛教の戒學を大成して律宗を開いた。併し是れは禪戒では無い。禪戒は達磨大師直授の法である。日本に於ては、孝謙天皇の御代に唐の鑑眞律師來朝し、奈良の東大寺に戒壇を築いて授戒會を行はれた。聖武天皇を始め奉り、皇后・太子・公卿以下皆戒法を御受けになつた。衆生若し戒法を受けて、之を行ふ時は眞の佛弟子にして、現在の此の身此の儘諸佛の位に入りて佛と成ると云ふ釋尊の金言であります。

がひ根機に應じて、御定めになつた戒法であるから、其の時代には必要であつても、後世若くは他の國土に於ては、餘り必要でない戒法もある。斯く其の時代其の機類に應じて、特別に制定せられたるものは、所謂別戒、即ち特別戒法である。

此の外に通戒と稱すべき一般的・普偏的・永久的の戒法がある。五戒・十善戒または禪門所傳の戒法等はそれである。是れ即ち古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる萬代不易の道德律を御示下されたのである。我が宗門に傳ふる戒法はこれを禪戒と申しますが、この禪戒の如きは、法性天然の法則であるから無論通戒であります。故に吾々日本國民のみならず、佛敎に緣なき西洋異敎徒の者と雖も、此の戒法は齊しく守らねばならぬ。佛であらうが、凡夫であらうが齊しく遵行せねばならぬ。貴賤男女の區別無く、一般的に必ず違背すべからざる道德的憲章であるのである。されば禪戒は一切戒法の中に於て最も高尙幽妙なる眞理と禪味とを含有する最高の道德標準である。禪戒の一々に最高最極の御悟りが含まれて居ります。是を細かく述ぶれば無際限である故に僅に其の大綱を示すことゝします。

然らば、禪戒は正しく道德上の原則であるに依て、此の戒法は天地間の大眞理より產み出されたもので、所謂萬代不磨の公道である。既に天地の公道より現出したる戒法であるから、その戒法の根本の源は、吾々の精神の中に本來具足して居る。即ち佛性本來の德相である。吾々の精神には自づと天地の公道を具有して毫も缺くる所は無い。其の天地の公道が、身口意の三業即ち身心の働の上に現はれて往く。之れ

行爲の根本を制止せしむるため、道徳を實現するための第一手段として、釋尊はこの戒法を御制定なつたのであります。

戒は制止の義である。防非止惡とも釋してある。併しながら、釋尊の御本旨は、唯だ消極的に惡を制止するのみに止まらず、進んで善を行はしむるに在るのである。故に、戒のことを止得とも釋してある。梵語では『尸羅』といひます。止得とは惡を止めて善を得ると云ふ事である。七佛通戒偈にも『諸々の惡は作す莫れ。衆の善は奉行せよ。自ら其の意を淨うす、是れは諸れ佛の敎なり』と示されてあります。佛敎道德の根柢は此の言葉の裡に自ら述べ盡されて居ります。

併し、戒法なるものは其の細目に至ると、其の時代に依り境遇に依り、根機に依りて、色々の禁止の形式、制裁の方法が變つて來るものであるから、釋尊の御一代の中でも隨つて犯せば隨つて制すると云うて、其の出來事に依つて、漸く細目を定められたものです。即ち酒の爲めに弊害を生ずれば酒を禁じ、肉食の爲めに弊害を來たせば肉食を禁ずると云ふ風であつた。事實行爲の上に現はれたる非行缺點を御見屆けになつて漸次に相當の制裁法を設けられて、遂には非常に緻密な複雜なものになつたのである。是の如く大小乘の戒法が盡く一時に制せられたのでは無く、次第々々に其の條章の數が殖えて來たので、比丘の二百五十戒（比丘とは私共のやうな男子の出家である）比丘尼（女子の出家）の三百四十八ケ條の戒法、其の他三千の威儀八萬の細行等無盡である。かやうに戒法の數が限りも無き程澤山できた。併し、時代に從

禪の戒律

禪戒は佛性の德相なり

佛教に於ては戒・定・慧の三學と云ふことを標示致しまして、此の三大分科に依つて佛教學を研究するになつて居るのであります。其の中の戒とは戒法、定とは禪定、慧とは智慧であります。我が禪門に於ては戒律と禪定と智慧とを圓かに相傳して居ります。が、先づ戒法と禪定とのことを申しますならば、即ち我が禪門に於ては、禪定に依りて心法を相嗣し、戒法に於て佛德を修めて行くのであります。併し我が宗の禪定は、單に定ではない、定慧圓明の禪です。

又、戒法は語を換へて申すと道德であります。即ち佛教道德です。

道德を完全に實行せしむる方法として、釋尊は先づ第一に吾人が精神上及び身口二業の上に於ける種々の缺點を指摘して、其の缺點を艾除すべく說かれました。吾々の精神上には種々の病がある。その病が自づと行動の上に現はれて、遂には非法を行ひ、非道に走り、色々の罪惡を產み出すのである。故に其の

や。飯さへ喰へれば生きて居られると思ふなよ。それでは飯櫃と擇ぶ所が無い。法衣さへ身につければ僧侶だと思ふな。それでは衣桁も同然ぢや。學校を卒業したとて好い氣になるな。今の卒業の卒といふ字は怱卒の卒ぢや。大勢聚つては居眠をして居る。丸で水瓜畑を風が吹く樣だ』それはそれは、手強い口宣であつたが、今になつて見ると、しみ〴〵有り難く感ずるのである。

今や我が國は世界の五大强國の一に算へられ、今後は所有方面に向て世界的に活動せねばならぬ大切な時代である。此の時に當り萬々一にも勇猛精進の志氣が無かつたならば、國家は恰も神經衰弱症の樣になるであらうと思ふ。先づ以て人の上に立つ者から自覺せねばならぬ。宗教家でも敎育家でも身を以て勇猛精進の範を示さねばならぬ。父兄たる者も亦然りである。子弟をのらくら者にするのは一つは父兄の罪、上流者の罪と言はねばならぬ。吾々は相互に眞正なる勇猛精進佛となることが急務である。

の武士と與に先陣に來たりしに、戰既に終りたる跡なりければ、あな無念やと言ひつゝ、父の本陣に馳せ行き、『父上が先陣の御許し無かりし爲め、今日の軍に逢はず、誠に殘念の事を致しけり』とて涙に咽びながら云へるを、傍に在りて松平正綱之を慰めて『卿は未だ年若くましませば、此の後、斯る戰場には幾度も臨み給ふ可し、左迄無念に思召し給ふにも及ばじ』と云ひけるに、賴宣は色を變へて、『正綱は何事をか申さるゝぞ、賴宣の十四歳は再びとあるべきや』と言ひけるを、家康公は嬉しき面持にて、『戰の場に手柄したらんよりは只今の一言こそ由々しき功名なるぞ』と激賞せられたは有名の話しであるが、吾々も亦事に當り業に從ふ時は、常に是の如き覺悟がありたいものである。陽氣の發する所金石亦透る、精神一到何事か成らざらん。少年も、青年も、男子も、女子も、一齊に勇猛精神佛とならねばならぬ。良田萬頃あるも一藝の身にあるに如かず、遊んで暮す者は終に是れ、一箇の造糞器たるのみである。

衲が幼年の時、御傍に事へし總持寺獨住一世奕堂禪師は剛毅の大善知識であつた。東京四谷笹寺に禪師の授戒會が勤まりし時、衲は戒行といふ禪師の御給仕役であつた。年は十四歳位であるのに、午後の十時過に就眠し、翌朝は午前一時半頃に起床、直ちに本堂で坐禪、その眠きこと譬へん方も無く、坐ると眠ると同時であつた。警策の僧も、流石、小僧と思うて知らぬ振して通過すると、禪師は大喝一聲して、『何故警策を與へない。遠慮なく打て〳〵、飯を喰て坐睡ばかりして居る樣な者は役に立たぬ。眠つて居るより打殺されて松の木の肥料にでもなつた方が餘程功德ぢや、今の禪者は勇猛精進力が無いから可愛そうぢ

き家に生れ、十二歳の時父を喪なひたるも、父の遺訓を守り、母に孝養を盡し、且つ家を興さんものをと志し、文化四年十九歳の時、行商を始め、僅かに五兩の金を以て小町紅を仕入れ、全國を廻りて業務に努力した。

野州蘆野驛の旅亭に泊せし折の如き、此の驛には醜き業を營む婦女ありて頻りに遊興を勸めたるも、氏は行なひを愼んで應ぜず、爲めに非常なる冷遇を受けたるのみならず、隣室では徹宵騒ぎ散す爲めに遂に眠ること能はざりき。されど氏は堅く志を守りて自ら『わかき時遊びに心あるならば後の難儀と思ひ知るべし』といふ歌を詠じた。此の時の光景を描いて同家子孫の教訓としてある。後、甲府某家の裏土藏を借り受け始て商業を開く。時に軒場の風鈴を見て詠ぜし歌に『かせがずにぶら〳〵してはなりませぬ一文錢もたのむ身なれば』とある。是より家業日に盛んにして、遂に今日の繁榮を見るに至つた。

氏は行商中、峠のあるのを樂まれたそうである。一里の峠よりは二里の峠を喜び、二里の峠よりは三里の峠を喜んだ。妙な樂みもあるもの、何故樂むかといふに、峠その物が好きといふでは無いが、峠が嶮難なればそれだけ行商人の入り込むことが少ないから、結局、商賣が歡迎される筈である。是れ峠を喜ぶ所以である。

德川賴宣は家康公の子である。十四歳の時、大阪の戰起りしかば、父に從うて軍中にあり、五月七日、先陣の戰始まれりと聞き、吾も亦其の陣に加はりて、初陣の功名を揚げばやと勇み奮ひて、馬に鞭ち近侍

間延長することもある。其の間は立ち通し、働き通しにて一分時間も安息の餘裕が無い。全く勇猛精進力の實現である。此の力に依て職務を遂行して居る。故に私は中心之を感謝すると共に、相互に益々勇猛精進力の增進を希望して居ります。不幸にして怪我をして命を殞したり、又は病死したりした人は、皆な職務に斃れた者として年々追弔法會を行ふのみならず、毎朝、自身で出勤前に讀經回向をして居ります。その回向の折、死者の姓名を一々讀み上げることは、永年の間には其の數も非常に多くなつた爲め時間が許さぬ。そこで此の頃は一切の死者を合稱して南無勇猛精進佛と唱えて回向して居る。是れは縱ひ如何なる人物にもせよ、公職公務に從事して勇猛精進して居る時は、其の動作は正しく佛心に相應して居るものと信ずるより、斯く稱名致し居ります』といふ意味であつた。その時衲は『それは洵に面白し、佛の中にも大强精進勇猛佛といふのがある。勇猛精進の一德既に是れ佛德一分の莊嚴たるを疑ふべからず』と申したことであつた。

又、越後國中魚沼郡中條町醫士杉本周德氏は、壯年の頃より佛教の篤信家で、且つ盡忠報國の士で、世に傳ふべき美談も甚だ多い。本年七十餘歲、益々國民精神の向上と宗教質實の信念とを鼓吹することに熱誠を注いで居られる。曾て衲に大强精進勇猛佛の御名號を書せんことを囑せられ、今猶ほ勇猛精進の志氣を振作して居られる。

衲の知人、佛教篤信者たる江州川並の塚本源三郎氏の祖先にて塚本家を興隆したる定右衛門氏は、乏し

下にてわたらせられた。時に寒風凜烈、肌膚を刺さん計りなるに、殿下は凝然として動かず、僅かに御喜びの色を洩し給ひしのみにて一語をだも發し給はず、子爵は、金枝玉葉の御身を以て、斯る軍務に服し給ふことの貴さよと、覺えず涙を流して拜辭せられたと申すことです。此等の事蹟を拜するに於ても、吾々は一層精進の大力を發揮せねばなりませぬ。

佛德一分の莊嚴

『なせばなる爲さねばならぬ成る事の成らぬは己が爲さぬなりけり』で、勇猛精進の力は、如何なる難事なりとも多くは爲し遂げられること、少水の常に流れて能く石を穿つに似たり。之に反して、若し此の力なかりせば、長者の爲めに枝を折ることすら出來ぬものである。釋尊は勇猛精進の力に依て成道せられ、孔夫子は勇猛精進の力に依りて大聖の德を備へられた。勇猛精進は實に佛の母、聖者の源である。故森田悟由禪師は、說教の終りに能く大强精進勇猛佛の名號を唱へられた。

名古屋驛の驛長飯田義一君は勇猛精進講を設け躬自ら勇猛精進主義を實行し、又、時々講演會を開きて驛員の修養に努め、又、年々驛員にして、職に斃れ、又は奉職中病死せし精靈の爲めに大追弔會を修し、同時に紀念講演會を開いて居られる。同驛貴賓室には勇猛精進と書せる扁額を掲げてある。猶ほ同君の御話しに、『驛員は二十四時間、卽ち一晝夜の間職務に勤勞して交代するのであるが、時としては更に數時

れた人を睨みつける樣では、その日は精進行に於て多くは落第を免れぬ。

支那禪門の高僧たる慈明禪師が修行せられし頃、谷泉・瑯琊と三人で汾陽禪師に參じた。汾陽は河東に住せられた。同地は特別に寒さが强い。日本ならば信州の高地か北海道といふ樣な處である。一般の雲衲は殆ど堪へ兼ねて逃げ出す者が多かつた。唯だ慈明のみあつて、晝夜間斷なく坐禪をして精進せられ、睡むくなると錐を把て股を刺し、殆ど不眠で修行を勵み、遂に汾陽の法を嗣で天下に英名を揚げられたといふ。彼の有名なる白隱禪師は、深く此の事を感じて大に苦修練行を試み、遂に天下の宗匠となられたのである。

昔は王侯貴人といへば、大概は安逸の生活をしたものであるが、今日は畏れ多くも、至尊陛下に於かせられても、吾々の想像も及ばぬ程の御勤勉であらせられる。皇族殿下も亦御同樣で、軍職に服せらるゝ時の如きは、普通の將校方と同樣なる勤務に服せらるゝのみならず、寧ろ普通人以上に御精勤遊ばされて、自から範を天下に御示し給はると承つて居る。

明治十五年の冬、我が國の某子爵が歐洲に使節として渡航の折、亞歷山港に寄航せしに、英國の軍艦が十餘艘碇泊し、中のビクトリア號に有栖川威仁親王が御乘込海事御練習と承はり、拜謁を願はれけるに、殿下は只今御服務中との事なれば、時間の來る迄艦内を參觀することゝし、艦長に導かれて階を降り、船底石炭庫の前に至りしに、薄暗い處に一人の番衞が居つた。近づいて之を見しに、是れなん畏れ多くも殿

から産み出される。

又、吾々の身は眇たる滄海の一粟で、餘りに少さい、餘りに値打がなさ過ぎる。そこで知己を求め朋友を求め、而して自己を擴大しやうとするのである。此の希望が段々に大きくなれば、後には釋尊の所謂『今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり』といふ大知見と大慈悲とが生み出されるのである。既に未來の生活を認むれば、吾は決して死滅には歸せぬ。既に一切衆生は皆是れ吾が子と念ずれば、吾は決して小さな身では無い。此の確信を以てすれば吾々の作すべき事は無限であつて、吾々の活動も亦た無邊であらねばならぬ。故に精進は無期限で、修養も亦無邊際である。されば佛菩薩は四弘の誓願を發して大活動を起される。即ち『衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成』である。全宇宙を以て活動の範圍となし、未來永遠に渉りて活動の期限を定む、實に大なる活動ではありませんか。

此の大精神を以て日々の行事に當れば、政治家たるも教育家たるも、工業に就くも商業に從ふも、乃至、百姓をするのも、勞働に從ふのも、馬を曳くのも、車を推すのも、皆な神聖なる道德的精神となるものであります。故に、眞に精進に志ざす人は、樂んで働き、喜んで勵み、快よく勤め、氣嫌好く進まねばならぬ。小兒などでも、眠い處を搖ぶり起されても、蒲團の上に立ちし時、嬉しさうにニツコリと笑顏するが宜い。此の笑顏がその日一日の活動を促すべき好箇の御祈禱となるものである。眠いからとて、起して呉

ば或る意味に於て面白い語であるが、文字通りに見ると大なる誤解を來すことになる。今日は『有事是れ貴人』を格言として勵まねばならぬ。

如何に位高く財富むとも、徒らに祖先や父母の餘德を承けて衣食し、唯だ其の身分に安んじて、富に任せて贅澤な振舞をなし、位地に誇りて傲慢なる態度をなすが如きは、之を道德上より觀たならば、實に人としての價値なきものと言はねばならぬ。世には青年の士女にして老後の樂を望んで働く者もある。是の如き人は勉强も修養も一身の樂を得るの手段として居るのである。學問も信仰も、矢張り一分の快樂を求むるの方法と心得て居るのである。故に此等の人は相當の年輩に達し、相當の成功を得、どうにか樂の出來る身になると、忽ちにして學問を抛ち修養を怠たり、唯だ一人で太平樂をならべて居るものである。此等の種類の人は決して少なくは無いとやら聞て居る。洵に憐れむべきことであります。

人間といふ者はその天性に於て、自己の延長とか自己の擴大とかいふを望むものである。人間僅か五十年、人生七十古來稀れなり、考へて見ると人の一代も極めて果敢ないものである。些子の理想ある者は、此の果敢ない人生を以て滿足することは出來ぬ。そこで長命長壽を欲する樣になる。しかし、長命を欲しても人生百に滿たず、百歲の壽を保つといふ人は曉天の星よりも稀れである。そこで自己を延長する方法として子孫の播殖を望む。卽ち自己の生命を子孫として永久に傳ふるのである。併し是れのみではなにやら物足らぬ心地がする。是に於てか未來の生活を豫想する樣になる。宗教的安心を求むるの動機は此處

勇猛精進は實に吾々の原動力である。內に勇猛の力を蓄へて外に精神の力を現はす時は、必ず一切事に於て成功することを得るものである。釋尊は菩薩の六度と稱する六大行の第四に、精進波羅密を御擧げなされた。天然の釋迦なく自然の彌勒なし、聖賢となり佛祖となる、皆な精進の產出する所である。十誦律の序には『諸の大德、道の爲めの故に、一心に勤めて精進す、所以者何、諸佛は一心に勤め、精進したまふが故に阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり、何に況や餘の善道の法をや』とある。

精進とは勤勉といふに同じ、即ち勉强することである。菩薩本行經には懈怠を誡められて、『夫れ懈怠は衆行の累なり、在家懈怠すれば衣食供せず、產業擧らず、出家懈怠すれば生死の苦を出離する能はず』とある。雪山童子は『諸行無常、是生滅法、生滅々已寂滅爲樂』といへる四句の偈文を敎へて貰はんが爲めに、その身を羅刹に施さんとせられた。支那禪門の二祖大師は、達磨大師の敎へを請はんが爲めに、利劍を把て左の臂を斷ちて決心を示されたのである。故に吾々は此の一生涯を通じて、身力の及ぶ限り勤勞を悋まざる樣致すが宜い。年老たりと雖も怠つてはならぬ。成功せしとて放逸に流れてはならぬ。

フランクリンは勤勉の君子であつた。故に彼は『勤勉は負債を償還し失望は負債を增加す』といひ、『怠惰は銹の如し、使用せざる鍵は銹によりて腐り、使用する鍵は光輝を放つ』ともいうてある。思ふに、今日は活動の世界であります。活動の貧弱なる國民を有する國家は亡びる。活動の豐富なる國民に依て進む國家は榮へます。然るに、人心の弱點として、動もすれば安逸を貪ぼりたがる。『無事是れ貴人』と

識を有する者が、一家の平和を保つこと能はずして常に紛擾を醸したりするの類は、多くは感情の一偏に走りて思慮を盡すことが行き届かぬより生ずるものである。

前にも申した腹を立つ人の如きも、腹を立たねばならぬ場合に腹を立つならば宜いが、つまらぬ事に腹を立ちたがる。そうして、自分も不快を感じ他人にも迷惑を與へる、結局、一擧兩損である。身分ある家の主人や主婦に此の種の人が隨分多い。半ばは我が儘より、半ばは習癖から出づる。熟々考へて見たならば、實に無益の癇癪にて、結局は罪を造るに過ぎぬ。心すべきことである。是れ畢竟、思慮に淺果敢なる處より、自己に制せらるゝの罪である。

以上の三德を內に守る時は、外に向ては自から溫和となり愛敬となるから、自他共に愉快に氣持好く交際することが出來る。人といふものは共同生活で、決して孤立の出來るものでは無い。故に親子でも、兄弟でも、夫婦でも、主從でも、朋友でも、相互に溫和の德を修め愛敬好くしてゆけば、之を小にしては一家一鄉の平和となり、之を大にして社會・國家の安寧となり、幸福も快樂も皆な之より生み出さるるに相違ない。眞正なる勇猛の德は、必ず是の如くならねばならぬ。是れ則ち精神の力の最も優良なるものであります。

眞の精進

己が自己を拋擲する、卽ち無我の三昧に住する事である。

西哲の語にも『克己を敎へよ、之を行ふを愉快とせよ、然らば汝は曾て漠然たる空想者の腦裏より發せる運命よりも、一層高尙なる運命を世界の爲めに造る事を得ん』又『克己は勝利の最大なり』等とある。自己を拋擲するは克己の最も優力なるものである。釋尊は、『汝等當に能く心を制すべし』と仰せられた。古今の忠臣孝子、仁人義士の如きは皆な己れを忘れて道に殉じたのである。『お腹が空いても饑じう無い』の一語は、全く自己を放下したる消息を漏らしたものである。お腹が空けば饑じいのは必然の事實であるが、君の御爲め國の爲めといふ時に、その饑じいといふ自己を打捨てゝ了ふのである。

世に精神の力ほど大なるものは無い。精神の力は事實にも超越する妙用を現はすものです。忍耐の力といふものは此の精神力を保護する所の德である。逆境に遇うても怒らず、恨みず、憎まず、妬まず、而して如何なる難局に出合うても敢然として進み行く、是れ亦自己以上の自己が實現したのであります。此の忍耐は、吾々が平生に於て養はねばならぬ大切な力であります。

次に思慮を殫すこと、是れは殊に緊要事である。如何に膽力を練りても、思慮を殫すの心得が無ければ、決して眞の大勇とは申されぬ、思慮を殫すといふは、深思熟考の德が萬事の上に現はれて、如何なる場合にも無謀の振舞に渉らぬことである。世の中が進歩するに從がひ人々の神經が過敏になり、神經質になり、動もすれば感情にのみ奔りたがる風がある。或は相當の資格あるものが、自殺を企てたり、立派な知

後漢の楊震が東萊の太守となり、赴任の途中、昌邑に宿りし時、曾て世話をしたことのある昌邑の令王密が、夜間竊かに金十斤を携へて震に呈した。震は潔白な人であるから、甚だ不興にて『予は貴殿を知て居るのに貴殿は予を知らないのか』というた。時に王密は『已に日も暮れて誰も知る者が無いから、拙者の寸志御受納下されよ』と申した。震は色を作して『天知る、地知る、我知る、子知る、然るに知る者なしとは何ぞや』というて呵つたので、王密は赤面して立去つたとは有名な話しである。經の中に『人の作す所の善惡は之を知る者四あり、一には天之を知り、二には地之を知り、三には傍人之を知り、四には吾意之を知る』とある。楊震の四知は、或は此の經意に倣うたものかも知れぬ。此等は義理を辨へる人の行なひである。

次に膽力を練ること、是れ洵に大切である。元の大兵を筑紫の沖にて鏖殺したといふ古今の豪傑北條時宗公も、青年の時代には極めて臆病であつたと見える。公は之を憂ひ、禪學を修めて膽力を練らんと欲し、支那より祖元禪師を請じて師事せられた。始て祖元禪師に相見の時、公は『人生の憂患、怯弱を以て最なりとす、如何してか脫することを得ん』と問はれた。鎌倉幕府の頭首として、政權も兵馬の權も掌握して居るのであるから、臆病では致し方が無い。其の時、禪師は『脫すること最も易し、怯弱の來處を閉づべし』臆病の入口を遮斷せよといふ奇拔な答へであつた。公は一向に領解が出來ず、乃ち問て曰く『怯弱何れよりか來る』すると禪師は『時宗より來る、來日より時宗を放擲し來れ』というて答へられた。自

軍人の御勅諭を拜するに『軍人は武勇を尙ぶべし』といへる條下に『夫れ武勇は我國にては古よりも貴べる所なれば、我國の臣民たらんものは武勇なくては叶ふまじ』と仰せられ、更に武勇の種類を分けて『武勇には大勇あり小勇ありて同からず、血氣にはやり粗暴の振舞などせんは武勇とは謂ひ難し、軍人たらん者は常に能く義理を辨へ、能く膽力を練り、思慮を殫して事を謀るべし、小敵たりとも侮らず大敵なりとも懼れず、己が武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれ、されば武勇を尙ぶ者常々人に接するには溫和を第一とし、諸人の愛敬を得むと心懸よ、由なき勇を好みて猛威を振ひたらば、果は世人之を忌嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ、心すべきことにこそ』と御諭し給はれてある。此の御諭しの如きは軍人のみならず、國民一般が暫時も忘るべからざる貴き御敎へである。

吾々が眞の勇猛を得んと欲せば、此の御諭を遵守して內と外とに於て修養せねばならぬ。卽ち內には第一に義理を辨へること、第二に膽力を練ること、第三に思慮を殫すこと、此の三者が內的要素であります。先づ第一には能く義理を辨へ、常に正義を履みて不正義に遠かる樣にせねばならぬ。『義を見て爲ざるは勇なきなり』と論語にあるが、不義を見て之を爲すも決して眞の勇者とは申されぬ。昔の俠客傳などを見ると、一諾千鈞、約を重んじ勇に誇り、一たび引受けたる事は、よしや不正不條理でも之をやり徹すといふ樣な風がある。故に、其の勇氣は頗る賞むべき價ありとするも、其の人格は依然として劣等たるを免れぬ。

勇猛精進

眞の勇猛

凡そ一身一家を修め、一事一行を爲すには、必ず力強い精神力が無ければならぬ。此の精神力が無い時は、何事をするにも躊躇逡巡して、之を斷行することが出來ず、又、一たび從事しても、少く頓挫する處があれば直ちに恐縮して了つたり、又、他人より強て賴まれたり推しつけられたりすると、惡いと知りながらも之を拒絶することが出來なんだりする。是れ皆な勇猛の氣を缺いて居る爲めである。故に、苟も、精神的にも經濟的にも眞に能く獨立自主の人とならんと欲せば、是非とも勇猛の志氣を養なはねばならぬ。況てや吾々日本國民が、世界を相手として、國家の慶運を發展し、東洋第一の文明國たる實蹟を彰はさんには、國民たる吾々の精神力が薄弱ではならぬ。併し、勇猛といふことを單に氣強いことのみと思うて、横紙破りの樣なことをしたり、濫りに腕力などを振舞したりする樣では、狂暴的勇猛といふので、野蠻性を脱することは出來ぬ。

なる。併し、吾々凡夫の常習として却々に誠實慈悲の徳を成すことは出來惡いものである。故に、虚の修養にも實の修養にも信心を發得することが必要です。

信心は精神上に於ける最も第一の力である。信心の本は誠である。誠の心を以て誠の道を求め、誠の結晶とも謂ふべき、御佛の慈光を認め、而して此の慈光を吾が心中に感德し、我が眞心と佛の大慈悲心とが一體になるのである。此の時、大歡喜心を發得し、恰も重荷を卸した樣な心地となり、常に佛と與に坐臥經行して暫時も相離れることの無きことを信ずるのである。我は既に佛の御手に救はれしと思へば、今生、後世の事毫も心に懸るに及ばぬ。佛は常に我が身を離れたまはずと思へば、淺ましき心や道ならぬ行ひは出來ませぬ。

佛の大解脱を喜ぶ時、浮世の束縛は更に我が心を苦むるに足らず、佛の大慈悲を念ずる時、些々たる我見我慢に拘泥せぬ。故に、妄想煩惱は之を除かんとせずして自づから消除し、誠實慈悲の徳は之を求めずして自づから顯現する。世に是れ程の滿足と安心はありませぬ。只だ此の滿足心は娑婆を化して直ちに淨土と爲し、只だ此の大安心は幻身を轉じて直ちに佛身と爲す。如何に嬉しき勝緣ではありませんか。

依て衲は健全なる信仰心を發得して、虚中存實の效を現はし、誠實慈悲の徳を涵養して、人々箇々、佛陀一分の妙德を此の身心の上に實現せられんことを希望して止まないのである。

を與へんとの情と、彼の苦惱束縛を濟はんとの情が起る。是れ即ち慈悲である。故に、此の慈悲が君主に對する時は忠となつて現はれ、父母に對する時は孝となつて現はれる。其の他に對しては、信義となり、慈善となり、博愛となつて現はれる。此の慈悲が商業上に現はれゝば商業道德を發揮するに依て、天の道に叶ひ神佛の心に合するから、自づと信用を得て商業の繁榮を來すのである。彼の不正不信の商法などは斷じて出來ぬやうになる。

尾州知多郡小鈴谷村の富豪盛田久左衛門氏の如きは、最も信仰と道義の觀念に厚き人である。故に、その舗憲、即ち店則なるものが、誠實と慈悲とを以て骨子として作成されて居る。即ち

> 常に忠實を旨とし、諸事必ず正直なるべし。客に接して慇懃を盡し、信を先にして利を後にし、業を樂みて不平を抱かず、難き業にも屈する勿れ、眞心を傾けて主命を守り、慈愛を捧げて後進を遇せよ。品性を養うて操行を愼み、愛敬ありて言葉を叮嚀にせよ。釐毛の商ひも疎略にせず、商品は賣らずとも親切を賣れ。朋輩互に和合を守り、何事も堪忍して腹を立てざれ。職業に貴賤なし唯だ心術に依る。商標と共に店の正直を廣めよ。健康と忍耐とは家を興すの基、勤勉と儉約とは福を招くの門、分に安んずるは進歩の土臺、忠孝の德も平生の務めと成る。

といふのである。此等の舗憲も中心より之を守る時は私慾の情自づから空虚となり、道德の實は自づから全身に充ち渉る。即ち虚中に實を存することを得るに依て、天祐も神助も加はり佛菩薩の冥護する所と

し、不捨一法不受一塵なり、天に在ては神、萬物に在ては靈、人に在ては眞心なり、萬物の靈、人の心、清明なる時は則ち神なり』云々というてある。要するに神の心は誠である。吾々も此の誠を存すれば必ず神の心に叶ひ、神の德に合するのである。維摩經には『直心是れ道場』とありて、佛の道も亦誠直を以て本と爲す、されば誠實は實に神の御心であると同時に佛の御德であることを忘れてはなりませぬ。

道徳の源泉

前に述べたる誠實の德が身口の上に作用を起すと慈悲となる。此の慈悲心の發動こそ道德の源泉である。慈悲とは愛情の道德的活動である。吾々は其の天性として愛情を有して居る。父母の其の子を愛する、子の其の父母を慕ふ、夫婦相互の愛念皆な天性の妙用である。唯だ妄想私慾が混入する所から、色々の煩惱を起し、種々の罪惡をも造るのである。水といふものは其の性本より清淨にして能く物を潤ほし物を養ふ。されど、若し泥や塵芥が混入すると却て物を汚し、物を損ずるに至る。手もつけられぬ汚ない泥水でも、其の泥さへ取り去れば、水は依然として清淨の德を顯はします。吾々の本性も亦是の如く、物慾の混入に依りて凡夫とも迷黨ともなる。妄想を除却すれば本心は自づと其の德を發するものである。その所發の德が慈悲となつて現はれる。

慈は與樂の義、悲は拔苦の義であるから、吾々が他人に接し衆生に對する時、忽然として彼に安樂幸福

ある。誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり。家庭の平和も社會の發達も總て誠實本位で無ければ、到底、成功は不可能である。商業でも工業でも政治も經濟も此の誠實が無つたならば、遂に失敗に歸すべきは理の當然である。

先帝（明治天皇）は常に誠實を以て百行の基礎となしたまひ、軍人勅諭の如きも、忠節・禮義・武勇・信義・質素の五ヶ條を列擧して『軍人の精神なるぞ』と仰せられ、更に『一の誠心こそ五ヶ條の精神なるぞ』と御諭したまうてある。御製にも『人はたゞ誠の道を守らなむ高きいやしき科はありとも』、『千早振神の心に叶ふらむ我が國民の盡す誠は』等の御示しがあります。此の誠は利慾に走つたり、虚名を貪つたり、懶惰に耽つたりすると忽ちに崩れ易い。故に先づ其の妄念を拂ひ除ける修養を積まねばならぬ。是れ即ち虚心の法である。一たび妄念を斷ずれば、天の道たる誠は自然に本心の上にその光輝を放つものである。前にもいうた通り、吾々は修養の第一歩として、忠節なり、孝行なり、堪忍なり、正直なり、何にか一の修養的中心を定め、是れだけは必ず之を確守するといふものが無ければならぬが、何れの德目を中心とするも、必ずや誠實の道を土臺とせねばなりませぬ。

我が國は神の御國である。我が國の神は皇室の御祖先、及び吾々臣民の祖先であるから、彼の西洋に於て宗教を主體として禮拜する神とは全然異なつて居る。此の神の御經營時代を神代といふ、忌部正通は曾て日本書紀の神代の卷を釋して『神とは嘉牟嘉美なり、略して嘉美といふ、神慮は明鏡の萬物を照すが如

を守りて、少しも昧ますことの無いのが誠實の體である。而して、事を行ふにも人に接するにも、常に眞心を存して一點も噓僞りの無いのが誠實の相である。

大集經に寶女童子が『實とは何ぞや』と佛に問ひ奉りし時『實に三あり、佛を誑かさると、己身を誑かさると、衆生を誑かさるとである』と御示し下された。此の中、佛を誑かぬことと、己身、卽ち己れを欺かぬこととが、誠實の體で、內に守る所あるをいふ。衆生を誑かぬといふは誠實の相で、外に眞實を示すことである。此の誠實の德に缺くる所があると、言行一致せず、信義行なはれず、虛僞巧詐至らざる所なきに至る。

衲は本年夏の滿洲巡錫の折、哈爾賓に至りし時、彼地に居留する我が同胞が衲に向つて『此の地は內地人の數僅かに五六千人に過ぎず、露國人は五萬餘、支那人は十五萬餘である。故に吾々日本人は中々彼等と拮抗することは出來ぬ。今後は工場を起し工業を盛んにして我が國民の實力を扶殖する積りである。故に我が同胞の內地より移住することは切望するが、但だ困ることは、吾々同胞が此の地に來りて、例の粗製濫造品を陳列して巧みに高く賣り付け、豫定の利益を占取すると、何時の間にか逃げて了ふ。跡には不信用と不正直といふ惡い評判を遺して往く者がある。之れが爲めに居留民の蒙むる迷惑と損害とは實に一通りでは無い。我が國人が今後世界的に發展せんと欲せば、萬事に就て絕對誠實主義で無ければならぬ。吾々が時々此の種の迷惑を感じて居ることを、我が內地の同胞に訴へて貰ひたし』と言はれたことが

又、勇氣に就ても矢張同樣で、若し慾念を挾む時は決して眞勇を現はすことは出來ぬ。孔夫子は曾て『吾れ未だ剛者を見ず』といはれた。剛者とは意志の剛健なる者で、所謂精神的勇者のことである。或人對へて魯の申棖などは剛者ならずやと申せしに、孔夫子は『棖は慾あり焉んぞ剛なるを得ん』と仰せられた。即ち申棖は、私慾があるから剛者とはせられぬ。何故なれば私慾ある者は慾に牽かれて義を忘るゝからである。又、孔夫子は『仁者は必ず勇あり、勇者必ずしも仁あらず』と言はれた。又、子路が孔夫子に『君子勇を尙ぶや』と問ひし時、『君子は義を以て上と爲す、君子勇あれども義なければ亂を爲す、小人勇あれども、義なければ盜を爲す』と示された。殊に軍人に下したまた明治天皇の御勅諭には『軍人たらん者は常に能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るべし云々』と仰せられ、更に『武勇を尙ぶ者は常々人に接するには溫和を第一とし、諸人の愛敬を得むと心懸けよ云々』と御諭したまうてある。是の如き大勇は正しく私慾を忘れて公道に順ふ者で無ければ出來ぬ。此の私慾を解脫する、是を虛心の人といふのである。虛心の人にして始て三德の實を得る。是れ自然の理であります。

神の心佛の德

實を養ふの道には種々の方法があれども、先づ以て誠實と慈悲とを以て主眼と爲すべきである。誠實とは單なる正直といふことでは無い。内に守る所があつて、外、欺く所なきの謂である。即ち中心に正しき道

ことを心懸くるが宜い。

乃木將軍の如きは極めて陰德主義を執られた樣に聞て居る。將軍一家に於ける一ヶ月間の生活費は約七十圓であつたそうな。將軍歿後の遺產は三千圓に過ぎなかつたのである。將軍は平素其の身を節して公共事業や慈善事業、又、癈兵や鰥寡孤獨の者に施された。此の場合にも自ら行て惠まれ、又は書生を遣はして與へられ、而して名を出すことを口留せらるゝのが常であつた。

伊豆凡夫將軍の談に依ると、將軍の日常生活は質素を極め、口中の掃除は指頭に鹽をつけて磨き、寢具は必ず自ら始末し、食事は一汁一菜で、而も家內中平等であつた。那須野より稗を取寄せて稗飯を時々食せられた。人あり『將軍は稗がお好であるや』と問へば『否や好では無い、然し人間は粗食に慣れて置く必要がある』と答へられた。煙草は『朝日』のみを用ゐられ、眼鏡を掛けらるゝが何れも鐵緣、時計は銀側の大形、靴は左右同型であつた。靜子夫人の如き、不斷は木綿物、外に銘仙を一二著所持せられた。夫人の晴着は實に銘仙であつた。旅順攻圍軍中に蚊軍多き爲めに將軍の宿舍には蚊帳の備へありしも、斷じて之を用ゐずして『第一線の將卒の艱苦を思へば迚も吊られぬ、部下の將校達は兎に角、司令官たる予の何とて吊らるべき』と仰せられ、極寒には將校が火鉢を擁する程なるに、將軍は火の氣の無い一室に在りて『我れ獨り暖を取るべきかは』と云はれたとある。此等は全く神聖なる仁德の發露であつて、其の精神內には一點の私慾を留めぬ。是を神心とも佛心ともいふのである。

自己の慾望を先だてずして、此の全身心を以て道を委るのが虚心である。佛敎では是を無我と謂うて居る。眞に能く虚心なる者で無ければ實德を顯はすことは出來ぬ。智・仁・勇の三德は最も大切なる實德の標準であるが、苟くも自己の欲望が加はる時は、三德の質ありと雖も三德の實蹟を收め得られるものではない。

程子は『今の人、書を讀むことを會せず、論語を讀むが如き、未だ讀まざる時是れ此等の人、讀み了て後又只だ是れ此等の人なるは便ち是れ曾て讀まざるなり』というた。卽ち論語は修身道德の書である。然るに、之を讀むも毫も實行を期せざる時は、讀まない以前と少しも異ならぬ『此等の人』とは平凡並々といふことである。所謂『論語讀みの論語知らず』となる。

世には學問はあるが金庫の番はさせられぬと言はれる者がある。又、利口な人だが油斷は出來ぬと言はれる者もある。此等は皆な自己の欲望が主となつて、智識を濫用するの弊である。又、仁の道とても同樣で、如何に慈善心に富み恩惠を施すことに努むるが如く見えても、自己心中に一分の野心存すれば、その善は僞善となり其の行も亦僞行となる。

達磨大師は梁の武帝に相見の時、武帝が『朕は卽位以來寺を建て僧を度すること無量なり、知らず功德多少ぞ』と問はれし時『無功德』と喝破せられた。是れ畢竟、武帝の信仰には利己的欲望の蟠まり居ることを誡められたのである。兎角、凡夫は名と利との爲めに使役せらるゝ癖があるから、勉めて陰德を積む

氏の母は能世子と稱し、同村星名氏の女、十五歳の時、母に別れたるが、その母臨終の折、金一兩を與へて『此の御金は大事の場合に非ざれば用ゐまじきぞ』と仰せられにき。能世子は深く此の語を服膺し、舍兄に托して利殖を圖り、五十一年にして四十五圓となつた。能世子は終りに臨んで之を氏に與へ『何にか記念になる物を調へよ』との遺囑であつた。氏は此の貴重なる賜を使用することに苦辛し、遂に杉苗九千五百本、落葉松苗一千五百本を購入して二町歩の地に造林せられた。氏の息貞治郎氏、帝國大學を卒業の後、農商務省に仕官して俊秀の譽れ高かりしが、不幸にも官務洋行中に病死せられた。後、知友代表者美濃部達吉博士が特に來りて靈前に備へたる賻典四百五十圓を前記の山林に併せて財團を組織し、以て育英の事業に寄附せられたり。

　其の他、氏は尋常、貧困の患者に對しては、施療・施藥し、時としては米・鹽・牛乳等迄も與へて患者を慰諭することも屢次ある。其の他、善行算するに暇あらず、洵に稀有の行事といふべきである。

　氏の如きは、青年の時は心を師として居りしが、一旦慈母の恩愛に感激してより、飜然として一大懺悔の法門を打開し、爾來全く心の師となりて自己敎育に努力せられ、終に虚心的修養の美蹟を擧げたのである。

虚なる者にして始て實なり

碁・將棋などにも耽り、母親にも一方ならず心配を懸けたことであつたが、或年の秋、激烈なる僂痲窒斯病に罹り、全然身體の自由を失つたのである。慈愛深き母の心盡しは如何許り、醫療看護は言ふに及ばず、神に祈り佛に禱り己れを忘れて氏の回春を懇願せられた。その愛念空しからず、翌年の四月に至り獨りで起居をする迄に至つた。母は之を視て喜びの餘り夢中になつて氏を抱き締め、聲を揚げて嬉し泣きに泣かれた。其の時、母の慈眼より溢れ出たる熱き涙が氏の身にかゝりけるに、氏は忽ちに骨身に沁み渡るが如くに感じ、是より報恩の念を發し、專ら養生に注意し、學業を勵み、以て今日の素地をなすに至れり。腸窒扶斯に罹り生死の間を往來せしが三十六歳、幸にして全快することを得、それより以來壯健の身となり、七十六歳の今日まで間斷なく活動を續け居れり。

氏は壯年にして東京に遊學して醫學を修め、爾來專ら醫業に從事せられしが、是れ皆な慈母の心盡しに依るものにありしならん。氏の父親は儒學を修められければ、佛敎には御縁薄かりしも、母は淨土眞宗の家に生れたれば自然に信仰の念厚かりき。されど、寺塔に參詣することも叶はざりしかば、氏は母の心を慰めんが爲めに、時々眞宗の御文章を讀んで御聞かせをした。それが因縁となり、自然に信仰を發するに至れり。後に護法資治論を讀みて大に感ずる所あり、益々眞面目に佛敎を翫味し、遂に熱烈なる信仰家となつたのである。氏は常に『予は全く慈母の御蔭に依りて入信することを得たり』というて感謝の涙に咽んで居られる。

心の師と作れ

涅槃經には『心の師と作るを願ひて心を師とせざれ』と仰せられた。此の心とは妄心のことである。吾吾は常に自己の心を敎養することに努めねばならぬ。心といふものは存外に我が儘なものである。阿含正行經に、佛陀は『人は常に目の爲に欺かれ、耳の爲に欺かれ、鼻の爲に欺かれ、口の爲に欺かれ、身の爲に欺かる』と仰せられた。『盜人を捕へて見れば我が子なり』吾々は常に耳、目、鼻、口等の爲めに欺かれて種々の罪惡を造るが、その耳、目、鼻、口等は色聲香味觸法の六境に依て惡化し去るのである。されば、吾々はその耳、目、鼻、口を制御して惡道に陷いらぬ樣にせねばならぬ。是れ卽ち修身の道である。併し、御互の精神は、修養の足らざる內は極めて柔弱なものであつて、中々自己を制御するの力が乏しいからして、佛陀の慈敎、聖賢の訓戒に依て自己敎養の標準を定めねばならぬ。是れ見佛聞法の要ある所以である。

新潟縣中魚沼郡中條村に杉本周德といへる醫師がある。衲が舊來の知音にして、佛敎の篤信家で、本年七十六歲、老て益々壯んである。氏は衆に秀でたる愛國盡忠の士で、且つ濟生慈善の念深く、世に稀れなる仁者である。衲は本年の秋に初めて氏が發信の動機を聞き、今更の如く有り難く感じたことである。

氏は二十歲頃迄は身體怯弱にして、到底、長壽を保つべき見込の無い處から自暴自棄して酒・煙草やら

振りが良くなかつたりしても、決して花や樹を咎めず、一々自己に反省して己れの非を顧みることとなる、其處に偉大なる修養上の教訓がある様に思はれる、人に對してはどうもそうは行かぬ、家内でも書生でも氣に入らぬことがあると、專ら彼れのみを責めんとして、自己に反省するといふことが容易に出來ぬ』と言はれた。其の時納は『然らば、世に處して人に對すること猶ほ花木に對するが如くならば更に妙ならずや』と申せしに、氏は『それならば實に結構であるが、吾輩は未だ其の地に達することの出來ぬを遺憾とする』と言はれました。是れ實に正直なる自白であらうと思ふ。

吾々御互も亦た同樣であるに依て、尋常に反省の修養を繰り回すことが肝要である。それには虛心坦懷、卽ち一心を空虛にして玲瓏潔白ならしむるを要す。若し能く虛心の位地に達すれば、其の時、本心の光明が輝き渡つて全身心に本然の道德が充つるものである。是れを實といふのである。心虛なる時は德性が發揮され、心實なる時は物欲の爲めに侵されぬものである。

併し、實際の修養を爲すには、先づ以て實行の中心を定むるが宜い。德川家康公は『忍』の一字を以て中心となし、司馬溫公は劉忠定をして『誠』の一字を中心となさしめられた。忠節・孝道・正直・堪忍・敬直・質實、何れなりとも一の中心を定めて、徹頭徹尾、之を確守するの覺悟が無ければならぬ。一行一切行、一得一切得、道德上自己の精神を堅く守る所の中心があれば、それが主體となつて、修養熟練の進むに從つて、自づと一切の德を聚むることの出來るものである。

煩惱妄想といふものは、皆な客塵というて、外界より侵入し來りたるものを緣じて、樣々なる妄分別を發すのである。故に、眼に對する色、耳に對する聲、鼻に對する香、舌に對する味、身に對する觸、意に對する法、是を六塵と稱して、何れも吾々の精神を穢す所の相手である。古人も『一心生ぜざれば萬法咎なし』と言うてあるが、色聲香味觸法の六境も强ち吾々の心を亂す物には非されども、無始劫來の煩惱の種子が、自から彼れの爲めに穢さるゝのである。而して、吾々凡夫は自分を穢す所の六塵の境を愛念して、此方より頻りに貪り求めて止まないから、益々束縛の度を高めることとなる。

故に、吾々は修養の第一歩として、前方に走り出す所の心を引留めて自己に反省することが大切である。反省して觀れば吾々の心には恥かしい事が多いものである。『人心鏡にうつるものならばさぞや姿の醜くかるらん』とは、慥かに人心に對する一面の正しき觀察です。孔夫子の弟子の曾子は有名なる賢人であるが、猶ほ『吾れ日に三たび吾が身を省みる、人の爲めに謀て而して忠ならざるか、朋友と交りて而して信あらざるか、傳へて習はざるか』と言はれました。卽ち、人の爲めに事を謀るに、我身の事をする如く衷心を盡して居るのであらうか、朋達と交りて慥かに約を守つて居るであらうか、師より傳はりし事を習熟して其の敎へを空しくせぬであらうか、と振り回つて見られたのである。

只今伊豆の修善寺村に住居せる陸軍少將杉原透君は衲の知人だが、先般面會せし時、氏は『私は近頃盆栽を樂みとして居る、盆栽の手入れは、非常なる運動なるのみならず、若し花の色が惡かつたり枝

虚中存實

實行の中心を定めよ

個人の向上も、社會の進運も、其の根柢は精神の修養に在るのである。精神活動の狀態は所謂千變萬化であるから、佛教には八萬四千の煩惱ありというてある。此の煩惱を解脫するには八萬四千の菩提を要する譯であるから、同一佛教の中でも、その說く所、教ふる所が千差萬別である。併し、一言にしていへば、修養の方法は虛と實との二つに歸するであらうと思ふ。故に、菜根譚にも『心は虛ならざるべからず、虛なれば則ち義理來り居る、心は實ならざるべからず、實なれば則ち物欲容らず』というてある。

虛とは空虛で、心を空することである。心を空しくするとは、精神界の妄想や邪念を一掃することである。吾々凡夫の常として、其の精神内には何時も妄想や邪念が混入して居て、良心の明を昧まし、道念の發動を妨げてならぬ。塵芥だらけの座敷を掃除するには、一旦は何もかも悉く取片付ける必要あるが如く、吾々も無心無我の狀態になるべき修養が大切である。

按ずるに、

寶光菩薩は閻浮檀金佛の所に於て、二十億歳終に惡心若くは利養心を生ぜず、又、未だ曾て婬怒癡心を發起せず、無量意菩薩・無量力菩薩は、四萬歳中終に睡眠せず、常に腹を滿たして食せず、亦、臥若くは坐、若くは經行せず、法語比丘は二萬年中睡眠あること無し、然る後、上、虚空に昇りて結跏趺坐、滿一千年動ぜず搖ぜず、法喜を食と爲し比智を獲得し、樂說無礙なり

とある。此等の因緣は單に神話の如きも、仔細に觀じ來れば、這裡無限の教訓あるを知るであらう。澤庵和尚の玲瓏隨筆に、

何事もをづるな〳〵、をづれば仕損ふぞ、をづる平生のこと、場へいでてはをづる、をづるなをづるな、溝をばづんと飛べ、危しと思へば、はまるぞ、

とある。此の志氣だにあらば、幾百千歳も不動不退なること古佛の如くなることを得よう。唯だ此の志氣なるもの無きが爲に、自ら警むること弱く、自ら信ずること淺く、自ら重んずること薄し、故に自得の功現はれ難し、玆に於てか吾人は相共に志氣を策振して四自の訓を習はむことを望む。

り、小節に勇にして大節に弱く、言舌に剛にして實行に柔なるは、人の免れ易からざる所なるも、是れ畢竟自得せざるの爲である。

余、幼年の時、環溪禪師に東京に侍す、茶を點ずる次、禪師示して曰く『聞く、汝は將に錫を駒込の宗黌に掛けむとすと、是れ甚だ好し、されど誤つて學問を以て飯を喫せむと思ふこと勿れ、宜しく學問を以て道體を養ふの粥飯とせよ』と、余、感銘猶ほ懷に忘れず。檗門の俊傑杭州楚南和尚の垂示に、

諸子、設使、三世諸佛を解し得て缾に水を注ぐが如く、及び百千の三昧を得るも、如かず、一念無漏道を修して、人天の因果に繫絆せらるゝことを免かれむには

とあるも、皆自得の訓誡ならざるは無し。

之を要するに、自警は消極的修養法にして自信と自重とは積極的修養法である。而して自得は修養の効果である。

精進不退

されど、法門は無量にして佛道は無上である。今日の自得は明日の自得の前驅であり、明日の自得は明後日の自得の準備であらう。一日修養すれば一日の自得あり、一刻修養すれば一刻の自得無かるべからず。須彌に上るも天の在るあり、吾人は宜しく未來際を盡して精進不退でなければならぬ。法苑珠林を

に他の珍寶を數ふるに過ぎぬ。

洪州の法達、常に法華を念じ、誦經三千部に至る。曹溪大師に投するに及んで、大師、其の執念を憐み、之を誡めて、『經、何の過かある、豈に汝が念を障へんや、只迷悟は人に在り、損益は汝に由るが爲なり』と仰せられ、『心迷法華轉、心悟轉法華、誦久不レ明レ己、與レ義作ニ讎家一』との偈を與へられた。法達をして、『誦經三千部、曹溪一句亡、未レ明ニ出世旨一、寧歇ニ累生狂一』と自得せしめられた。

臨濟、一日、黄檗の僧堂裏に在りて眠れる時、黄檗入り來り柱杖を以て臨濟の牀邊を敲くこと三下せられた。臨濟、首を擧げて是を見て、再び瞌睡を始められた。黄檗は其の儘席を打つこと三下して去り、上間に第一座の座するを見るや、大喝して『下間の禪客は恁麼に坐禪す、汝何ぞ瞌睡して禪を打せざるや』と言はれた。第一座は大いに驚きて『這の老漢、何ぞ見ることの顚倒せるや』と云ひたれば、黄檗は『汝は睡れり彼は覺めたり』と示されしと云ふ因緣あり。是れ卽ち自得の垂訓である。臨濟は大道を自得せり。故に覺睡共に道を離れず。第一座は自得の境に達せず、故に覺睡共に禪に背くことを免がれぬ。

永平六十一世環溪禪師が、一日、久我侯を訪はれし時、偶ま數人の將校座に在りて酒を喫す。一將、大杯を捧げて禪師に薦む、禪師一口に呑却して之に酬ゆ。献酬幾回、將校皆醉倒して之を謝す。禪師曰く、『百萬の大敵をも一口に呑却する底の漢に非ざれば英雄と云ひ難し、子等かばかりの酒に倒るゝに至りては、平生の修する所知るべきのみ』と、哄笑一番、傍に人無きが如くなりしと、禪林言行錄に記せられた

つた。近年は縱ひ服裝等には大變化を來たしたにせよ、我は佛敎家なり、僧侶なりと名乘り、堂々として世に臨むといふ風あるは、最も喜ぶべき現象である。尤も、服裝等に至りては、頗る亂雜不紀律に流れ、佛敎の神聖と體面とを傷くるの恐なきに非ざれば、一時も早く斷然たる改良を施すの必要あるべし。

溷濁極り無き現時代に於ける佛敎家の如きは、實に是れ世海の南針、人道の木鐸ではないか。若し能く其の人を得ば、天下は靡然として敎を其の膝下に乞ふであらう。世情より見るも、今日の佛敎家は最も尊嚴高尙なる職分と謂つべきである。然るに、若し自ら其の職分を輕んじ、其の位地を卑むことあらんか、何を以てか佛敎の眞福音を天下に頒つことが出來やう。

昔は太宰春臺よく笛を吹き、日光門主深く音律を好み給ひ、春臺の名を聞いて之を召す。春臺辭して曰く『臣は道を講ずるの儒者なり、薄技を奏し宴樂に供することは能くせざるなり、若し强ひて召さば吾我が笛を破らむ』と。是れより終身また笛を操らざりしといふ。是れ亦た自重心の致す所と謂ふべきである。俗人すら猶ほ然り、況や人天の導師を以て自ら任ずる者に於てをやである。

自得の妙境

四に自得とは、吾人發心の最初より期する所の目的である。前の自警・自信・自重の三者も、畢竟、自得の境に達するの方法である。若し自得するに非ずんば、縱ひ八萬の法藏を諳んずるの才能ありと雖も、徒

夫れ懈怠は衆生の累なり、家に居して懈怠なれば衣食供せず産業擧らず、出家して懈怠なれば生死の苦を出離すること能はず、一切衆受皆精進に由つて興起することを得と、時に帝釋は偈を說いて、

最勝の道を求めむと欲せば其の軀命を惜まず云々

と言はれた。最勝の道を求めむに軀命を惜まず。この自信ありて始て精進力を增進すべきである。宗教家の最も貴ぶ所は信念の堅固なるに在り。信念の前には名なく利なく、束縛もなく壓制もなし。信念は實に是れ人性の獨立である。

自己の尊重

三に自重とは、自己を尊重するの謂なり。是決して高貢我慢なれとには非ず、又、決して他を凌ぎ他を慢れとには非ず、自ら己の天職を重んじ、自ら己の本分を尊び、寸毫も自己を損傷せざらむことを要するのである。

我が佛教界に就て見るも、維新の當時は僧侶に自重心ある者少く、唯我獨尊の法流に浴する僧侶にして、世に阿ねり時に媚び、言語道斷の醜態を露はしたることは世人の齊しく記憶する所である。明治二十四五年頃迄は、猶ほ僧侶にして僧侶たることを世人に知られまじとて、種々の風裝を爲す者も少くはなか

る。天眞爛熳たる小兒に於てすら、仔細に觀察すれば、既に正平の氣と邪曲の質との穩々地に存するものあるを發見するであらう。六七歳にして稍萌芽を見、十四五歳よりは恰も善惡に二個の異りたる性分あるかの如き觀ありて、常に吾人の精神中に善惡相對し淨穢相侵さんとし、殆ど一心兩性の爭鬪的狀態を示す。若し、外、教育の資け無く、內、修養の力が無かつたならば、善性は惡性の爲めに敗られ、淨情は穢情の爲めに制せられ、習以て性を成し、遂には『生れ子が次第〳〵に智慧づきて佛に遠くなるがかなしき』と云ふに至る。

事茲に至りては、如何に教育の力を以てするも、其の心的能力の一局部たる、知識才能等は或は之を啓發し得べきも、一心の根柢は全く混濁の氣を以て充たされ、容易に之を囘復することができぬ。世に、學あり智あり、才あり能ありて、而して猶ほ良心の存在を疑はれるやうなものは、皆此の種の人である。

信ずることは力なり

一に自信とは、自己の理想と自己の能力とを諦觀し、此の理想を以て絕對の目的とし、誓て此の理想に到着せずんば止まずとの信念を操持するをいふのである。此の自信無き者は、見聞覺知の爲に誘惑せられ、朝變暮改、波に漂ふ浮草の飄々として止まる所無きが如くであらう。自信ある者は必ず勇氣あり、勇氣ある者は必ず精進力あり、精進力ある者は必ず成功あり、菩薩本行經に釋尊が阿難に告げて

跌（つまづくこと）して脚實地を踏むこと能はず、猶豫孤疑是れに出て生ず。若し能く之に反すれば、乃ち信力堅固の菩薩と名く。所謂信心不二、不二信心といふものなり。自信の知、嗚呼大なるかな。

佛祖の道は自ら重んずべし。苟も自ら重んぜざるときは、其の果熟せず、中途にて廢る。既に聖胎長養と謂ふ、須臾も間斷すべからず。又、考妣に喪するが如しと謂ふ、豈に眉を開いて笑ふの隙あらむや。祖師門下是を奉重と名づく。虎缺馬升驗とすべきかな。自重の力豈に容易ならむや。

佛祖の道は自ら得べし。苟も自ら得ざるときは、風の境に飄零し、四山の界に逼惱して、透脱自在、安樂に游踐すること能はず。若し能く之れに反せば、毫端の無邊刹海、當會の十世古今、只だ當人破蒲團上の安眠に在るのみ。所謂如是の法、佛祖密に付す、汝今之を得たりといふものなり。自得の法寶に希有なるかな。

此の四自訓なるものは、獨り禪者の上にのみ必要なるに非ずして、實に是れ精神修養の基礎である。

內觀省察の術

先づ第一の自警とは、修養上の根柢たる內觀省察の術である。人は必ず發心の最初より此の自警力を養はなければならぬ。

孟子の如きは人の性は善なりとするも、宋儒の所謂氣質に至つては善惡混同し淨穢紛然たるものであ

禪の四自訓

精神修養の基礎

面山廣錄の中に海東の瑞亮侍者と云へるが、四自の偈を作つて面山和尚に贈つたことが書いてある。四自とは一に自警、二に自信、三に自重、四に自得、是れである。和尚は深く之を賞して『大凡、佛祖の道に志あらむ者は、必ず之を忘れてはならぬ、此の四自の教訓こそ盛德大業の本なるぞ』と云うて、自ら四自の道理を解說し、授くるに偈を以てせられた。卽ち左の如くである。

佛祖の道は自ら警むべし。苟も自ら警めざれば、我見競ひ生じて、貢高自大、同朋を侵凌し、新學を輕蔑して、偒搔阿勞、(偒搔阿勞とは不謹愼なるを云ふ)至らざる所なし。若し能く之れに反せば、所謂潛行密用、愚の如く魯の如しと云ふ者なり。祖宗夫れ若き人に託すべし、自警の志豈に忽にすべけむや。

佛祖の道は自ら信ずべし。苟も自ら信ぜざれば、途に觸れて滯りを成す。蹭蹬(迷ひ行くの意)蹉

不染汚無罣礙の佛法が無ければならぬ。

定慧均等

玆に於てか、正傳の禪は、決して單に精神を靜めるを目的とすると云ふやうな、靜の一方でなく、其處に生々した活潑無礙の大智慧大光明が發揮せられて、寂定の力と智慧の力とが兼ね備る、即ち心地寂靜、一點の妄想執着を寄せつけぬ定力と天地の大公案を觀破して自己の實相を徹證する智慧の力と二つながら備はる。此の定慧の二大力が均等して圓融無礙に備はりて相離るゝことなき、定慧一體になつた所に、悟達の境界も現はれ、信仰安心の目的をも安全に達せられるのであります。正傳の禪は定慧均等であります。

禪門では或は趙州の『無』の鐵關、或は『隻手の聲』の機關等、色々の公案を授けられ、沒趣味なる卽ち味ひの知れぬ公案を拈提して、之に向つて工夫し修行して往くのは、其の公案を通じて天地に彌綸する大なる公案に接觸せしむるのである。宋の東坡居士は廬山の麓の東林寺の常聰禪師に參ぜられ、無情說法の公案を授けられて、之れを熱心に工夫研鑽し、其の結果一朝悠然として大悟せられた。時に詠じた有名な偈がある。

　溪聲便是廣長舌　山色豈非清淨身
　夜來八萬四千偈　他日如何擧似人

詠じ得て好しと謂ふべし。天地の大公案に參徹したのである。或は桃の花の開くことを見て悟り、或は小石が竹に當りて響きを作すを聞いて悟り、中には魚屋の前を通り魚屋の亭主の話を聞いて大悟した人もある。盤山寶積和尙は魚屋の前を通りし折、官吏らしい人が魚屋に『惡い肉は御免だから、精良の肉を賣つて吳れ』といふと亭主は腹を立て『憚りながら私の店には惡い肉は一片もござらぬ』と云ふを聽いて忽然として悟を開いたといふ。大智見を開發して宇宙の萬象を眺むる時は、綠の山、流るゝ水、雲の影、海の色、悉く皆眞如實相の法を示し大乘佛敎深甚の妙法を說て居るのである。日蓮上人の御言葉にも、

　女房と打向ひ、飯打食ひ、酒打飮む、此の外佛法ありと思ふ邪見も候

と仰せられた。眞の佛法は吾人の活きた生命です。家庭團欒、女房と打向ひ御飯を食べ、酒を飮む所に、

これ程吾々に實際なる法は無い。然るに、餘り見識の一方に偏すれば高尚に失して實際生活に沒交涉となる。又、實際生活に重きを置き過ぎて、爲めに禪の本領を失ふこともある。何れに偏しても禪の第一義を失却することは免れぬ。故に或從知識或從經卷といふことが大切である。

禪道は一大事の修行にして、固より容易きものでないから、或は參禪入室して師家の鉗鎚を願ひ、其の提撕を受くることを要する。是は禪門では、或從知識或從經卷と云ふのである。即ち知識に從つて親く其の敎へを受け、或は經卷に從つて審細に佛敎の敎理を究む、而して、時々刻々に自己自らが自己を點檢し、寸毫の錯無き正眞純一の禪法を、自己の身心行爲の上に實現して往かねばならぬ。

大自然の公案に參ぜよ

西有穆山禪師に或小僧が『如何なるか是佛法』と問ひしに、禪師は『板の間を綺麗に拭け』と言はれた。小僧さん平生掃除の仕方が疎相であつたと見える。商人が『如何なるか是佛法』と問うたら『商賣を正直に行れ』御百姓が『如何なるか是佛法』と問うたら『農事を熱心に努めよ』と、百姓にせよ、商人にせよ、熱心に親切に其の職業を勵みて、人の人たる道を盡すその事が光り輝く禪で無ければならぬ。小僧が掃除する時には熱心に板の間を拭く、其の上に於て『不染汚』と云ふ境涯が現はれ、無罣礙の佛德が圓通するのが眞の禪です。

力で鍛え上げたのでないと駄目です。珍牛和尚は實際禪定力に達して居られたから、たつた其の一言が大顚をして感奮措く與はざらしめた、大顚は終生自分の大本師・大恩人と仰がれました。自己の全身心が活きた正法眼藏、活きた大般若となつてこそ、一動一靜、渾然として無罣礙となるのであります。

行も亦禪坐も亦禪

坐禪の事を正傳の三昧といひ、また、王三昧とも稱す。我が宗では三昧は禪の異名と見る。三昧とは梵語で、譯して正受といふ。少しも雜念妄想を挾まず、其の道を正しく受け込だのが三昧である。又、人我の隔執を離れ、大無我の境に住し、一心を平等界に安住するを以て等持とも譯してある。碁を圍む人は碁に熱心して更に雜念を生ぜざれば、それが碁三昧で、詩人が詩に心を傾けて雜念の無い時は詩三昧である。吾々が禪定力に依つて自己の本性本心を現成せしめ、毫末も妄想や雜念を混入せぬその時を三昧現前といふのである。一たび三昧現前して、禪的安心に止住する時は、往くも復るも立つも坐るも、日用光中の七顚八倒、一として禪ならざるなしであります。永嘉大師は

　行も亦禪　坐も亦禪　語默動靜體安然

と云うて置かれた。何事でも其の眞を得ることは決して容易の業で無い。禪も親參實究せされば、動もすると禪病に陷り易いものである。禪の見地は非常に氣高いが、併し禪は畢竟自己究盡の法であるから、

れゝば痛い、盜まれゝば不自由である。さう云ふ樣々の境遇に接しましても、其の精神上に於て、毫末も夫れが爲めに汚されると云ふ事が無い。之れが非思量といふ境界の一部分の相と見ることも出來る。

吾々の心なるものは、充分に從前の妄想執着を打破つて、其の本心が現はれ來る時には、自然に此の『不染汚』と云ふ威德が備はる。此の德が備はるから、從つて一切處に無罣礙である。卽ち滯る所が無い。人に接する場合にも、自ら仕事をして居る場合にも、如何なる場合に臨んでも、決して禪的態度を失はないから、頭々上物々上が眞理の活動となる、それが無罣礙の境界といふのである。故に般若心經には『心罣礙なし、罣礙なきが故に恐怖あること無し』とある。恐怖なきは卽ち安心である。

名古屋護國院の開山は萬松寺の珍牛和尙である。和尙は承陽大師の正法眼藏に通じて居られた宗乘家である、曾て江戸に在りし時、駒込吉祥寺學寮の寮主大贇和尙と云ふが、珍牛和尙に正法眼藏の御提唱を願ひたいと思ひ、正裝を具し禮拜して懇請せられた。其の時、珍牛和尙は澹然として兀坐せしまゝ、徐に口を開いて『山僧が一動一靜何れか正法眼藏にあらざる』と、いはれた。卽ち迂衲は動くのも、坐るのも、立つのも、歩くのも、一つとして正法眼藏ならざるはないぞ、汝は書典を開き、机に向うて、正法眼藏を閱覽研究せんとして居るが、自己の全身が正法の眼藏なることを知らざれば、決して大師の兒孫では無いぞと仰せられた。私共でも其の位の事は言へるが、併し、實地に夫れだけの修行力が進んで居らねば、如何程言論に巧みなるも畢竟他人の寶を算ふるの類である。如何に巧まい理窟を付けても、自分が確實に禪定

盜人のとりのこしたり窓の月

泥棒に襲はれて、心中に怖るゝとか、厭ふとか、苦しむとかいふ不平があれば、却々斯んな風流は現はれぬ。和尚さんは盜難に遭つた場合に於ても、其の精神は坦然として三昧の蒲團の上に安住して居ればこそ、斯やうな如何にも悠長なる無限の妙趣が現はれて來るのである。實に面白くも又高潔なる和尚さんである。又、或る天氣の好い日に、ニコ〳〵して窓際に居られるから、側へ往つて見ると、三四疋の半風子を自分の身體から取り出して、角力を取らせて見て居るのである。國技館以上の技を弄して、彼等が角力とつて居るのを喜んで見て居つたが、晩方になると『オウ寒からう可愛想に』と言うて、又半風子を懷の中へ入れて了つた。不潔ない和尚さんもあればあるもので、或人が何ぜそんなことをなさると御尋ねすると、其の時和尚さん歌に詠じて曰く

夜のしらみねに鳴く秋の虫ならばわがふところは武藏野の原

或晩、和尚さん、ブラ〳〵と芋畑の間を通りつゝあると、畑泥棒と見誤られて、青年の爲めにひどく打ち据ゑられた。打つてから青年は見て驚いた。良寛和尚である。彼が『飛んでもない失禮を致しました』と平謝りに謝まつたところ、良寛和尚打たれた頭を撫でながら、顰面をして、

打つ人も打たるゝ人も諸共に如露亦電應作如是觀

と吟ぜられた。和尚の生涯は實に斯くの如く凡情を超越したる所謂解脫の狀態で送られたのである。叩か

心の活動して居る其の儘が『不染汚』である。即ち一切萬境の間に身を處して居りながら、其の精神に於て、毫末も執着する所なく束縛される所がなく、所謂百花叢裏に行つて一葉身を潤さず、木人方に歌ひ、石女立つて舞ふが如く、活動の儘が大無我である。是れが『不染汚』であります。

越後の有名なる良寛和尚といふ人は、禪門に於ても頗る修養の力の進んだ人である。其の全生涯は、『不染汚』の型を示して居ります。順境に處して著せず、逆境に處して恨みず、一切處に於て毫末も念頭を動亂すること無く、心念を汚されることのなかつた人でありました。或時、良寛の草庵へ泥棒が這入つた事がある、泥棒は何か盗まうと思うて入りしに、何うも貧乏此の上も無しと云ふ和尚であるから、何一つとして盜むべき物が無いので、賊も呆きれ切つて、能くも斯んな貧乏な家が天下の中に在つたものだ、折角這入つても盜る物が一つも無い。却つて此方から遣りたいやうな氣がする『あゝ馬鹿々々しい』とぶつ〳〵いひながら、泥棒がコソ〳〵と歸つて往くのを見て、良寛和尚は折角這入つて來たものを氣の毒なことと思つて『マア〳〵待て、俺が着て居る布子を一枚遣らう』、『夫んな布子は宜うございます』、『折角來たのに何も土產が無くては心持が惡い、マア之れだけ持つて往て吳れ』、泥棒は感心しながら其の布子を持つて出懸けて往つた。和尚は平氣なもので、泥棒の後ろ姿を眺めて居つたが言ふ可らざる興味を感じて居た。折しも月が雲間を出でゝ皎々と輝き、其の影を窓に懸けて居るので、良寛和尚思はず知らず一句を詠じた。

眞爛漫、明玉の內外玲瓏として透き通つたやうな心そのまゝ、意識そのまゝを『非思量』と云ふのである。

例へば諸君が美しい花を見て、綺麗だと思ふ時は意識はある。あゝ綺麗な花であると眺て、其の瞬間の精神狀態には、妄想邪念は無い。惜しいも、欲しも、憎いも、可愛いも、何も無い。其の時の心は實に天眞爛漫です。或は花月を觀、或は山水を眺め、江上の淸風、山間の明月、其の淸風明月に對した時、皎潔なる自然界の美妙に接觸した時の吾々の精神狀態に至つては、實に長空一碧、天雲なく山霧なく、妄想も分別も無い、我と云ふ考へも無い、彼といふ考へも無い、一切何も無い、而も、意識の活動は停止はしてゐないのである。

吾々の身體も、極く健康の場合には橫にならうが、縱にならうが、晝寢しやうが、自分の身體に對して何等心に介する所、滯る所は無い。心持好く橫になり、肘を枕にして休息す、此の時に肘が何處にあるといふ考へも頭が何處にあると云ふ考へも起ない。即ち吾れ我れを忘れて居る。然るに、少しでも身體に缺陷があると、足が邪魔になるとか、膝が邪魔になるとか、肩が邪魔になるとかして、心に必ず滯る所が出來る。若し健全なる身體であれば、立ても坐つても、何處に手があるやら、何處に足があるやら、殆ど忘れて居る。斯の如く吾れが我を忘れた狀態を名けて非思量と稱す。

併し、唯だ我を忘れると云ふのみでは、何やら漠然たるもので、說明になりませぬ。そこで、假りに其の作用に就て、其の樣子を申して見ると『不染汚』、『無罣礙』と云ふ狀態になるのであります。吾々の

身體を靜かに動かして調和を取り、而して後、兀々山の如く不動着に坐定すると云ふ事が、極まつた法則であります。

三　調心法。是れが一番大切なる御話であります。調心の極則は、單に心地の昏散を遠離するのみでなく、進んで自己本然の佛性佛心を證得するのであります。此の目的を達する爲めに、臨濟宗に於ては主として公案を授け、之れに向つて猛烈な工夫を凝して往く樣に導かれる。曹洞禪の方では公案を授けるが如きは參禪者を誘引する臨機の手段である。故に、坐禪の正則としては、公案などを授けないで、有心無心を超越せる非思量の狀態に安住せしむるのである。是れも矢張落つれば同じ谷川の水です。曹洞禪の教ふる所は普勸坐禪儀及び坐禪用心記に就て、研究して戴きたい。

普勸坐禪儀には『個の不思量底を思量せよ』とある。吾々は坐禪をして何を工夫するのかと云ふと、思ふ事も量る事も出來ぬ事を工夫せよと云ふのである。思ふ事も量る事も出來ぬ事を何う工夫するが『非思慮』だと仰られてゐる。此の非思量の三字が全く調心の極意を示された言葉である。『非』と云ふ字は、普通の場合には物を取除いて了ふ、卽ち除却の語であるから、思量を除却して單なる無心、恰も枯木死灰の樣になるのを『非思量』と申すことになるが、禪門に於ける『非思量』と云ふ文字の意は決してさにあらず、思量を取除くことをいふにあらず、吾々の精神作用其の儘が、吾々の本性の實習實德に相應したる狀態をいふのである。語を換ていはゞ、小なる吾人の精神が、其の儘絶大なる天地の精神にして、所謂天

結跏して足の上に安ぜよと仰せられて居る。つまり之れは下腹部の底に心を落着くることです。一寸聞くと妙な事を言はれたやうであるが實際坐禪をして見ると此の味ひが判ります。

若し、又、心が昏沈と云うて昏くなり、記憶力も衰へ元氣も盡きて、ボンヤリとして居る樣な場合には、心を髮際、卽ち額の處、又は眉間、卽ち眉毛の中間に安ぜよといふ御示しである。之れも實行して見れば直ぐ其の趣が知れます。口頭で說明するだけでは判り惡い。髮の生へ際、眉間の所に、氣を沈着けると云ふは可笑しいやうであるが、其の的處に精神を集めるので、是れは肉體の自然に契うた當然の敎へである。

又心の散亂してならぬ時、例へば平生電車や人力車などに乘つて心が何んとなくザワ〳〵する樣な時は、鼻端又は丹田に氣を沈着けよと云ふので、鼻端と云ふのは、目を僅に開いて少く下を眺めるやうにすると、鼻の頭がホンノリと見えるが、其處に落付くるのです。丹田と云ふは下腹、卽ち臍下三寸の處である。此の鼻端、又は丹田に精神を注げば、自然に心が靜まるものです。斯う云ふやうな安心法が坐禪の上に指南せられて在ります。

夫れから、坐禪を止めやうと云ふ際には、手を左右の膝の上に置て、自分の身體を靜かに七八度も搖すぶつて、徐ろに坐を起つやうにせねばならぬ。さもないと、何んとなく筋肉に變化を生じて、痺れが切れるとか、足元がヒヨロついて轉ぶとか云ふ虞がある。そこで靜に身體を動かして全身の調和を圖り、而して後に起つが宜い。又、坐る折も同一の方法に依るのでございます。卽ち足を組み手を重ねて坐つたならば、

も熱心に此の『無』の一點に向つて、工夫を凝らして居ると、或晩、自分の坐つて居る正面の、而も眞つ暗な中に非常に大きな狗の頭が現はれた。此の狗が恐ろしい目を見張つて口を大に開き、今にも喰ひ付かうと云ふ勢をなしたので、件の雲水は慄へ出して恐れた。その中に姿は消えたが、又、翌晩も現はれたので、恐ろしさの餘り禪師の所へ飛んで往き『大變です、私が坐禪をして居りますと、恐ろしい狗子の頭が現はれ私の頭にぶつかり付かうと致しますが、如何致したものでございませう』と言ふと、禪師が『さうか、狗が頭を現はしたと申すか、今晩も亦その狗奴が現はれるであらう、若し現はれたなら、それは好個の機會ぢや、その時こそ少しも恐れず、汝の頭をその狗の口の中に突込んで見よ、其の位の勇氣が無くては「無」字の公案を透破することが出來ぬぞ』と申されたので、此の雲水、元來熱心なる行人であるから、敎へられた通りの覺悟を以て坐つて居ると、夜中に至つて又もや恐ろしい狗子の顏が現はれ、大きな口を張て今にも頭に喰ひ付かうとした、こゝぞと思ひ殆ど己の身命を拋つ程の決心で、其の狗の口の中に頭をウンと突込んだ。すると、狗の口には非ずして、函櫃といふ押入の中へ頭を入れたのであつたが、夫れつきり恐ろしいお化は現はれなかつたと云ふ事である。

一週間若くは二週間、三週間と云ふ大攝心になると、熱心の餘り往々變態的心理現象を見ることがある。之れは未だ精神が十分に沈着かず、呼吸が完全に調はぬ所から來る一種の病である。斯る場合には、如何樣にして精神を寂靜ならしむるかと云ふに、大師は若しさう云ふ事のあつた時は、心を兩股の上即ち

やうと思うて、強て力を費す必要は無い譯のものである。斯くの如く自然に息が調うて參りますると、終ひには得も言はれない所の愉快な感じが起る。何んとなく精神が脱落して、佛界に昇入したやうな感じが生ずる。其の時、調息の目的が達せられるのである。坐の初めに口を開いて、腹中の宿氣を吐き出し、而して後口を閉ぢ、さうして『鼻息微に通じ』と申して鼻を以て息をするのである。

所が、息が十分調はざる時は、種々奇怪な幻影が現はれ、奇妙なる狀態を見ることがあります。即ち吾々の精神の上に於て、感覺の上に於て、此の身體が非常に冷たいやうな氣分がしたり、熱いやうな氣分がしたり、身體が石のやうに硬くなつたやうな心持がしたり、綿の如く柔くなつたやうな感じがしたり、又重くなつたやうな氣がしたり、輕くなつたやうな氣がしたりすることがある。或る場合には色々のものが眼に映じ來る。佛の姿が見えたり、鬼の形が見えたり、又は亡くなつた人の姿が歴々と見えたり、時としては千里眼を開いた樣に、數百千里の遠方が目前に見えたりすることもある。斯樣に樣々の幻覺、若くは錯覺に類する變態なる感覺上の現象を呈するは、要するに、精神が調はず、呼吸即ち息の未だ調はざる爲めの病的現象であると御誡めになつて居る。楞嚴經の五十魔境などは、此の現象の纖細を說き盡されたものです。

昔徳山密禪師と云ふ高僧があつた。其の門下の一雲水が禪堂に於て坐禪を致し、趙州の『無』の公案を工夫して居つた。『狗子に還つて佛性ありや』、『無』。此の『無』の一字が參禪上の一大難關である。彼は最

である。夫れで、坐禪を行ふ室には佛の御像とか羅漢の像、達磨の像などを安置するが宜い。さう云ふ風に飾り付けを整へて往くと、自然に惡魔も之を怖れて寄り付かぬ。惡魔が其の人の修行を妨げやうとしても妨げられぬものである。かやうな御指圖が委しくあります。

又『脣齒相着け目は須く常に開くべし』と云うて、口は堅く鎖して居らねば不可ぬ。目は細めず張らず、中正に開いて居るが宜い。凡そ坐つて居る所の前方四尺位の所を眺める程度に開いて居るが適當である。餘り目を張り過ぎると、其の爲めに散亂し易い。又、目を閉ぢて居りますと、昏沈の狀態と云うて精神が昏み易い。夫れで、目は成るべく中眼に開いて居るのであります。斯くして全身の姿勢が端正になつて不動着の態度を取る、之れが坐法で所謂調身法であります。

二　調息法。之れは常濟大師の御指圖に依ると、打坐の始めに當りて、暫らく口を開いて息をするので、『長息なれば長に委せ、短息なれば短に委せ、漸うに之を調へ、覺觸來る時自然に調適す』と仰せられてある。禪宗の調息法は、我が曹洞宗などに於ては別段に深呼吸と云ふやうな事を敎へて無い、又、言葉の上にもありませぬ。息の長い人は長きに隨ひ、息の短い人は短きに隨つて宜い。身體の自然に委せて往くのである。故に、別段、息を調へる爲めに氣を揉むに及ばぬ、完全に坐法が調ひ、精神が三昧に入ることが出來れば、呼吸は自ら調つて往くものである。卽ち脊梁骨を直立し、下腹にウンと力を入れて兀々地に坐わり込みまするると、不知不識に深呼吸とか腹式呼吸とかいふ狀態になつて參ります。故らに息を深くし

じ、次に右の足を左の股の上に安ずるのである。此の兩樣の坐法を古人は降魔坐・吉祥坐と云ふ名稱を附して居る。尤も、是等は餘りに小刀細工の註釋でありますが參考までに申して置きます。普通の坐り方を降魔坐と稱し、佛の坐り方を吉祥坐と稱するのである。左右を陰陽に分てば、右は陽に屬し左は陰に屬して居る。凡夫は精神が散亂し易いに依つて陽の足を下にして陰の足を以て壓へる、即ち第一に精神內の妄想の魔軍を降伏して泰然不動の境に住す、是に依つて自ら外界一切の魔障にも打勝つことが出來る。夫れで降魔坐と稱するのである。佛は之に反して寂滅道場に坐して精神の坐り切つた御方であるから、その不動の處より更に大活動を起し、衆生濟度の妙用を顯はしたまふのが佛の行持であるから、佛の坐法は陰の足を下に陽の足を上にするのです。吉祥とは佛の代名詞である。吉祥は智德圓滿の稱號です。總ての修行門に於て成熟せられ大成功を爲されたのが佛であるから、佛の事を吉祥と申すのである。

さて、坐つた後は手を組みます。即ち先づ『右の手を左の足の上に安じ左掌の脊を右の掌の上に置くのです。『兩の大拇指面て相拄ふ』と申して、左右の拇指の頭を向ひ合せ平直に相拄へ、足の上、下腹の處に安ずるのである。斯くする時は自然と姿勢が正しくなるから從つて精神も安靜になります。常濟大師の坐禪用心記中の御指圖に依ると、坐禪する場所は成る可く淸潔に爲し、出來得るなら常に香を焚き華を献じ、座敷を莊嚴にせよと仰せられてある。香を焚き華を献ずる時はその座敷が一層神聖の感を生ずるのであります。斯くする時は自ら諸天善神が其の坐を守つて下され、三世の諸佛も自ら來迎ましますと云う

て、適度に眠り、適度に食事し、適度に衣服を着けねばならぬ。今は其の中の最も調節の取り悪い飲食の一つを擧げて示されたものです。

さて彌々坐禪三昧に入る時には、總ゆる世間的關係を忘却して所謂『諸緣を放捨し、萬事を休息する』のである。縱へ大熱鬧中に在りと雖も、坐禪の一刹那に大靜寂に安住せねばならぬ。『坐物』と稱する敷物は成る可く厚く敷くが宜しい。日本では疊が敷いてあるから別に坐物を要しないでも、其の上に『蒲團』を用ゐる。蒲團は圓座で差渡し一尺二寸、廻り三尺六寸に製するのが極まりである。夫れは背梁骨の直下に蒲團を置き臀部を支へる樣にする、故に身體の全部を蒲團の上に安するのでない。詰り後だけ載せるのです。

さうして、坐り方には『結跏趺坐』と『半跏趺坐』の二樣がある。結跏趺坐とは先づ右の足を以て左の股の上に安じ、次に左の足を以て右の股の上に乘せるのである。之れが結跏の坐り方である。半跏趺坐は御婦人とか、又は肥滿して居る爲め足の痛みに堪へぬと云ふ樣な人の爲めに定められたる輕便なる坐禪の仕方を稱するのであります。半跏趺坐は單に左の足を以て右の股を壓すと云ふのみで、非常に樂な坐法であります。尤も、時として坐禪の爲め足部に甚しき疲勞を感じた場合は、左右の足を組替ると云ふ事も差支ないといふ古人の指南もある。

佛樣の坐相は、多くは只今申した結跏坐法の反對の坐り方で、即ち先きに左の足を以て右の股の上に安

坐禪の正儀は之れを三調に分けて說明することが出來る。卽ち調身・調息・調心である。此の三つの調へ方が大切である。

一　調身法。先づ身相を調へる、卽ち坐禪の形を成す、是を調身法と稱す。之れを實地に行ふことは何んにも六ケ敷ことで無い。先づ普勸坐禪儀に『靜室宜しく、飮食節あり』とある。是れは、身相を調へる上の準備として是非之れだけの心得が要ります。先づ靜かなる場所を擇んで坐禪することが最も便宜であることは勿論です。併し、各自が平素坐禪を實行する場合には、其の度毎に靜かなる禪室に行くことも出來ず、また靜かな室の無い場合もあらう。此の時は何うすれば宜いかと云ふに、或は佛壇、或は床の間、或は机等に對して、一本の線香を立て、恰も深山幽谷に居るが如き觀念に住すれば、何んとなく寂靜の境に在るやうな感じがするものです。いかなる場合に於ても、自分が一つ坐禪しやうと思つたなら、或は壁の方に面して後ろ向きになり、達磨の像でも壁間に懸けて、線香を立て、而して、充分精神を一點に集中し念想の散亂を防ぎ、ドツシリと坐りますと、恰も紛亂に遠ざかりたる靜かなる坐敷の別室に坐つて居ると同一の感じが致すものであります。

『飮食節あり』と云ふは、食物を調へて往く事である。古來、三不足を戒められてある。卽ち睡眠の不足、食物の不足、衣服の不足、何れも坐禪の害となる。衣服の足らざるは寒氣を招き、食物の足らざるは身體の營養力を失ひ、睡眠の足らざるは精力を損じ氣力を害する。此の三不足と云ふものはお互に注意し

許に在る母親の事を言はうとしたが『唯母が』と言つたなり言葉が途切れ、良あつて斷乎たる勇氣を鼓し『何も言ひ遺す事はない』と言ひ切つた。彼れの心を推量して見ると、自分は縱ひ末期とは言ひながら此の戰爭の眞最中に、母親の事を申したとて何うならう、なまなか言うて卑怯者未練者と思はれては軍人の不名譽と言ふ事に氣が付いたらしい。言はぬは言ふに優る。如何にも其の士官の心中を推測つて軍醫と看護卒は互に顏を見合せて同情の涙に暮れて居ると、彼は再び聲を發して『今日の戰爭は何うあつたか』といふ、『君安心し給へ我軍の勝利に歸した、バルチック艦隊は全滅の狀態だ』と聞かす其の聲が耳に通ずると、さも嬉しさうに顏面に笑みを湛えて『自分は假令死んでも永く靈魂となつて此の艦隊を去りませぬ、大日本帝國萬歲』と唱へて其の儘息を引取つたといふ。此の時の精神狀態を察して見ると『己が』『我が』と云ふやうな考へも妄想も無い。人我の見を超越して唯國家在る事を知つて我在る事を知らぬ、陛下在る事を知つて、己れ在る事を知らぬと云ふ狀態です。所謂國家に對する信仰の偉大なる力が現はれたのである。

　吾々が宗教的信仰の上に於ても斯く迄に進んで往かねばならぬ。眞言宗では之れを法界力と稱して居る。茲に於てか、自力と他力が一致融合して、そこに法界力と云ふ絶大な信仰力が現はれるのである。故に禪門の信仰も全く自力・他力の二途を超越して居るのであります。

坐禪の正儀

此の仰信が一度び發したならば、更に進んで解信に入るのである。解信とは理致を了解し解決して信ずるのであります。佛とは何んぞや、吾々の位地境遇は如何、吾人は如何なる覺悟を以て理想境に進むべきや、如何なる方法に依つて迷ひを脱して覺位に證入すべきや、其の迷ひとは何んぞや、悟とは何んぞや、此等の道理に於て充分の意義を究め解決を與へて、そして、益々信仰の根を固めて往くが解信である。

併しながら、理窟を捉へて居る中は未だ精神に大滿足と大歡喜を生ずる處には達せられぬ。色々に考へ込んで居る間は未だ本當の信仰とは言はれない。信仰の極處に到つて見ると、もう考へも何にも無い、理窟などを離れて了ふ。彼の軍人が戰場に臨み身命を抛つて國家の犧牲になると云ふ、其の瞬間には、最早、我も無く、人も無く、唯だ大滿足心あるのみであります。即ち信仰と云ふ狀態になつて了ふのである。日本海の大海戰の時、一人の靑年士官が砲彈の爲め傷痍を受け、寢臺の上に橫はり昏睡狀態に陷つて居る際、軍醫は枕許に往つて治療を施して見たが、もう見込みが無いと匙を投げて側の看護卒に向ひ、『唯今注射を施して本人を覺醒せしむるから、其の機を逸せないで言ふ事があつたら聞いて置き給へ。』と申して直ちに注射を施しますと、其の効が現はれて、彼の負傷士官は眼を開き口を動かし何事か言はんとする樣子である。看護卒は耳下に口を寄せ、大きい聲を出して『少尉殿苦しうございますか』苦しいのは言ふ迄もありませぬ。非常に苦痛の有樣であるが、彼れは苦痛を忍びつゝ『苦しくない』と答へた。『何か言ひ置く事はありませぬか』と看護卒が再び尋ねると『何も申すべき事は無いが、唯母が、母親が』というて沈默した。國

私は總じて宗教上の仰信狀態は仰信より解信に進み、更に解信より仰信に返るといふ所に確立もし成功もすると思ふ。

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

吾々が國家に對する信念も斯くの如く、如何なる譯かは知らぬが、陛下に對し奉り、又は、國家に對する時は、唯々有難うて全身心を捧げても惜む所は少しも無い。尊皇報國の理趣は動かすべからざるものがあるが、然も、又、理窟も及ばぬ程に奧深い情操のあることを感ずるのである。天皇陛下の御名を承ると、殆んど我を忘れて崇敬の念に打たれる、御國の事を聞くと譯も無く有難涙に咽ぶ、是れ即ち仰信である。佛敎に於ての吾々が進境を顧るに、忽然として一點の自覺心が生じ、吾々は本來佛性を有して居るに依て成佛得脫することは疑ひない、佛も本は凡夫なり、我等も遂には佛なりと云ふ自覺が成立つて來ると、今度は更に進んで其の自覺心に向つて、十分の滿足を得んとする希望が生じて來ます。その希望信念が大聖佛陀に向つて注がれる時、信仰が現はれて來る。苦しい時の神頼みと能く言ひますが、吾々は一時的の神頼みではなく、全生涯を通じて色々の煩悶苦惱に沈淪する結果、何うしても佛の救濟を戴かなければならぬ。佛の御指導に依らねばならぬと云ふ信念が湧て出る。恰も暗夜に燈火を得たらん如く、又迷子が母親に會ひたるが如く、不知不識、佛の御袖に取縋つて、全身の肉が躍り出す有り難いといふ感じが起る、是れが即ち仰信である。

雲はれて後の光りと思ふなよもとより空に有明の月

浮雲一度び去れば、天邊の明月は本來輝いて曾て昧ますことは無いのである。吾々も本來輝き渡つて曾て昧まさゞる佛陀の本性を具有して居ると云ふ眞理を堅く信じなば其の時の喜びは如何であらう。渺たる滄海の一粟とも思ひし此の身心が、ソックリ萬德圓滿の佛境界なることを信得せば、如何にも嬉しくて涙がこぼれる。この自覺が卽ち信念の根柢でございます。吾々は佛の救濟を仰ぎ、佛の御指導に從ひ、佛の廣大智慧力に依賴して迷執の雲を打拂ふ、これが佛に對する絕對信仰であります。

して見ると、成佛と云ふ目的に向つて一大自覺心を起す、これが自力。佛の救濟力に絕對服從して往く、これが他力。此の自力と他力との二大力が渾然合致した所に於て、はじめて信仰が成立つのです。曹洞宗の御開山承陽大師が正法眼藏の生死の卷に信仰の狀態を示されてある。之れを拜讀すると恰も淨土眞宗の蓮如上人の御文章でも拜讀するやうな心地がします。

厭ふ事なく、慕ふ事なし、此の時はじめて佛の心に入る。但し心を以て計る事勿れ、言葉を以て言ふ事勿れ。たゞ我身をも心をも放ち忘れて、佛の家に投げ入れて、佛の方より行はれて、之れに隨ひもて行く時、力をも入れず、心をも費さずして生死を離れ佛となる、たれの人か心に滯るべき

と申してある。力をも入れず心をも費さず、唯全身心を捧げて佛の心に投げ入れて其の御心に御委せ爲ると云ふのである。何うしても眞の信仰は斯う云ふ狀態になつて往かねばなりませぬ。

佛陀の全身は道の表現である。佛體は道體なり、佛心は道心なり、故に、自己の全身心を大道に捧げて往く、そこに信念は確立するのである。信念、殊に宗教的信仰は是非とも斯くなければならぬ。これは自己を否定するのでは無く、小なる自己を大なる道に投合するのです。

　して見ると、信念の上には自力だの他力だのと云ふ名前は附けられぬ。禪門よりすれば他力門などいふことも未盡理である。何故かならば、信念は自覺の發現であります。吾人は本來、佛陀の本性を具へて居るに依つて、必ず成佛することが出來るに相違ないと自覺し、成佛と云ふ點に於て一點疑ふ所なく其の道を求むるこれが信念であります。

　佛陀の本性を具へて居りながら凡夫となり下つて今尙ほ迷うて居る。吾々は恥かしながら現に迷うて居る。吾々は善には遷り難く惡には傾き易い素質を有つて居る。且つ我々の一生涯其の半ばは種々の境遇に轉ぜられて樣々な苦痛の爲めに束縛を受けて居る。惑業苦の三道は萬代不易の因果律の狀態である。釋尊は華嚴經の中に、

　一切の衆生は皆如來の智慧德相を具す。唯妄想執着を以ての故に而も證得せず

と仰せられた。吾々は佛陀の智慧と德相を具へて居りながらも、妄想執着の爲めに覆はれて居るのである。妄想執着とは卽ち迷執です。恰も明月が天空に懸つて居つても、浮雲の之を覆ふあれば其の影を見ざると同じである。迷雲一たび散ずる時は心月自ら現はれて、不可思議光を發揮するのである。

かくて信念が確立して後には、
第二に端身正坐する。所謂坐禪を致すのである。
第三に錬心工夫する。即ち自己の精神上に禪的訓錬を施して、純一の工夫を凝らすのである。工夫とは研究といふ意味である。

禪の信念

然らば禪門の信念は如何なる狀態であるかと云ふと、世間では淨土眞宗は他力の極端であつて、禪宗と云ふ宗旨は、自力の極端であると云ふ事を能く申します。之れも一應の解釋としては敢て不可とは言はないが、然し苟くも純一貞淳なる信念の究竟する所に至つては、自力と云ふ樣な名前は附けられるものでありませぬ。或る意味に於て自己を沒却したのが信念です。

信念は吾々の信仰對象となるべき絶對標準を見認めて、其の標準に向つて自己の敬意眞心を捧げて、服從し歸仰し依憑して往く、其の所に確立するものである。禪宗の如きも、必ず御本尊を祀り、經卷を安置し、袈裟を懸け、法衣を着けて、手を合せ禮拜をして、はじめて佛弟子たるの信念を確立して往くので、恰も子供が親に懷くが如く、人民が君主に服從するが如く、己を忘れて佛陀に歸依を致す所に信念は確立するのである。

坐禪修行の實際方法

參禪の三要門

第一に參禪の三要門と云ふ事を申します。參禪とは禪を實行する事です。臨濟宗等に於ては參禪とは師家の室に入つて親しく師家の提撕を受けるをいふ。曹洞宗に於ては參禪と云ふ文字の解釋が少しく廣くなつて居り、總て禪を參究すると云ふ意味に使つて居る。つまり坐禪の實行と云ふ事になる。而して、禪を實行するには三つの肝要なる法門があります。

第一が信念の確立です。之れは申すまでもない事で、佛法の大海は信を以て能入と爲す。禪は佛教の中の一宗、佛心宗である。最も淸淨無垢なる信仰信念が確立して、はじめて禪門に入るべき資格が出來るのである。然らば謂ふ所の信仰信念とは何んぞやと云ふに、一言にしていへば、求道の精神であります。道を求むる所の精神が猛烈でなければ禪門に這入る事が出來ない。大道を以て絶對の歸依處として、自己の身心を大道に投入する時、大道と自己とは自ら一如となる。大道に歸するは佛陀に歸するのである。

又「祖宗の神靈照鑑上に在り」とは大正天皇御卽位の御勅語に於て御告げ下されたる御聖語です。我が皇室に於て皇祖皇宗の御神靈は幾萬年の後に至りても照鑑上に在りて一點昧ますべからざるものである。夫れと同じく吾々の祖先の靈も、又、吾々それ自身の靈も、未來際に涉りて永久不滅であると云ふ事を信ずべきである。此の確信ありてこそ、未來の生活と云ふ問題に對して、斷々乎として拔く可らざる一大安心を得るのである。是れ敬神崇祖の基であるから吾々國民に於て最も大切なる覺悟であると思ふ。

以上略說したる三大目的を貫徹せんが爲めに此の禪的敎化の擴張が最も必要と思ひます。又、禪の敎化は國民一般に對し此の三大功用を顯現してこそ、始めて禪の禪たる價値が現はれることと思ふ。併し、之れのみが禪の目的であるかと云ふと、直ちに三十棒の御叱りを免れぬ。若し夫れ禪の第一義諦に至つては、過去・現在・未來の三世を一貫し、時間・空間を超越して、全宇宙に充滿彌綸せる佛陀の大精神、天地の大道、絕對の大眞理を覺悟し、此の身心を以て直ちに佛心に冥合し、卽ち小なる自己が大なる全宇宙の佛心と云ふものに同化融合して廓然として大道に橫行濶步することを得るのである。此の妙諦は所謂敎化別傳、不立文字で全く祇管打坐の端的にのみ自知自得するのであります。

然らば道徳の基礎は何かといふと、一言以て之を蔽へば、金剛不動の大信念です。此の信念は吾人の徳性の秘藏を開く所の鍵である。三學六度も八萬四千の大菩提も皆な此の大信念より發現するものであります。

第三には未來の安心を決定する事です。抑も人生の中で何が最も重大な問題であるかといへば、生死の問題である。吾々は何に依つて生れたるや、生れて而して何事をすべきや、人生の目的は那邊に在りや、死後は如何に成行くや、死後の生活が果して有りや否や、若し死後の生活ありとすれば如何やうに安心をなすべきや、と云ふ事は、吾々が自己を盡す上にも他人の幸福を進める上にも最も重大なる覺悟であると思ふ。之れは固より世間の學術を以て論究すべき範圍ではない、所謂宗教の領分に屬して居る。宗教の領分に屬して居るとは云へ、此の覺悟が寧ろ學術、就中、心理・倫理・敎育等の學科に直接の關係を有するものであります。然らば、吾々は確實に未來に對する覺悟と安心とを定むるだけの修養をば要すると思ふのである。

乃木將軍が殉死されたのは何んであるかと云へば、所謂未來の生活を認めてござつたからです。明治天皇の御跡を慕ひ奉りて冥界に陪侍せんと期せられたは、全く未來に對する一大信念の上の行動であつた。卽ち死ぬ爲めに死なれたのでない。再生を期して生くる爲めに死なれたのである。

うつし世を神去りましゝ大君のみあと慕ひてわれはゆくなり

御跡を慕ひ參らせて我れは行くのであると云ふ。つまり未來の活動を豫想して自覺せられたのである。

つも無い。

其の道德の基礎が出來ねば根なし草の如くであるから、人生に處するは不可能である。明治天皇は教育の御勅語を下したまうて國民道德の標準を明に御示し下された。吾等天下の萬民は教育の御勅語を以て、一の大生命を有する一大活本尊として、何處までも渇仰し歸命し、此の御勅語の御聖旨を遵奉して往かねばならぬ。併し、忠と說き、孝と說き、和と說き、信と說かれてある其の忠孝和信の道を實行して往くには、吾々の精神の根柢に確乎不拔なる道德の基礎が出來て居らねばならぬ。其の道德の根本基礎を養つて往く所に禪的教化の目的があるのであります。

禪は唯世間を離れた隱居的の樂みの道具では無い。暇になつたから禪學でも遣つて見やうかなどと云ふ禪では決して感心せぬ。碁も飽きた、將棋も飽きた、これから一つ禪に依つて趣味を養つて見やうかなどと碁・將棋の代用にされてはならぬ。上流の方でも下層の人でも一切の機根を引くるめて、盡く此の禪的信念の上から道德の基礎を養つて往く樣にしたいと思ふ。

尤も、道德の基礎を涵養するといふことは禪門のみの目的ではない。眞宗でも日蓮宗でも、將たまた淨土宗であらうが、天台宗であらうが、總じて道德の基礎を涵養するといふことが目的の一部になつて居るから、各宗派とも此の點に於ては大同小異である。併し、兎に角禪と云ふ立場の上から觀れば、禪は道德の基礎を涵養するに最も簡單にして普遍的であると思ふのであります。

可ニ是禪房無ニ熱到一　祇能心靜便身涼

と云ふ詩を詠じて壁に題したと申すことである。暑い〳〵と云ふので、世の中の人々は狂人のやうになり、舞子の濱へ往かうとか、又は逗子へでも出懸けやうとか、氷水屋へ飛び込むとかいうて、大騷ぎをして居る。然るに禪師は禪房卽ち自分の方一丈位の室にあつて出です、泰然自若として坐して居られる、然らば、其の禪房には暑熱は到らないのであるかといふと、却々さうで無い。殊に建築物が不完全であるから、普通の人の座敷より餘程暑さが強い樣に感ぜられる。其の暑い室内に坐して暑さを忘れて居られるのは何故であるかといふに、「唯だ能く心靜なれば卽ち身涼し」卽ち禪的精神の力である。

寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心無ければ苦しみも無し

眞解脫底の人ならば、寒熱の地獄に居つて、寒熱の苦しみを忘れ、人生に處して人生を超越して居る、苦中に樂を占め、動中に靜を領して居る狀態であります。單り此の寒熱の地獄の束縛許りでなく、順逆の境遇に處しても、四苦八苦の風波に迫られながらも、毫末も精神の束縛を受けぬ故に、五慾六塵の巷に在りながら、一點執着する所なく、繫累せらるゝ所無いと云ふ、所謂安住不動如須彌山です、禪の効果は斯やうに現はれて來ねばならぬ。

第二には道德の基礎を涵養する事です。道德の人に於ける尙ほ魚の水に於ける如し。一日も人生に道德無かるべからず、宗敎と云ひ、經濟と云ひ、敎育と云ひ、其の外世間百般のことに道德を離れたことは一

要でありませう。禪學を爲さる丶方は世間に澤山ありますから、私が珍らしさうにいふの必要は無い事であるが、禪的敎化の目的は要するに三綱領を以て主要なるものとする。

第一に人生の繫縛を遠離する事です。之れは前にも述べた通り、所謂解脫的境界を得るのであります。尤も如何なる宗派でも之を敎へて居るが、其の中で禪學が一番簡潔で且つ適切のやうに思はれる。私は禪を以て禪宗特得の禪と見ず、佛敎の禪と見て御話する考へである。自分の田に水を引くと云ふやうな事は致さぬ。眞の禪は佛敎全體に於て活々したる生命であります。故に最も普徧的に禪の意味を御紹介申します。諸君と共に此の禪力に依つて永遠無窮の精神的最大幸福を得、宗敎的大安心を得たいと思ふのであります。

人生の繫縛、卽ち一切の束縛を離れ、精神上の苦痛を脫すると云ふことは、修養の要機、幸福の源泉です。唐の白樂天が恒寂禪師の所に行きし時恰も三伏の暑い日中であつた。然るに禪師は平然として端坐して居られる。暑さうな樣子をしてゐられぬ、暑いなどと云ふ語は一度も發せられぬ。如何にも安靜の境界である。方丈の室は涼しくて暑さを感ぜぬかと思ひ、室に入つて坐つて見ると、却々以て自分の室よりも一段と暑い。此の暑い中に和尙サンは知らぬ顏をして居られるのを見て、白樂天は是れ全く禪定の力の致す所なりと大いに感心し

人人避レ暑走如レ狂　　獨有ニ禪師一不レ出レ房

れたであらう、大變な事をした」と云うて、とう〱住居を川上に引越して了つたといふ。
斯ういふ厄介な解脱では困ります。斯う云ふ解脱は濟世利民の上に何等の効能も無いから決して眞の解脱ではない。眞の解脱的境界は決して人世を侮蔑する様なことはない。又、吾々の肉體や形式をも輕んじはせぬ。何となれば眞の解脱は必ず慈悲と一致するからである。大解脱の下に大慈悲がある。故に人世を輕んぜざるのみならず人世を以て我が運動場と爲し遊び場所とするから、此の人世に處して、隨時隨處に解脱の妙用を縱横に現はし、以て國家の文明を進め民人の幸福に努めて往く、併し、妄りに人世に執着すると却て墮落の本となる。故に世間に着する者は眞の大慈悲を運用することは出來ませぬ。母親が其の子を愛育するは容易ならざる勤めであるが、其の母の心こそ佛の慈悲に相似して居る。併し愛着と云ふ一種の頑固なる執着心が含まれて居れば、決して子供を教養するの功は奏せられぬ。卽ち眞の慈悲を圓滿に且つ有益に應用する事が出來ぬ。して見れば世間にも停まらず、出世間にも偏せず、其の中庸を履んでこそ、吾吾は超然として大覺の妙德を發揮することが得られる。然らざるものは未だ以て禪的修養の完全なるものとは言はれない。

禪的敎化の三綱領

禪は現代に於て流行して居る重なるものゝ一つである。此の禪より出でたる敎化が何う云ふ點に於て必

此の解脱・慈悲の二德は、本來吾々の精神上に備つて居るに依て、其の本德を現はして自利利他一如なる大覺の働きとなして往くが禪の効用である。然るに、吾々が實行上に於ける有り樣を點檢して見ると、動もすれば唯古來の佛教者の一部の形のみに偏執して、或は世間を度外視して出世間にのみ偏するあり、或は出世間の理想境に背いて全然世間門に墮落するありて、却々中庸を得ることが難い。故に解脱的境界に達しても出世間に偏したるものは決して眞の解脱と言へぬ。禪門では百尺竿頭にズッと高く登つて人世を超越したる向上漢でも、更に一步を進めて全身を十方世界に現するの働きが無ければ所謂向上の死漢であるといつて非難する。如何に圓滿なる智德と斷德とを具備して、自覺の位置に達しても、更に覺他の妙用が無ければ、眞の大自覺とは許されませぬ。眞の大自覺は覺他を離れざる自覺であらねばならぬ。

古の許由とか巢父とかいふ人なども一分の解脱を得て居るが、それは消極的解脱であつて、決して大解脱とは言へぬ。許由は古への賢人である。堯帝の御覺え目出度く堯帝は深く許由の人格を敬慕し、特に宮中に召して、堯の天下を讓らん事を以てせられた所、許由は驚いて山中に逃げ返り溪邊に下りて、頻りに耳を洗つて居ると、友人の巢父が來て其の故を問ふ、許由は堯帝の御仰を說て『今日は斯かる汚らはしい事を聽いたから、今、耳を消毒して居る所だ、天下を讓らうなどゝいふ不潔な事を耳に入れたので、如何にも汚らはしいことぢや』と申すと、巢父も許由の友人だけあつて、『さうするとお前の汚れた耳を洗つた滓が川下に流れて來たに相違ない、夫れとも知らず今まで川下で己の馬に水を飲まして居たが、大方、馬の腸が汚

かり地獄の方へも往つて見たいと云ふので、妹のメリーと家庭教師と二人が漸くの思ひで、極樂城を逃げ出された。すると、途中虎や狼に遭ふやら慘々の目に遭遇したので、再び極樂が戀しくなつて、またもや極樂城へ歸つて、今度こそは眞に能く極樂の味が判つたと云ふことである。さすれば、何のやうな富貴榮華を極める身に居つても、吾々の此の精神上に斯樣の缺陷があれば、到底、解脱の樂みを得ることは出來ないものであります。

背觸俱に非なり

抑も佛敎に於ける解脱といふは、如何なる逆境に處しても、如何なる順境に處しても、泰然として其の束縛を解脱し、超然として道を樂しみ、佛陀の大精神に向つて向上し往くと云ふ活動的の解脱であります。決して山の中へ引込んで人生を厭ひ嫌ふと云ふ樣な病的解脱ではない。

坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人を深山木に見て

人生の眞つたゞ中に在りて自由無礙の大活動をなし、而して、其の間に悠然として天地の大道に逍遙するといふのである。

又、佛德の最も貴重なるは大慈悲である。吾人は佛陀大聖の如き公明正大、無限絕對なる大慈悲光を發揮して、濟生利民・治國齊家の方面に向つて畢生の力を注いで往かねばならぬ。

様子がない。禪師は恭しく『御粗末でございますが、何うぞ御召上り下し置かるゝやうに』と言ふ、御挨拶。變に思ひながら箸を御取りになると御碗には御粥、壺には菜びたし、皿には、燒鹽そこで鹽を粥に加へ召上られしに、其の美味いこと甘露の如く、天下の大將軍も此の世に生まれてから斯んな美味いものを食べた事は初めてだと云ふ程で、家光公は非常の御喜びで澤山御上りになり御機嫌よく御歸城なされた。

翌日、澤庵禪師は御禮の爲めに參上し、御目通りの上『昨日は寔に御粗末でございました』と申し上げると『いや粗末所でない、品數は少いが非常に結構であつた、あの御米は何處の產なるや、あの茶と鹽は普通の物とは思はれぬ、一體何處から取られたのだ』との御尋ね。禪師は『あの茶は寺內で造りましたものでございます、鹽は附近の海岸で取れたのでございます、又、御米は上樣から頂いた御米でございます』、『なぜあの樣に結構でありしぞ調理の致方はいかゞ』、『貴方樣は品川まで運動を遊ばし、其の上に御空腹なる所へ、アツサリとした物を御上りになつたから、美味く思召したのであります、此の後とも美味しき物を召上りたいと思召さば能々運動を遊ばし御腹を空かして御上り下されば、何時でも結構に頂けるものであります』と申されたと云ふのであるが、家光公餘り平生が極樂過ぎた所から、常に美味い物を食べながら、其の美味さが御判りにならなかつたのが、一寸不自由の稽古をして地獄の隅の方へ片足入れた爲めに美味い物が食べられたのです。

ラセラス皇太子も矢張りさうである。『余は不足無きを以て不足とす』、何うも極樂にも飽きたから少しば

セラス皇太子は漸く僻々として陰氣になつて了つた。そこで始終書齋か何かに立籠つて、机に凭れてボンヤリして居られるので、家庭教師は心配して側へ往き『殿下には御身體に御悪い處でもございますか』皇太子は『イヤ別に悪くはない』と言はれる。『極樂城に居て何一つ御不足は無い筈でありますが、何か御不足がございますか』『ある』『何が御不足でございますか』と家庭教師が御尋ねをすると、ラセラス皇太子の言葉が面白い『余は不足無きを以て不足とす』といはれた。ちつとも不足のないのが却て不足であると云ふのです。不足して見なければ眞の樂しみは出て來ないものです。

徳川家光公が曾て胃病を患はれて更に食物が進まぬことがあつた時に、澤庵禪師が御見舞に伺つて『私は御前に對し禪宗の特色たる最上の料理を製して差上げたいと思ひますが、恐れながら品川東海寺まで御微行にて御台臨が願ひたい』と申し上ると、家光公は大に喜ばれ、翌日は全く御微行で東海寺の澤庵禪師の許へ御越しなされた。處が御晝過ぎになつても御料理の出る様子が無い。其の内に段々御腹が空いて來た。御伴の者も御氣の毒に感じて臺所を覗いて見たが、一向料理番が働いて居る様子もないので『催促を致しませうか』と申し上ると『何にも天下の將軍とも言はるゝ者が御膳部の催促などをしては品格にも關するから、もう少し我慢する』と仰せられ、空腹を耐へて待つて居られると、只今で云ふと午後の二時か三時頃になつて漸く御膳が出た。澤庵禪師自ら葵の御紋の附いた高足の立派な膳を持つて公の前に据ゑた。膳の上を見ると御壺と御皿しか附いて居らぬ。大方、二の膳、三の膳でも出るだらうと思召して居られたが何も出る

非常に評判が好く澤山賣れたので、其の利益を以て立派な御葬式を出したと云ふ人である。

其の『ラセラス傳』の筋書は、阿弗利加のアビシニヤ州では皇太子が未だ立皇太子の式を擧げられぬ前に、極樂城を拵へて其の中に皇太子を幽閉する習慣になつて居るので、ラセラスといふ皇太子も其の國の習慣と皇室の規則に依つて立皇太子式前に極樂城に幽閉される事となつた、そこで妹のメリーと佛蘭西人の家庭教師一人と都合三人で極樂城の人となつた。四方は斷岸絕壁を以て圍まれて居るが、一度び極樂城の中に踏み込んで往くと、暑からず、寒からず、氣候は頗る好く、春夏秋冬、百花爛漫として咲き亂れ、其の上御馳走は山海の珍味、少しも不自由なく苦痛も無い。心の欲する儘に愉快を盡して往く事が出來る。眞に極樂城と云ふ名に違はぬ。併し、出口は僅に一方しか無く、鐵の門で閉ざゝれて居る。普通の考へなら何んなに窮窟な點があつても其んな所ならば定めし樂しいことであらうと思ふ。

ラセラスも初めの程は無我夢中で極樂の樂しみを嘗めて居られた。汗を出すと云ふ事も無く、又、手が痛むとか足が疲れるとか身體が大儀と云ふやうな事も無い。實際極樂で實に七寶莊嚴の御淨土に居るやうな形で、御馳走が欲しいと思へば美酒佳肴は直ちに眼の前に列べられ、芝居でも何んでも面白いと云ふ娯樂の機關は皆悉く備はつて居るから、殆ど夢中になつて暫くの間樂しみに耽つて居たが、餘り極樂過ぎて了ひにはその極樂に飽いて來て、少し汗位出して見たくなり、手や足を少しは草臥れさして見たくなり、不味い物も食べて見たいやうな考へが起つて來た。さうなると極樂城に居つても一向樂しくないから、ラ

す。多くの人は世間的色々の事情と境遇の爲めに限り無き束縛を受けて、益々煩悶の淵に沈んで居るが、其の源は多くは自分の手拵へである。自己の精神力の缺陥から故らに苦痛を自ら造つて往くのであります。

今一つは外襲的束縛である。外部から餘儀なく隔られて苦境に悩む事です。或は人と人との關係に於て苦しみを生じ、又、自然界と自己との關係に於て苦しめられる。其の他種々様々の壓迫を受け、脅迫を受けて、爲めに自己身心上に於て寸時も安心を保つ事の出來ないやうな者が世の中には澤山ある。假令んば表面からは苦痛と見るべきやうな事は無いにしても、其の精神の根柢を穿鑿して見ると、矢張り妄想煩悩と云ふもの〻爲めに、常に束縛を受けて居る。

以上の二種の束縛の中、前のは精神の上に現はれたる妄想、後のは宿業に根さしたる境遇の苦悩です。是の如き内外一切の束縛を悉く解脱して、精神的大自在の域に進んだのが大解脱である。此の解脱の意義に於ける詳しき説明は追々申し述ますが、とにかく禪的修養は專ら解脱の法を奬勵して居るのである。

人世の半面は正しく苦痛の世界である。果報の好い人は苦みは無いかといふに、好ければ好いで矢張り苦しみがある。有名なる英吉利の文豪ジョンソンの書いた『ラセラス傳』を讀んで私は面白く感じたことがある。ジョンソンは百年程前の人で有名な小説家であるが、自分の母親が亡くなつた時貧乏で葬式を出す事が出來なかつた。夫れで一夜作りで以て『ラセラス傳』を書いた。そして、夫れを世の中に發表すると

然らば禪を基礎とせる修養の標準は如何と云ふに、一言之を蔽へば、大解脫と大慈悲との二門を出でないのです。卽ち一面には大解脫の門を開き、一面には大慈悲の德を擴むるのである。卽ち大解脫は自覺で、大慈悲は覺他であります。前に述べし如く、佛の大覺の妙德を吾々の身心上に實現すると云ふが禪の目的であるに依つて、禪的修養としては一面には解脫の道に向つて進み一面には慈悲の德に向つて進まねばならぬ。

然らば、解脫とは何んぞや。蓋し、吾々御互の此の世に處するや、必ず種々樣々なる境遇に遭遇して色々の束縛を受けて居る。何んな御方でも此の束縛は免れ得ない。而して、その束縛たるものを大別すれば二通りになります。

一には自發的の束縛です。所謂自分の心柄から拵へ出した苦惱痛傷である。精神修養の力の足らぬ所より自分の心に種々の妄想を描き、繩なき繩を作り出して苦しんで居るのである。或る御醫者さんの御話に、十人の患者を扱つて見ると、其の中の五人までは大抵手拵への病氣であると云はれた。自己の精神の缺陷から煩悶を招き、爲めに病氣を作り出すやうになる。都會でも田舍でも、色々の御方に接しまするに、殊に中流以下の御方などは猶更であるが、實に氣の毒千萬で同情の淚に咽ぶやうな事が澤山ありま

雨霰雪や氷とへだつれどおつれば同じ谷川の水

で、佛教の根本義は唯有一乘法です。然るに宗派の異同に依つて宗敵の如き觀を作し、互に相反目するが如きは、釋尊に對し奉りて實以て相濟まぬことではあるまいか。勿論、各宗の高僧方も夫々廢立の法門を開かれ是非の論をも起てられた。殊に日蓮上人の如きは隨分惡辣の手段を執られた。併し、畢竟するに見地の相違と信徒の立場とに依り種々の流派を異にするが、其の源は釋尊金口の說法に基きたるものであるから、遂には同道同證に歸せねばならぬ。又、排他的言動の激烈なるは、多くは時弊に憤慨し、之を矯正するの方便である。つまり佛教界の病的分子を除き、佛教の弊害を芟り盡さんが爲め、日蓮上人の如きは非常なる奮鬪的態度に出で、折伏門に全力を注がるゝことにもなつたのである。併し、日蓮上人の御說を段々咀嚼して見ると、全く堅實なる信仰に依りて眞の佛心を現はさんとするに努められたことは言ふまでも無い。要するに各宗各派ともに春蘭秋菊の如く互に佛界を莊嚴して居るのである。

して見ると、禪は何が目的かと云ふと、云ふまでも無く覺道の體現を目的とするのである。覺道とは佛心である。佛の心を吾々の手の舞ひ足の踏む所、日常の精神活動の上に進退行動の上に確實に顯現するのが、禪の目的である。廣き意味を以て言へば聖道・淨土、大乘・小乘の法門も要するに覺道、卽ち佛心の體現を期するの外は無いのであります。」

大體に於て、此等の點から見て、佛教は倫理的宗教・道徳的宗教とも云ふことが出來る。而して、佛教は殊に倫理道徳を熱心に鼓吹されて居ることは申すまでも無い。

第三に情的方面、即ち信仰的方面より見れば、佛教の目的は離苦得樂といふに歸するのである。所謂宗教的大安心が目的である。所有精神上の苦痛を離れて永遠無窮の大安心を成得するのである。故に現在に於て大安心を得るのみならず。未來に對して大安心を決定するのです。此の安心究竟の位地を成佛と稱するが、此の成佛に就ても即身成佛の法門もあれば、未來成佛の教へもある。されど、歸する所は離苦得樂といふにあるのである。此の方面から見ますると、佛教は最も堅實なる信仰を鼓吹し安心決定を開示せられた教へである。

夫れで一佛教の上に自づから智的方面の大覺、道徳的方面の大意思、信仰的方面の大情操、皆な 盡 く備はつて居る。而して結局は成佛と云ふ聖位に登るより外はない。此の標準を領得して各宗の教義を御覽下されたならば、縦ひ宗派多岐なりと雖も少しも惑ふ所は無い。信仰の力は能く離苦得樂の目的を達し、道徳の法門は能く止惡作善の效果を收め、幽玄高尚なる哲學的の教理を説かれたる智的法門は轉迷開悟の大理想を實現するのである。

　わけ登るふもとの道は多けれど同じたかねの月を見るかな

で、また

のであります。故に迷ひを去り妄想を棄て、永久に動かす可らざる萬世不易の根本眞理を明めて往く、禪門に於ける大悟とはそれである。是れが智的方面から大覺位に進むべき標準である。

第二には意志的方面、卽ち道德的方面から說かれた法門は要するに止惡作善である。卽ち惡を離れて善を行ふことです。七佛通戒の偈に

　諸〻の惡は作す莫れ。諸〻の善は奉行せよ。
　自ら其の意を淨す。是は諸れ佛の敎なり。

と云ふが阿含經等に說てある。承陽大師の如きは正法眼藏に於て此の一偈を拈提して佛門上の宗旨を說破せられてあります。支那に於ける有名な話であるが、昔、唐の白樂天が烏窠の道林和尚に參じて『如何なるか是れ佛法の大意』と問れし時、和尚は『諸〻の惡は作す莫れ、衆〻の善は奉行せよ』といふ二句を示し、是れこそ佛敎の大意であるぞと答へられた。白樂天は口を開いて大いに嗤うて、那んな事ならば三歲の孩兒でも知つて居りますと言うた。すると道林和尚は『三歲の孩兒も、之れを言うことを解すと雖も、八十の老翁も之れを行うこと難かるべし』と答へられた。知るは易く行ふことは聖賢も猶ほ難しとする所です。併し、惡い事を止めて善い事をせよと云ふ事は唯通俗的なる道德の原則を說かれたと云ふのでなく、此の御語の中には宗敎的・哲學的なる甚深の妙理が含まれて居る。此の善惡は有漏・無漏に涉り、凡夫・聖賢に涉つて居るに依て、普通凡夫の容易に窺ふ能はざる絕對的道德をも含蓄して居るのである。併し、先づ

ふと云ふやうな淺薄な且つ亂暴な考へで成立つて居るのでありませぬ。一切の聖經は禪宗の道具である、日常の珍財である。一經一論と雖も苟も棄てべきものでは無い。私共は小僧の時分から法華經でも大般若經でも一部經でも皆習つた。悉く禪宗の經典として讀んで居るのであります。併し、色々の經典があつて八萬の法門が分れて居ても、釋尊の一大精神に觸れて見ると大小權實圓融交渉して皆一佛乘になつて居る。恰も多くの河の流れが盡く大海に注いで一味の大海水となると同じで、三千餘卷の經典が渾然として佛の大精神と云ふ一大海水となつてこそ、はじめて妙の妙なる佛教の根本原理を覺了する事が出來る。各宗各派の祖師方も決して佛教の一隅に偏しては居られまい。其の祖師の信念と見地とは全佛教を統一して此處ぞといふ妙處を捉へて、玆に宗旨を建立せられたものであらう。是れが即ち大覺である。

成正覺の三方面

此の大覺に達するには如何なる方法に依るか、是れは禪門のみでない。佛教各宗ともに夫々の方法を示されてあるが、併し禪門は一經一論に依らず佛教全體を總合して教へを立てたものであります。假りに其の方法を三分しまして、之を智情意に區別して見る時は、

智的方面には轉迷開悟となる。即ち迷を轉じて悟りを開くと云ふのです。迷とは眞理を味ますより生じ、悟とは眞理を覺了する底のものである。玆に於てか、佛教には哲學的の要素が充分に含蓄されて居る

て人間の情愛でも矢張り同じ事です。子供が可愛い、妻が可愛い、その可愛いといふ妙味は其の人にして始めて知るべきである。況や釋尊の覺り給うた所の宇宙の大精神、唯有一乘の大眞理に至つては、到底、科學的の頭腦を以てするも、之れを判斷し得る事は出來ぬ。まして文筆言語を以て完全に發表する事の出來るものではない。所謂『妙の妙、玄の玄』なるものである。是れを『不立文字、敎外別傳』と古人は申したのであります。

禪宗は一切の經典に所依を立せず敎の外に別に傳へると云ふが、決して禪宗ばかりが敎外別傳では無い。念佛門でも眞言門でも佛心相應の端的は言敎の及ばざる所である。故に不立文字と云うても強ちに文字を排斥すると云ふのではない。況や經典を排斥するにあらず、經の一字を離るれば魔說である。併し、眞の佛敎の大眞理は文字の葛藤に拘泥せず文字の外に溢れて居る精神を活捉せねばならぬ。承陽大師は

不立文字とは、一切の文字是なり。

と仰せられた。釋尊の御說き下された敎は一切經となつて今日に存して居るが、その一切經を隅から隅まで拜讀しても却々本當の御心は判らぬ。故に到底文字の上で窺ふ事の出來ない妙所にまで到達した時、始て佛陀の精神、卽ち禪が現はれるのであつて不立文字といへばとて文字を棄てることでは無い。唯文字其ものに拘泥せず、所謂眼光紙背に徹るで、文字の奧底へまで眼光が透徹して、はじめて佛の精神が判るものであると云ふので、其の意味から不立文字と云ふ語が出たのです。故に禪宗の敎は一切經文を棄てゝ了

み拘泥するは邪道の人である。所謂見地の間違つた者であると極端に御示し下されてあります。又、釋尊の本懐を說かせられたといふ法華經の中には

唯佛と佛とのみ乃ち能く諸法實相を究盡す

とあり涅槃經の中には

我一字を說かず。

と仰せられて、四十九年間の御說法を御自身で抹殺してござる。是等の大眞理は人々の大自覺に待たねばならぬのであります。

然らば、斯くまで甚深微妙なる大法は、釋尊のみが御覺り遊ばしたのであるかと云ふと、決してさうではない。一切の諸法其の蘊底に至つては盡く言句文字の及ぶ所ではありませぬ。總て吾々人間の情意でも感覺でも其の他一切の事物は、其の究極する所は到底言葉を以て述べられぬものである。親子夫婦の情愛などに至つても決して言葉や文字を以て盡すことの出來るものではない。面山和尚の歌にも

一口に飮みたる水の味ひを問ふ人あらば如何に答へむ

とある通り、渴いた時に一口飮んだ水の味ひは頗る美味い、如何にも結構な味ひとは云ふが、其の結構な味ひとは何んな味であるかと云ふと、それは決して言葉を以て言ひ現はす事は出來ぬ。矢張り妙です。妙法であると言はねばならぬ。それを知らんと欲せば實際自分で飮んで見ねば本當の水の味ひは判らない。總

無論出來ぬ。尤も、禪宗のみに其の妙を傳へたのではない。釋尊四十九年三百餘會の御說法をも唯『妙』の一字を說き示さん爲めの御骨折である。此の事は時々釋尊が自ら仰せられて居る。故に禪宗流の口調は、佛教諸經典の中に澤山ある。大般若經の中には

言語ある事無きを名けて佛法と爲す

とある。故に此の語は榮西禪師の『興禪護國論』の中にも引用してあります。到底、言語を以て盡すべき法では無いから、文字言語を離れた所に眞の佛法が存在するぞと申すのである。又、同じ大般若經の中に

第一義諦は文字有ること無し、一切の言語は世俗に依つて說く

とある。萬已むことを得ず、言葉を藉り文字を假りたのであるが、釋尊の根本精神、即ち大覺の境界に至つては、決して言葉や文字を以て現はす事の出來るものでは無い。

法曹界に其の人ありと知られた東京に居らるゝ辯護士濱地八郎君は、生れは九州福岡の人であるが、初め王陽明學を愛し之に由て修養に努めて居られた所、或日、寺院に詣して金剛經を手にし一讀の下に大に感ずる所あり、此の經一卷で一生の修養を指導する敎へは澤山であると云ふので、遂に王陽明學に關係する藏書を悉く其のお寺に納め、爾來、金剛經一卷に依て安心決定して居られます。其の金剛經の中に

若し人、色を以て我を見、音聲を以て我を聞かば、此の人邪道を行うて如來を見る事能はず

と說てある。即ち形體や言葉の上で如來を見んとすれば未來劫を盡すも如來を見る事は出來ぬ。形象にの

られたのも、葦の葉に乘つて揚子江を渡り、魏の嵩山の下に達し、少林寺に止まつて九年面壁せられたのも、つまり、佛心を傳へんとするの外は別に目的は無いのである。併し、曹洞宗の開山承陽大師の如きは、佛心宗と云ふ稱呼すら非常に嫌つてをられた。何故ならば、佛の心のみを傳へると云ふやうな言葉は甚だ不合理である。佛陀の大精神は、身體を度外視して心のみを重んずると云ふやうな、一方に偏した敎へでは無い。宇宙六合の全體を網羅し、萬象森羅の大精神を明らめ、縱横濶達に、吾人の精神及び肉體を通じて、日常の生活の上に發揮して往くと云ふのが佛教の本旨である。佛心のみを傳へると云ふやうな詞は非常に語弊がある。佛心のみ傳へたなら佛自は何うなる。佛語は何うなる。佛陀の行動は何うなる。つまり佛の身心言行及び神通妙用等の全面目を傳ふるのが禪の目的であるといふ意味にて承陽大師は御示し下されてあります。

して見れば佛心宗と云ふ名を附けるのも既に第二、第三である。併し、判り易く申せば、佛心とは佛の御精神であるから佛心宗と稱したもので、言葉と云ふものは極く完全に其の旨意を表はし盡すことは却々難いものである。故に佛心と云ふも勿論假設の名稱である。其の假設的名稱の佛心、即ち佛陀の精神は如何なるものであるかと云ふと、通俗的に解釋せば、智慧道德の大源これが佛心である。其の智慧・道德の一大根元たる所謂佛陀の精神に至つては、大には方所を絶し細には無限に入り、不可思議、不可稱量の妙諦であるから、固より言葉を以て述ぶる事は出來ない妙の妙なるものである。文字を以て書き現す事も

に對して應用し、其の學理をば弘く一切の生物の上に向つて應用することに依つて始めて學問の目的が達せられるものである。學問を自分の腹にだけ貯へて置いた分では、學問の價値はありませぬ。佛も亦斯くの如く、大覺者の位置に達せられ、更に進んで一切の人類、一切の生物に向つて其の覺悟の大徳妙用を發揮して往くから、はじめて佛陀の佛陀たる價値が現はれるのです。自覺覺他の二大徳を永久に受用し實行致しまして、其の理想とする最大目的を圓滿に大成するに至つたのが覺行圓滿と云ふのです。大覺聖位と云ふは卽ち此の境界に名けたものであります。

故に、此の自覺を名けて、之れを智慧と稱すれば、覺他の方は、之を名けて德相といふことになる。卽ち、今日の通俗の言葉で申せは智識と道德です。御勅語に智能を啓發し德器を成就しとあるが如く、智識・道德の二者を大成せられたのが佛陀の境界である。智識・道德の完全に發達したる處を成佛と稱するのである。して見れば、佛敎は決して佛敎家の佛敎にあらずして、苟くも人類たらん者が、此の文明の社會に一身を處して、人類の目的を達せんとせば、必ず共に學ばねばならぬ、尊信せねばならぬ所のものであります。

佛敎は斯くの如く、公明正大の見地に依つて釋尊が開かれたのである。其の大覺の境界を佛心と稱するのです。夫れ故、禪宗をば古來より佛心宗とも稱へるのであります。達磨大師は此の佛心を傳へんが爲めに態々印度より支那に御出でになつたのである。梁の武帝に向つて『廓然無聖』と云ふ一大公案を授け

何に宗派が異なるとも、一眞實の佛陀の大精神が時に應じ機に從つて流れて來て、遂に多くの宗派を産み出したのであるから、其の根本原理に至つては微塵も相違する所は無いのであります。

佛教の歸決は大覺にあり

然らば、佛教全體を通じての最終の目的は何んであるかと云ふと、一言以て之を蔽へば、成佛と云ふ外に佛教の精神はありませぬ。他力往生と云ふも成佛が目的、即身成佛と云ふも成佛が目的である。顯教の教ふる所、密教の示す所、成佛と離れては他に佛教の目的は無いのであります。佛教とは即ち佛となる事で、佛とは何んぞやと言へば、佛とは覺者である、即ち大覺者である。大なる覺りを開きたまうたのが佛であるから、つまり、成佛を目的とするは大覺の位置に達することである。然らば大覺とは何んぞや、自覺覺他、覺行圓滿のことである。自覺とは自分が最高圓滿なる正智見を開いて、自己の本性を覺悟し、宇宙の大精神を究め、萬法生起の本末を明らめ盡したことである。而して、自覺の後には、必ず覺他の妙用を現はすべきが自然の法則である。自覺的活動が即ち覺他である。自分自ら覺悟の位置に立つて、その覺悟より發する努力に依りて、其の覺悟する所の道を一般人類の爲めに應用し、運用し、活動して往く夫れが覺他の大行となるのであります。自覺本來の目的は、覺他の大行に依つて始めて達せられるので、學者になつても、學者の目的は何んに依つて現はれるかと云ふと、之れを社會に向つて應用し、之れを國家

神に投合せしむるが爲めの御活動であつたのです。

然らば、禪と云ふは一體如何なるものぞと言ふに、禪は佛教の一部にあらずして、其の全體である。佛教の一部分の法門にあらずして、佛教の全體を統一したる上に於て、向上の第一義、即ち佛教の大精神を發見し活捉して往くのが禪の本領である。抑も、佛教を研究するには三學といふがある。即ち佛學研究上の三大科目、戒學・定學・慧學で、是を戒定慧の三學と稱へてゐる。又、佛教を實行する上には六波羅密といふ標準がある。即ち布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六大行で、此の六度の中の第五の禪那波羅密が禪である。故に、三學六度と云ふ上から申しますと、禪と云ふものは、佛教中の一部分の行といはねばならぬ。三學六度の中の禪は正しく諸行の一であります。

併しながら、現在、我が國に行はれて居る禪宗と稱する宗門に於て唱ふる所の禪は、決して三學の一部分、六波羅密の一部分の禪を指したのでない。佛教の全體を總合し、唯有一乘法なる佛陀の大精神を顯證するの法門を、假りに名けて禪と申したのであります。

抑も、我が佛教なるものは、御承知の如く十三宗・五十六派にも分れて居る。全世界を通じて、佛教宗派の多きこと我日本の如きは、他に、決して見ることが出來ませぬ。隨つて其の各宗派の教ふる所の教義・信條及び儀式も自から區々であります。聖道門あり、淨土門あり、自力門あり、他力門あり、顯教あり、密教あり、千態萬狀であるが、併し、其の源を原ぬれば、釋尊御一人の御說法に出でたもので、如

檢して、精密に御話すると云ふ事は、不可能であります。故に、禪とは如何なるものかと云ふくらゐの大綱だけを御話して、其の深遠幽微の點は、諸君の研究を仰ぎたいと云ふ考へであります。

元來、禪と云ふものは如何なるものかといふに、當今では、御承知の如く、禪宗と云ふ一つの宗派をなしてをりまして、夫れも、我が日本に於ては、曹洞・臨濟・黃檗の三派、卽ち三宗に分れて居り、また、支那では禪の五派と稱して五宗に分れてゐます。併しながら他の佛敎各宗派中に於ける眞言・天台・日蓮等の分派とは大に趣を異にして居りまして、僅に歷史上の系統と禪道擧揚の形式に多少の趣の異なる所があつて、其の特徵を繼承する所から遂に宗派が分れたに過ぎないのです。故に、今日に至つては殆ど敎理の上に於て宗派の區別を附ける必要が無い樣なものであります。單に、各派異なる歷史があつて、各本山が宗政を履行し、且つ、本末の關係を規定し、宗義を宣布して往くと云ふ點に於て、自然に宗派の分立を爲すべき必要の有るに過ぎぬので、其の敎理の上より見れば、殆ど何等の相違點を有つて居らぬと言うても宜いくらゐであります。

元來、禪と云ふものはもと無宗派であつた。否な、佛敎その物が、本來、宗派などは無かつたのである。禪宗などと云ふ宗名は皆後世に至つて出來たのです。達磨大師が支那へ來て、始めて正傳の祖師禪を弘められたとは言ふものゝ、達磨大師には、素より禪宗と云ふやうな宗派を別立しようと云ふ御考へは無く、唯、佛敎の精神、佛陀の大生命を傳へ、直指人心、見性成佛、卽ち佛敎徒をして、直ちに佛陀の大精

禪とは如何なるものか

禪は佛敎の全體なり

近來、禪といふものが一般に行はれ、政治家・實業家・其の外一般の智識階級に盛に研究せられ、殆んど流行といふ形である。到る處に禪學會・參禪會といふ樣な機關が設けられて實に喜ばしき現象であるが、仔細に點檢し來らば、未だ完全なる禪が遺憾なく行はれてゐるとは申されぬやうに考へられます。

抑も、禪は其の敎理及び形式が一定の型にはまつて居らぬ爲め、動もすれば種々の誤解を生じ易いやうに思はれます。唯、表面に現はれた一部の解釋や態度だけを觀て、直ちに皮相的なる觀察を下し、これで以て禪の研究を了つたやうに思はゞ、遂には禪病と稱する一種の弊竇に陷り、爲めに、着實にして有益なる修養の効果を收め得ないやうな結果を見る事が往々あります。

加之、禪というても、曹洞宗・臨濟宗・黃檗宗共に各々其の派を異にして居りまして、其等を一々點

禪學講話篇 第一

禪學講話篇第一

目次

退轉した人が多かつた。然るに新井禪師によつて、この憾は滯りなく拭ひ去られたといふも、過言でない。

今、禪師の全集を刊行して、江湖に頒つは、暗澹たる思想界に、一道の光明を與へ、渾沌たる實社會に、一大指針を示す所以のものである。この擧を圓成することは、また吾等の責務であると思ふ。

一言、所懷を述べ、以て序となす。

昭和四年十月　日

秋野孝道誌

序

「新井石禪全集」全十二卷の刊行を發願して、選輯編纂、既にその準備を終へ、逐月上梓頒布をなすに到れるは、吾等の最も欣快とするところである。

新井石禪禪師は、禪門の巨擘、教界の權威、その道眼は圓明にして信念は醇厚、その識見は高邁にして行持は綿密、その操志は堅固にして接化は溫雅、實に當代稀有の高僧、渾然たる大人格であつた。

禪師の道譽は、夙く中外に揚り、相隨うて禪師に參ずるもの無量にして數ふべからず。一席の講演を聽聞して、禪の秘奥に徹するあり、一篇の文章を讀誦して、人道の本義に悟入するあり、禪師に誘引せられて大解脫の禪喜法悅を樂しんでゐる人々の聲が、隨所に滿ちてゐる。

由來、禪は難澁、佛教は深遠、これを修めんとするも詮術なしと稱し、

風來疏竹風過而竹不留
聲雁度寒潭雁去而潭
不留影故君子事來而心
始現事去而心隨空

總持石禪叟



新井石禅全集